

バンドリ人生初の恋

鹿其鹿隣@

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

今まで何をしても楽しくなかった。

けれど高校2年にある転機が訪れる。

そこから広がっていく恋物語

目次

高校生編

第1話	1
2話	8
合宿	15
合宿	20
家出!	32
一人暮らし〜そしてテレビ!	38
テレビ〜花咲川	45
花咲川	53
花咲川vol2	59
ライブ対決!その後は大変です	71
プールで大暴れ	79
病院	88
病院vol2	96
旅行前に	104
京都編vol1	111
京都編vol2	117
京都編vol3	123
京都編vol4	128
京都編vol5	134
修学旅行編vol1	141
修学旅行編vol2	147
修学旅行編vol3	155
修学旅行編vol4	159

夏休み	306
中々に大学は大変	301
入学式からいろいろ大変	295
入学式	291
大学生編	
卒業式はなんだかんだで泣く人が多い	283
怖い	279
文化祭くその後	276
文化祭編 vol.10	264
文化祭編 vol.9	255
文化祭編 vol.8	251
友希那誕生日回 (文化祭編 vol.7)	247
文化祭編 vol.6	243
文化祭編 vol.5	237
文化祭編 vol.4	231
文化祭編 vol.3	222
文化祭 vol.2	217
文化祭編 vol.1	210
修学旅行くその後	203
修学旅行編 vol.10	195
修学旅行編 vol.9	187
修学旅行編 vol.8	182
修学旅行編 vol.7	177
修学旅行編 vol.6	171
修学旅行編 vol.5	165

無人島	309
対バンライブは大変	317
無茶な要求ばかり	322
対バンライブまたかよ!	329
対バンライブ……結果は?	338
夏休み終わりは?	345
大学は色々と裏が多い	349
急展開、時間が経つのは早い	357
トラウマを乗り越えた今何を思う	364
バレンタインってこんなイベントだったっけ	370
悩みの種	375
ホワイトデー	383
進級	392
衝撃の事実	394
全てを知られた今	402
いよいよその日	415
その間に	420
夢の中で	422
日本に帰って	427
崩壊	435
俺はどうしたい?	438
潰される気持ち	442
諭されてわかる自分の気持ち	447
支えて支えられて	451
やっぱり俺は	454

大変	457
願い	460
文句	468
最終回！	474
新年初	481
バレンタイン	485
過去話その他	
対バンライブ	492
リサの嫉妬は怖い	498
意外と人間はいろんな面が見れる	503
対バンライブいざやってみると楽しすぎるもんだなあー	508

高校生編

第1話

俺は小さい頃からいじめにあっていた。

それも段々酷くなり周りには頼れる人もいなかった。

そして俺の親は昔バンドをやっていて、プロになってすぐに自分たちの思っている曲とは違うものを歌わされてすぐにバンドは解散になった。

そのせいで飛び火が俺に飛んで来た。

そして高校になり俺の周りが変わることはこの時はまだ知らなかった。

高校2年

俺は羽丘に通っている。

ほんの最近まで女子校だったらしく男の割合が圧倒的に少ない。

2年の始業式の日が来て学校に向かう準備をした。

朝飯を作り、俺の姉が降りてくるのを待った。

しばらくすると降りて来た。

友希那「おはよう勇也」

勇也「おはよう姉さん。また夜更かししてたみたいだね」

友希那「少しだけよ」

勇也「ほどほどにしておきなよ。何しても体が1番なんだから」

俺の姉湊友希那は親が否定された歌を認めさせるために努力している。

そのあとは朝ごはんを食べて家を出た。

ヘッドホンをつけて学校に向かった。

昔一定以上のいじめにあうと人が近づいてくるのがよくわかる。

だから周りの音が聞こえていなくても関係ない。

学校につき机に突っ伏していると幼馴染のリサが声をかけて来た。

リサ「おはよう勇也」

俺は顔を上げないで手だけで返事をした。

そこからは毎日毎日つまらない授業を聞いて1日が終わる。
家に帰りゲームをするかバイトをするかの二つになっていた。

友希那「勇也今は時間あるかしら？」

「そういう部屋に入って来た。」

勇也「あるけどどうしたの？珍しいね」

友希那「少し散歩に行かない？フリーズが思い浮かばなくて」

勇也「かまわないよ。それじゃあ行こっか」

もう春に入ったといってもまだ少し肌寒い感じだった。

散歩中

友希那（勇也最近元氣ないから引つ張って来たけど何を話せばいいのかしら？）

勇也「なんだか静かだね。姉さん」

友希那「そうかしら？普段と変わらないと思うけれど」

歩き始めて10分ぐらい何も喋らなかつた。

これでいつも通りはおかしいと思いつつも何も言わなかつた。

そしてしばらく歩くと昔よく遊んでいた公園の前に着いた。

勇也「姉さん少しだけ寄る？」

友希那「そうね。少しだけ寄りましょうか」

ベンチに座り俺は2人分の飲み物を買った。

友希那「ありがとう。助かるわ」

勇也「気にしないで」

そこからしばらく沈黙が続き気まぎれなくなった。

勇也「姉さん何かいいフレーズは浮かんだ？」

友希那「いいえ。けれどいい気分転換になったわ」

「そういつて微笑んだ。」

勇也「そっか。ならよかつた」

友希那「そろそろ帰りましょうか」

勇也「そうだね」

周りを見ると夕陽が落ちていた。

家の前に行くとバイト終わりのリサとあつた。

リサ「あれー？勇也と友希那じゃん珍しいね」

勇也「それはねえ、ふがつ！」
姉さんに口を押さえられた。

リサ「友希那がそんなに焦るなんて珍しいな。勇也。またバイトで教えてね」

そう言い家に入っけていった。

次の日

その日の学校も何もなく終わった。

学校が終わりバイトに向かった。

バイトはモカとのシフトだったはずだ。

リサ「遅いよー。時間ギリギリだよ」

勇也「!!なんでリサが」

リサ「モカから代わってーって連絡きたから代わったんだよ。

ちよつとラツキーだけどね」

勇也「はあ。大方昨日のことだろう。何にも言わないぞ」

リサ「ちえー。まあいいや。今日はよろしく」

勇也「ああ、よろしく」

そこからは大変だった。

今日に限って客が多かった。

バイトが終わり2人とも壁を挟んで着替えた。

着替えてると「勇也。今から少し時間ある？少しお願いあるんだけど」

勇也「かまわないよ。昨日のこと聞かないならな」

リサ「もちろん！」

勇也「それじゃあ先に出てるよ」

先に出て俺とリサの分の飲み物を買った。

リサ「お待たせー」

勇也「はい」

そーいい飲み物を渡した。

リサ「ありがと。それじゃあ行こっか」

そこから移動して近くの公園に行った。

公園

バイトが終わったのが9時半だからもうすでに外は暗かった。
公園のベンチに座り周りを見ても誰もいなかった。

勇也「それでお願いつて何？」

リサ「友希那のことなんだけど作詞手伝ってもらえないかな？最近夜遅くまで起きてる気がするんだよ」

勇也「まったくリサは相変わらずだな。元からそのつもりだよ」

リサ「そっかありがと」

勇也「帰るか。リサの頼みは俺の出来る範囲で頑張るよ」

リサ「うん！よろしくね♪」

そこからは家に帰った。

家に着いたのは10時を回っていた。

家

友希那「随分遅かったのね」

勇也「ちよつとね。それより作詞を手伝うわ。無理はダメだからな」

友希那「どうしたのかしら？急に。でも手伝ってくれるならお願いするわ」

そこから少し手伝い時計を見ると12時を回りそうだった。

勇也「はい姉さん。もう寝るよ」

友希那「もう少しだけ」

勇也「ダメだ。これ以上は許可できないよ」

姉さんは少し膨れていたが寝た。

俺はそれを確認してから寝ることにした。

次の日

朝起きていつも通り学校に行った。

朝から授業を受けていつも通り終わった。

帰り道にリサに捕まった。

リサ「勇也ー。ありがとね。友希那随分喜んでたよ」

勇也「はーあの姉さんがね。ところで俺なんかしたっけ？」

リサ「もー作詞の件だよ」

勇也「あーそのことか。別にそんなお礼言われることでもないんだ

けどな」

「そうこうしているうちに家に着いた。」

リサ「じゃあねー」

勇也「ああ」

「そこで別れた。」

「そこからしばらく日にちが経ち姉さんに呼ばれた。」

友希那「勇也今日暇かしら？」

勇也「今日か。うん暇だよ」

友希那「それならよかつたわ。少し付いてきてちょうだい」

「そう言い着いて行った先はCiRCLEと書かれた看板が立っていた。」

勇也「ここは？」

友希那「早く来て」

「中に入ると20代ぐらいの女性が話しかけて来た。」

「???」 「やつほー友希那ちゃん。それに後ろの子は？」

友希那「私の弟の勇也です」

「紹介されたので頭を下げた。」

「???」 「私は月島まりなよろしくね。それにしても友希那ちゃんと同じで神秘的な感じがするよー」

友希那「Roseliaはどこですか？」

まりな「ごめんねー。3番だよ。もうみんな来てるよ」

友希那「わかりました」

「そう言い姉さんは俺の手を引っ張って行った。」

「俺は引っ張られながら頭を下げた。」

「まりなさんは笑っていたが」

部屋内

友希那「みんな遅くなつたわ」

「そこで入ったらリサに知らない3人がいた。」

友希那「勇也には初めてね。私たちRoseliaよ」

リサ「ボーカルの友希那にベースのあたし、ギターの氷川紗夜にキーボードの白金燐子、ドラムの宇田川あこ」

そういうと全員頭を下げて来た。

勇也「うーん。俺が連れてこられた理由が全くわからんけどどういうこと?」

リサ「まさか友希那何も話してないの?」

友希那「ええ、話したらこないと思っただから」

紗夜「すいません。今回は私たちの演奏を聴いて欲しくて来ていたできました」

俺が氷川さん抱いたのは真面目ということだった。

友希那「とりあえず聞いてちょうだい」

勇也「はいはい。逃げもしないよ」

友希那「それじゃあ行くわよ」

そこから演奏が始まり聞いているとなんだか熱くなってきた。

演奏がうまくマッチして普段静かそうな白金さんや氷川さんから
も熱い音楽が聞こえた。

けれど少しずれているところもあった。

聞き終わると早速聞かれた。

リサ「どうだったー?」

俺は正直に言った。

熱い音楽だったこと。そして音がずれていたこと。

リサ「あはは。そこまで正確に当てられるとはね。あたしはそこで
でちよつとミスしたんだよ」

リサを除く4人が驚いていた。

友希那「この分なら問題なさそうね。みんなもいいかしら?」

全員「はい!」

俺は意味がわからなかった。

いきなり連れてこられて問題ないと言われているのだから。

友希那「勇也。私たちRoseliaのマネージャーになってほし
いわ」

勇也「!?!」

その場で意味がすぐには理解できなかった。

そして少し経ったらやつと意味が理解出来た。

勇也「どうして？Roseliaはすでにかなりレベルが高いよ。高校生でそこまで上を目指す理由は何？」

友希那「私たちはFuture World Fesを目指しているわ。それはプロでもかなり落とされるほどの大会よ。今よりさらに上に行くにはあなたの力が必要なの」

正直その話を受けようとは思わなかった。

Future world Fesは確かあいつが落とされた舞台。

そして姉さんはその舞台で復讐をしようとしていることがわかった。

勇也「少し考える」

友希那「ええ、考えた結果なら何も言わないわ」

勇也「それじゃあ」

部屋を出ようとするとりさに手を掴まれた。

リサ「ふふー今日は1日聞いてもらおうからねー」

勇也「嘘だろ」

そこからほんとにずっと聞いていた。

2話

姉さんからマネージャーの話聞いて1週間ずっと悩んでいた。俺は思ったことを言っただけなのになぜあそこまで頼まれるのかも分からなかった。

朝

友希那「おはよう勇也」

勇也「おはよ姉さん。マネージャーやってみるよ。何ができるか分からないけど」

友希那「ありがとう。みんなに伝えておくわ」

そこから学校に向かいいつもどおりに過ごした。

学校

リサ「聞いたよー。マネージャーやってくれるんだって？ありがとうー」

勇也「ただの気まぐれだよ。それに俺自身何ができるか分からないし」

リサ「それでもだよ。ありがとうね」

勇也「はいはい」

そこから授業を受けいつも通りに過ごした。

帰り道

後ろから突撃された。

何かと思い見てみるとリサがいた。

リサ「ちよつとー何回も連絡してるのに無視しないでよー」

勇也「ああ、悪い携帯開いてなかったわ」

携帯を見てみると確かに連絡が来ていた。

リサ「それで今週の土曜日空いてるの？」

勇也「空いてるよ。けどどうしたの？」

リサ「シヨツピングに行こうよ」

勇也「いいよ。ちようど服なかったし」

リサはなぜか喜んでいた。

そこから一緒に帰り別れた。

土曜日

朝目覚ましが鳴り、ケータイがなってることも気づいた。

勇也「もしもし」

リサ「もしかしてまだ寝てたの？もうすぐ時間だよ」

勇也「あ、そうだ。用意するわ」

そう返事したが眠気には勝てず二度寝した。

勇也「うぐっ。なんだ」

上を見るとリサが乗っていた。

リサ「勇也ー起きるって言ってたじゃん。なんでまだ寝てるのかなー？」

リサは頬を引つ張って聞いて来た。

勇也「ごめん。あと痛い痛い。用意するから」

リサ「早くしてねー」

勇也「うん…」

布団の中に隠れた。

リサ「おきてー」

布団をまくりあげられ起こされた。

そこから用意をして行く準備を始めた。

準備が終わり家を出た。

そこから駅前のショッピングモールに向かった。

ショッピングモール内

リサ「まったくー勇也が全然起きないからもう昼じゃん」

勇也「悪かったって。昼は奢るから」

リサ「今日一日だよーだ」

勇也「マジか。わかったよ」

リサ「やったね☆」

そこからは昼を奢り、アクセサリーショップに向かった。

アクセサリーショップで販売リサに買った。

ハート形のネックレスだった。

それも奢ったが似合っていたのであまり気にはならなかった。次に服屋に行きファッションショーをさせられた。

気がつくとは外はもう夕陽が落ちかけていた。

勇也「そろそろ帰るか」

リサ「そうだね。今日はありがとう」

そこから帰った。

月曜日

朝はいつも通りに過ごしていた。

昼になり一人で飯を食べるのが最近では当たり前になっていった。

その頃に起こっている会話も知らずに

???「リサちー土曜日一緒にいた子誰ー？」

リサ「日菜！見てたんなら声かけてくれればいいのに」

日菜「だつて彩ちゃんに止められたんだもん。それであの子は彼氏

なの？」

リサ「違うよ。あの子は友希那の弟だよ」

日菜「え！あの子友希那ちゃんの弟だったの？」

日菜は教室内を見て渡ったがいないことに気がついた。

リサ「まあ基本的にはどっかに行ってるかも」

日菜「また後で話そーと」

昼休みも終わり授業が始まった。

そこからも授業は進み学校は終わった。

部屋から出ようとすると知らない人につかまった。

日菜「ねえねえあなた友希那ちゃんの弟なんですよ？」

勇也「そうだけど、誰？」

日菜「あたしは氷川日菜よろしくねー」

氷川と聞いて真っ先に浮かんだのが紗夜だった。

勇也「うん。よろしく。それじゃ俺帰るから」

日菜「待って。今からあたしとシヨツピングに行こうよ」

勇也「まって。なんでそうなるの？」

日菜「いいじゃん。リサちーとも行ってたんだし」

あれを見てて言ってきたのか。

勇也「仕方ない。わかったよ」

日菜「やったー。るん！つてくるよ」

そこから手を引つ張られひたすらに走られた。

そこからシヨッピングをしたが怒涛の勢いで回って行くので正直あまり覚えていなかった。

日菜「うーんそろそろ時間かー」

勇也「そうだな。帰るか」

日菜「うん。今日はありがとう」

勇也「ああ、気にしないで」

そこから帰った。

こうして俺は天才氷川日菜と知り合った。

そこから1週間後

帰ろうとすると5人組の女の子たち呼ばれた。

自己紹介されると5人は1年でバンドを組んでいると言っていた。しかもその中にモカいた。

蘭「それであたしたちの演奏聞いて欲しいんだけど」

ひまり「蘭。それじゃあ脅迫みたいになってるよ」

勇也「別にいいけどどうして俺のところに来たの？」

巴「それはあこが言ってたんです。すごい音感の人が居るって」

あこが言っただ。

それじゃあこの子はお姉ちゃんかな？

勇也「わかったよ。今日は大丈夫だから」

モカ「それじゃあ勇也さん。いきましょー」

他の4人「勇也さん？」

勇也「モカはバイトで一緒になんだよ」

他の4人「モカ！（ちゃん）」

勇也「どうした？」

つぐみ「実は今日上級生の校舎に行きにくくて知り合いかどうか聞いたら誰もいなかったんですよ」

勇也「ああ、それで。それじゃあ行こっか」

そこで別の視線があるのには気づいていたが無視した。

そこからライブハウスに向かった。

C i R C L Eに着いた。

C i R C L E

まりな「あれ？勇也くん。今度は蘭ちゃんたちなんだ。モテモテだねー」

勇也「そういうのじゃないですから」

そこから部屋に入った。

蘭「それじゃあ一曲。That Is How I Roll」

そこから演奏を聴いたがなんていうんだろこういうの。

息があつたらつて言つたら正しいと思う。

演奏が終わった。

蘭「どうだった？あたしたちの演奏」

正直に答えた。足りない部分を

勇也「それともう一つ。ここにいる全員は幼馴染か何か？」

モカ「おおくよくわかりましたね。全員幼馴染です」

勇也「なるほどね。どおりで」

ひまり「どうかしたんですか？そんなことを気づくなんて」

勇也「いや。演奏を聞いてもしかしたらと思っただけだよ」

つぐみ「演奏だけでそこまで分かるなんてすごいです」

勇也「なんとなくだよ。それじゃあ帰るわ」

ひまり「えー最後までいてくださいよ」

そこから最後まで聞いた。

そこから帰り姉さんに何があつたのか問い詰められたのはまた別の話

しばらくたち5月の中頃

教室内の雰囲気がおかしい。

なんだか言い合いをしていた。

日菜「だからなんでそんなこと言うの？」

???「あいつはそういうやつだよ」

勇也「日菜何やってるんだ？」

日菜「勇也くん。この人たちが勇也くんは女の子を遊び回しているっていうんだよ」

見るとクラスのリーダー格の奴らだった。

勇也「日菜いいよ。別になんて言われようとも」

日菜「けど…」

リーダー格「ずいぶん生意気だな。付いて来い」

勇也「はいはい」

日菜・リサ「勇也（くん）！」

勇也「大丈夫だから」

そこで俺は教室を出てそいつらについていった。

校舎裏

リーダー格「お前最近調子に乗りすぎだ」

勇也「？言っていることの意味が全くわからないんだが」

リーダー格「そういうところだよ」

そういう殴りかかって来た。

反撃しても勝てないと踏んでじつと耐えていた。

あまりに反撃がないのが面白くないのか近くにあった鉄パイプで

殴りかかって来た。

今までのと違いやばかったので右手で防いだ。

防いだ途端に鈍い音がした。

そこで気が済んだのかどこかに行った。

俺は痛みで気を失った。

その頃教室内

日菜「リサちー勇也くん大丈夫かな？」

リサ「だ、大丈夫だよ。勇也だもん」

そこにさっきの男たちが帰って来た。

日菜「勇也くんは？」

リーダー格「さあ？寝てるんじゃないか？」

リサ「っ！」

その場で2人とも教室から飛び出し勇也を探しに行った。

2人は学校中探したが勇也は見つからなかった。

それもそうだ。勇也は途中で目が覚めて帰っていた。

勇也 side

帰って一度荷物を置き病院に向かった。

病院での診察結果は骨折が右手に2箇所できていると言われた。なんでもしばかれたところと耐えていた右肩付近が折れていると言われた。

診察を受け出来るだけ周りにわからないように治療してもらい、ギプスも付けなかった。

その帰りにリサと日菜に捕まった。

帰り道

リサ「あー勇也。どこに行ってたの？」

勇也「腹減ったからコンビニに」

日菜がじつと見てくる。

日菜「勇也くん。何か隠してるよね？」

その場で顔色を変えないようにしていた。

勇也「日菜なんのこと？何も隠してないよ」

日菜「だって勇也くんからるん！って感じしないもん。いつもはしてたのに」

勇也「ん？よく分からないよ。とりあえず帰るわ」

リサ「あ！ちよつと勇也」

聞こえていたがあまり気にせずに戻った。

家に着きその日は終わった。

そこからしばらく経ち俺はギターを教える欲しいと紗夜から言われた。

正直あまり弾けるかはしないが弾いてみた。

すると紗夜の顔色が変わった。

紗夜「勇也さんはギター弾けたんですか？」

痛みがひどくすぐには答えられなかった。

勇也「昔少しね」

紗夜「時間がある時でいいのでおしえていただけませんか？」

紗夜は真剣に頼んで来たので無下にできないと思いを承した。

これには姉さんたちも驚いていたが。

俺はギターが弾けることを確認したのでRoselliaの曲を作ろうと決心した。

合宿

紗夜からギターを教えて欲しいと言われて1週間がたった。

学校に向かうと日菜がいきなり飛びついてきた。

受け止めることは出来たが周りの視線が痛い。

勇也「日菜。危ないからやめてくれ。あとどうしたんだ？やけにテンション高いな」

右手が痛いから早く降りて欲しいとはいえなかった。

日菜「そろそろ夏休みでしょー。あたしたちのバンド見に来て欲しいなーと思って」

確か日菜たちのバンドは芸能界が作ったバンドだったはずだ。

勇也「それって芸能界だよな？そこに行くの？」

日菜「そうだよー。それがどうかしたの？」

勇也「いやこういうのって事務所からの許可がいるんじゃないの？」

日菜「別にいいよー。黙ってたら」

そこでリサに助けて欲しいと口パクで伝えるとリサが日菜を連れてどこかに行ってくれた。

そしてしばらくすると1人の女の子と一緒にきた。

???「すいません。自分は大和麻弥と言います。さっきは日菜さんがすいませんでした」

随分と礼儀ができている人がきた。

麻弥「それで練習の件なんですけど一度事務所に聞いてみてから連絡させていただきます」

勇也「わかりました。それをお願いします」

そこでお辞儀をして大和さんはどこかに行った。

しばらくすると日菜から連絡がきて許可が下りたとき。

日時も伝えられその日になった。

芸能事務所前

事務所はでかかった。こんなところに入るのかと思い、入り口で止まってしまった。

すると後ろから声をかけられた。
??? 「あの、通りたいのですが…」

勇也 「あ、ああごめんなさい」

すぐにそこをどき、道を開けた。

さっきの人見たことがあったが名前が出てこない。

中に入り受付の人に用件を言うと場所を教えてくれた。

練習場所

勇也 「失礼しまーす」

中を見て見るとパスパレのメンバーが揃っていた。

その中にさつき見た人もいた。

向こうも気づいたが何も言ってこなかった。

スタッフ 「今日はありがとうございます。一日よろしくお願ひします」

勇也 「こちらこそよろしくお願ひします」

そこからパスパレメンバーの自己紹介が始まった。

一通り聞きさつきの人が白鷺千聖ということがわかった。

勇也 「それで練習はもうするの？」

彩 「とりあえず一曲いこ！」

そこから曲が始まった。

アイドルだけあって Roselia や After glow とは

また違った音楽をしていた。

そこで曲が終わり感想を聞かれそのまま意見を答えた。

麻弥 「す、すごいです。そこまではつきり当てられるなんて」

千聖 「ええ驚いたわ」

勇也 「それじゃ俺はこれで」

部屋を出ようとすると日菜に捕まり、イヴに抑えられた。

イヴ 「最後までいてください！今日の練習ちゅうはずつとです」

日菜 「なんで帰ろうとしてるのかなー？今日は一日中だよ」

勇也 「マジか。帰りたい」

本当にそこから一日ずつといた。

やっと終わり帰ろうとすると白鷺さんに呼ばれた。

千聖「あなたパスパレのマネージャーにならない？」

勇也「嬉しいお誘いですけど俺はすでにRoseliaのマネージャーなのでお断りします」

千聖「そう：なら強硬手段ね」

最後はよく聞こえなかった。

そこで俺は帰った。

次の日

学校で日菜にとんでもないことを言われた。

日菜「勇也くん。合宿行こ！パスパレの合宿」

勇也「は？合宿？なんで俺が」

リサ「勇也。あたしたちとも合宿だよ」

勇也「お断りします」

日菜「えーいこーよ」

リサ「そうそう今回はパスパレとあたしたちで合同なんだからさ。それに場所は海の近くのコテージだよ。事務所が出してくれるんだって」

勇也「嫌だよ。なんで女10に対して俺1人なんだよ」

リサ「えー普通は喜ぶはずなんだけどな」

勇也「嫌だよ」

リサ「勇也の部屋は別にあるよ」

その瞬間一瞬考えた。

勇也「明日に返事するよ。明後日が終業式だろ」

リサ「りょーかい。それじゃあ考えておいてね」

学校が朝だけでおわり家に帰った。

そして合宿のことを考えているともう朝日が昇り始めていた。

結局寝ることはなかった。

次の日

学校に行きいつも通りの格好をしていると寝てないせいもありそのまま寝てしまった。

そしてそのまま起きることなく昼休みまで寝ていた。

昼休みのチャイムで目が覚めてリサにえらく言われた。

リサ「寝すぎだよー。それで返事はどうなの？」

勇也「はー急だな。行くよ」

それを聞くとリサは走って日菜のところに行き伝えていた。

日菜も喜んでいた。

学校がおわり家に帰り準備をしていた。

そのまま寝てしまった。

次の日

集合場所は事務所前と聞いていたのでリサと姉さんと向かうことにし、朝早くから家を出た。

事務所前に向かうと俺たち以外全員来ていた。

勇也「あれ？最後？」

紗夜「時間には遅れてないのできにしないでください」

友希那「そう。ならよかったわ」

それに見越したかのようにバスがやって来た。

全員乗り込み俺の隣は日菜、後ろは千聖と麻弥になった。

勇也「眠いから寝るわ」

素晴らしい寝ようとする日菜がずっと喋りかけて来てねれなかった。

着いたのは海に近いコテージだった。

勇也「へー今回はここでやるのか」

するとパスパレのマネージャーが話しかけて来た。

マネージャー「素晴らしいですか？」

勇也「ええ、構いませんよ」

素晴らしい移動を始めた。

少し離れたところで口を開かれあることを聞かされた。

勇也「わかりました。可能な限りやります」

マネージャー「助かります」

そう言い帰った。

俺もコテージに戻るとみんなリビングでぐったりしていた。

勇也「はいはい。もうすぐ夜飯だし軽くおやつ作るけど食べる人？」

「聞くと全員が手を挙げていた。

俺は軽くどら焼きを作った。

勇也「はい。どうぞ」

みんな意外な顔をしていたが食べると顔色が変わった。

彩「これってどら焼きじゃないの?」

勇也「どら焼きだよ。リンゴを使った」

みんなあつという間に食べ終わり演奏に行こうとしていたので止めた。

勇也「今から夜飯までは休憩だよー。流石に着いて早々はダメだね」

みんな嫌な顔をしていたが納得してくれたようだった。

その日は夜飯を食べて軽く音を合わせてもう寝ることにした

合宿

二日目

朝起きて朝食を作っていると紗夜が起きてきた。

紗夜「おはようございます。勇也くんは料理できたんですね」

勇也「多少な。みんな降りてくるまで待ってて」

紗夜「わかりました」

そういい紗夜はリビングでゆっくりしているとみんなもやってきた。

そこで朝飯を食べてみんな用意を始めた。

勇也「今日は朝からRoseliaを見て昼からはパスパレを見るから」

全員納得して練習に向かった。

俺はRoseliaのところに行き練習を見ていたがあまりいい感じはしなかった。

見ていてかなりこんを詰めた練習しているからそのうちに合わなくなるだろうと見ているとやっぱ音が少しずつ始めた。

それでも練習を続けて9時から練習を開始したのに休憩に入ったのは10時半だった。

友希那「どうだったかしら？」

勇也「いや特に言うことはないよ。今はね」

リサ「なんか気になる言い方だなー。今教えてよ」

勇也「また今度な。いずれ気づくよ。この合宿のうちに」

紗夜「そうですか。ではそろそろ始めましょうか」

時計の針は11時にもなっていないのにもう始めようとしていた。そこから練習を昼まで続けていた。

俺は昼になる少し前に抜けて昼飯を作っていた。

昼は軽くオムライスを作った。

すぐに全員が揃い昼飯を食べて俺は早く食べ終わった。

勇也「しばらく部屋にいるから練習を始めるときに呼んでくれ」
部屋に行きこの合宿の条件の作詞を始めた。

勇也「全く無理難題だな」

少しはフレーズが出てきたがそれ以上出てくることもなかった。しばらくして麻弥が呼びにきた。

麻弥「そろそろ練習始めるっす」

勇也「りよーかい。今いくよ」

そこからパスパレの練習を見ていた。

初めて見た時も思っていたがなかなかバランスが悪い。

けれどみんな楽しそうに演奏しているので口は出さなかった。

そして休憩も程よく取っていたので少し抜けておやつを作りに行った。

リンゴのタルトを作って持って行った。

少し時間がかかったのでみんなまた練習をしていた。

勇也「みんなごめんー。ちよつと休憩しよー」

素晴らしいカゴを渡した。

日菜「何これー？どこ食べたらいいの？」

勇也「全部食べられるよ」

千聖「かなり上手にできてるわね」

素晴らしいみんな食べ始めた。

タルトは食べ始めたがみんなカゴは食べなかった。

勇也「これ食べないの？パンだよ」

千聖「食べにくいなのよ。綺麗だから」

勇也「そう？なら俺が食べるわ」

食べようとした瞬間に日菜にかすめ取られた。

日菜「ならあたしが食べる」

素晴らしい日菜が食べた。

そこから少し休んでまた練習を開始した。

俺は夜飯を作りに行った。

夜飯も軽くしてリゾットにしてみんなが来るのを待った。

みんなが揃って飯を食べ俺は部屋に帰って作詞を始めた。

その頃リビング

リサ「なーんか勇也バタバタしてない？」

友希那「そうかしら？いつもあんな感じだと思っけれど」
千聖「確かにいつもよりなにかに追われてる感じがするわね」
紗夜「けれど何も言ってくれないでしょうね」
全員が無言になった。

日菜「なら聞きに行つてくるー」

彩「ちよつと！日菜ちゃんストープ」

止まることなく行つた。

勇也の部屋

作詞して下から何か声が聞こえるがはっきり聞き取れなかつた。

「 Bannon! 」

勇也「うお！なんだ」

日菜「勇也くん何してるのー？」

勇也「ちよつとな。野暮用だ」

日菜「みんな心配してるよー」

勇也「そつか。下に行くよ」

そこから2人で下に降りるとみんなびっくりしていたが何も聞いてこなかった。

そこからは雑談をして部屋に帰るとリサと日菜がいた。

勇也の部屋

勇也「なんでいんの？」

日菜「一緒に寝よーよ」

リサ「たまにはいいでしょ」

勇也「いや君たちもう高校生だからね。特に日菜はアイドルなんだから」

日菜「いいから早くー」

ベッドに引きずり込まれて俺が真ん中左に日菜、右にリサの形になつて寝ていた。

俺は緊張して寝れなかった。

次の日（3日目）

朝も1番にリビングに降りて朝飯を作っていた。

眠気と戦って料理を作っていると今日は千聖が1番に降りてきた。

千聖「あら？勇也くん随分眠そうね」

勇也「ちよつと色々あってな。痛っ！」

眠気のせいで体がうまく動かず指の先を切ってしまった。

千聖「大丈夫!?治療するからこつちにきて」

勇也「そんな大げさにしなくても大丈夫だから」

千聖「いいから早くしてちようだい」

こういう時の女には勝てそうもない。

俺はおとなしく座り千聖はそれに消毒をして絆創膏を巻いた。

千聖「全くこういう時は素直になればいいのに」

勇也「悪かったよ。ありがとう」

そこから料理を作りみんなが揃うまでになんとか終わった。

食べ終わり姉さんに聞かれた。

友希那「勇也なにかいい練習方法はないかしら？」

勇也「あるにはあるよ。けど嫌がるよ」

紗夜「そんな方法があるなら嫌とも言ってられません」

勇也「なら今日から全体練習は終わりだ。バンドの垣根を超えた練習をしてもらう同じ楽器同士でペアを組んで2人で話し合っつて練習してくれ」

リサ「ちよつ！ちよつと待ってよ。どうしてそれがいい練習なの？」

勇也「やるかやらないかは任せる。ただこれはいい練習だと断言できよるよ」

友希那「私はやってみるわ。勇也がそこまでいうんだもの」
そこからは全員が納得していた。

勇也「それじゃあまた後でそれぞれのところ行くから。後それとこの練習中は2人で話して決めたことなら何してもいいから。練習しなくてもいいし、練習してもいいし」

紗夜「それはどういことですか？」

勇也「それじゃあまた後でねー」

そういい部屋を出て自分の部屋に戻った。

みんなも渋々練習に向かった。

作詞しながらどこを回ろうか気になっていて一番心配なボーカル組とギター組を急いで行くことにした。

そこから移動してボーカル組がやっている練習場所に向かった。

ボーカル組

部屋に入ると案の定彩はおどおどして姉さんは一人で練習していた。

彩「勇也くーん。助けてー」

勇也「全くこうなることが分かってたんだけどな」

友希那「それならこういう練習をしなくてもいいでしょう!」

勇也「ちよつと怒ってるね。けどこの練習の意味をよく考えてね。そしたらまた上に上げれる」

「そういう俺は部屋を出た。」

部屋を出て次はギター組のところに向かった。

ギター組

部屋に入ると混沌としていた。

日菜はただひたすらに話しかけて紗夜はそれを無視して練習していた。

日菜「あー勇也くん。遅いよー」

勇也「悪い悪いそれでどう?」

紗夜「どうもこうもないです。全く集中できません!」

勇也「紗夜も姉さんと同じだな。この練習の意味を考えてくれ」
「そういう部屋を出て行った。」

その次は大体どこもおんなじくらいだったのでドラム組に向かった。

ドラム組

中に入ると2人は仲良く練習していた。

互いにできないところを教えたりして楽しく練習していたので何もいうことはなかった。

あこ「あー勇也さん。遅いですよー」

勇也「悪いな。この2人なら大丈夫と思って後回しにしたよ」

麻弥「それはいいんですけど何か言うことありました？」

勇也「いや特にないかな。2人の練習はいいと思うよ。互いが互いに教えあえるのは刺激になるし」

あこ「ほんとですか!？」

勇也「ほんとだよ。それじゃあ」

そう言つて部屋を出た。

次はキーボードに向かった

キーボード組

中に入ると三手はいけないものを見た気がした。

イヴが隣子に抱きついてはなれなかった。

勇也「えーととりあえず何してるの？」

隣子「若宮さんが：離れて：くれません」

勇也「うん。とりあえず離れようかイヴ」

イヴ「勇也さん顔が怖いです」

そう言つてはなれた。

勇也「それで練習は？」

イヴ「今からします！」

勇也「そう。無理だけはしないようにね」

隣子「はい：」

そう言つて部屋を出て最後のベース組に向かった。

ベース組

中に入つて見てみると2人仲良く話していた。

リサ「あー勇也遅いじゃん」

勇也「悪いなー1番安心だったから最後に来たんだよ」

千聖「ならいいけどこの練習の意味は教えてくれないかしら？」

勇也「自分で考えないと前には進めないよ。特に今の Rose li a はね。」

リサ「あはは。みんな考えて動いてても勇也考えてることには敵わないなー。あたしも全然分かんないやー」

勇也「まあ考えて悩んでそれでもわからなかったらヒントはあげるよ」

千聖「そうするわ。今日は2人で話しているだけでもいいんでしよう」

勇也「ああ、かまわないよ」

リサ「ならそうするよー」

勇也「そつか。それじゃあ」

俺は部屋を出てリビングに向かい昼飯にグラタンを作って置いておいた。

作り終わり俺は部屋に戻って作詞を始めた。

結局半分ぐらいまでは進んだけどそこからは何もできなかった。

片方はもう終わったんだけどな。

今回の作詞で俺は *Rosealia* の分はもう終わってパスパレの分は全然進まない。

考えていると眠気が襲ってきてそのまま寝てしまった。

起きるとそこには姉さんと紗夜がいた。

友希那「どうしても教えてくれないかしら？今回の練習の意味」

勇也「それは無理だよ。けどもうそろそろわかるかもね。明日の最後に音を合わせたらわかるよ」

紗夜「そんなすぐにわかるんですか？」

勇也「だから自分たちで考えて動いてみるといいよ」

紗夜「わかりました。それでは」

紗夜と姉さんは部屋から出て行った。

俺もそれに続いてリビングに向かい料理をしようとするともうできている。

リビング

リサ「あーやつとききた。もう作つといたからみんなで食べよ」

その瞬間に心臓が跳ね上がった。

勇也「ああ、もううよ」

なんだったんだ今のは？

そこからみんなで飯を食べていたが姉さんと紗夜は難しい顔をしていた。

俺はリビングでしばらくゆっくりして部屋に戻った。

そこには千聖と燐子がいた。

勇也「なんでここに？」

千聖「一緒に寝るためよ」

燐子「お邪魔…でしたか？」

千聖「そんなことはないわよね？昨日日菜ちゃんとリサちゃんと一緒に寝たんだから」

勇也「なんでそれを」

千聖「今日聞いたのよ」

その時の千聖は悪魔みたいな顔をしていた。

ベットに入り左に千聖、右に燐子が来て寝た。

燐子は抱き枕がわりに俺の腕を使っていたが燐子意外にあつてなかなか寝付けなかった。

けど昨日も寝てないので何とか寝ることができた。

次の日（4日目）

朝起きているとすでにキッチンにはリサが立っていた。

勇也「リサ今日は早いな」

リサ「早くに目が覚めちゃって」

勇也「それじゃあ一緒に作るか」

リサ「うん♪」

2人でサンドウィッチを作っているとみんな降りて来た。

勇也「さて今日は朝は昨日と同じでやってもらうけど昼からはバンドごとで音合わせしてみて」

全員納得してくれた。

麻弥「それで勇也さんは何するんっすか？」

勇也「今日はやることあるから朝は回らない。昼からは両方行くよ」

友希那「わかったわ」

しばらくしてみんな各楽器ごとに別れた。

俺は部屋に戻り作詞の最後を終わらせた。

そして昼まで休憩して昼飯を作った。

みんなが揃い食べ終わった。

勇也「さて昼からは音合わせするだけだからな」

紗夜「分かってます」

勇也「それじゃあRoseliaから行こっか。パスパレは後で行くよ」

そこから移動してRoseliaの練習を見た。

演奏してるとやはりリサ、あこ、燐子の演奏レベルが上がっていた。

それに対して姉さんと紗夜は今までとあまり大差はなかった。

姉さんと紗夜はびっくりしていた。

勇也「姉さんと紗夜は驚いてるね」

友希那「ええ。どういうこと？」

紗夜「どうしてここまで技術が上がって」

勇也「それじゃありサから何してたか答えてあげて」

リサ「それは千聖と話したり、少しベースを触っただけだよ」

勇也「次にあこ話してあげて」

あこ「私は麻弥さんとお互いに教えあいながら練習してました」

勇也「それじゃあ最後に燐子お願い」

燐子「私は…若宮さんと…音を合わせたり…教えたり…してました」

勇也「そういうこと。わかった？」

紗夜「さっぱりわかりません！」

勇也「答えだよ。ここでのやり方は間違ってる」

友希那「どうして！何がちがうの？」

勇也「こんを詰めすぎなんだよ。リサやあこ、燐子は休憩をして今までより音がわかるようになってるんだよ。同じ音ばかり聞いていると感覚がどうしても狂う。だからペアでやってもらったのに。それに100%でやり続けることはいいいことじゃない」

友希那「どうして!?何がいけないの？」

勇也「ずっとそれでやると初めは上手くいっててもいずれば疲労がたまっていくからね。最後に一回合わせるときや少し全力でやるのはすごい効率のいいことだから」

紗夜と姉さんは悔しそうな顔をしていた。

勇也「それじゃあもうすこし音を合わせて終わりにしようか」
みんな納得してくれた。

そこから少し音を合わせて終わった。

俺はパスパレのところに行きRoseliaはリビングで休憩を
していた。

パスパレ

練習場所に行くときみんな休憩していた。

勇也「おつかれーパスパレのみんなにはこれを見て欲しいんだ」
そう言っただけが作った作詞を見せた。

彩「これもしかして勇也くんが作ったの？」

勇也「そうだよ」

日菜「うわーすごい曲だよ」

イヴ「ほんとです！すごい曲ですね」

麻弥「ほんとっすね」

千聖「もしかして最近忙しそうにしてたのって？」

勇也「やつぱりバレてた？」

そこから全員に怒られながらもお礼を言われた。

勇也「それじゃあ軽く音を合わせようか」

そこから音を合わせたらずば抜けて伸びた人はいないけどみんな
のレベルは上がっていた。

勇也「うん。上出来だね。それじゃあ終わりにしようか」

彩「え？もう」

勇也「今日は音合わせだけだからね。無理しても意味ないし」

千聖「そうね。今日は終わりにしましょうか」

そこからリビングで全員で遊んで夜飯を食べた。

明日で合宿も終わりだから最後に遊ぼうと思って部屋に帰った。

勇也の部屋

部屋に入ると紗夜と麻弥がいた。

勇也「どうしたの？」

紗夜「勇也くん。正直に聞きます。どうしてそんな目をしてるん
ですか？」

勇也「なんのこと？」

麻弥「勇也さん。たまに自分たちを見る目が怖いときがあるんです」

多分昔のことを思い出し出してるんだろうな。人を信用して裏切られるあれが怖いからそんな目をしてたんだろうな。

勇也「心配かけてごめん。大丈夫だから」

俺は一旦部屋から出て外の空気を吸おうと思ったらリサと千聖に止められた。

リサ「勇也さ。なんでそんなに怖い目をしてるの？」

勇也「なんのこと？」

千聖「とぼけても無駄よ。もう紗夜ちゃんや麻弥ちゃんから聞いているでしょ」

勇也「ほんとに大丈夫だから」

俺は外の空気を吸いに行つた。

リサ「勇也！」

声を無視して外に行つた。

コテージから離れたところで1人でキレていた。

勇也「なんなんだ。くそっ！」

1人で暴れまわっていた。ある程度暴れてスッキリして1人で海岸ぎわに寝転んでいた。

しばらくして部屋に戻って寝た。

次の日（最終日）

俺は起きて下に行くときみんなもう起きてた。

友希那「リサたちから聞いたわ。話してちょうだい」

勇也「だから俺が悪かったって。何も無いよ。それよりみんな今日練習は？」

千聖「今日はしないわ。勇也くんのこと聞きたいから」

勇也「そう。俺はもう一眠りしてくるよ」

部屋に行き辺りを見渡した。

カッターを見つけてリストカットを試してみた。すると痛みが走ったが不思議と悪くなかった。

リストカットして痛みでここにいるって証明する人もいるらしいから俺もその状況なんだと思い2つ、3つ、とだんだん増やしていき気がつくあたりが血の海になっていた。

それをみて自分の中の血がやばいと思った時には遅かった。

その頃リビング

リサ「やっぱり話してくれなかったね」

日菜「話して欲しかったんだけどなー」

そこまで話していると上から「ドンッ！」となった。

みんな急いで上が上がって見ると勇也が倒れていた。

友希那「イヤァー」

紗夜「すぐに救急車を」

千聖「わかったわ」

そこで千聖が電話してすぐに救急車が来た。

そこに友希那とリサが乗り他のみんなは事務所のバスで帰った。

救急車が病院に着き勇也はすぐに手術しに運ばれた。

家出！

病院

「ここからはリサ目線です

勇也が運び込まれてあたしと友希那は手術室の前で座って待っていた。

しばらくすると中からお医者さんが出て来た。

医者「彼の出血は少し多くてここにあるストックだけでは足りません。どなたがO型の方はいますか？」

リサ「あたしO型です」

医者「わかりました。血をとりますがいいですか？」

リサ「大丈夫です！」

そこからあたしは別の部屋に連れていかれて血を抜かれた。

医者「少し貧血気味になるかもしれませんが」

リサ「大丈夫です」

そこからお医者さんは手術室に戻ってあたしは友希那のところに戻った。

しばらくして手術が終わったみたいだ。

医者「一応安定してますがあとは彼次第です」

あたしたちは頭を下げて勇也の病室に向かった。

病室

勇也の手首は縫われた後や包帯が巻かれていて見るだけで痛々しかった。

友希那もよほどショックだったのか一言も話さない。

しばらくするとパスパレのメンバーとRoseliaの残りのメンバーがやって来た。

リサ「一応もう大丈夫らしいんだけどあとは勇也次第だつて」

みんなショックを受けていたが何も話すことはなかった。

リサ「とりあえずあたしと友希那だけここに残るよ。みんなは帰った方がいいよ」

紗夜「わかりました」

紗夜の言葉でみんな部屋から出て行った。

リサ「友希那。もうそろそろいいんじゃない?」

友希那はあたしの言葉を聞くと我慢していた涙を一気に流し始めた。

あたしも少しの間病室から出た。

1人になるとやっぱりさみしかったし胸が苦しくなった。

その日は看護師さんに頼んで勇也の病室で寝かせてもらうことになった。

次の日

起きると友希那は泣き疲れたのかまだ起きていない。

勇也も未だに目を覚ます気配がなかった。

昼前になると友希那が目を覚ました。

リサ「おはよう友希那」

友希那「リサおはよう」

それ以上の会話はなかった。

昼を回つてもそれ以上の会話はなくみんながお見舞いに来るときに少し話すぐらいだった。

夜も看護師さんに頼んで寝かせてもらえることになった。

友希那は勇也に寄り添って寝ていた。

あたしは少し離れた場所で寝ることにした。

次の日

起きるとやっぱり勇也は起きてなかった。

そのまま時間だけが過ぎみんな昼頃にお見舞いにやって来た。

来たのはパスパレのメンバーとRoseliaのメンバーだった。

昨日は何も話さなかったが今日は少し話していた。

日菜「うーん何も話さないのは勇也くんも寂しいと思うな」

紗夜「日菜からそんな言葉が聞けるとは思ってたわ」

日菜「ひどーいおねーちゃん」

そこで笑いが起こった。

それに反応して勇也が目覚めた。

勇也「ん?みんな。というかここどこ?」(ここからは勇也目線で

す)

俺が起きるとみんなポカンとして何も話さなくなった。

しばらくして姉さんが「勇也!」と抱きついて来た。

勇也「どうしたの? 姉さん」

よくよく考えてみると全部のことを思い出して俺が何をしたかも思い出した。

勇也「みんなごめん。今日は時間も時間だから明日全て話すよ。なんでこんなことをしたか。みんなが聞いてきた質問にも答える」

みんな納得して帰ってくれた。

自分で数つけた手首はまだうまく動かせないが必要最低限のことではできた。

ずっと寝ていたせいかその日は中々寝付けなかったが時間とともに眠った。

次の日の朝一からみんなやってきた。

友希那「話してくれる」

勇也「わかった。その前に少し暗い話になるから覚悟しておいてね」

みんな納得してくれたので話し始めた。

勇也「俺は小さい時からいじめを受けてたんだよ。小学校から。俺はリサや姉さんともよく遊んでいたし2人とも学校で人気だったから男子からの嫉妬に近いかな。はじめは無視とかだったんだけどだんだんひどくなってきてしまいには暴力になってきた。けど俺が反撃すると今度は姉さんやリサに白羽の矢が立つ。それは嫌だったから我慢するしかなかった。そして中学になるとたった1人だけ俺と仲良くしてくれたやつが居たんだよ。そいつの名前は沢木 興佐そいつだけは俺のことをかまってくれた。俺も嬉しかったんだよ、いろんなことを話した。

そいつはそれをネタに俺をさらに孤独にしていこうにした。

それ以降は人との付き合いにも信じられ無くなっていったんだな。

それに中学になると親からの暴力もあったしな」

友希那「どういうこと!?!」

勇也「ここからは少し家庭の話だけど中学の時に俺の父さんのバンドが解散したんだよ。そこからは全てが許せなかったんだな。俺に暴力を振るい母さんは止めるわけでもなく仕事でのストレスと一緒にになって振るってきたんだよ。そのせいで俺は中学で長袖着用は確定だったしね。それに飯抜きの日も多かった。育ち盛りにはそれはきつかったよ。時期的には裏切られたのとほとんど同時期だったから俺の心が折れるには十分すぎるほどだったんだよ」

紗夜「そんなことが…」

勇也「そういうこと。こんな出来事があったからリサたちの言う通りそんな目をしてたんだと思う」

みんな聞いていてシヨックを顔に隠せていなかった。

特に姉さんとリサは…

千聖「酷いことがあったのね」

勇也「まあね。もうこの過去からはどうやっても逃げられない。だから俺との付き合いはやめた方がいいよ。これからもそんな目をすると思うし」

彩「そんな…」

日菜「いやだよ。離れてって言っても離れないから」

勇也「は？なんで？」

日菜「あたしが勇也くんという楽しかったから。初めてあたしを理解しようとしてくれたから。そんな人とは離れないよ」

勇也「はは…そんなことしたつもりはないよ」

紗夜「私も勇也くんと一緒にいたいんです。あなたは私たちをさらに上に連れて行ってくれる。勇也くんは掛け替えのない存在ですから」

勇也「けど…」

正直みんなに突き放されると思っていた。

友希那「私はあなたが受けてきた痛みを知らない。けど私はあなたの姉でいたい！」

リサ「あたしも何も知らなかった。けどこれからは少しずつ勇也を支えていきたいよ」

勇也「みんなごめん。そしてありがとう。今はまだ厳しいかもしれ

ないけど頑張るよ」

リサ「うん♪一緒にがんばろ！」

勇也「話しすぎたな。もうそろそろ昼だよ」

麻弥「それもそうっすね。帰りましようか」

そこからみんな病室から出て行った。

俺も上手くない病院のメシを食べ終わって寝ようとするすると寒気が走った。

いやな予感がしたからリサに電話した。

勇也「もしもしリサ。姉さん大丈夫だった？」

リサ「うーんわからないけどなんか思い詰めてるような感じだったよ」

勇也「わかった。ありがとう」

その言葉を聞いて手に刺さってる点滴やらを引っこ抜いて家まで走った。

その頃自宅

友希那「お父さん。今までどうして勇也にあんなことしたの？」

友希那父「そうか。聞いたのか。なら無関係じゃないな。友希那は傷つけたくなかったんだけどな…」

手を振り上げた瞬間ドアが蹴破られた。

勇也「おいテメエ俺だけじゃなくて姉さんにまで手をあげるつもりか？」

友希那父「なんだお前か。半死人は出て行け」

それでも姉さんをしばこうとしたので俺が間に入った。

来る前に電話しといてよかった。

勇也「姉さん今すぐ部屋に向かって荷物固めてきて。説明はあと！」

その言葉で姉さんは自分の部屋に向かってくれた。

勇也「もうお前の世話にはならない。二度と俺の前に現れるな」

友希那父「そんなことを許すと思うのか」

そこから喧嘩になり俺がなんとか勝った。

そこで頼んでた人たちが来て荷物を運んでもらった。

勇也「じゃあな」
俺と姉さんはその日家を出た。

一人暮らしくそしてテレビ!

俺と姉さんが家を出て向かったのは一つの軒家だった。

??? 「それでは荷物を運んでおきます」

勇也 「頼みます」

友希那 「どういうこと? 全くついてこないのだけれど」

勇也 「話すよ。全て」

??? 「私たちの1人も行きます。少し相談があるので」

そこから3人で移動をして喫茶店に着いた。

羽沢珈琲店と書いてある店に入った。

つぐみ 「いらっしやいませー」

勇也 「あれつぐみ? なんでここに」

つぐみ 「ここは私の父が経営しているお店なんですよ」

勇也 「なるほどね。それじゃあコーヒー3つ頼める?」

つぐみ 「わかりました。少々お待ちください」

つぐみはカウンターの方に行った。

友希那 「さて話してもらおうわよ」

勇也 「もちろんだよ。今回の一件は全部俺の独断だ。この前に合宿があつたら」

友希那 「ええ」

勇也 「あの時にパスパレの歌を作ったんだよ。その対価として家を用意してもらったんだよ」

友希那 「そういうことね。けれどどうしてそうなることがわかつたの?」

勇也 「元々高校出たら家を出るつもりだったんだよ。けど何も知らない奴が出て何もできない。だから足がかりにしようと思ってね」

友希那 「そんな! それじゃあ勇也は」

勇也 「けど少々予定が狂った。だから今回はあそこに住むことにするよ。姉さんはどうする? あそこに住んでもいいし、あの家に帰ってもいい。こっちに住むなら俺のできることをして姉さんを守るよ。またあいつが来るかもしれないしね」

友希那「元々こうなつた時点で決まつてるわ。こっちに住むもの」
勇也「りよーかい。それじゃあ先に帰つててくれる?この人が用があるのは俺みたいだから」

???「いえ、いていただいても結構です」

勇也「それでなんですか?」

つぐみ「すいません。お待たせしました」

素晴らしい俺たちの前に3つのコーヒを置いてくれた。

勇也「ありがとうつぐみ」

つぐみ「ではごゆっくりどうぞ」

つぐみは裏に行ったのを確認して話し始めた。

???「では本題を。勇也さんテレビに出ませんか?」

俺と姉さんは何を言っているのかよくわからなかった。

勇也「はい?俺がテレビですか?」

???「ええ実は今度。パスパレが料理番組をすることになったんです。

けど知つての通りそこまで料理ができるわけでもありません。

そこで知り合いに誰かいないかと聞いてみたら勇也さんの名前が上がりまして今回の件もあります。

これと同時にテレビデビューされてはいかがです?

知つての通りこれは仕事ですので…これ以上は言わなくてもわかりますね?」

勇也「なるほどよく分かりました。少し考えます」

???「返事は1週間以内をお願いします。では…」

素晴らしいそいつは店から出た。

友希那「どうするつもり勇也」

勇也「少し考えるよ。もう少しゆっくりしてから帰ろうか」

そこでコーヒーを飲んでこれからのことを話して帰った。

俺は家に帰り夜飯を作っている間姉さんは荷ほどきをしていた。
夜飯を食べてその日は寝た。

次の日

「おきこー勇也」

勇也「ん?誰」

目を開けてみると本来そこにはいないはずの人が俺の上に乗っていた。

リサ「あたしだよー。おきた?」

勇也「いや起きたけどなんでいるの?」

リサ「いやー昨日友希那から連絡きてね。そのあとこっちにきて話を聞いてこっちに住むことにしたんだ」

勇也「いや待て。今なんて言った?一緒に住む!?どういうこと?」

友希那「それについては私が話すわ。お父さんの危険がリサにも及びかねない。だからこっちにきてもらったの」

確かに姉さんの言う通りだ。あいつなら俺を探すために何をするかわからない。

勇也「わかった。これからよろしく。部屋は適当なところ使ってくれ」

リサ「りょーかい♪」

勇也「それじゃあ出かけてくる。姉さんあとよろしく」

友希那「そうやっぱり行くのね」

勇也「それじゃあ後は頼んだよ」

俺は家を出て芸能事務所に向かった。

芸能事務所

入り口に行くと昨日の人がいた。

???「お待ちしてました。勇也さんならきてくれると信じていました」

勇也「あの話お受けします」

???「ありがとうございます。ですが中にはあなたの料理の腕を信用していないのがあります」

勇也「言いたいことはわかりました。やります」

???「ではこちらへ」

素晴らしい案内されたのはキッチンだった。

しかもすべてのものが2人分ありなんとなく状況がわかった。

勇也「それで誰が俺の相手なんですか?」

???「目の前にあるじゃないですか。私です」

勇也「わかりました。けどそろそろ名前教えてくださいよ」

???「私に勝てたら教えます。これは最終選考みたいなものなので本気でいきますよ」

勇也「喧嘩みたいになってますけどわかりました」

???「ではフレンチで使う食材は鹿肉」

勇也「わかりました」

鹿肉ねー何を作ろうかな。

考えているうちに相手はもも肉をとって調理を始めた。

確かに何も知らない子でももも肉は美味しく食べられる部分だ。

勇也「あ！そうだ。審査員的是はどうします？」

???「多分そろそろくるよ」

素晴らしいドアが開いたらパスパレのメンバーが来た。

彩「お待たせしましたー」

勇也「なんだ。審査員ってパスパレのメンバーか」

千聖「なんだか嫌そうね」

勇也「い、いやそんなことないよ。さあ調理しようかなー」

相手はもう調理を終えたみたいだ。

栗とコーヒーを使っていたからよく分らん。

???「食べてみる？」

食べると確かに美味かった。

そして考えているとみんながこっちを見てきた。

勇也「あ！そうだな。ちよっと待ってて」

俺は料理の盛り付けをして出した。

勇也「そうだな料理名は2つの表情を見せる鹿肉かな？」

???「とりあえず食べてみましょう」

食べた途端みんな固まった。

勇也「あ、あれ不味かった？」

イヴ「すごく美味しいです！」

勇也「それじゃあ勝った方を教えてくれる？」

全員「勇也さんです！」

???「私の負けです。では名前をいいます。私の名前は新庄正樹。か

つて君のお父さんのバンドのドラムだよ」

勇也「は？もしかしてあいつに言われて俺のこと捕らえに来たのか？」

正樹「そんなことしないよ。バンド解散後にここで仕事してるだけだから」

勇也「そうですか。それでぼくは大丈夫なんですか？」

正樹「ええ、文句なしです。会議室で話をしますのでこちらに」
会議室

正樹「ーが今回の依頼です」

勇也「わかりました。後あの件頼みます」

正樹「ええ、この仕事が上手く行ったら必ず」

勇也「それでこれは5人でコース料理でも作るんですか？」

正樹「ええその通りです。収録は1週間後です。それまではパスパレの練習も休みにしますのでお願いします」

勇也「わかりました。後は食材送ってください。失敗するので」

正樹「わかりました。連絡先を覚えておくのでここに送って来てください」

勇也「それじゃあ行こうかみんな」

麻弥「どこに行くんつすか？」

勇也「俺の家。あそこならある程度のもの揃ってるから」

日菜「わかったよー。それじゃあ行こ」

底から6人で俺の家に向かった。

俺の家

リサ「あれー？パスパレのみんなじゃん」

日菜「リサちーなんているのー？」

勇也「もういいだろー。早く話し合いしようぜー」

千聖「そうね。そうしましょうか」

リサ「勇也ーどういふことか後で話してもらうからね」

勇也「りようかい。それじゃありサにも聞いていてくれ。多分手を借りるから」

リサ「え？あたしも」

勇也「頼むよ」

リサ「しようがないな」

そこからリサを加えたメンバーで話し合った。

はじめは意見のぶつかり合いばかりで厳しいと思ったけど決まると一瞬だった。

勇也「それじゃあ前菜はイヴ、スープは日菜、メインは千聖、魚料理は麻弥、デザートはあやに決まりだな」

そこから俺は欲しいものを送ると30分もしないうちにとんでもない量が来た。

勇也「これは多いな。まあしつかり練習できるからいいけど」

そこからある程度の形になりなんとか料理が完成するまでやっていた。

全員が一通りできてきた。

そこで時間はもう夜になっていた。

勇也「もう全員ここに泊まっていよいよ。家に帰りたい人は送るけど」

全員「泊まります」

勇也「わかった。空いてる部屋使ってくれ。俺は風呂の準備してくるよ」

イヴ「私も手伝います!」

俺は肩を押えて「休んで。料理でかなり疲れてるはずだから」

麻弥「それなら勇也さんだって」

勇也「俺は慣れてるからね。みんなは初めてだろ。それにお客さんなんだから」

千聖「そうね。少し休ませてもらうわ」

勇也「ああ、休んでくれ」

そこから俺は風呂の準備をしてさつき作っていた料理の改良に入った。

味見してみるとみんなそれなりにできているが相手が相手だからなもつと上手くならないと。

みんなは少し寝ていた。

リサ「勇也少し休まないで倒れるよー」

勇也「リサは起きてたのか。わかってる。けど今回はみんなだからしっかりしたいといけないからな」

リサ「もうしようがないなーあたしがやめって言ったらやめだからね」

勇也「わかったよ。それよりみんな起こして風呂に入るように行ってきてくれよ。服はリサのでも俺のでもいいから」

リサ「わかったよ」

リサはみんなを起こしに行ってくれた。

みんな風呂に入って出てきたのを確認して俺は夜飯を作った。

みんなが食べている間もずっと改良してそのまま寝てしまった。

みんなも寝たように次の日になった。

そこからずっと練習を重ねてみんなかなりできるようになり、いよいよ本番が来た。

テレビく花咲川

本番の日

彩「緊張するよー」

彩と麻弥、イヴは緊張してるみたいだった。

千聖、日菜はいつも通りリラックスしていた。

スタッフ「本番です」

その言葉で俺たちは会場に入っていくとすでに対戦相手はいた。

千聖「あら？あの人たちは最近噂の人たちじゃないかしら？」

麻弥「あーそろそろ星をとるかもしれないって噂の」

確かに最近噂で聞いていたがまさか対戦するこのになっていたとは。

彩「こんなの勝てるわけないよ」

勇也「かもな」

イヴ「勇也さん！なんでそんなこと言うんですか」

勇也「負けてもしようがないんだよ。相手はプロなんだから。負け

て当たり前勝つたらすごいんだよ。だからやれることをやろうぜ」

対戦相手「ところでそちらの方は？」

勇也「今回サポートに入る湊 勇也です」

対戦相手「なるほど。わかりました」

司会「それでは対戦スタート」

そこからみんな調理に入り順調に進んだ。

俺は全員の調理に意識を向け、自分のサポートを最大限に発揮していた。

調理も終盤にかかり、みんな終わりかけていると彩が途中で止まっていた。

彩「緊張して手順忘れちゃったよ」

周り見えていなかった。

勇也「悪い。ちよつと外すぞ。みんな大丈夫か？」

千聖「こっちは大丈夫だから彩ちゃんの方に行つてあげて」

「や、彩、丸山彩！」

彩「は、はい！」

勇也「つたくなんでここまでできてわからないかなー？」

彩「ごめんなさい」

勇也「冗談だよ。それじゃあ深呼吸して思い出そうか」

彩「スーハーハー。!!そっか分かった」

そこから彩はしっかりできていた。

審査員に全ての料理を食べてもらい判定してもらった。

審査員「さて判定ですが、この料理は一体誰が構想したんですか？

パスパレの皆さん」

あっこれやばいやつだ。

千聖「そこにいる湊 勇也くんですよ」

審査員「なるほど。斬新かつしっかりとしたコース料理でした」

勇也「ありがとうございます」

審査員「勝者はパスパレの皆さんです」

対戦相手「そんなバカな」

勇也「納得いかないなら食べてみるといいですよ」

そこで対戦相手の全員は食べて納得していた。

対戦相手「私たちの負けだ」

そこで番組の収録は終わり控室に帰った。

控室

彩「やったー勝ったー」

イヴ「本当に良かったです」

日菜「まさかあそこで彩ちゃんレシピ忘れるとは思わなかったけ

どねー」

麻弥「それを言っちゃダメですよ」

勇也「ハハハ、まあ無事に終わったし俺は帰るわ」

千聖「あら？今からみんなで打ち上げに行くのよ」

スタッフ「失礼します。さっきの対戦相手のお店を予約しておきま

した。そこならいくら食べても大丈夫です。先ほどの対戦の勝利報

酬みみたいなものです」

彩「ならそこにしようよ！」

千聖「そうね。そこにしましょうか」
全員納得していこうとした。

スタッフ「勇也さんだけ少し残ってください」

勇也「わかりました」

パスパレは全員部屋から出て俺だけ部屋に残り話を始めた。

スタッフ「今日はありがとうございます。今回の仕事の結果で決めると言っていたので簡潔に言います。これからよろしくお願いします」

勇也「こちらこそお願いします」

スタッフ「詳しい資料などは後日お渡しいたします」

勇也「わかりました」

スタッフ「ではみなさんも待っているようなので早く行って上げてください」

勇也「わかりました。失礼します」

俺は部屋を出てみんながあるところに向かってそこからみんなで言われた料理店に向かった。

料理店

着くとそこには誰も客がいなかった。

オーナー「お待ちしておりました。私はこのオーナーです」

勇也「もしかして貸切ですか？」

オーナー「その通りです。今回は貸切にしました」

勇也「何もそこまでしなくても」

そこから先に案内されみんな頼みたいように頼んだ。

実際料理がきて食べてみるとほんとに美味しい。

みんなも満足した顔で食べ続けていた。

オーナー「一つお願いがあるのですがよろしいですか？」

勇也「いやです」

麻弥「勇也さんそこまで言わなくても話だけでも聞いてあげたら」

勇也「大方俺と料理勝負しようとか言い出すんだろ。めんどくさいから嫌だ」

オーナー「そんなこと言わずにお願いします」

イヴ「勇也さん。ここはやってあげるべきです」
日菜「やってあげたらいんじゃないかなー？」

勇也「分かったよ。早くやろう。お題は？」

オーナー「お題は中華、食材は薩摩地鶏です」

勇也「へーほー地鶏なんて使ったことねえや」

千聖「大丈夫なの？」

勇也「まあなんとかなるだろ。少しだけ時間もらいます。仕込みするんで」

オーナー「わかりました。それまでは待ちましょう」

俺は厨房に行き鶏ガラのスープを作っておいた。

勇也「すいません。お待たせしました」

オーナー「では始めましょうか」

俺は調理にかかり向こうも調理を始めた。

勇也「あ！判定はどうします？」

オーナー「パスパレの皆さんでいいと思います」

勇也「だつてさ。公平にたのむよ」

イヴ「もちろんです。嘘をつくなんてブシドーに反します」

その言葉をかけたので俺は調理を再開した。

相手の方が早く終わりみんな食べ始めた。

俺も調理が終わりできた。

千聖「これは何？」

勇也「ギョーザだよ。まあ見た感じはそうは見えないけど。とりあえず食べて見てよ」

みんな食べた途端に箸が止まらなかった。

勇也「おいおい。火傷するぞ」

彩「うん！美味しい」

勇也「それは良かった。それじゃあ勝った方を言ってくれるかな？」

全員「勇也くん！「さん」」

勇也「どうも、それじゃあ帰るか」

オーナー「ここで働きませんか？」

勇也「お断りします。それじゃあ帰ろう。このままいると面倒なことになる」

俺たちはその店から逃げるように早く出て行った。

店を逃げるように出てからみんなを送り家に帰った

自宅

勇也「ただいまー」

かなり小さい声で入った。

時間はすでに11時を回っている。

リビングに行くとりサと姉さんは起きていた。

リサ・友希那「おかえりなさい」

勇也「ただいま。まだ起きてたんだね」

リサ「そりやあんな料理の仕方見せられたら寝れないよ」

勇也「もしかしてあれって生放送だった？」

友希那「もちろん全部見てたわよ」

リサ「そうだねー勇也が彩にあんなことを言うなんてね」

勇也「その言い方やめて。俺がなんか悪いみたいになってる」

リサ「アハハごめん。それにしてもお疲れ様」

勇也「もう寝るよ。今日は疲れた」

友希那「おやすみなさい」

勇也「おやすみ」

俺は自室に行きベッドに倒れこんだ。

それからはテレビにもかなりの数を出て夏休みが終わる頃にはかなり仕事をもらっていた。

始業式

朝起きて俺は姉さんとリサの分の朝飯を作って早く出た。

ここ最近忙しかったから屋上でのんびりしようと思い、早くに家を出たのはいいが少し小腹がすいた。

商店街の中を通ると色々な店があった。

朝からコロツケは少ししんどいのでパン屋に行くことにした。

???「いらっしやませー」

中からは高校生ぐらいの女の子が店番をしていた。

俺はカレーパンとチョココロネを買って学校に向かった。

???「ありがたいございましたー(カツコいい人だったなー。けど今の人どこがで見た感じがする)」

俺は店から出て学校に向かった。

屋上でのんびりして教室に向かうと女子が一気に寄ってきた。

「テレビ出てたね」「あんなに料理できるんだ」：etc

質問は1時間目が始まるまで終わることはなかった。

1時間目は移動して体育館での始業式だった。

それが終わり次の時間に入るときに呼ばれた。

「湊 勇也くん。今すぐ理事長室に来てください」

呼ばれたのは俺は全く記憶にない。

とりあえず向かった。

理事長室

理事長「突然呼んでごめんね。そんなに固くならなくていいから。

怒るとかそんなんじゃないよ」

勇也「わかりました」

俺はソファを勧められたのでそこに座った。

理事長「あなたに花咲川学園に行ってもらいます。向こうの理事長

との話し合いでね」

勇也「どうして俺なんですか？他にもいい人はたくさんいたはずですよ」

理事長「そうね、そこから話した方が良さそうね」

勇也「いやそこから話してくださいよ」

理事長「それじゃあ話すわよ。ここの学校と花咲川は姉妹校でね。

もう少しすると向こうも共学にしたいらしいのだけれどまずはお試しでしたいって話になってねそれで勇也くんが選ばれたのよ」

勇也「なんとなくわかりました。次は選出理由を教えてください」

理事長「それなら簡単よ。あなたが頭いいからよ。学年2位だも

の。あの氷川さんと点数もほとんど変わらないし、しかもあなたわざと間違えてるでしょ」

勇也「なんのことでしよう？そんなつもりありませんが」

理事長「間違えてる場所毎回のテスト同じなもの」

勇也「ありやりや。そうですよ。まあそれは置いてわかりました。花咲川に行きますよ」

理事長「そう言ってくれて助かるわ。明日からね」

勇也「わかりました。では」

俺はそこで部屋を出た。

授業はもう終わるぐらいの時間だったので終わってから教室に向かった。

教室

戻ると姉さんやリサ、それに面白そうに日菜まで寄ってきた。

リサ「何したのー？勇也」

勇也「何にもないよ。明日から体験で花咲川に行ってくれって言われただけだよ」

日菜「えー勇也くん花咲川に行くのーいいなー」

友希那「どうして勇也なの？」

勇也「成績順で俺だとさ」

リサ「それなら日菜になるんじゃないの？」

勇也「向こうもそろそろ共学にしたいから体験だとさ」

友希那「納得したわ」

勇也「そういうこと。それじゃあ帰るよ」

俺たちは家に帰り明日のことを考えて寝る準備をした。

勇也の部屋

部屋に入ると姉さんとリサがいた。

勇也「何してんの？2人とも」

リサ「いや〜明日で勇也花咲川に行くでしょ。だから一緒に寝ようと思って」

勇也「いやあなたたち高校生だからね」

友希那「昔はよく寝たじゃない」

勇也「昔はね！今は高校生だよ」

リサ「まあまあいいじゃん。一緒に寝よ！」

俺は手を引っ張られベッドに入った。

少し豪華にダブルベッドにしていたが3人だとやっぱり厳しい。みんな疲れていたみたいで早くに眠った。

俺はベッドから出てリビングにあるソファーに寝転んで寝ることにした。

正直高校生にもなった2人と寝るのは心臓がもたない。

俺はソファーに寝転んで寝ることにした。

朝起きて朝飯を置いておき俺は昨日のパン屋に向かった。

「いらっしやいませー。あつ！昨日の人ですか？」

勇也「ああ、そうだよー、昨日の人であってるよ」

「すみません。私は山吹 沙綾です」

勇也「俺は湊 勇也です」

沙綾「湊……ってRoseliaの湊さんの弟さんですか？」

勇也「あれ？Roseliaのこと知ってるんだ」

沙綾「私はpoppin partyっていうバンドのドラムな
んです」

勇也「へー今度見かけたら顔出してみるよ」

沙綾「その時は是非！」

俺は会計を済ませて店を出ようとした時に聞いた。

勇也「そういえば花咲川の場所って知ってる？」

俺花咲川の場所を知らない。

沙綾「花咲川に何か用があるんですか？」

勇也「今日から一週間花咲川の体験なんだよ」

沙綾「そうなんですか！実は私花咲川の生徒です。案内しますね
素晴らしい山吹さんは奥に入ってカバンを持ってきた。

勇也「ごめんね。山吹さん」

沙綾「いえいえ。気にしないでください。それに私のことは沙綾で
いいですよ」

勇也「なら俺のことも勇也って呼んでくれ」

沙綾「わかりました。勇也さん」

そこから2人で花咲川に向かった。

着いて校門に着くと1人の大人が立っていた。

花咲川

花咲川に着くと大人が1人立っていた。

??? 「あなたが湊 勇也くんかしら？」

勇也 「そうです。あなたは？」

??? 「私がこの理事長の橘 花蓮よ。案内するわ。付いてきて」
そういう先に向かつて歩いて行った。

勇也 「ごめん沙綾。ありがとう。助かったよー」

俺はそういうながら後ろをついて行った。

沙綾 (また会えるといいなー)

理事長室

花蓮 「あなたが湊 勇也くんなのね。中々いい男ね」

勇也 「それってあなたが言っていていいんですか？」

花蓮 「これは失礼。さて冗談はさておきようこそ花咲川に。あなたにはこれから1週間ここでの生活をしてもらうから安心してね」

クラスはのちに来る担任に教えてもらえるから安心してね」

そういう部屋から出て行った。

俺はソファーにゴロゴロしていた。

このソファーは気持ちよくて眠たくなってきた。

しばらくすると1人の教師が入ってきた。

??? 「あなたが湊 勇也くんかしら？」

勇也 「ええ、そうですけど…」

??? 「私はこの一週間あなたの担任になる工藤 涼子よ。よろしく
ね」

勇也 「よろしくお願ひします」

涼子 「それじゃあ教室に案内するわ。ついてきて」

勇也 「わかりました」

俺は後ろについていき教室に着いた。

ここに来るまでにかなり見られたが気にしたら負けだ。

涼子 「それじゃあここで待ってて」

そういう中に入って行った。

教室内

涼子「このクラスに転校生が来ます」

転校生じゃねえってツツコミそうになった。

涼子「それじゃあ入って来て」

その言葉で中に入ると黄色い歓声が上がって耳が痛い。

勇也「今日から一週間このクラスで体験させていただく
す。勇也で

よろしくお願いします」

「ガタッ」

音のする方を見ると千聖がびっくりした顔で立っていた。

涼子「どうしました白鷺さん？」

千聖「い、いえなんでもありません」

千聖はそこで座り前の子と話していた。

涼子「それじゃあ湊くんの席は今立った子の前にいる青い髪の毛の
子の隣ね」

勇也「わかりました」

俺は席に移動して座った。

隣の子は少し怯えている感じで見た感じ小動物みたいが一番しつ
くり来る。

勇也「とりあえずよろしくね」

???「う、うんよろしくね。私は松原花音」

千聖「花音怯えなくていいわよ。この人は優しいから」

勇也「なんか棘があるな」

千聖「あら？なんのことかしら」

花音「うん。よろしくね湊くん」

勇也「勇也でいいよ。上の名前で呼ばれるのあんまり慣れてなく
て」

花音「それじゃあ私も花音でいいよ」

涼子「はい。それじゃあ授業始めますよー」

そこから授業が始まり1時間目が終わった。

そこからは質問せめにあった。

時間ギリギリまで質問されて休憩してどころか授業より疲れる。
授業が始まりみんなどこかに行った。

勇也「疲れた〜」

机に突っ伏していると2人とも笑っていた。

花音「お疲れ様」

千聖「ふふ、人気者ね」

勇也「千聖わざと言ってるだろー。助け舟だしてくれよ」

千聖「あんな中に巻き込まれたら大変よ」

勇也「つたくー。それより1人になれる場所ってある？昼は静かに
食べたい」

花音「それなら屋上がいいんじゃないかな？あそこなら静かだと思
うよ」

勇也「そつか。それじゃあ屋上で食べようかなー」

千聖「なら私も行くわ」

勇也「なんでだよ！花音と一緒に食べるんだろ」

花音「わ、私もいききたいなー」

勇也「全くしようがないな」

千聖「なんだか花音には甘くないかしら？」

勇也「そんなことないよ」

とりあえずその黒いオーラだだもれにするのやめようよ。

花音もびつくりしてるからさ。

そのまま休憩時間は質問せぬにされて昼休みは逃げるように屋上
に向かった。

屋上

???「んーほんとにここは気持ちいいわね！」

???「はいはいそうですね。とりあえず昼ごはん食べようよ」

先客がいて2人だった。

まためんどくさそうなことになりそうだったので引き返そうとす
ると千聖と花音がきた。

千聖「あら？どうしたの」

勇也「先客がいたんだよ。だから場所を変えようと思ってな」

花音「先客？誰だろう」

花音は屋上のドアを開けて入って行った。

花音「こころちゃん、美咲ちゃん！」

美咲「花音さんどうしたんですか？いつもなら中庭で食べてませんでした？」

花音「今日はこっちで食べようと思って、勇也くんと一緒に」

美咲「勇也くん？って誰ですか？」

俺は手を引つ張られて屋上に向かった。

こころ「あら初めて見る人ね。私は弦巻こころ、こころって呼んでほしいわ」

テンションたけーな。

美咲「なんかすいません。私は奥沢美咲です。よろしくお願ひします」

勇也「湊 勇也です。よろしくね〜」

足が痛いと思って見ると千聖が足を踏んでいる。

勇也「あのー千聖さん。すごく痛いんですが…」

千聖「あらごめんさい。無意識で」

絶対わざとだよな。

声には出さないがそう思っていた。

昼飯を食べて少しするとすぐに眠くなってきた。

俺はすぐに横になり眠った。

途中で硬いところから気持ちよくなったがあまり気にしないで眠っていた。

起きると千聖と目が合い今の自分の状況がわかった。

千聖「もう起きたのね。普段とは随分かけ離れた長男だったわ」

勇也「それは褒め言葉ですか？」

千聖「もちろんよ」

屋上から教室に戻って授業を受けて放課後になった。

勇也「そういえば今日って弓道部やってるのかな？」

花音「どうだろう？やっているとと思うけどよくわからないよ」

千聖「どうして弓道部なの？」

勇也「前に紗夜がやってるって聞いて。今日はRoseliaもないし俺は仕事もないしな」

花音「それじゃあ行ってみる？私は今日茶道部の活動ないから」

勇也「頼む。場所をよくわからんからな」

そこから3人で弓道部の練習場所に向かった。

弓道部

勇也「失礼しまーす」

中に入ると視線が一気にこっちに集まってきた。

昔からこういうのは苦手だ。

一呼吸置きそこからまた黄色い歓声が上がった。

しばらくは落ち着かずまた質問せめにあつた。

紗夜は遠くから見ているやれやれみたいな顔をしていて心の中では助けてくれよと願っていた。

なんとか終わりみんなが離れてくれた。

顧問「それでどうしたんですか？」

勇也「ああ、紗夜がいるって聞いたんで顔を出しに来たんですよ」

顧問「なるほどよければ体験もされますか？」

勇也「いえ「やらせてあげてください」」

あれー？今の誰だ。

なんだか流れでやることになったがなかなか道着は着心地が良くなかった。

千聖や花音は橋で見ているなぜか下を向いている。

顧問「それじゃあ氷川さん教えてあげてください」

紗夜「わかりました」

素晴らしい紗夜と2人で一つ場所を借りて教えてもらっていた。

紗夜「細かい部分は今回は飛ばします。ところで勇也さん。正射必中の意味は知っていますか？」

勇也「あんまり詳しくはないけど確か正しく行ったものは必ず成功するとかだったかな？」

紗夜「その通りです。それと同じで正しい打ち方をすると必ず当たります。みていてください」

そこから紗夜は弓を引いて放った。

こういうのも絵になるのは元々可愛いからだろーな。

紗夜「では勇也さんの方に行きましようか」

勇也「えっ？あ、うん」

俺は弓を引いてみると意外と簡単に引けた。

そのまま放つと全然的違いのところに刺さった。

紗夜「次はもう少しゆっくり引いて、弓の構える位置を低くしてください」

言われた通りにしてみるとさっきよりは的に近づいたが中々当たらない。

そこから10発ほど打ったがもう少しのところに刺さっている。

勇也「これ意外と難しいんだな」

紗夜「そうですね。最初は私もできませんでしたし」

勇也「なら当然か。もうちよいやってみるわ」

紗夜「わかりました。もう少ししましょうか」

そこから10発ほど打って手の力がだんだん抜けて来た。

そしてその後に打つとど真ん中に刺さった。

勇也「やった。刺さった」

俺はすぐに座った。

紗夜「お疲れ様です。最後のは綺麗でしたよ」

勇也「ああ、ありがとう。紗夜のおかげだ」

千聖「すごかったわね」

花音「私少し泣きそうになっちゃった」

勇也「あはは、ありがとう。俺はもういいや。後は紗夜に任せるよ」

紗夜「そうですか。では私ももう置きます」

勇也「なんで？」

花音「勇也くん時間だよ」

時計を見てみると6時半を回っていた。

勇也「ありやりやそれじゃあ帰るか。みんな送るよ」

そこからはみんなを送り俺も家に帰って俺も家に帰ってその日は終わった。

花咲川 vol 2

花咲川 (2日目)

いつもどおりではないが起きて花咲川に向かった。
朝起きて飯の支度だけして家を出てお気に入りのやまぶきベーカリーに向かった。

このパンは俺が作るのよりよっぽどうまいし安い。
入ると沙綾がいた。

沙綾「おはようございます勇也さん」

勇也「おはよ。ふわあ〜」

沙綾「眠たいんですか？」

勇也「ちよつと夜更かししててな〜」

俺はパンを選び会計を済ませて屋上で食べていた。

屋上

食べて寝転んでいると人がやってきた。

こころ「あら！勇也じゃない。なにしてるの？」

出たな。テンション高い女め。

勇也「パン食べてゴロゴロしてるんだよ」

美咲「こころすぐに絡まないで」

こころ「美咲。遅かったじゃない。なにしてたの？」

美咲「あんたが早すぎるの。すいません勇也さん」

勇也「いやいいんだけど、こころまた走って行ってるよ」

美咲「あーこころ待つてば。すいません失礼します」

美咲はこころを追いかけてどこかに行った。

ケータイで時計を見るとチャイムがなる時間になりそうだったので教室に帰った。

教室

千聖「どこに行ってたの？」

勇也「屋上で寝てたんだよ。一番気持ちいいからな」

千聖「そうなのね。そろそろ始まるわよ」

授業が始まり何回か嫌な質問されたがこたえられた。

花音と千聖はビックリしていたが。

昼休み

勇也「二人ともどうしたの？じつと見られると怖いんだけど…」

花音「勇也くんって頭もいいんだね。さっきの問題誰も解けないよ普通」

勇也「俺にはこれしかなかったんだよ」

千聖「何か言ったかしら？」

勇也「なんでもないよ」

俺たち三人は飯を食べているとまた派手に屋上のドアが開いた。

その中に沙綾もいて他に4人いた。

???「あなたが勇也さんですか？」

すげ〜コミュ力高そうなのが来たな

???「だー落ち着けて。何かわかってない顔してるだろ」

勇也「えーと君たち誰？」

???「わたしは戸山香澄です」

???「市ヶ谷有咲です。よろしく願います」

???「牛込りみです。願います」

???「花園たえです。おたえって呼んでください」

沙綾「山吹沙綾です。願います」

うん。流石に怖い。この数相手は少しビビる。

勇也「それでどうしたの？」

香澄「沙綾が最近あなたの話ばかりしてるんでどんな人か気になっ
たんです」

沙綾「ちよつと！香澄！」

千聖は「へーあの沙綾ちゃんかねー」

有咲「白鷺先輩怒ってます？」

そこでチャイムがなって弁当を見るとなかった。

勇也「あ、あれ？俺の弁当がなくなってる」

おたえ「美味しかったー」

りみ「食べちゃったの？」

有咲「おたえ〜お前なー」

勇也「アハハ、いいから。早く帰ろつか」
そこから別れて教室に戻った。

そのまま授業を受けていたがなんだか頭に内容が入ってこない。
なんとかその日を終え家に帰った。

千聖「顔色悪いけど大丈夫?」

勇也「大丈夫大丈夫。帰ろつか」

俺は2人を送って家に帰った。

家に着くと集中の糸が切れたのかそのまま玄関に寝転んだ。

自宅

リサ「どうしたの!?!勇也」

勇也「リサか。眠たくてな」

俺は部屋に移動してベッドに倒れこんだ。

体も指先も今まで通り動かない。

俺はそのまま眠った。

しばらくすると頭の上が気持ちいい。

目を覚まして見て見るとリサと姉さんが横で寝ていた。

俺もまだ体がだるかったのもう少し寝ることにした。

起きて見るとだいぶ楽にはなったが頭はかなり痛い。

動くことはできたので起き上がってキッチンに向かった。

リビング

そこに姉さんとリサがいた。

起きるといかなかったのでここにいると思っていたが。

リサ「あー起きたんだ。体は大丈夫?」

勇也「元々大丈夫だけど…?」

友希那「あれだけの熱を引いてて大丈夫なんて無茶よ」

勇也「もう大丈夫だから。だいぶ楽になったよ」

友希那「明日は学校を休みなさい。いいわね?」

有無を言わさないオーラを出して言って来た。

勇也「はい。わかりました。けど誰に連絡したらいいの?花咲川の

連絡先なんて俺知らないよ」

友希那「紗夜か燐子に言うわ。それでいいわね?」

勇也「そっかならそうするよ」

俺はもう一度部屋に戻り部屋のベッドの上で寝転んでいた。

勇也「うーんまだ痺れてるなー。うまく動かない」

そのまままた眠った。

それ以降は起きる事なくずっと眠っていた。

次の日

朝起きると姉さんとリサはもう学校に行っていた。

やることなく暇なのでベッドの上でゴロゴロしていると連絡が来た。

紗夜「体大丈夫ですか？無理はしないでください」
相変わらず硬いみたいだ。

返信をしてまたゴロゴロしていると腹が減って来た。

朝から少し頭痛はするが耐えられないほどではないので昼飯を作って食べていてそのままゴロゴロしていると外が少し騒がしい。

気がつくとすでに学校が終わる時間になっていた。

そこでインターホンが鳴り誰かと思つて見ると千聖と花音がいた。

俺は玄関に行き招いた。

勇也「どうしたの2人とも？」

千聖「あなたが風邪をひいたって聞いたから見に来たのよ」

勇也「そりや悪かったな。もう大丈夫だよ」

花音「本当に良かったー」

リビングに行きソファに座ってもらっていた。

お茶を用意して出すと花音に怒られた。

花音「もう！言ってくればいいのに。私たちで用意するよ」

勇也「ご、ごめん。お客さんだからさ」

千聖「それよりあなた本当に治ったの？時々辛そうな顔してるけど」

勇也「やつぱりわかる？時々ひどい頭痛が来るんだよ。大したことないからほってるけど」

そこで2人は立ち上がり俺を拘束した。

勇也「ちよつと2人とも？何してんの？」

千聖「今すぐ部屋に連れて帰るわよ花音」

花音「うん千聖ちゃん」

2人は俺を連れて部屋に向かった。

自分の部屋

連れていかれてそのままベットに置かれた。

千聖「今日残り少ないけどゆつくりしてもらいます。まだ菌が体の中に残ってるかもしれないから」

花音「私たち2人で面倒みるからね」

勇也「2人に風がうつるからいいよ。もう寝とくから」

千聖「ダメよ。そう言っただけじゃ動かないよ」

千聖の剣幕に押されて俺は納得した。

そこから2人は入れ替わりで俺が退屈しないように部屋に来てくれた。

そしてRoseliaの練習を終えた姉さんとリサが帰ってきた。

リサ「花音に千聖ありがとねー」

花音「ううん。私たちは話してただけだよ」

友希那「それでもよ。この子無茶ばかりするから」

千聖「わかる気がするわ」

勇也「ひつでー。俺だっちゃんと考えてるよ」

リサ「あははくまあありがとね。後はやつとくよ」

千聖「それじゃあ帰りましょうか」

千聖と花音は帰って行ってその日は終わった。

次の日(4日目)

俺はいつも通り起きて朝飯を作って家を先に出た。しばらくすると後ろから誰か近づいてきた。

見てみると沙綾と他の子がいた。

沙綾「勇也さん大丈夫ですか？昨日は風邪ひいてたみたいですけど」

勇也「あー大丈夫。大したことないから」

それにしても雲行きがあやしい。

こんなことならカサ持ってきておけばよかった。

香澄「風邪ってしんどいんですか？」

有咲「バカは風邪ひかないって言うしな。香澄にはわかんねえだろ」

香澄「有咲ひどい」

勇也「ハハハ仲良いんだね」

そんなことを話していると学校につきそこで別れて教室に向かった。

教室

席に着くともう花音と千聖はいた。

勇也「昨日はありがとな」

花音「ううん気にしないで」

千聖「……………」

千聖の様子がおかしい。

勇也「千聖になんかあったの？」

花音「何もないと思うけど……」

そのまま授業は始まり、昼休みまで行った。

屋上で食べているとやっぱり千聖の様子がおかしい。

さつきから全然弁当に手をつけていない。

勇也「千聖ごめんな」

俺は千聖のデコに手を当ててみると普通より絶対熱いぐらい熱かった。

勇也「全くなんで今日来たんだよ。これ絶対熱あるだろ」

多分俺のが移ったんだろう。だから俺も責めない。

勇也「全く少し寝てろ」

千聖「ええそうさせてもらうわ」

千聖は寝転んで俺の膝を使った。

千聖「少し寝かせてほしいわ」

こう言われると何も言えない。

勇也「わかったよ。少し寝とけ」

そこで千聖は寝た。

花音「うー私何も気づかなかったよ」

勇也「そんなに自分を責めなくていいと思うぞ。多分バレないよう
に最大限尽くしてたんだろ。それならしょうがないと思うけどな」

花音「けど…!」

勇也「自分を責めることを千聖は望んでないと思うけどな」

花音「!うんそうだね」

そこでチャイムが鳴ったので千聖を起こして教室に向かったがま
だしんどそうだったので教師に言った。

勇也「白鷺さんがしんどそうなので保健室に行かせてもいいですか
?」

教師「わかったわ。なら連れて行ってあげてね」

勇也「わかりました」

俺は千聖の手を引いたがやっぱりしんどそうなので教室から出て
廊下で座った。

千聖「あら?どうしたの?」

勇也「ほら保健室まで乗せてやるから乗って」

千聖が乗ったのを確認して保健室に向かった。

保健室

勇也「失礼しまーす」

先生「あら?ごめんなさいね。もうベッドが空いてないのよ」

勇也「どうしましょ?」

先生「そのままうろうろしてあげてくれる?随分気持ち良さそうだ
から。教室には言っておくわ」

勇也「わかりました。それじゃあ」

俺はそのまま千聖をおんぶして歩いていた。

それにしても千聖は軽い。

しばらく歩いていると5時間目終了のチャイムが鳴りそれで千聖
は目を覚ました。

千聖「う…んあら?どうしてまだ私は上に乗っているの?」

勇也「保健室が空いてないんだとさ」

そんなことを話してブラブラしていると後ろから走ってくる音が
した。

彩「千聖ちゃん大丈夫？」

後ろから彩が走って来た。

勇也「彩！どうしたの？」

彩「さつき花音ちゃんから千聖ちゃんが風邪引いてるって聞いたから探したんだよ」

千聖は後ろで顔を埋めている。

勇也「まあ大丈夫みたいだから教室に戻りなよ。時間大丈夫？」

彩「あ！それじゃあねー」

彩はまた走ってどこかに行った。

その後にチャイムが鳴った。

勇也「千聖には悪いことをしたな」

千聖「なんのことかしら？」

勇也「俺の風邪が多分移ったんだろ。その風邪はどちらかという俺のせいだ」

千聖「それは違うわよ。私の意思であなたの家に行ったの。そして自分で体調を崩した。あなたが悪いことなんて何も無いわ」

勇也「そっか：それでこのまま歩く？それとも保健室に行く？」

千聖「勇也くんがいいなら歩いてほしいわ。ダメかしら？」

勇也「全然。千聖軽いからな。飯食べてる？」

千聖「失礼ね！ちゃんと食べてるわよ」

勇也「冗談だよ。暴れないでよ」

千聖が暴れると胸が当たって意識しないようにしていたのを意識してしまう。

そのまま歩き回り授業が終わった。

教室にカバンを取りに行くと雨が降りそうな天気になっている。

早く千聖を送って帰ろうと思いき急ぎ足で帰っていると案の定雨が降り出した。

すぐにコンビニに向かい傘をかうと周りから視線を感じる。

まあ千聖ほどの可愛い子をおんぶしてコンビニに入ったらこんなと思うけど：

気にしないで傘をさしていた。

勇也「千聖の家ってどこだっけ？遠い？」

千聖「ここから少し距離があるわ」

勇也「なら俺の家に行くぞ。それでいい？」

千聖「ええ」

俺は千里に雨がかからないように傘を持ちながらおんぶをして家に帰った。

自宅

勇也「なんとか着いたけど風呂入れそう？雨に当たってると思うから」

千聖「そうね。入れるわ」

勇也「そつ。なら用意してくるよ。少しのんびりしてて」

俺は風呂の用意をしに行き千聖にはリビングで待っていてもらった。

用意をして戻り部屋を見てみると千聖はソファで寝ていた。

とりあえず風呂が沸くまでは寝かそうと思いきのままにして俺は着替えに行った。

千聖に雨がかからないようにしていたからビショビショになっている。

着替えてリビングに戻ると風呂が沸けたので千聖を起こした。

千聖「もうお風呂できたのかしら？」

勇也「ああ、できたよ。洗面所に俺の服置いてあるからとりあえずそれ着てくれ」

千聖「わかったわ」

千聖はお風呂に行った。

行くときに思ったけどもう治ってそうだ。

出て来て制服が乾いたから送ろうと思いき少し休んだ。

その時にリサと姉さんが帰ってきた。

リサ「勇也ー誰かいるの？」

勇也「千聖がいるよ。今日風邪ひいたみたいでここで少し休んでもらってる」

友希那「そうなのね。どおりでお風呂から声がするわけだわ」

そこで千聖が出てきた。

リサと姉さんは空気を読んでくれたみたいでどこかに行った。

千聖「ありがとう。少し大きいけれど助かったわ」

勇也「なら服が乾いたら家に送るよ。もう大丈夫だろう？」

千聖「今日は泊まるって言ってるの」

勇也「!?!千聖が俺の家に泊まるの?」

千聖「ええ、そうよ」

勇也「全くわかったよ。それじゃあ弁当箱出しといて。明日朝入れとくから。後制服も。洗つとくよ」

千聖「何から何までごめんなさいね」

勇也「それと俺のベッドで寝てくれる?姉さんたちに移るとめんどくさいことになりそうだから」

千聖「(やったわ) わかったわ」

そこで千聖を部屋に連れて行き俺は夜飯の準備をするためにキツチンで作っていた。

俺たちは食べて千聖にはおかゆを作って持って行った。

俺の部屋

勇也「千聖はベッド使っていいよ。俺は下で寝るから」

千聖は少し膨れていた。

千聖「体壊すといけないから一緒に寝ましょう」

あなたアイドルの子役でしょ。何言ってるの?」

千聖「ダメかしら?」

その上目遣いやめてくれ。俺が悪いみたいになってるから。

勇也「わかったよ」

俺はベッドに入ると背を向けて寝転んだ。

そこに千聖が抱きついてきた。

千聖「今日は色々ごめんなさいね」

勇也「気にしなくていいよ。知ってる人はほっとけないし、俺のせいでもあるから」

千聖「気にしなくていいわよ」

そこから話したが返事がなくもう眠ってしまったみたいだ。

俺も寝た。

次の日(最終日)

起きると千聖は離れていたのでもそのまま弁当を作りに行った。全員の分作ると千聖が降りてきた。

勇也「もう大丈夫？」

千聖「おかげさまですつかり良くなったわ」

勇也「ならよかった。これ弁当な」

俺は弁当を渡し出ようと思いい準備を始めた。

そこに千聖もついてきて一緒に学校に向かった。

学校につき教室に向かいいつも通り授業を受けていて春休みになつた。

春休みは屋上で食べようと思いい移動して着くところと美咲がいた。

こころ「あら勇也じゃない。一緒に食べましょ」

美咲「すいません。こころが勝手に」

勇也「ううん気にしなくていいよ。それじゃあ一緒に食べようか」
「そういう座ると屋上のドアが派手に開いた。」

香澄「勇也さーん。一緒に食べましょ」

おたえ「勇也さん。お弁当ください」

有咲「直球だな！つてか食べたら勇也さんの分なくなるだろーが」
入ってきて早々いいパンチを食らわされた。

沙綾「アハハごめんなさい」

勇也「アアー気にしなくていいよ。はいこれ」

俺は弁当を渡した。

りみ「けどそれって勇也さんのじゃ」

勇也「いいのいいのもう一個あるから」

俺はもう一つの弁当を出した。

こころ「すぐくおいしそうね！あたしも食べたいわ」

勇也「どーぞご自由に」

そういうとみんな少しずつ食べていた。

食べてもらえる側としては喜んでもらえるだけで嬉しい。

そんなこんなで昼休みも終わり授業に戻って体験は終わった。
その帰りに電話はかかってきた。

ライブ対決！その後は大変です

学校の帰りに電話で呼び出されたのでCIRCLEに向かった。
CIRCLEに入るとかなりの人数がいてよく見ると全員知って
るメンバーだった。

まりな「勇也くんきてくれてありがとうね」

勇也「いえ。それよりこれは一体？」

まりな「実はここにいるバンドで対決しようと思うんだ」

勇也「はあ、対決ですか。それでなんで僕は呼ばれたんですか？」

まりな「実は…」

なんだかい淀んでいる。

「こころ「優勝したバンドには賞品があるのよ！」

勇也「あー確かにそりや大事だわ」

日菜「それで賞品は勇也くんなんだよー」

勇也「はー俺ね。って俺!?!」

まりな「そうなんだよ。賞品は何かいいって聞いたら満場一致で
勇也くんの名前が出てきてね。それでお願いしたいんだけどダメか
な？」

勇也「マジですか…わかりましたよ」

まりな「ありがとね。今回は審査員もしてもらうから」

勇也「わかりました」

まりな「それじゃあ開催日は今日から一週間後だからよろしくね」

勇也「わかりました。それじゃあ失礼します」

俺は用事が終わったので出ようとすると腕を掴まれた。

蘭「なんで出て行くこうとしてるんですか？」

友希那「あなたにはこれから練習に付き合ってもらおうわよ」

「こころ「そうよ!どこに行くのかしら？」

彩「私たちの練習も見てよー」

香澄「私たちも見てください！」

まさか全バンドから頼まれるとは…

勇也「わかりましたよ。拒否権はないんですからね！」

俺は結局全てのバンドの練習を見ることになった。
何故だかどのバンドもかなり気合が入っている。

そのまま1日が終わり家に帰った。

自宅

勇也「なんでみんなあんなにも気合が入っているんだろう？」

独り言をつぶやいていると後ろからリサが出てきた。

リサ「まさか気づいてないのか。まあ勇也だしね。しょうがないや」

リサはそのまま歩いて俺から離れていった。

勇也「おい！どういう意味だ！ちよつと」

リサ「今からお風呂入るけど覗かないでよね」

勇也「話聞いてねえ。つてか覗かねえよ。覗いたことないだろ」

リサ「アハハくそれはそうだけど、念には念をだよー」

勇也「失礼な。俺はもう寝る」

リサ「おやすみー」

勇也「おやすみ」

俺は愛想なく部屋に戻った。

俺今でも内心怯えている。

今でもあの時、あの時期のことがフラッシュバックするし周りからの視線に恐怖を感じる。

あの時のみんなの視線に嘘はないとわかっているけども傷は消えない。

こんなことを考えていると眠った。

その日からあつという間に1週間が経ちライブ本番になった。

姉さんやリサは音合わせがあると行って先に出ていったので俺はみんなに差し入れ用におやつを作って家を出た。

C i R C L E

まりな「あつ勇也くん。今日はありがとねー」

勇也「いえ。それじゃあみんなのところに行ってきます」

まりな「うんうん。わかったよー。最後にはここにきてねー」

勇也「わかりました」

俺はみんなのところに向かった。

はじめはハロハピのところに行くことにした。
ハロハピ

中に入るとかなり混沌としていた。

着ぐるみのクマに抱きつくところやオレンジ色の髪の女の子。
わけのわからない独り言をつぶやく女？みたいな子に花音。

勇也「失礼しましたー」

花音「待って勇也くん。部屋間違えてないから」

勇也「なんか混沌としてたから」

「こころ」あら！勇也じゃない。何をしにきたのかしら？」

勇也「ああくそうだった。これ」

俺は5人分のおやつが入った箱を渡した。

???「これはとても儂いものだね。感謝するよ」

何言ったんだこいつ？と思っても口には出さないでいる。

???「わーありがと。すっごいおいしそうー」

花音「背の高い人が瀬田 薫さん。それと元気な子が北沢 はぐみ
ちゃんだよ」

花音は俺の近くで教えてくれた。

勇也「そっか。それじゃ俺は他のところも回らないといけないか
ら」

花音「うん。ありがとう」

俺は部屋を出て次はポピパのところに向かった。

ポピパ

香澄「うーん有咲ありがと〜」

有咲「だー離れろー」

勇也「ここも混沌としてるな」

沙綾「あ！勇也さん」

勇也「沙綾。これどうなってるの？」

沙綾「あはは、香澄は基本的に有咲のこと大好きなんで何かあるた
びこうなるんですよ」

有咲「勇也さん来ただろ。離れろ！」

香澄「え!?!あつ！勇也さん」

標的がこっち移ったみたいなので俺は沙綾におやつを渡して逃げた

急いで部屋を出て次はパスパレのところに向かった。

パスパレ

中に入ると安心した。

軽く音あわせてるだけでむちやくちはしていなかったから。

日菜「あ、勇也くん」

勇也「心配なさそうだな。彩以外」

千聖「彩ちゃんはいつもだから…」

彩「ひどい！けど事実だから何も言えない」

勇也「はいはい彩弄りはそこまですてはいいこれ」

俺は箱を渡した。

イヴ「うわ〜美味しそうです！」

麻弥「いいんですか？」

勇也「いいよー。そのために作って来たし」

日菜「うわ〜いい。いただきまーす」

ここも心配なさそうなので部屋を後にした。

先についた部屋がRoseliaなのでそっちに入った。

Roselia

入ると案の定とんでもないぐらい練習をしていた。

勇也「はあまたか」

紗夜「！勇也さんため息はどういう意味ですか？」

勇也「いや前の合宿で言ったことはもう忘れてんのか？」

全員「!!」

友希那「そうね。ごめんなさい。ここからは休憩して最後に音を合わせましょう」

全員「はい！」

勇也「まあこれが全てってわけじゃないけど今のRoseliaには必要だよ。上を目指すならね」

リサ「そうだね。ありがと」

勇也「あ！そうだ。こんなこと言いに来たんじゃなくてこれ」

あこ「うわー美味しそう。早く食べたいです」

燐子「あこちゃん：おち：ついて」

勇也「まあ食べてゆつくりしてくれたらいいよ。それじゃあ」
友希那「ええ、ありがとう」

俺は部屋を出て最後にAfter glowのところに行った。

After glow

入るとRoselia以上に酷かった。

勇也「はあくここもか」

モカ「勇也さくんため息なんてひどいですよ」

勇也「まさかRoseliaよりひどいとは思わなくてさ」

蘭「どういう意味ですか！」

ああ、きつかけは蘭か。

勇也「ちよつと蘭借りて行くよー」

ひまり「え!?!ちよつと勇也さん？」

俺は蘭を担いで外に出た。

蘭「離してよ！」

外の誰もいないところで蘭を下ろして話をした。

蘭「ちよつとどういうつもり？」

勇也「ひとつだけヒントをやる。勝ちたいならまずは周りを見る。

そして頭は冷静にじやないと見えるもんまで見えなくなるぞ」

蘭「!ごめん」

勇也「謝るのは俺じゃないだろ」

蘭「わかつてるよ。お節介！」

蘭に腹を殴られ蘭は不機嫌になりながら部屋に戻っていった。

勇也「あ、痛たた」

After glowの部屋に戻るとみんな休憩をされていて俺は
持ってきていたおやつを渡した。

ひまり「わあくありがとうございます」

つぐみ「いいんですか？」

勇也「構わないよ。それじゃあ」

俺は部屋を出てスタッフルームに向かった。

スタツフルーム

勇也「失礼しまーす」

まりな「待ってたよー。座って」

まりなさんは自分の椅子の隣を手でたたいている。

勇也「これどうぞ」

俺はみんなに渡したのと同じように同じものを渡した。

まりな「ありがとね。いただくよー」

そこで時間を潰してライブの時間になった。

1番目はハロハピだった。

ハロハピ

こころ「それじゃあいくわよー。せかいのびのびトレジャー」

そこから三曲やっていたがハロハピのライブは見ていてハラハラした。

ライブ中にもかかわらずこころは客席に飛ぶしそれを客は普通に受け入れていた。

その次にポピパが出てきた。

ポピパ

香澄「聞いてください！八月のif」

聞いてみると意外な曲調だった。

ポピパはもつと元気のある曲を演奏すると思っていたから。

2曲目が始まって前言撤回した。

ポピパは終わりパスパレの番になった。

パスパレ

始まりラストに入るまえに彩がMCをした。

彩「今から歌う曲は私たちにとって大切なひとが作ってくれた曲です。聞いてください」

そこで始まったのは合宿で俺が作った曲だった。

その場で俺はむせた。

無事にパスパレの出番も終わり、次はAfter glowが出てきた。

After glow

演奏が始まるとさつきまでの緊張感というか張り詰めた感じはなく今この場を楽しんでライブをしている感じを受けた。

みんな楽しそうに演奏していて蘭の顔も熱は持っているが冷静な感じだった。

After glowも無事に終わり最後はRoseliaが出てきた。

Roselia

二曲終わり最後にMCを挟んできた。

勇也「あれ？珍しい」

友希那「今から歌う曲は大事な人からの曲です」

勇也「ぶー」

おれは端で見えていて一人で驚いた。

なんでパスパレもRoseliaもおれが作った曲をするかなと思いつつも演奏は終わった。

ホールの片付けが一通り終わりおれは控え室に呼ばれたのでそっちに行つた。

控え室

開けると同時に香澄、日菜、こころが飛んできたので香澄だけ掴んでしゃがんだ。

香澄「うげ！」

全員「おおー」

勇也「そんなんじゃないやなくて誰か止めろよ」

日菜「こころは思った通りうまく着地していた。」

友希那「それでどうだったかしら？」

勇也「早速ですか。おれにはどのバンドが一番なんて決められないよ。だってどのバンドも良かったから」

こころ「それじゃあ全員でプールに行きましょう！」

勇也「嫌だ。このメンバーで行くとおれが周りに殺される」

こころは他所に行つてすでに何かを話している。

黒服「勇也様こちらのプールを貸し切りにしました。これをお願いします」

そういいわけのわからない人たちは部屋から出て行った。

勇也「あ！おいこらちよつと待て」

止めたが止まることなく何処かに行った。

おれはその直後にクマに手を引っ張られ外に出た。

美咲「プハッ！疲れた」

勇也「美咲だったんだ」

美咲「あの人たちはこころの家の使用人みたいな人たちです。

それでこころの言うこと全てかなつちやうんです」

勇也「マジか…」

使用人がいるとか一体どんな家なんだよ。

俺は話を聞くと部屋に戻った。

もうすでにみんな行く話になっていて断れなかった。

こうして俺は25人の女子に対して唯一の男で行くことになった。

プールで大暴れ

ライブ対決してはじめての土曜日。

起きてリビングに行くともうすでに全員集まっていた。

勇也「間違えました」

リサ「間違えてないから！早く」

勇也「そりや間違えたと思うだろ。こんだけいるんだから」

友希那「いいから早くしなさい」

勇也「まあまあ落ち着いて。とりあえず朝飯作るけど食べる？」

全員「食べる」

俺はサンドウィッチをかなり作るとすぐになくなった。

つぐみ「手伝いますよ」

つぐみが言うところから美咲、沙綾、麻弥、リサが来た。

勇也「それじゃあちやっちゃと作るよー」

そこから作り全員が食べてる間に俺は用意を済ませた。

こころ「それじゃあ行きましよう！」

そこからみんな出て行き俺は最後に出て鍵を閉めて向き直すとんでもないリズムジーンが止まっていた。

勇也「なにこれ？」

黒服「お待ちしておりました。どうぞこちらに」

中にはすでにみんな入っておりそれが動き出した。

勇也「26人乗っても余裕ってどんな車だよ」

美咲「こころの家のことで考えたら負けですよ。勇也さん」

勇也「はあ」

俺は少し憂鬱になりながらプールに着くまでの間眠った。

プール

着くととんでもないでかきのプールだった。

黒服「貸し切りにしておりますのでどうぞごゆっくり」

勇也「もうなんか突っ込むのも疲れた」

こころ「なにしてるのかしら？早く行きましよう」

こころは走って行きその後を香澄、日菜、はぐみ、薫が追いかけた。

勇也「元気すぎるわ」

俺たちも後を追い中に入っっていた。

こちらたちはすでに着替え終わり中ではしゃいでいて俺たちも着替えることにした。

勇也「それじゃあ着替えてこいよー」

みんなが着替えに行ったが俺は水着を持って来ていないので他の場所に行き時間を潰した。

上に行きプール全体が見える場所があったのでそこに移動して待っていた。

リサ「勇也ーどこにいるの?」

勇也「ああ、今から行くよ」

俺は下に降りてみんなのところに行った。

千聖「どうして水着じゃないのかしら?」

勇也「持って来てないから」

彩「ええー早く取って来てよー」

黒服「勇也さまの水着です。サイズも大丈夫だと思います」

勇也「あ、ああありがとうございます」

俺は受け取り着替えに行った。

着替え終わると全員がキョトンとしていた。

全員（勇也くんって筋肉すごいな）

勇也「変だった?」

こちら「勇也ってすごい筋肉あるのね!」

全員「ぶふー」

勇也「そうかなー?それより入るか」

これ以上ここにいると俺がみんなのこと注視できない。

しばらく遊んでいると疲れたので少し上がると彩と千聖がゆっくりしていた。

千聖「勇也くんも休憩かしら?」

勇也「ちよつとだけな。あのバケモノたちに付き合っていると倒れるわ」

彩「あはは、確かにすごいかも」

今でも爆走して競争している。

しばらくのんびりしていると休憩を終えて俺はのんびり浮かぶことをしていた。

そこにリサが走って来た。

リサ「勇也一緒に遊ぼうよっ!」

プールサイドでこけてこっちに飛んで来た。

俺は受け止めようとしてこっちも水中なので足を滑らせてリサを受け止められたがそのまま水中に落ちた。

その時に二人の唇が重なり水中から上がったら二人とも顔を合わせられなかった。

リサ「ご、ごめんね」

勇也「い、いやこっちこそ悪い」

リサ・勇也(気まずい)

そこにAfter glowのメンバーがやって来た。

モカ「あれれ?リサさんと勇也さんなんだか気まずい感じですか?」

モカはこういうところ鋭い。

勇也「なんでもないよ。それでどうしたの?」

ひまり「そうでした!リサさんが勇也さんを呼びに行くって言うってから中々来ないんでこっちに来たんですよ」

勇也「それじゃあ行こうか。なにをする?」

全員「……………」

勇也「なにをしたいんだよ!もう別のところ行くぞ」

リサ「あぁー待って。わかった話すから」

ひまり「実はアレに乗って欲しいんですよ」

素晴らしい指で指した先にはウォーターライダーがあった。

巴「アレに乗って欲しいんですよ」

勇也「いいけど。この人数で?」

モカ「蘭く説明しちやってー」

蘭「え!?あたし?アレ二人ならなんでこのメンバー分乗ってもらえないですか?」

勇也「それって6回乗るってこと？」
全員が頷き断れなかった。

勇也「わかったよ。誰から行くの？」
そこからジャンケンをして順番が決まった。

よく見るとあのウォータースライダー100mじゃきかない。
最悪300くらいあるかも。

順番はモカ、つぐみ、巴、ひまり、蘭、リサになった。
モカ

いざ上がってみるとそこにはなにもなく二人のタイミングで降り
てくださいいとしか書いてなかった。

モカ「それじゃあいきましょ」

勇也「はあわかったよ」

少しは恥ずかしがってくれ。

モカ「それじゃあモカちゃんは勇也さんに抱きついて行きますよ
」

勇也「はあ!？」

俺の言葉は遅くモカは後ろから抱きついてウォータースライダー
に落ちていった。

これに関しては滑るより落ちたっていう表現の方がいいはずだ。

なんとか終わり俺は一回でヘトヘトだった。

モカ「いや〜楽しかったですね〜」

勇也「もうモカと乗るのいやだな〜」

モカ「ひどい。まあ次はつぐみですね〜。つぐ〜いつてらっしや
い〜」

つぐみ

勇也「それじゃあ行こうか」

つぐみは少し怖そうにしていた。

つぐみ「はい、大丈夫、大丈夫」

勇也「つぐみそんなに怖がらなくてもいいよ。こういうところは楽
しんだもん勝ちだからさ」

つぐみ「そうですね。それじゃあいきましょ」

つぐみは手を出して来たので少し調子に乗った。

勇也「かしこまりました。プリンセス」

つぐみ「ボン！」

顔を真っ赤にして倒れてしまったのでそのまま降りるのも時間がかかるので上に乗せて滑った。

下に降りるとえらく言われた。

蘭「ちよつとつぐみ！勇也さん？なにしたんですか？」

勇也「すいません。少し調子に乗りました」

つぐみ「違うの！私がちよつと恥ずかしくて」

そこで目が覚めたみたいで弁明してくれた。

そして次は巴と一緒に上がった。

巴

巴「いや〜楽しみですね。どうやっております？」

勇也「うーん今までも基本的に相手に任せてたからなく。今回もそうするよ」

巴「そうですか。それじゃあ…」

あれ？急に無言になった。

しかもちよつと顔が赤いような…

勇也「なら一緒に滑るか。俺は前にいるから後ろは巴の好きなようにしていいよ」

巴「ほんとですか!?!それじゃあ」

急に元気になったな。

俺が前に行くと巴が後ろから抱きついてそのまま二人で滑った。

モカのは落ちただけで巴とは本当に滑ったって感じだった。

巴「いや〜楽しかったっすね」

勇也「ああ、モカより楽しめたよ」

モカ「勇也さんひどいですね〜」

巴「ほら次はひまりだろ。早く行ってこい」

ひまりと上がった。

ひまり

ひまり「今までどうやって決めたんですか？」

勇也「相手に任せたよ。ってことで今回もひまりに任せるわ」
ひまり「えーそれじゃあ〜」

勇也「??なんだよ」

ひまり「これでいきましよう」

ひまりは素晴らしい抱きつき胸を俺の顔の後ろにつけて来た。

勇也「なあほんとにこれで行くの？」

ひまり「いきますよー」

勇也「話聞いてねえ」

ひまりは後ろから地面を蹴って滑って行った。

下に降りるとえらい誤解された。

モカ「わ〜ひーちゃん大胆〜」

ひまり「え、あ！違うってば〜」

勇也「なんか余計疲れた」

ひまり「それじゃあ次は蘭でしょ。早く早く」

蘭と上上がった。

蘭

蘭「大丈夫なんですか？」

勇也「ん？なにが？」

蘭「疲れた顔してますよ」

勇也「ハハ、確かに疲れたかもな「なら！」けど元々遊ぶなんて疲れることばかりだ。だから蘭が気にすることはないよ」

蘭「そうなんですか…」

勇也「それじゃあどう滑る？」

蘭「え!?!今までそうやって決めて来たんですか？」

勇也「そうだよ。俺は一回も自分では決めてないし」

蘭「それじゃあ」

蘭は素晴らしい目の前に来て抱きつき「このままお願いします」

勇也「わかりました（理性保てるかな?）」

そのまま滑り下に降りるとみんなびっくりしてた。

モカ「わ〜蘭も大胆〜」

蘭は顔を真っ赤にしていた。

勇也「はいはいモカもそれぐらいにして最後はリサだろ。行くぞ」
リサ「へ!? あ、うん。ちよつと待ってってばー」

リサと上に上がった。

リサ

リサ「勇也さつきはごめんね」

勇也「まだ言ってるのか? 気にしないでいいよ。事故みたいなもんだし」

リサ「ここは勇也に任せるよ」

勇也「そつかなら遠慮なく」

俺はリサを持ち上げた。

リサ「あれ? これって滑るんだよね。なんでこんなにもあげられるの?」

勇也「後で怒ってくれてもいいから」

俺はリサを放り投げた。

リサ「え!? えええええー」

A f t e r g l o w 「リサさん!」

勇也「いよつと」

俺はすぐに飛んでリサをキャッチした。

勇也「行くぞー」

リサ「いやああああー」

「バツシャーン」

勇也「あ、はははは。あー面白かった」

リサ「死ぬかと思った。じゃなくて勇也! なにしてくれてんの!」

勇也「楽しかったろ?」

リサ「死ぬかと思つたよ!!」

勇也「悪い悪い。もうしないから」

リサ「当たり前だよ!」

日菜「みんなーお昼だよ」

日菜は走ってこつちに来た。

勇也「りよーかい今行くわ」

俺たちは昼飯に行こうとしたがリサは腰が抜けたみたいで動けな

くなっていた。

勇也「ほら乗れ」

リサ「けど…」

勇也「元々は俺のせいだから気にしなくていいよ」

リサ「！（これが狙いかな？あたしがなにも感じなくするため自分が悪くしたんだね勇也）そーいうことなら乗るよ」

リサは俺の背中になりみんなのところに戻って昼飯を食べた。

その後もバカ4人は食べた直後でも暴れていてついていけなかった。

その日はなんとか終わり着替えてプールを出た。

俺は歩いて帰ることにした。

そして車にこころ、はぐみ、薫、おたえ、香澄、イヴ、モカ、あこ、隣子が乗った。

残りのメンバーは歩いて帰った。

帰り道

俺は一番後ろにいて信号が変わったので歩いて行くとなんだか変な音がして音のする方を向くと赤信号でも突っ込んでくる車があり体が勝手に前にいたリサと千聖を押ししていた。

千聖「きやつ！」

リサ「うわ！」

「ドオン！」

リサ「ちよつとー勇也なにする…の!？」

俺はもう意識もなく車にひかれていた。

リサ side

あたしと千聖が勇也に押されて後ろを見てみると勇也がひかれてそこには血が出て止まらなかった。

リサ「勇也、勇也、勇也つてば！」

千聖は呆然として動けないみたいだ。

友希那は泣いて止まらない。

あたしの頭の中はぐちゃぐちゃになってもう考えることすらできなかった。

その直後に紗夜が電話して少しすると救急車が来た。

友希那は泣きながらも救急車に乗り込んで一緒に向かった。

あたしはその場から動くことができず、しばらくすると勇也のことを引いた運転手がやってきた。

運転手「本当にすいませんでした」

こんな言葉で勇也はひかれたのか我慢しないといけないの？

頭の中で目の前にいるこの運転手に対しての怒りばかり湧いて来た。

なにも考えることができずに手を上げようとするとその手を掴まれた。

リサ「なにをするの、離して！」

「パーン！」

あたしは頬を叩かれた。

紗夜「勇也くんがそんなことを望んでると思ってるんですか!?

頭を冷やしてください！」

リサ「でも…でも！」

日菜「リサちー早く病院に行こう」

彩「ほら千聖ちゃんも早く」

千聖「う、うう…」

千聖はショックから立ち直れてはいないみたいだった。

あたしも正直なところ立ち直れる気がしない。

リサ「千聖行こ。あたしたちがいけないといけないんだよ」

千聖「ええ、わかったわ」

あたしたちは全員で病院に向かった

病院

あたしたちが病院に着くと手術室の前で祈るように待っている友希那がいた。

リサ「友希那……」

友希那「みんな来たのね」

千聖「友希那ちゃん……」

友希那「あなたたちが責任を感じる必要はないわ」

あたしたちはそこから手術室の前で待っていた。

18時から始まった手術も12時間後の6時に終わった。

起きているのはあたしと千聖だけになった。

そこでドアが開き医者が出て来た。

リサ「勇也は、勇也は無事なんですか？」

医者「落ち着いてください。峠は超えました。後で家族の方をお連れしてください。話をしますから」

リサ「わかりました」

あたしと千聖は全員を起こして移動した。

勇也の病室

勇也は四肢のすべてが包帯で巻かれてたくさんの医療機器をつけられていた。

これもあたしのせいなんだと思う。

沙綾「勇也さんは大丈夫ですよ」

日菜「そうだね。勇也くんだもん」

友希那「それじゃあ行ってくるわ」

友希那は話を聞きに行った。

診断室

医者「今回の彼の怪我はかなりのものです。警察から聞いた話によると100kmの自動車にぶつかられたみたいなんです。そのせいで四肢のすべてが折れていました」

友希那「そんな…」

医者「唯一の救いは内臓が無事だったことです」

友希那「そうですか」

医者「彼のそばにいてあげてください。彼は今生と死の狭間をさまよっています。可能な限りそばで声をかけてあげてください。最後に1つ。何かしらの後遺症が出てくるかもしれません。可能性の1つですけど」

友希那「ーっ！わかりました」

診断室を出て勇也の部屋に向かった。

病室（リサ）

友希那「あなたたちは一度帰りなさい。昨日からずっとここにいるでしょ。親御さんたちも心配しているわ」

リサ「あたしはここに残るよ！」

千聖「私も残るわ」

友希那「リサはともかく白鷺さんは帰った方がいいわ。女優がそんな状態はひどいでしょう」

千聖は髪はボサボサで目の下にクマができています。

千聖「ここにいさせて欲しいわ」

友希那「別にダメとは行つてないわ。一度家に帰つてもう一度ここに来てあげて」

千聖は納得したようだった。

そこからみんな一度帰り病室にはあたしと友希那になった。

リサ「友希那はさあたしのこと恨んでいないの？」

友希那「本当なら恨んでいるわ。けれどそんなことこの子も望むわけがない。それにリサを恨むなんて間違っているもの」

リサ「そっか」

確かに勇也ならあたしや千聖を恨んだらたえ誰でもその人を怒ると思う。

しばらくしてあたしは眠ってしまった。

その時は気づいてなかったんだ。

友希那「早く、早く帰って来て勇也」

そこからさらに時間が経ち千聖に日菜、紗夜がやって来た。
そこであたしも目が覚めた。

紗夜「勇也くんは大丈夫なんでしょうか？」

「コンコン」

そこで入って来たのは事故を起こした本人だった。

運転手「失礼します。今回は本当にすいませんでした」

友希那「あなたはこないで！」

リサ「ゆ、友希那!?! どうしたの？」

友希那は狂ったようにその人に近づいた。

紗夜「いい加減にしてください！ 湊さん」

友希那「紗夜…ごめんなさい」

運転手「本当にすいませんでした」

その人は部屋から出て行った。

その日に雄哉は眼を覚ますことなく終わった。

あたしが病室に残り友希那は一度家にあるものを取りに帰った。

そこからさらに一週間経っても勇也は眼を覚ますことはなかった。

病室

あたしと千聖は必ずここに来ている。

友希那は気にしなくていいって言うけど正直のところそんなこと
できない。

正直この状況を打破できるならなんでもいいから欲しかった。

あたしが右手を千聖が左手を握っていた。

勇也「う…ん。痛い」

リサ「勇也!?!」

勇也「うん？ え…とどちら様ですか？」

友希那・リサ・千聖「え!?!」

リサ「これって」

千聖「まさか」

友希那「記憶喪失？」

すぐに検査してもらい結果は記憶喪失だった。
再び病室

全員に来てもらった。

勇也「え…とどちらさまですか？というか僕は誰ですか？」

友希那「まずはそこから話した方が良さそうね」

全員の名前を聞いても全く誰か思い出せない。

蘭「ほんとに何も思い出せないんですか？」

勇也「ごめんなさい」

つぐみ「大丈夫ですよ！思い出せるように頑張りましょう」

ひまり「そうですよ。私たちも手伝いますから」

勇也「すみません。お願いします」

麻弥「敬語はやめてください。同い年か年下しかいませんから」

勇也「はい…」

リサ「はいはい。とりあえず各バンドごとに時間作って話してみようか。ここにいるメンバーごとに」

全員「はい！（りょーかい）」

ポピパ・ハロハピ

沙綾「私たちは合同で行くよ」

勇也「はあ…バンドをやってるんですね」

花音「敬語はなしにして。そこからだよ！」

勇也「は、はい！」

美咲「うーんとりあえず私たちのこと言つとこうか」

花音「それじゃあわたしから。松原花音。花咲川高校2年だよ」

美咲「奥沢美咲。花咲川高校1年です」

沙綾「山吹沙綾。花咲川高校1年です」

勇也「俺は勇也。あれ？上の名前がわからないや」

美咲「湊ですよ。湊 勇也さん」

勇也「うん？確かさつき湊って人がいたような」

花音「友希那ちゃんも勇也くんのお姉ちゃんだよ」

勇也「はい？あんな人が俺のお姉ちゃん？そんなバカな…」

俺は本当にありえないと思っっている。

だってあんなにも綺麗な人が俺のお姉ちゃんだなんて。

美咲「そろそろ時間だね。私たちは行くよ」

勇也「うん。ありがとね」

3人は出て行き次のメンバーが入って来た。
パスパレ

日菜「やつほー日菜ちゃんが来たよー」

彩「日菜ちゃん落ち着いて。勇也くんもびっくりしてるから」

日菜「むーわかったよ」

4人入って来たが1人は後ろにいる。

勇也「えっと確か白鷺さんだっけ？なんで入ってこないの？」

千聖「わたしはここでいいわ（正直今の勇也くんを見ることができない）」

麻弥「まあまあとりあえず何を話しますか？」

彩「私たちのことも思い出せない？」

勇也「はい。すみません」

麻弥「敬語はやめてください。ここにいる人たちは全員勇也さんと同級生ですから」

勇也「そうなんですか」

日菜「むーやめてってばー」

日菜は俺を叩いて来た。

勇也「い”っでー」

彩「日菜ちゃん！」

日菜「ごめんなさい。ついついもの癖で」

勇也「ハアハア。大丈夫だから」

日菜「ほんとにごめんね」

麻弥「ほんとに大丈夫ですか？」

勇也「大丈夫大丈夫。ところでその白鷺さんはなんでそんなにも辛そうな顔をしているの？」

千聖「え!?!あれ。なんでかしら」

彩「千聖ちゃんもう我慢しなくていいと思うな」

白鷺さんは泣きながら俺のところに来た。

そして「本当にごめんなさい！謝って済むことじゃないのはわかっている。けど」

勇也「お、落ち着いて。まず話が全く見えないんだけど…」

千聖「あなたが怪我をしたのはわたしのせい。わたしをかばって車にひかれて怪我をして記憶をなくし、生と死の狭間をさまよっていたの。すべて悪いのはわたしなのよ」

勇也「なるほどね。俺は白鷺さんをかばって怪我をしたのか」

千聖「ええ、そうよ。だから許されることじゃないわ」

勇也「ならよかった」

千聖「どうして!?あなたは死ぬかもしれなかったのよ」

勇也「だって俺が怪我したおかげで白鷺さんにけがはなかったんだろ。それに白鷺さんがすごい苦しんだのもわかる。目の下にクマがはつきりとできてるから。多分記憶をなくす前の俺も後悔はしてないよ」

千聖「う：うウワアアアアアア」

俺は千聖の頭を動かない手を無理やり動かし撫でた。

そのまま千聖は安心したのか俺の体の上に頭を置き眠っていた。

麻弥「それじゃあそろそろ行きましようか。勇也さん。千聖さんをお願いしますね」

勇也「わかったよ」

そこで3人は出て行き次の人たちが入って来た。

A f t e r g l o w

部屋に4人の人が入って来た。

ひまり「お邪魔しまーす」

勇也「えつと確か上原さんに、宇田川さん、美竹さん、羽沢さんだったかな？」

巴「敬語はなしでお願いします。それに苗字もやめてください」

勇也「わかった」

蘭「それでなんで白鷺先輩はそこで寝てるんですか？」

勇也「泣き疲れてそしてしんどかったんだと思うよ」

つぐみ「そうなんですか」

勇也「4人はさ事故の現場にいた？」

4人「っ！」

この反応はいたみたいだな。

蘭「どうしてそんなことを聞くんですか？」

勇也「記憶を取り戻したいから」

巴「いきましたよ。けれどどこかは言えません」

勇也「なんで？」

ひまり「勇也さんが苦しむのがわかってるからです」

その時は迫力に気圧されて何も言えなかった。

勇也「わかった。変なことを言っでごめん」

つぐみ「それじゃあ私たちも行きますね」

素晴らしいみんな出て行った。

Rosealia

紗夜「失礼します」

そう言い3人が入って来た。

そのうちの1人はさっきの千聖と同じように離れたところにいた。

友希那「それで体はどうなの？」

勇也「無理さえしなければなんとでもなるよ」

紗夜「そうですか…」

勇也「ところで彼女はなんでこっちにこないんですか？」

友希那「多分責任を感じてるのよ。リサをかばって怪我したのだから」

勇也「???さっき白鷺さんからも同じことを聞いたんだけどどういうこと？」

俺は全てを聞いた。

俺は2人をかばって怪我をしたらしい。

勇也「よくわかんないけど俺は庇う時よっぽど下手みたいだな。今井さんも白鷺さんも膝に怪我してるし」

リサ「そんなことない！勇也はあたしたちをかばってそんな大怪我をしたんだから…」

勇也「フフ、やっと喋ったな。ずいぶんと喋らなかつたからな」

リサ「へ？あつ！」

勇也「今井さんもこっちに来てよ。全員と喋つときたいからさ」

そういうとリサはこつちに来て座っていた。

今井さんもかなり心配しているみたいで目の下のクマがひどい。

勇也「今井さんも少し休みなよ。体壊すよ」

リサ「ううん大丈夫」

勇也「責任感じてるならもういいから。記憶のある頃の俺も必ずそういう。それにその時の俺も思ってるはずだよ。今井さんに体は壊して欲しくないってね」

友希那「勇也のいうとおりだわ。リサあなたは少し休みなさい。あの日からほとんど寝てないでしょう」

リサ「でも…」

俺はまだ合図して紗夜と友希那に部屋を出してもらった。

手でリサを引き寄せ「もう大丈夫だから。体は大事にして」

リサは泣き俺に顔をつけて来た。

そして少し時間が経ち泣き疲れたのかそれとも緊張の糸が切れたのかどっちはわからないが千聖と同じような感じで寝た。

俺は看護師に頼んで二枚の布団を持って来てもらいかけてもらった。

勇也「すいません」

看護師「いえいえ気にしないでください。それより2人が心配だったんですよ。毎日来てほとんど寝てませんでしたから」

勇也「やっぱり」

看護師「それじゃあ失礼しますね、ゆっくり寝させてあげてください」

看護師は出て行き気がつくと窓から微かな月明りが部屋を照らしていた。

俺は座っている状態で目を閉じた。

俺が目を覚ますと2人ともまだ寝ていた。
よほど疲れていたみたいだ。

リサ「う…ん勇也？」

勇也「起きたか？ずいぶん疲れてたみたいだな」

リサは真っ赤になって飛び起きた。

その声で千聖も目が覚めた。

「ぐうぐ」

俺の腹からなった。

リサ「勇也お腹空いてるの？」

勇也「ちよつとな」

リサ「ちよつと待ってて」

リサはすぐに病室を出て何処かに行った。

勇也「どこに行ったんだろう？」

千聖「少し待ってて。そしたらわかるから」

しばらくするとリサが息を切らしながら病室に入って来た。

勇也「ど、どうしたの？今井さん」

リサ「はいこれ」

渡されたものを開けると綺麗なお弁当だった。

見た感じと全然違うイメージにびっくりした。

ただ開けるのはできても箸を持ってない。

リサ「あ、そうだった。はいあーん」

リサが食べさせてくれてなんとか食べ終わった。

途中から心臓の音がやばかったのは内緒だな。

勇也「ありがとリサ。助かったよ。腹減って死ぬところだわ」

リサ「ううん気にしないで」

リサと千聖はやっぱり責任を感じてるみたいだった。

勇也「うーんそうだなー責任感じてるなら頼みたいことがあるんだ
けどいい？」

千聖「なんでもいいわ。言ってちょうだい」

勇也「俺と友達であってくれ。このままでも記憶が戻っても」
リサ「勇也くそれは頼みでもないよ。あたしたちそれに昨日きたみ
んなはこれから勇也の友達だから」

勇也「そっかよかった」

そこからは俺がリサと千聖を一度帰らした。

あの2人かなり疲れているので家に帰ったほうがいいと思ったか
らだ。

そこからはしばらくすると美咲たちがやってきた。

美咲「失礼します」

来たのは美咲、花音、沙綾、それに千聖がやってきた。

勇也「おいおい千聖。俺は家で寝てゆつくりして欲しかったんだけ
ど？」

千聖「もう休んだわ」

そうは言っても足元も少し無理して立っているし、何より顔色が良
くない。

勇也「はあ。奥沢さんちよつと車椅子貸してもらえますか？」

美咲「はい。これでいいんですか？」

そういい近くの車椅子を広げて貸してくれた。

勇也「ベッドを開けたからそこで寝て。頼みじゃないよ強制」

千聖「だから私は大丈夫よ！」

花音「千聖ちゃん無理してるよ。顔色本当に悪いもん」

沙綾「そうですよ。少し休んでください」

千聖「花音に沙綾ちゃんにも言われるとは思わなかったわ。勇也く
ん少しベッドを借りるわね」

勇也「好きに使ってくれ」

千聖はベッドに入り目を瞑っていたがすぐに眠った。

勇也「俺たちは場所を移動しようか」

俺は手で車椅子を動かそうとしても動かない。

美咲「押しますから無理しないでください」

勇也「ごめん」

俺は押してもらいこの病院の屋上に向かった。
屋上

屋上にはたくさん洗濯物がありあまり良い場所とは言えなかった。

花音「勇也くんありがとう」

勇也「なんのこと？俺なにもしてないよ」

花音「千聖ちゃんのことだよ。私だけだったら多分聞いてくれなかつたと思うんだよ」

勇也「それなら別にいいよ」

しばらく無言が続き美咲がそれを破った。

美咲「そうだった。これを見て欲しいんですよ」

そう言いだされたのは写真だった。

おそらくプールで撮った写真だと思う。

しばらく見ているとなんだか懐かしい。

勇也「っ!!」

その時に激しい頭痛が襲ってきた。

沙綾「勇也さん!?大丈夫ですか?」

勇也「大丈夫。それよりこの時のこともうすこし教えてくれ」

3人ともすこし悩んだような顔で言ってくれた。

プールにはあの時のメンバーだけじゃなくてもっと多くのメンバーで行ったこと。

その時にどんなことをしたのかを教えてください。

そのを聞いている内にまた頭痛が襲ってきてなんだか思い出せそうな感じがした。

勇也「いてて。なんだか思い出せそうなんだけどな」

美咲「もう今日はこれくらいにしましょう。勇也さんがしんどいです」

美咲だけじゃなくて沙綾と花音もそうして欲しいような顔だったので諦めた。

勇也「そろそろ部屋に帰るか」

沙綾に押してもらって部屋に帰った。

千聖はすでに起きておりその日はみんな帰っていった。

そこから1ヶ月半後

医師「それじゃあ取るよ」

勇也「はい」

俺はギブスを取ってもらった。

医師「全くどういう体をしているんだから。1ヶ月半で治るなんてね」

勇也「けどこの後のリハビリが大変なんですよね？」

医師「なにしろ1日に限られた時間しかできないからね。それなりにかかると思った方がいいよ」

もう動くんだけどな。

俺は手を動かして見た。

勇也「わかりました」

俺は部屋を出て病室に戻った。

病室

そこには千聖、リサ、紗夜、友希那がいた。

この1ヶ月半でかなりのことを教えられた。

勇也「毎日来なくていいよ。リサと千聖は毎日なんだから体壊すよ」

リサ「つついっいきちやうんだよねー」

なんだろ。リサのことを見ていると心臓が苦しい。

友希那「それでどうなの？もうギブスは取れたようだけど」

勇也「今からはリハビリだけだよ。そんなにかからない」

千聖「そう…それじゃあ合同修学旅行には来れるのね」

勇也「合同修学旅行？」

紗夜「私たち花咲川と勇也さんたち羽丘で合同で修学旅行になったんです」

勇也「またどうしてそんなことに？」

千聖「それは前に勇也くんが前に花咲川に体験で来た時にうちの理事長が気に入っちゃったのよ」

勇也「それは嬉しいな」

リサ「そういえば記憶を取り戻すには印象が強いことを見せればい
いって聞いたよ」

急に話を変えてきた。

千聖「それならいいものがあるわよ」

そういう千聖が出したのはDVDだった。

それを見るとみんなのバンド映像が流れ始めた。

そこには今までにあった全員が写っていた。

みんなの演奏は力強く楽しそうな感じだった。

バンドにより音を外しているところもあったが…

そしてRoseliaというグループとパスパレのというグルー

プで新曲が流れると俺の頭に激痛が走った。

勇也「つう！この曲は」

友希那「勇也!?大丈夫」

勇也「ああ、この曲は誰が作った?」

紗夜「それは勇也さんが作ってくれました」

千聖「私たちの曲も同様にあなたが作ってくれたわ」

勇也「そうだ。俺は確か曲を合宿…で」

そこで俺は意識が落ちた。

目を覚ますと心配そうに姉さんたちが見守っている。

勇也「どうしたの?姉さんまで不安そうな顔をして」

全員「?!」

友希那「もしかして記憶が戻ったの?」

勇也「??何言ってるの俺は俺だよ」

友希那「勇也!」

姉さんは素晴らしい飛びついてきた。

リサ「それじゃああたしたちのこともわかるの?」

勇也「??リサに千聖、紗夜だろ。リサボケたのか?」

リサ「勇也:」

千聖「勇也くん:」

2人は泣き出した。

正直なところよく覚えていない。

勇也「はいはい泣かないでくれ。俺がショックだよ。自分自身でやったことだから気にしないでくれ」

姉さんはいまだに離れてくれない。

リサ「勇也ありがとう。おかげで助かったよ」

勇也「ああ、それならよかった。みんなそろそろ時間だよ。帰ったほうがいいんじゃない？」

けれどそこから誰も動こうとはしなかった。

勇也「もうどこにもいかないよ。だから休んできてくれ。俺のために体を壊すのはやめてくれよ」

渋々みんなは帰っていった。

俺は全てを思い出しその日は眠った。

次の日からのリハビリはかなりきつかった。

想像以上に体が動かないし、何より足が動かない。

きついがみんなに心配をかけないと思うとなんとかやり切れた。

そのまま時間は過ぎついに俺は退院の日を迎えた。

その日は全員が迎えに来てくれた。

蘭「けどまさかバンドのことで思い出すなんて思いもしませんでしたよ」

勇也「よくよく考えてみれば当然なんだよな」

麻弥「どういうことですか？」

勇也「だつてさ今ここにいるメンバーを繋いでこんな風にしたのはバンドなんだからそれで思い出してもなんら不思議じゃない」

俺はみんなと一度自宅に帰った。

自宅

久しぶりに帰って来ても何も変わっていない。

勇也「たまには何か作るか。何がいい？」

モカ「中華でお願いしまーす」

ひまり「甘いもので」

日菜「なんでもいいよー」

勇也「すげえバラバラだな。けど作るわ」

俺はそこから久しぶりにキッチンに立ちそこから調理を始めた。みんなの要望を全て作ると久しぶりすぎてしんどい。

俺はソファアに倒れこんだ。

千聖「勇也くん!?大丈夫」

勇也「千聖心配しすぎだよ。ただ久しぶりに作ってしんどくなっただけだから」

リサ「それを心配してるんだよ」

勇也「返す言葉もない。少し寝るよ。また起こし…て」
俺はすぐに眠ってしまった。

その時にされている会話などももちろん聞けるわけがない。

リビング

千聖「勇也くんにあの話どうするの?」

紗夜「そうですね。合同ライブ。しかも勇也くんは参加って」

リサ「なかなか難しいよね」

モカ「モカちゃんたちも行きたいです」

日菜「あははそれは無理だよ、だって修学旅行でやるんだもん」
蘭「修学旅行でやるんですか!」

友希那「両理事長からの頼みは断れないわ」

その話はしばらく続き1時間ほど経った。

そこで勇也の携帯が鳴り勇也は目を覚ました。

勇也「はい。わかりました。誰でもいいんですか?」

俺は電話を切りみんなの方を向いた。

勇也「うーんリサ頼みあるんだけど…」

リサ「なにになに。聞いちゃうよ」

勇也「それじゃあ俺と京都行かない?」

全員「えー!」

リサ「ちよつとまって。話が全然わからない。どういうこと?」

勇也「それが前に料理対決した時に向こうの大物が俺の料理を食べたい!つてなったらしいんだけど俺しばらく入院してたからな。そ

こで今の電話で今回の仕事でお願いしますって来たんだよ。それで1人パートナーを連れて行けるってことになったからリサに頼みたいんだよ」

ひまり「それって私たちじゃダメなんですか？」

勇也「いや一番料理できるのリサだからお願いしたいなくって思ったんだけど」

全員が少し膨れていた。

リサ「あたしでいいの？」

勇也「リサに頼みたいんだよ」

リサは顔を真っ赤にして下を向いてわかったと返事をくれた。出発は3日後だ。

旅行前に

俺はリサに頼んですぐに別の場所に電話をかけた。

勇也「大急ぎで頼む。あと2日で。金は大丈夫だから」

相手からの了解も得られたのでリビングに戻った。

リビング

勇也「リサと俺が行ってる間紗夜こっちにきてくれない？できればつぐみとひまりも」

紗夜「どうしてです？」

勇也「それは…姉さんを1人にするとか何があるかわからないから若干笑っている奴もいたが実際のところ笑い事じゃない。

前なんかシチューを作るときに手伝ってもらおうとジャガイモがなくなりそうだったんだからな。

つぐみ「それはわかりましたけどどうして私たちもなんですか？」

勇也「えーと…」

俺は答えられなかった。

紗夜はきつちりしてるけど料理できないから2人を呼んだなんて…

リサ「まあまあ2人ともお願い！帰ってきたら勇也がお礼するから」

つぐみ・ひまり「ほんとですか!？」

勇也「それはもちろんするよ。俺から頼んどいてしないのはおかしいからね」

ひまり「わかりました。来ます」

友希那「ちよつと待って！大丈夫よ」

勇也「無理だね。俺が心配で向こうに行けない。だから聞いてほしいな」

友希那「はあ、わかったわ」

勇也「それじゃあ3人ともよろしく」

3人とも納得してほかの子からはすごい殺気が飛んで来ていた。

勇也「それじゃ送るよ」

俺はみんなを送り自宅で眠った。

次の日

俺とリサは事務所に呼ばれた。

リサ「あたしまで来ていいの？」

リサは少しビビっている。

まあ始めて来た頃の俺もこんな感じだったけど…

勇也「大丈夫だって。何言われても俺がいるから」

そのまま2人で会議室に向かった。

会議室

スタッフ「今日はすいません、急に来てもらって」

リサ「いえ。それでどうしたんですか？」

勇也「もしかして料理してくれとかいうんじゃないだろうな？」

スタッフ「そのもしかしてです。勇也さんの料理の腕は知ってま

す。けどこの方の腕は知りません」

勇也「だから俺が保証するよ」

スタッフ「今回勇也さんの料理を食べたいと言って来たのは○沼さ

んです」

勇也・リサ「!!」

スタッフ「そのために失敗は許されません」

リサ「わかりました。なんでもいいんですか？」

スタッフ「はい。とりあえずどの程度か知りたいので」

そこで俺たちはキッチンに移動して調理を開始した。

リサが作ったのは筑前煮だった。

俺たちは食べるとやっぱリサは美味しい。

勇也「これなら大丈夫でしょう」

スタッフ「はい試すような真似して申し訳ありませんでした」

リサ「いえ気にしないでください。楽しかったですから」

俺とリサはそこで事務所から出て行き自宅に帰った。

自宅

俺はベッドに倒れているとリサが入って来た。

リサ「勇也今日さ暇？」

勇也「この後は何もないけどどうした？」

リサ「それじゃあさ一緒に服買いにいかない？向こう行くときの服欲しくて」

勇也「それもそうだな。行くか」

俺はそのまま用意して家を出て行った。

勇也「それでどこに行くんだ？」

リサ「新しくできたショッピングモールがあるんだけど遠くて舌を出して悪そうに言っているが何が言いたいかわかった。

勇也「元々そのつもりだったんだろ。ったく」

俺は家からヘルメットをリサに向かって投げた。

リサ「うわつと。いきなり投げないでよ」

勇也「これぐらいの仕返しはいいだろ」

俺はバイクにまたがりリサを後ろに乗せた。

勇也「一応捕まつとけよ。落ちないように運転するけど」

リサ「もちろん」

リサは後ろから間をなくすように抱きついて来た。

勇也「はあ」

これ俺冷静に運転できるかな？

そんなことを感じながら運転を始めた。

途中の信号でリサの様子や道を聞きながらなんとか着いた。たしかに遠かった。

ショッピングモール

駐車場にバイクを止めリサと中に入った。

勇也「うわっ！すげー」

中に入ってみるとかなり広く店も今までのところとは違った。

リサ「それじゃあ行こっか☆」

リサはかなり上機嫌になってショッピングモール内を散策し始めた。

勇也「どこから行く？」

リサ「うーん服は最後にしたいからまずはアクセ見に行こ！」
アクセサリーショップに向かいリサは物色していた。
昼から来たがかなりの時間が経っている。

勇也「リサーそろそろ出ないと服見れないよ」

リサ「え!?!うそ」

リサは時計を見てびっくりしていた。
もう3時を回っている。

帰る時間を考えるとあんまり長くは服屋にいられない。

リサ「早くいくよ!」

勇也「わかったから手を引つ張るな」

俺はリサに手を引つ張られながら服屋に着いた。

服屋でも前回同様になると思ったがリサ自身が着せ替え人形の
ペースで着替えては俺に意見を求めて来た。

気にあつたのがあつたみたいでレジに持っていく直前で取った。

店員「35000円になります」

リサは想像以上にいいのを買っていたみたいで値段にびっくりし
た。

リサ「勇也く自分で買うってば」

勇也「リサに京都まで来てもらうからこれくらいはね」

そんなことを話しながら会計を済ました。

リサ「ずるいよ／＼」

リサは顔を真っ赤にしてそう言って来た。

勇也「???それじゃあ帰るか」

俺とリサはそこから家に帰った。

そこからはあつという間にその日が終わった。

出発まで後2日

そこからは何もなくて俺とリサは出発前日になった。

???「もしもできましたよ」

俺はその一報を受けてすぐに家を出た。

俺は店に着くと店員がカウンターの裏に呼んでくれた。

勇也「助かったわ。和樹」

こいつは田中和樹。

俺がテレビに入ってから知り合った人物だ。

知り合った経緯はまた今度でもいいだろう。

和樹「マジで死ぬかと思ったわ」

勇也「いやマジで助かったよ」

そいつの目の下にはクマができていた。

和樹「はいこれ。俺はもう寝る」

勇也「おう。サンキューな。また今度なんかするよ。金は店員に渡しとくわ」

和樹「いらねえ。俺はお前に助けてもらったからな。どうしてもって言うなら今度飯おごってくれ」

勇也「りょーかい。んじやまたな」

俺は店を出て家に帰った。

そこからは何もなく用意をして眠った。

出発日

朝早いから目が覚めてリビングに行くときまだ誰も来てなかった。

俺は朝飯を作りリサを呼びに行った。

部屋をノックしても返事がない。

中に入るとベッドの中で幸せそうに寝ているリサがいた。

勇也「はあ。なんか起こすの悪く感じるわ」

そこから体を揺すったりして見たがなかなか起きない。

俺は一つしか手段がないと思い実行した。

布団を剥ぎ取ることだった。

時期的には少し肌寒い10月に入っているのでこの時期に気づかないうちに取りられるのはなかなか辛い。

勇也「おきーろ」

剥ぎ取ると案の定すごい声を出して起きた。

リサ「ひぎあああああああさむい」

勇也「リサでもこんな声出すんだ」

リサ「勇也ひどいよ」

勇也「俺は最初は普通に起こしたぞ。それでもリサが起きなかったんだから」

リサ「ううくわかったよ。用意するから下に行つてて」

俺はリビングに行きリサを待っていると少ししたら降りて来た。

勇也「早く食べて新幹線に乗るよ」

リサ「待ってよ。そんなに急かさないで」

リサが食べ終わるのを待って俺たちは家を出た。

出てすぐにひまりとつぐみと紗夜に連絡をしておいた。

タクシーで向かいそこから新幹線に乗った。

新幹線

勇也「リサこれをこの間肌身離さず付けといて」

リサ「何すごい綺麗なんだけど」

勇也「まあ見た目重視で作ってもらったけどこれを付けてると万が一

の時にリサを守る」

リサ「ちよつと待って、作ってもらったって何?」

勇也「これオーダーメイドなんだよ」

リサ「そんなのもらえないよ。高かったんでしょ」

勇也「そこは気にしなくていいよ。俺からのプレゼント」

リサ「うん。ありがとう」

リサはそこから付けてくれたが似合っている。

勇也「少し寝かせてくれ。今からでも2、3時間あるから」

リサ「うん。ゆっくり寝てていいよ」

俺はそこから眠った。

リサ side

勇也からのプレゼントは嬉しかった。

とつても綺麗なネックレスだけどひとつだけ気がかりなことがあった。

これで万が一の時にあたしを守れるってどういうことだろう？

そればかり気がかりになっていたが隣で寝ている勇也を見てたらどうでもよくなった。

リサ「勇也ありがとう」

あたしは寝ている勇也ので頬にキスをした。

END

京都編 V O I 1

俺が目を覚ますと隣でリサが肩をつけて寝ていた。

起こすのも悪いのでそのままにしていると少し緊張する。

リサが少し動くとその反動でウェーブのかかった髪が俺の鼻をくすぐる。

勇也「そろそろ起きてほしいかな」

そんなことを呟いて30分ぐらい経つとやっと起きた。

リサ「ん…？ああ寝てたか。ごめんね勇也」

勇也「謝る必要はないよ。そろそろつくから用意しといてくれよ」

リサ「りよーかい」

そこから少しして俺たちは京都についた。

向こうに着くとすでにスタッフたちはいた。

勇也「それで俺たちはこれからどうするんですか？」

スタッフ「今日は移動だけに時間を使ったので後は自由です。明日に会っていただきそこから番組の話をします」

勇也「わかりました」

スタッフ「とりあえずホテルに案内します」

そこからホテルに向かいロビーで鍵をもらった。

けれどももらった鍵は一つしかない。

勇也「これ鍵一つしかないんですけど…」

スタッフ「それは今井さんが一つでいいとおっしゃったので」

リサの方を見るとあからさまに顔を晒している。

勇也「どーいうことかなー？くわしく聞きたいなー」

リサ「わーごめんってば。料理食べてもらった後に部屋のことを聞かれていいですって答えちゃったんだ」

ベロを出しながら言われて何も言えない。

勇也「わかったよ」

俺は鍵を預かり部屋に向かった。

ホテルの部屋

中に入るとスイートルームらしくめちやめちやでかかった。

リサ「なんでこんなにも広いの？」

勇也「いや俺に聞かれても困る」

そこで部屋の電話が鳴った。

勇也「はい。え!?わかりました」

俺は電話を切った。

リサ「なんだったの？」

勇也「この部屋共演者の○沼さんが出してくれたらしい」

リサ「え”?ほんとに？」

勇也「事務所としては普通の部屋を用意するつもりだったらしいんだけどわざわざ来てもらってそれはダメだって言われてこの部屋を用意してくれたらしい」

リサ「うっそ！」

リサは唾然としてそれ以上何も言えなかった。

そこで俺のケータイにメールが入った。

スタッフ「明日は○沼さんとの打ち合わせです」

俺は返信してリサに事情を話した。

リサ「それにしても勇也大丈夫なの？」

勇也「なにが？」

リサ「なにを料理するかもわかってないのにいきなり言われて大丈夫なの?後あたしで大丈夫？」

勇也「俺が今までやってきた料理の一つをするだけに過ぎないよ。」

それにリサだから頼んだんだ」

リサ「く／＼女たらし」

勇也「え?なんて」

リサ「なんでもない！」

リサはベッドに飛び込んだ。

それが楽しかったのかベッドで跳ねたりゴロゴロ転がったりしている。

リラックスしているみたいで良かった。

俺はそのままソファーに座りこんだ。

その日はホテルの部屋で1日を過ごした。

次の日(2日目)

起きてしばらくすると電話が鳴りもうすぐ時間だと言われたので準備をして向かった。

向かうとそこにその人はいた。

勇也「はじめまして。湊 勇也です」

○沼「かしこまってるな。そんなにかしこまらんでええて。ところでそつちの子は？」

リサ「今回サポートできた今井リサです」

○沼「随分かわいい子を連れて彼女さんか？」

勇也・リサ「ブツ！」

勇也「違いますよ」

○沼「そうか。それじゃあ仕事の話しよか」

最初の話のおかげでかなり場が和んだと思う。

もしかしたらこれが目当てだったのかもしれないが…

○沼「今回調理してもらうのは熊肉や」

勇也「熊肉ですか。失礼ですけどどうして熊肉なんですか？」

○沼「前に食べたんが上手くてんけどなかなか作れる人がおらんくてな。それで君を見つけたってわけや」

勇也「わかりました。やってみます」

○沼「なるほどな。いい目してるな。試作用にたくさん用意したからそこを使ってええで。キッチンもあるからそこで作ってくれてええで」

勇也「ありがとうございます。試作期間は1日ですよね？」

○沼「そうやねん。短くてごめんな」

勇也「いえ、ありがとうございます。早速いつでも大丈夫ですか？」

○沼「かまへんよ。頼むでー」

俺とリサはそこで部屋を出て試作室に向かった。

試作室

勇也「とりあえず色々やってみるか」

リサ「うん！」

俺たちはそこから色々してみた。

焼いてみたり、塩胡椒で味付けしたりけれどこの独特の臭みが消えない。

リサ「最初よりはマシになったけどそれでも全然だねー」

勇也「そうなんだよな。中々この匂いがきつい」

リサ「うーんスパイスでも入れてみる？」

勇也「そうするか」

俺はそこからスパイスでの香り付けに味付けをした。

リサ「うん。これなら美味しい。けど…」

勇也「そうなんだよな、どこにでもある味だよな」

二人ともかなり悩んでリサが口を開いた。

リサ「そもそも匂いって消す必要あるのかな？」

勇也「???どういうことだ？」

リサ「だつてさ一般的に納豆やチーズなんかは臭いけどそれが美味しいって人もいるじゃん」

勇也「……!!ならこれならどうだ」

俺はそこから一つの品を作った。

リサ「これは美味しいよ!こんなの中々ないし」

勇也「そうだな。っとそろそろリサ帰るか。時間も時間だし」

朝に打ち合わせしてそのままここにきたのに外は暗くなっていた。

俺とリサは一度ホテルに帰った。

リサ「それじゃおやすみ」

勇也「ああ、おやすみ」

リサはそこから眠った。

俺は起き上がりさっきの試作室に戻った。

リサは美味しいって言ってくれたけど正直何か足りない。

そう思い俺は改良を重ねた。

気がつくとは外は朝日が差しており俺の改良もそこで終わりホテル

の部屋に戻った。

ホテルの部屋

戻ると俺は正座していた。

リサ「それでどうしてそういうことをするのかなー？」

勇也「いや、その、はい。すいませんでした」

リサ「もー時間まで寝てて。時間になったら起こすから」

リサにベッドに倒された。

勇也「いや大丈夫だから…」

口ではそう言っても睡眠には勝てない。

ベッドが気持ちいいのもあって俺は寝てしまった。

リサ「無理しすぎだよ。友希那から頼まれてるんだから」

俺はそんなことを聞けるはずもなく寝ていた。

しばらくすると叩き起こされたが…

俺は服に袖を通して会場に向かった。

するとすでにその人はいてこつちをみた。

○沼「今日はすまん。頼むで」

勇也「やれる限りやってみます」

素晴らしい開始時間まで待つて番組が始まった。

番組が始まり俺とリサは調理にかかった。

するとリサが途中で異変に気付いたようで声を上げてびっくりした。

リサ「ちよつと勇也！なに作ろうとしてんの？」

勇也「ちよつと待つてくれ。リサにやつてもらおうから」

素晴らしい俺は衣をつけてリサに渡した。

勇也「これを揚げてくれ」

リサ「う、うん」

俺はリサに渡してその間に昨日作ったソースの再現を始めた。

リサ「こつちは終わりだよ」

勇也「こつちもだ」

素晴らしい調理は終了した。

勇也「ではどうぞ。熊肉のメンチカツです」

○沼「メンチカツとはビックリやな」

勇也「実のところ昨日までハンバーグにする予定だったんですけどね。思いつきり風味を閉じ込めたらどうなるのかやってみたら成功して」

○沼「それでこっちのソースは？」

「素晴らしい付けて食べると顔色が変わった。」

○沼「これは…うま！あんたほんまに高校生？」

勇也「ええ、健全な高校生ですよ」

○沼「うん。あんたのこと気に入ったわ」

勇也「ありがとうございます」

横でリサがジト目で睨んでいるので小声で「テレビに映るよ」といういつも通りの顔になった。

そのまま番組は盛り上がり終わった。

俺とリサは一度楽屋に戻ってゆっくりしていたら扉が開いた。

楽屋

○沼「ごめんな休憩中に」

勇也「いえ気にしないでください。それでどうされました？」

○沼「今日の夜暇か？」

俺はリサの方を見て確認を取り返事した。

○沼「そんならうちにおいでや。話しながら飯食べよう」

俺とリサはこの時に気付くはずもなかった。

あんなことが起こるなんて

俺は○沼さんから住所を教えてもらい夜にまたいくといいホテルにリサと帰った。

さつきからリサの様子がなんだかおかしい。

勇也「リサどうしたんだ？なんだか怒ってるのか？」

リサ「なんでもないよ！」

そうは言っているが声色が違う。

俺たちはホテルに帰り時間まで待つて向かった。

その道は暗くリサはかなり怖がっていた。

着くとびっくりするような家が目の前にあった。

勇也「う、わでか」

そこでインターホンを鳴らして俺とリサは中に入った。

中に入るとすでに共演した人たちもおり俺たちが最後になっていた。

勇也「すいません。遅くなりました」

○沼「気にせんでええよ。集合時間にはまにあつとるし。それじゃ

あカンパニー」

そこからは俺たちは宴会状態になりすごい楽しかった。

それもしばらくして終わり俺とリサは家を出た。

勇也「今日はありがとうございしました。楽しかったです」

○沼「ええんやて。またやろな」

勇也「はい」

俺とリサは帰路に着いた。

帰り道

リサ「んー勇也ありがとね」

勇也「なにをだ？何にもしてないけど」

リサ「それでもだよ。あたしが不機嫌でも怒らなかつたし」

勇也「そのことか、気にしないでいいよ」

あたりは真っ暗でかなり前に自販機があつた。

よく見えないがその近くに車もある気がする。

リサ「それにしても喉乾いちやつた。ちよつとあの自販機で買ってくるよ」

「そういいリサは走っていった。」

俺はその後ろから歩いて追っているとその車のランプが急についた。

リサ「きゃあー」

勇也「クソ！」

俺は走っていったけど間に合うわけがなかった。

そのまま車はどこかに行った。

俺は焦っていたがその時に自分の言ったことを思い出した。

それで落ち着きすぐに来た道を引き返してインターホンを鳴らした

○沼「どないしたん？」

勇也「すいませんなにも聞かずにバイク貸してもらえませんか？」

○沼「(えらい真剣やな) ええで。使い」

勇也「すいません。ありがとうございます」

俺はバイクにまたがりケータイを起動して急いで運転した。

勇也「この車一体どこまで行く気だ」

俺はひたすらにバイクを運転した。

リサside

あたしが車に入れられて口と手と目をすぐに縛られた。

運転手を入れて四人いて一人が話し出した。

「まさかRoseliaのリサちゃんをできるとはな」

リサ「!!? (この人たちあたしを知ってる)」

「まあ向こうまで待ってろ」

そのまま車はさらに進み止まったのは海岸沿いの汚いところだっ

た。

着くと同時にあたしはクッションの上に倒され服を破かれた。

リサ「んーんー（いやだ。勇也助けて…）」

END

勇也「やっと止まりやがった」

そういう俺はさらにアクセルを上げて着いた。

海岸沿いの廃工場に、

俺はそのまま扉とぶち破った。

意外と中は明るく何が起こっているかすぐにわかった。

クッションの上にリサがいてその服は破かれていた。

その周りには10人ほどの男たちがいた。

「なんだテメエ？」

勇也「御託はいい。俺は今までで一番キレてんだ。早く来い」

そのまま全員がかかって来たので全て避けてリサのところについた。

勇也「ごめんリサ」

俺はその一言ををいいリサにパーカーをかけた。

「テメエ」

そのまま殴りかかって来たのですぐに5人ほど倒すとその他の奴らは素手ではダメだと思ったのかはものをだしてきた。

4人はすぐに倒してあと一人を殴り飛ばしたと同時に倒れていたはずの一人に後ろから刺された。

勇也「ガッ！（ここで声を出すとリサに心配をかける）」

声押し殺して俺は蹴り飛ばした。

なんとか終わりリサを拘束していたものを外した。

リサ「勇也！」

そのまま飛びついて来た。

そして一人が話し始めた。

「お前はもう終わりだ」

勇也「さてどつちがかな？」

その時に警察のサイレンが鳴り始めた。

勇也「それじゃあ帰るか」

リサは泣きながら頷いた。

俺はリサをおんぶして歩いて帰った。

そこから出てホテルじゃなく○沼さんの家に向かっている最中だった。

勇也「リサごめんな。怖い思いさせて」

リサ「勇也気にしないで、ありがとう」

リサは泣き疲れたのかそのまま俺の上で寝てしまった。

普段ならなんともないリサの体重も今の俺には厳しく目の前がチカチカしている。

勇也「ハアハア」

俺はなんとか○沼さんの家に着きインターホンを鳴らして謝った。

リサもそこで目が覚めたようで自分でたった。

家の中に連れられてリビングについて俺はあつたことを全て話した。

○沼「そうか。リサちゃんも怖かったな。上に行って好きな服とついで」

リサは二階に上がった。

○沼「さていつまでやせ我慢してるつもりや。もうリサちゃんはおらんで」

勇也「バレてましたか」

○沼「はい時間ないからすぐに応急処置するで」

そのまま俺は包帯を巻かれて服をもらった。

Tシャツをもらいそつちに着替えた。

勇也「それでバイクはあれいきました？お金は返します」

○沼「それはいらん。それに私の頼み聞いてや」

勇也「はい…」

○沼「もう今回の番組はええ。まだ発表すらしてないやつやしな。」

だからリサちゃんの隣におったってくれ。多分あの子トラウマになってるはずや」

勇也「そんな…」

○沼「ただそれを支えたってくれや」

勇也「はい」

○沼「スタツフの方にはうちから話しとくわ。だからもう帰り。タクシー呼んどいたから」

リサ side

あたしは服を選んでいた。

あたしはあの人のことを勘違いしていたみたいだ。すごいいい人だった。

軽く服を着ようと服を脱ぐとあたしの左足の内ももの部分に血が付いていた。

リサ「え？これって」

誰のかはその時は分からなかった。

着替えてリビングに向かった

END

○沼「それじゃあ帰りや。リサちゃんもな」

その時にリサは二階から降りて来た。

勇也「本当にありがとうございます」

○沼「気にせんでいいよ。うちがあんたのことを気に入っただけやから」

俺とリサは頭を下げてタクシーに乗り込んだ。

そのままホテルに着きリサはすぐに寝てしまった。

俺は洗面所に向かいとりあえず包帯を外した。

刃物自体そこまで大きいのじゃなかったから傷自体は塞ぎかかっている。

そのまま風呂に入るとやっぱりとんでもないぐらいの激痛が襲っ

て来た。

風呂から出てズボンだけ履き終わるとリサが入って来た。

勇也「寝たんじゃなかったのか？」

リサ「やっぱり勇也だったんだね」

そういいりサが目線を俺の怪我している腰に落として来た。

リサ「どうしてあの時に言ってくれなかったの!？」

勇也「リサ落ち着いて」

リサ「これが落ち着けるの!?!無理だよ。勇也があたしのせいで怪我してるんだよ」

勇也「だからだよ。俺が怪我してよかった。俺の怪我一つでリサを守れてるんだから」

リサ「バカ！」

俺はそのまま押し倒されてリサは俺の胸に顔を埋めた。

リサ「ほんとにありがとう勇也」

勇也「リサが無事でよかった」

俺とリサはそのままベッドに戻って眠った。

俺とリサは眠ったが俺は結局痛みと心配ですぐに目が覚めた。俺はそのまま眠ることなく朝を迎えた。

朝になつてもリサはなかなか起きる気配がない。

普段なら起こす前に起きるが今回ばかりは話が別だ。

あんな間に合うと体はもちろんそれ以上に精神的にも疲れる。

朝の9時を待ったところでリサは目を覚ました。

勇也「おはよりサ」

リサ「うん。おはよう勇也」

リサは寝ても疲れが取れなかったんだろう。

見ただけでわかるぐらい疲れている。

リサ「それじゃあ勇也の病院に行こっか」

勇也「俺1人でいっよ」

リサ「ダメだよ！勇也行くとか言つて適当に時間潰しそうなんでもん！」

バレてた。

実際にしそうだから何も言えない。

勇也「それじゃあ行こっか」

用意をして部屋から出ようとするとスタッフから電話がかかってきた。

スタッフ「すいません。話は聞きました。学校側には休むと前もつて伝えているので今日を含めてあと4日あるのでゆっくりしてください」

勇也「はい。ありがとうございます」

俺は電話を切りリサとタクシーに乗り込み病院に向かった。

病院

着いて呼ばれるまでまっついているとなんだかりサが無言になつてい

る。

気になりそつちを見ると顔色が青ざめていた。

勇也「リサ!？」

勇也「勇也、ごめん。なんだか気持ち悪いや」

勇也「いやいいから休んで」

リサ「あ…」

俺はリサを引き寄せパーカーをかぶせた。

実際俺も無意識にやっていたから気がつくど恥ずかしい。

リサはそのまま俺にもたれてゆっくりしていた。

俺は呼ばれたので立とうとしてパーカーを取るとリサの顔色はさつきよりマシになっていた。

勇也「大丈夫か？無理ならここで帰るけど」

リサ「ダメ。行くよ!」

俺はリサに連れられて行った。

医師「それで今回はどうしたのかな？」

勇也「この傷って治せます?」

俺はそういい刺されたところを見せた。

医師「これなら縫えばなんとかなるよ。今すぐにするかい?」

勇也「ええ、お願いします」

リサが一言も話さないので気になって見て見ると顔色がかなり悪い。

勇也「リサ。少し休んで…」

リサ「う、うん。ごめんね」

勇也「気にしなくていいから」

リサ「パーカー借りてもいい?」

勇也「???いいけど…」

俺はパーカーを脱ぎリサに貸した。

医師「それじゃあ行こうか」

俺は移動してそこから縫い始めた。

少し痛んだがそこまでじゃなかった。

また戻るとリサがいなかった。

そのままそこから飛び出しどこに行ったのかと探していると自動販売機の隣で座り込んでいるリサがいた。

勇也「リサ。何してんだよ？」

リサ「ごめん。ちよつとトイレに行つて喉乾いたから買おうと思つたら足が動かなくなつちやつて」

確かに病院内は男ばかりでその恐怖で動けなくなつたんだろう。

勇也「そっか。それじゃあしようがないな」

リサ「うわ！ち、ちよつと勇也。下ろしてー」

勇也「うるさい！動けないのに」

リサ「うう〜」

リサはお姫様抱っこされて恥ずかしいのか顔を真っ赤にしていた。恥ずかしいのは俺も同じなんだけど：

そのままお金を払い俺たちは病院から出た。

出た時にリサは降ろしたけど：

勇也「どう？だいぶ楽になった？」

リサ「うん。そうだね。ありがとう」

リサはだいぶ楽そうだけど足元が定まっていない。

勇也「それじゃあ帰るか」

リサ「え!?!遊ばないの？」

勇也「リサがこんな状態じゃ無理だよ。遊びたいなら明日な」

リサは少し膨れているが納得して俺たちはホテルに帰った。

ホテルの部屋

リサ「ほんとにいいの勇也？」

勇也「ん、何が？」

リサ「せっかくこっちに來たのにホテルでゆっくりしてるんだよ」

勇也「気にすんな。俺はこうやつてリサとゆっくりしてても楽しいから。こっちに來てもどこにいても楽しいんだよ」

リサ「バカ！バーカ」

なんで罵られてるだろう。

けどリサの顔色も何より元気も出たみたいで良かった。そこからは2人で話していて気がつくともう夜になっていた。リサ「もう夜だね。夜は外に行かない？」前の件もあるし行きたいっていうリサの気持ちを尊重したい。勇也「うーん俺から離れないならいいよ」リサ「りよーかい☆それじゃあ行こ！」俺とリサはそこから出て行き適当にぶらついていたので見つけた定食屋があったので入ることにした。

定食屋

中は意外にも広くかなり盛り上がっていた。

勇也「リサ大丈夫か？」

リサ「うん。なんとか」

勇也「厳しくなったら言えよ。いつでも出るから」

店員「ご注文はお決まりですか？」

リサは返事をせず和食定食を頼んでいた。

勇也「和食定食を2つで」

店員「かしこまりましたー」

店員は素晴らしい裏に行った。

勇也「リサやっぱり厳しいんじゃない」

リサ「あはは…ごめん。厳しいかも。けど食べて帰るよ。美味しそうだもん」

かなり無理をしているのがわかった。

何よりあの時の俺と同じ感じがして放っては置けなかった。

親や同級生からのいじめに対して怯えていた毎日に…

勇也「そっか。ならリサの意見を尊重するよ。けど絶対に無理はするなよ」

リサ「うん。わかってる」

そこから店員が持ってきてきてリサと俺は食べ終わり店を出た。

出てリサを見るとかなり無理をしていたみたいだった。
足元はフラフラで体を支えるので精一杯だった。

勇也「リサ乗って」

俺はリサをおんぶしようとした。

リサ「けど…」

勇也「けども何もないよ。早く乗って」

リサは乗って俺の背中に顔を埋めた。

そのままリサは眠ってしまったようでリサの静かな寝息が俺の背中に当たっていた。

リサ「勇也く。ありがとう」

寝言でまでお礼を言われるとかなり恥ずかしい。

勇也「無理はしないでくれよ」

俺はそう呟きホテルに帰った

京都編 V o l 4

ホテルに帰りリサをベッドに置いて布団をかけて俺は部屋に備え付けのソファ―に座り電話をかけた。

勇也「もしもし。今大丈夫？」

千聖「ええ、大丈夫よ。どうしたの？」

勇也「千聖はトラウマとかになったことある？」

千聖「どうしたのよ急に？けどそうね。トラウマはないけれどスランプならあるわよ」

勇也「うーん。どんなことで？教えてほしい。特にどうやって切り抜けたのか」

千聖「私の場合は花音に相談したわ。そしたらパスパレのみんなに話して見たら？って言われたのよ。そして話してみると仕事仲間としてしか見れなかった私に対して様々な意見をくれたわ。その時に思ったのよ。1人で抱え込むのは間違いだってね」

勇也「なるほどねー。ありがと。助かったよ」

千聖「ええ、それじゃあおやすみなさい」

素晴らしい千聖との電話を切った。

そこから俺はリサのことを R o s e l i a のみんなに話そうか悩んだ。

そのままベッドには戻らず俺はそこで眠った。

次の日（残り3日）

その日はリサの方が起きるのが早かった。
が：俺がなかなか起きれない。

正確には目は覚めているが立ち上がれない。

リサ「どうしたの？勇也」

勇也「いやなんでもない」

俺は立ち上がろうと全身に力を入れると刺された部分が痛む。

気になり見てみるとそこから血が染み出していた。

勇也「今日の遊び無しでいいか？ちよつと眠いや」

リサ「う、うん。大丈夫だけど…」

勇也「少し寝るよ」

少し血が出ているがそれ以上出ている感じはしない。
俺は寝たら治るだろうと思いき寝た。

リサ side

勇也は朝起きてからなんだか変だった。

ソファーから立ち上がろうとすると痛むような顔をしていたけど
勇也のことだから何も言ってくれない。

ならアタシにできることってなんなんだろう？

リサ「はあ…」

考えてもでてこない。

勇也の世話にしかなくていい気がする。

END

俺が目覚ますともう昼を回っていた。

リサはベッドの上で座ってなんだか負のオーラが出ている。

俺は痛みも引いていたので立ち上がりパーカーを羽織ってリサに
近づいた。

後ろからいきなり背中を叩いた。

リサ「うひあぁ！」

勇也「あははは、悪い悪い。なんだかあまりにも元気なかったから
さ」

リサ「むー（勇也にはわかるのかなー？）あはははそんなことない
んだけどなー」

勇也「それじゃあ行こっか」

リサ「??え？どこに」

勇也「さっきはあ言ったけど遊びに行くぞ」

リサ「えっ？えー」

勇也はすぐに着替え終わりあたしも着替えをした。

俺とリサはそこから出かけて外に出ているんなどころを回った。

リサは気分が良くないのにその場は楽しそうにしている。

勇也「リサ大丈夫なのか？」

リサ「だーかーらー大丈夫だつてば。早く行こー！」

そこからも次々に店を回った。

リサは今までの分を取り返すように遊びまわった。

気がつくと辺りは暗くなりリサは途中から話はしなかったがそれでも俺を連れ回した。

勇也「それじゃあ帰るか。リサ乗って」

リサ「え!？」

勇也「かなり無理してるんだろ。最後ぐらいゆっくりしてて。顔は伏せてていいから」

リサ「うん。お願い」

リサはそこで乗って後ろで俺の背中に顔を伏せた。

リサ「ありがとね勇也」

勇也「気にすんな」

俺たちはそのままホテルに帰り眠った。

残り2日

俺たちは起きて朝から何をするか話していた。

勇也「今日はお土産買って明日に帰ろっか」

リサ「そうだね：そうしよっか」

勇也「それにあの人にもお礼言に行かないとね」

リサ「わかってるよ」

俺たちは用意してホテルを出た。

リサ「それじゃあはじめは挨拶に行こっか」

勇也「そうするか」

俺たちは○沼さんの家に向かった。

すでにアポはとつてあるので向かうとすでに待っていてくれた。

○沼「ようきたな。明日で帰るんか？」

勇也「はい。本当にありがとうございました」

○沼「気にせんでええつて。それよりリサちゃん大丈夫か？来てからずっと顔色悪いで」

リサの方を見てみると今まで程ではないが顔色が悪い。

勇也「すいません。空いてる部屋とかがつてあります？」

○沼「あるで。とりあえずそこで休んどき」

部屋を案内されてリサはそこで横になっていた。

俺と○沼さんは部屋から出てリビングに戻った。

○沼「それでリサちゃんはやっぱり…」

勇也「ええ、男を見るとトラウマになるみたいです。なぜか僕は大丈夫なんですけど」

○沼「それはそやろな。まあそれより明日で帰るんやったら向こうの住所教えてや。これ送つとくから」

そういう後ろの幕を外して出てきたのはすごい数の食材やらお土産だった。

勇也「こ、これはもらえませんか」

○沼「ええつて。気にせんといて。あたしがあんたを気に入ってるから」

俺はしばらく考えてもらうことにした。

○沼「それじゃありサちゃん迎えに行こか」

リサがいる部屋に行くとりサはベッドに横になって眠っていた。少し長かったせいもあり眠っていた。

リサの寝顔はずっと見ている飽きないと思った。

○沼「もしかしてリサちゃんのこと好きなん？」

勇也「好き？僕がリサをですか。正直わかりません。今まで恋沙汰とかに関して無縁だったんで」

○沼「そうかー」

俺はリサをおぶって帰ることにした。

勇也「本当にありがとうございました」

○沼「気にせんでええつて。それじゃあな」

勇也「はい」

俺はそこで家を後にしてホテルに帰った。

お土産を買うつもりがもらったのもうそのままホテルに帰り
ゆっくりしようと思った。

帰り道

リサを背負うのはこっちにきてから多くなっただが、まだ慣れない。
足を支えるためとはいえ足を掴むのも未だに抵抗がある。

リサ「う…ん。ゆう…や」

勇也「起きたか？今ホテルに帰ってるから」

リサ「うん。ごめんね。あたしがこんななせいで」

勇也「はあ。それいうなら怒るよ。リサは気にしなくていい。俺が
「悪くないよ」へ？」

リサ「勇也はあたしを助けてくれたんだもん。なのに自分自身を責
めるなんておかしいよ」

勇也「こんな話ちよつと前にもしたな」

リサ「ふふ、そうだね」

俺たちはいつもより機嫌よくホテルまでの道のりを帰った。

ホテル

リサ「そういうえばお土産はどうしたの？」

勇也「その点は問題ないよ。向こうに届くようにしているよ」

リサ「そつかく。それじゃあ勇也は寝ててもいいよ」

勇也「ん？なんで」

リサ「だって勇也さつきからあくびばかりしてるよ」

確かにしてたけどまさか見られているとは思わなかった。

勇也「そうだな。少し眠るよ」

俺はベッドに行こうとすると手を掴まれてこけそうになった。

勇也「な、何？どうした」

リサ「ここで寝て。お願い」

そういうリサは自分の膝を叩いている。

しかも上目遣いで来られると断るところがちが悪く感じる。

勇也「わかったよ」

俺はリサの横に座りそのまま倒れた。

もちろん勢いは緩めたが…

リサ「どう？」

顔を真っ赤にして聞いてくる。

勇也「ああ、今まで使ってきたものの中で一番いいよ」

リサ「そっか。よかった」

俺はそこから時間もかかることなく眠っていた。

リサ side

勇也を誘った時はすごい恥ずかしかった。

あたしは勇也が好きなんだ。

勇也はあの時も昔の時もアタシがどれだけ立ち上がれなくなつて

もそれを拒絶したりしないので受け止めてくれる。

その優しさに惹かれたんだと思う。

けれど勇也と付き合いたいとは思っちゃいけない。

アタシは勇也を殺しかけたし、今も勇也に迷惑ばかりかけている。

だからアタシの頬を伝っている熱さは別れの涙なんだと思う。

リサ「勇也、ありがとう。大好きだよ」

アタシは膝の上で寝ている勇也にキスをしてアタシもそのまま眠った。

京都編 V O 1 5

俺は結局起きることなくそのまま寝続けた。

次の日になり俺は起きないせいもありかなり早く目が覚めた。けれど起きて俺の頭の下にリサの膝はなかった。

俺は机の上に一枚の紙を見つけた。

「少し散歩してくるよ。心配しないで」

短く書かれたその文字は何かを決意した感じだった。

何より見たときにその紙の周りに濡れた跡があった。

俺はすぐにケータイを起動してリサの位置を探った。

勇也「頼む。充電持ってくれよ」

そのままなんの用意もせずに俺は飛び出した。

そのまま行くとリサは海岸で倒れていた。

勇也「リサ！起きろ！」

手首を触り確認してみると脈はあったし見た感じ大きな外傷はなかった。

そのまま何回か揺するとリサは目を覚ました。

リサ「ゆ…うや？」

勇也「起きたか」

リサ「どうしてここに？」

俺はその言葉にいろんな感情を持ち言葉より先に手が出てしまった。

「パァーン！」

リサ「ゆう…や」

勇也「頼む…もうこんなことしないでくれ。心配なんだよ」

俺は泣きながら言っていた。

リサ「なんで!?なんで勇也はあたしを助けてくれるの!あたしはみんなに合わせる顔がないんだよ!こっちに残るつもりだったのに」

勇也「ふぎけんな！リサが人前に出れなくなったからか!?そんなことで言つてんならぶつ飛ばすぞ！それは俺だけじゃ無理でもみんなを頼れよ。リサの周りには頼りになるやつがいっぱいいるだろうが！」

そこからはしばらく沈黙が続きリサは口を開いた。

リサ「っ！ごめん：あたしが間違つてたよ」

勇也「いや、俺の方こそごめん。叩いたりリサにキレたりして」

リサ「ううん。ありがとう。少し気が楽になったよ。これから帰つてみんなに相談してみるよ」

勇也「うん。そうした方がいいよ」

リサ「帰ろっか」

リサは立ち上がろうとしても立ち上がれなかった。

勇也「ほら乗つて。首に手を回るだけでいいから」

リサ「うんありがと」

リサを乗せて俺はホテルに荷物を取りに帰った。

勇也の背中つて大きいな。

それに今あたしの心臓の音がすごい。

勇也には聞こえてないよね。

あたしは勇也を好きになっちゃいけないのに気持ちが止められない。
い。

こんな気持ちになるなんて思いもしなかった。

そのまま歩いていきホテルの荷物をとつて俺たちはホテルを出た。
出るとそこには○沼さんがいた。

勇也「ど、どうしたんですか？」

○沼「ああ、今日で帰るんやろ。新幹線の中で食べてや」

渡された袋の中にはたくさんの食べ物が入っていた。

勇也「いや、でも」

○沼「ええから、また機会があったらよろしくな」

勇也「はい。こちらこそお願いします」

俺たちはお礼を言つて駅に向かって新幹線に乗り込んだ。

新幹線

リサと隣で座っているが朝のこともありなかなか話しづらい。

リサ「そういえばさ勇也。あの時も今朝もなんであたしの場所わかったの？」

勇也「怒らないなら教えるよ」

リサ「怒らないよ」

勇也「なら種明かし。リサに初日に渡したネックレスの中に小型GPSが仕込んである。もう電池切れてただのネックレスだけだな」

リサ「え!?!これってそんな機能あったの?だったら高かったんじゃない」

そこは聞きたくない。

自分でもちよつとね。

あとが怖いんで、あいつに飯とか想像したくない。

勇也「さーてさつきももらったものでも食べようかな」

リサ「あからさまに話をそらしたね。まあいいや」

そこから食べてリサは眠たくなつたのか目がウトウトしてる。

勇也「少し寝てていいよ」

リサ「うん。どこにもいかないでね」

勇也「いかないよ」

リサは安心してくれたのか横で眠り始めた。

さて考えますか。

みんなは必ず一回は俺を責めるしその点に関しては何も言い返せないから構わないけど問題は今後のRoseliaなんだよな。

ライブする上で必ず男はいる。

そこをどうするかなんだよな。

何か大きなイベントでもあればいいんだけど…

そのままリサは起きることなくみんなのところについた。

なんとか家に帰った。

自宅

勇也「ただいまー」

つぐみ「おかえりなさい。あれリサさん寝てるんですか？」

勇也「ああ、その件で話したいことがあるからAfter glow
Wのメンバー全員呼べる？」

つぐみ「ちよつと待つてくださいいね。連絡してみます」

そこからリサを部屋に連れていき俺はリビングに向かった。

リビング

つぐみ「みんな来れるみたいです」

勇也「そつかありがと。みんな来てから話すよ」

そこかしばらしくしないうちにAfter glowのメンバー
が揃い今家には紗夜、姉さんAfter glowというメンツに
なった。

紗夜「それでどうしたんですか？」

勇也「頼む。助けてくれ」

俺はまず頭を下げた。

ひまり「ちよつと勇也さん!?!どうしたんですか？」

友希那「なんだかわからないわ。一から説明してちようだい」

勇也「そうだな。そこから話すよ。まずはリサがここにいない理由
だな。というかそれを話したいんだよ」

蘭「一体何があつたんですか？」

勇也「端的に言うとりサは今男に会うといつもの状態でいられない。
それも俺のせいなんだよ」

モカ「どーいうことですかー」

勇也「向こうで誘拐にあつてそこから拒絶反応が出るみたいなん
だ」

紗夜「あなたは一体何をしてたんですか!？」

紗夜はそのまま俺を掴み壁に叩きつけた。

つぐみ「さ、紗夜さん落ち着いてください」

紗夜「あなたがついていながら一体何をしてたんですか？」

紗夜の剣幕は収まることなく俺に当たって来た。

実際俺も何もできなかつたからこんなことをされても文句も言えない。

勇也「ごめん……」

紗夜「あなたが……すっかりしていたらこんなことにはならなかつたんですよ！」

その頃

あたしが目を覚ますと見たことのある天井だった。

リサ「家に着いたんだ」

ベッドから降りると下からすごい声が出た。

この声は紗夜かな。

気になってリビングに降りていった。

勇也「その通りだ。言い返す言葉もない」

紗夜「っ！ふざけないでください」

紗夜に1発殴られると思った。

リサ「紗夜待って！」

そこで手は止まり俺は殴られることはなかった。

勇也「リサ……」

紗夜「今井さん」

リサ「待ってなんでこんなことになってるの!? 勇也もう話したの？」

勇也「全部話したんだよ。向こうであつたこと」

リサ「だったらなんでこんな状況なの!? 勇也は何も悪くないのに」

友希那「どういうこと?」

リサ「それを話すから紗夜も一旦落ち着いて」

紗夜「はい。勇也さんすいませんでした」

勇也「ううん気にしないで。メンバーを思っでの行動だっけ知ってるから」

リサ「勇也から大まかなことは聞いてると思うけどどこまで聞いたの？」

蘭「リサさんが誘拐されてそのせいで拒否反応が出るってことまでですかね」

リサ「もしかしてみんなアタシが何かされたと思ってる？」

ひまり「え？何もされてないんですか？」

リサ「いやされるところで勇也が助けてくれたんだよ。正直にいうともう諦めてたから。相手は声だけでも10人くらいいたから」

紗夜「それじゃあ今井さんは何もされてなくて勇也さんに助けてもらったんですか？」

リサ「うん。勇也が来てくれてあたしを助けてくれたんだよ」
すると紗夜は俺の前に来て頭を下げた。

紗夜「本当にごめんなさい。勘違いであんなことをしてしまっ

勇也「ちよ、ちよつと待って気にしなくていいから。ほんとに」

紗夜「ですが…」

勇也「ほんとに大丈夫。それよりみんなに頼みたいことがあるんだよ。な、リサ」

リサ「うん。実はみんなの意見も欲しいんだ。早く治したいから」

巴「そんなの当たり前じゃないですか！」

つぐみ「うん。私たちにも手伝わせてください」

モカ「モカちゃんも本気出しちゃうよ」

ひまり「私たちもね、蘭」

蘭「うん。リサさんには助けてもらってるし当たり前だよ」

友希那「私たちはもちろんよ」

紗夜「ええもちろんです」

勇也「な、いった通りだろ。みんなは協力してくれるよ」

リサ「うん。そうだね」

勇也「なんか大きいイベントでもあればなー。俺と一緒にけるやつ」

全員「あ”!”」

勇也「ん? どうした?’」

リサ「そうだよ! とっておきがあるんだよ!”」

紗夜「修学旅行で花咲川と羽丘での合同修学旅行とライブです」

勇也「そんなのがあるのか。確かにそれならなんとかなりそうだな」

ここから俺を含む2年全員での練習の幕が上がった

修学旅行編 V O I 1

俺は修学旅行の話詳しく聞きその日は解散となった。
飯を食べて風呂に入ると自宅に帰って来た感じがする。
風呂に入り部屋に帰るとリサがいた。

勇也「なにしてんの？」

リサ「うん。ちよつとね」

月明かりに照らされているリサはなんとも言えなかった。

リサ「今日だけでいいから一緒に寝てくれない？」

こうなっても何にも言えない。

リサはいいと言うけど正直責任を感じないわけがない。

勇也「わかったよ」

俺がベッドに入るとリサも入って来た。

リサ「勇也あのパーカーくれない？」

勇也「パーカーって向こうでずっと来てたやつ？」

リサ「そうそれ」

勇也「いいけどリサに似合うのかなー？」

リサがパーカー着てる姿なんて全くと言っていいほど想像できない。
い。

リサ「それでもいいの！」

勇也「ならいいけど…」

リサ「ありがと☆」

俺はその言葉を聞き眠った。

次の日

いつも通り学校に行きリサを家に連れて帰った後に俺は事務所で
一仕事を終えて帰っていた。

かなり時間が経っていたので俺は近道をするために普段絶対に通
らない道を歩いていった。

しばらくして一本道に入ると後ろから襲われて抵抗することもで
きずに俺は抵抗もできずにその場に倒れた。

??? 「やつと会えた」

そのまま気がつくくと椅子に座らされては後ろにくくられ足は椅子にくくりつけられていた。

勇也 「ふわあくここはどこだ」

??? 「やつと会えた」

そう言い出て来たのは長く赤い髪右側だけお下げそれに豊満な胸に瑠璃色の目多分街ですれ違うと見直すぐらいの女の人だった。

勇也 「俺と会ったことあるの？つてか誰？」

??? 「私を知っていないのはちよつとショックですね。けど名前は

『沢木興花』ですよ」

沢木と聞いて俺は全身の血の気がひいた。

勇也 「なにをするつもりだ」

すると手と足の拘束を解いて俺の前に来た。

興花 「まず兄が大変なことを失礼しました」

頭を下げられて俺は頭の回転に対して目の前のことが追いつかなかった。

勇也 「えつと兄っていうのはあいつのことでもいいのかな？」

興花 「はい。兄の沢木興佐です」

勇也 「気にしないでつて言つても聞いてくれないと思うからなんでこんなことをしたの？」

興花 「兄がしたことを聞いてあなたに謝らないといけないと思つてこんなことをしました」

勇也 「その兄貴は？」

興花 「今は刑務所の中にいます。昔から少しおかしかつたんですけど最近では特にひどくなつて薬に無免許で捕まりました」

よく見てみるとこの子体の所々に痣がある。

勇也 「悲しくなつた？」

興花 「いいえ。私は兄から軽いいじめを受けてたので」

勇也 「もしかしてその痣も？」

興花「やっぱり気になりました？兄につけられたんです
少し声が震えていた。」

俺も同じ境遇にいたからよくわかる。

気がつく俺は引き寄せて抱いていた。

勇也「辛かったな。もういいから。なにも責任も感じなくていい」

興花「う、うわああああああん」

そのまましばらく泣いていた。

しばらくして泣き止むと恥ずかしかったのかすぐに離れた。

興花「すいません。泣いてしまつて」

勇也「ううん気にしなくていいよ。それじゃあ」

興花「待ってください！ひとつだけお願いがあります」

勇也「うん？」

興花「私をあなたのマネージャーにしてくれませんか？」

勇也「それは俺がテレビに出てそのマネージャーってこと？」

興花「そうです」

確かにしてくれるのは嬉しいけどこれは俺一人じゃ決められない
よな。

勇也「返事はまた今度でもいい？俺の独断はダメだからさ」

興花「はい。もちろんです」

俺は連絡先を交換した。

勇也「ゲツ！」

ケータイにすごい数の通知が来ている。

姉さんとリサからだが：

興花「どうしたんですか？」

勇也「いやなんでも。また今度連絡するわー」

俺は大急ぎで帰った。

自宅

家に入ると玄関で鬼のプレッシャーを出している姉さんとリサが

いた。

友希那「それでどうしてこんなにも遅くなったのかしら？」

勇也「いや、その、あのちよつと寄り道を」

リサ「へーそれじゃあ勇也はあたしたちの連絡を無視してまで寄り道して来たんだ」

怖いよこの2人。

勇也「すいませんでした。もうしません」

友希那「わかればいいのよ」

リサ「早くご飯食べよ！」

俺たちはリビングに行き飯を食べ始めた。

勇也「それで修学旅行での演奏は誰がするの？」

リサ「簡単に言うと花咲川と羽丘の2年でバンドやつてるメンバーだよ」

つてことは紗夜や千聖、彩、花音も来るのか。

なかなか大変そうなメンバーになりそうだ。

勇也「修学旅行まであとどれぐらいだっけ？」

友希那「1ヶ月ちよつとね。カバー曲をすればなんとかかなると思うわ。

それに今回はいつものライブとは違うしね」

勇也「そうだな。後で全員に連絡取ってみるよ。明日羽丘に来てもらうようにする」

リサ「りょーかい」

食べ終わり風呂に入ってそのまま眠った。

次の日

学校ではリサはかなり無理をしているのがわかった。

けれど本人はなんとかなると俺に言って我慢していた。

そのまま放課後になり教師に空き教室を一つ借りてみんなの到着を待った。

しばらくすると全員が揃った。

勇也「さてみんな揃ったみたいだし始めよっか」

紗夜「そうですね。まずは何の曲をするかですよ」

勇也「それはとりあえずはカバー曲でいいと思う。なにかクラスの子たちからリクエストがあったらそれを出来るだけやりたいと思うけど大丈夫かな？」

千聖「そうね。言われた時にもよるけれど時間があれば大丈夫だと思おうわ」

そこで教室の扉がなった。

勇也「はい」

そこに来たのは何人かの女子だった。

クラスメイト「あのバンドやるって聞いたんですけど…」

薫「ああ、やるとも。楽しみにしておいてくれたまえ」

多分それだけを言いに来たんじゃないと思うんだけどな…

リサ「どうしたの？」

クラスメイト「あのできたらでいいんですけどやって欲しい曲があつて」

勇也「りよーかい。紙にリストアップしてくれる？」

そこで紙を渡すと何曲か書き出した。

そこにはアニソンばかり書いてあつた。

catch the moment、seven doors、シルエツトが書いてあつた。

勇也「ありがと。考えてみるよ」

クラスメイト「はい！失礼します」

そういうその子たちは出て行った。

日菜「ねーねーこの曲って何の曲なの？」

勇也「こういう時は教えるより一回聞いてもらった方がマシか」

俺はこの三曲を流した。

花音「やってみよっか」

彩「そうだね。リクエストされたんだしやれるだけやってみようよ」

勇也「そうするか」

そこから話が進みその日のうちにある程度セットリストが決
まった

修学旅行編 V O 1 2

やる曲が決まり俺たちは時間も経っていたのでそこで終わりにして帰った。

家に帰りやることをして全員が寝た頃に俺はパソコンを開いた。イヤホンをケータイにつなぎ一応のセットリスト分聞きスコアを作り始めた。

一人一人アレンジを加えてやっているので時間が足りない。

夜中の3時を超えてやつと半分が終わった。

勇也「やつと半分か。まだまだかかりそうだな」

そこからも作業を続けなんとか終わって窓を見ると朝日が差ししていた。

俺はリビングに行くとすでにリサは起きていた。

リサ「おはよ勇也」

勇也「おはよリサ」

リサ「勇也昨日寝たの？すごい顔してるよ」

勇也「も、もちろん寝たよ」

リサ「はあまた夜更かししたんだね。理由は聞かないけどあんまり無理しちやダメだよ」

勇也「わかってるよ。それじゃあ作るから」

リサ「今日はあたしが作るからゆっくりしてて」
有無を言わさない剣幕で言われて俺は納得した。

リサ「勇也はすぐに無理をするんだから」

俺は寝ていて聞こえなかった。

そこから俺は目を覚まして学校に向かった。

カバンの中には作ったスコアも入っているが…

学校では何事もなく放課後になった。

放課後になりまた空き教室に全員が揃った。

勇也「はいはい揃ったから始めようか」

麻弥「何すればいいんっすかね？」

勇也「あーそうだった。これ1人ずつ」

「素晴らしい作ったスコアを1人ずつに渡した。」

勇也「これはあくまで暫定だから全然アレンジしてくれてもいいよ」

花音「ちよつと待つて！これ私と麻弥ちゃんであレンジ部分が違うんだけど…」

勇也「とりあえず一人一人違うよ。前に聞いた音からかんがえてみたんだけど…変えてくれてもいいよ」

全員「!!!」

彩「私たちボーカル組には歌詞の部分書いて強調するところも書いてあるし」

千聖「勇也くん一つ聞いていいかしら？あなた昨日正確には今日にかけて寝たのかしら？」

勇也「えーとそれは」

紗夜「寝てないんですね」

「そこで全員がアイコンタクトしていた。」

「そこから全員が俺をpushして机のところに行かせた。」

友希那「とりあえずそこで寝てちょうだい。あなたを先に帰らせる」と1人で練習してそうなもの」

勇也「はい」

「俺は机に伏せているとすぐに眠った。」

紗夜「このスコア一人一人の個性を表すようなアレンジがされていますね」

リサ「ほんとだね。ここまですごいのを作ってくるなんて思いもしなかったよ」

千聖「そのためにも練習をしましょうか」

日菜「そうだね。ビビッとやっちゃおうよ」

「そこから個人練習を始めた。」

個人練習の終わり頃に目が覚めた。

勇也「んん。ああー」

俺は体を伸ばして起きた。

個人練習をしていたようで気がついた日菜、リサ、麻弥はこっちにきた。

日菜「あー勇也くん起きたんだー」

日菜の容赦ない大きい声で起きたばかりの頭には響く。

麻弥「ダメですよ日菜さん。起きたばかりで頭に響くんつすから」

勇也「あはは気にしなくていいよ。言っても多分わかってないから」

リサ「それより勇也このフレーズどうやって引くの」

そこで見せてきたのは俺がアレンジしたところだった。

勇也「そこはこうやって指を押さえて弾いてみて」
教えると弾けるようになっていた。

勇也「うん。とりあえず一通り音を合わせてみようか。俺はその音を聞いてどの楽器をするか決めるよ」

友希那「わかったわ。それじゃあ行くわよ」

そこから三曲続けて演奏をして俺のやる楽器が決まった。

勇也「うん。一曲目のcatch the momentは俺キーボードに行くよ。」

二曲目のseven doorsはドラム、三曲目のシルエットはベースかな。

とりあえずはそれで行ってみるよ」

そこからは少し曲を合わせて帰る準備をした。

帰る準備を終え俺たちは教室を閉めて帰って行った。

帰り道

勇也「そうだ！今日暇な人俺の家に来てよ。前に届いたマグロ食べるんだけど多くて」

そこで全員が来ることになった。

そこで俺は別のメンバーにも声をかけた。

今いるバンドメンバー全てとAfter glow、ハロハピ、ピパ全てのバンドメンバーが家に来た。

自宅

勇也「はいはいーできるまでゆっくりしてて」

沙綾「手伝いますよ!」

勇也「うーん。けどなく」

つぐみ「大丈夫です。邪魔はしませんから」

勇也「あー違う違う。邪魔とかじゃなくて来てもらったのに手伝ってもらうのは気が引ける。だから…さ」

つぐみ「気にしないでください! 私たちがやりたくてやってるだけですから」

勇也「それじゃあ手伝ってもらおうよ。よろしくね」

そこから捌いて料理を始めた。

薫「おや、お寿司を作るのかな?」

勇也「そうだけどどうかした?」

薫「私は生魚はダメでね」

たしかに今の時代生魚は食べられない人がちらほら聞く。

勇也「それならこういうのはどう?」

俺はマグロを少し串に刺して藁で炙ってそれを寿司にした。

薫に渡しても少し抵抗があるみたいだ。

そこに千聖がやってきた。

千聖「早く食べてみたらどうかしらかおちゃん」

薫「ハハハ、誰だいそのかおちゃんというのは? いただくよ」

薫は食べても何も言わなかった。

薫「これをたくさん作ってくれるかい?」

勇也「はいはいわかったから座っててくれ」

そのまま調理を進めかなりの量を作った。

量だけなら200貫を超えている。

勇也「はいはいいくできたよ」

モカ「待ってました〜」

みんなのところに持って行った。

勇也「沙綾もつぐみもイヴも燐子も美咲もありがとな」

美咲「気にしないでください。楽しかったですから」

イヴ「そうです！気にしないでほしいです」

勇也「ありがと。みんなは先に食べてて」

沙綾「わかりました」

みんなも席に着き食べ始めた。

俺は使ったものを先に片付けしていた。

こういう雰囲気は好きだけど怖い。

いつ壊れるかもわからないから。

そんなことを考えながら片付けしているとリサがやってきた。

リサ「勇也こっち向いて」

勇也「ん？なんだ…よ！」

その瞬間に寿司を入れた。

リサ「さつきから全然食べてないでしょ。ちよつとは食べなよ」

勇也「わかったよ。けどいきなり入れるのはやめてくれ。びっくり

する」

リサ「あはは〜ごめんごめん」

そこにいろんな人がきた。

ひまり「勇也さん。食べてください」

ひまりにも食べさせられその後も止まることはなかった。

勇也「ス、ストップ。そろそろやばいから」

結局かなりの数食べたと思う。

そこにころがやってきた。

ころ「まだまだ食べられるわ。何かないかしら？」

勇也「わかった。ちよつとまってて」

そこからすぐにマグロ丼を作りころに渡した。

ころ「すっごい美味しそうね！いただくわ」

ころは席に戻って食べ始めた。

沙綾「前から気になってたんですけどなんで勇也さんってそんなに

も料理できるんですか？」

俺は説明の仕方がわからず口ごもった。

勇也「ちよつと暗い話になつてもいいならついてきて」

そこでついてきたのは蘭、沙綾、ひまり、つぐみ、千聖、麻弥それぞれの内容を知つてる姉さんとリサだった。

自室

勇也「俺が料理できるようになつたのはこれが原因なんだよ」

俺は服を脱いだ。

ひまり「ちよつと勇也さん！」

蘭「待つてひまり。これって」

千聖「ええ、傷だらけね」

勇也「みんないや、千聖や麻弥は知つてるか。昔いじめにあつたのを」

麻弥「はい。けどどういう関係があるんっすか？」

勇也「親からの強制だよ。家事もやらされてそのかわり失敗したり、自分たちの気に入らない味付けをしたら殴られたり切り傷がつくことが多々あつたから上手くやらなきゃって思つてたんだよ。

もうそろそろこのあざも消えると思うんだけどね」

蘭「そんな…そんなことつておかしいですよ！」

ひまり「蘭？」

蘭「そんなの親のすることじゃない」

蘭はまるで自分のことのように泣いていた。

勇也「ありがとな蘭。俺のためなんか涙流してくれて」

沙綾「勇也さんは今は楽しいんですか？」

勇也「ああ、楽しいよ」

沙綾「ならこれからも楽しいこといっぱいしましょうよ」

勇也「ハハハその時は頼むよ」

沙綾「はい！」

勇也「さあ早く帰ろつか。みんなもそろそろ怪しむし」

みんなは部屋から出て行った。

蘭はまだ部屋にいるが：

部屋には俺と蘭の2人きりになった。

勇也「蘭はもう少しゆっくりしてて」

俺は立ち上がり部屋から出ようとすると手を引っ張られそのままベッドに倒された。

勇也「ん!? 蘭」

蘭「大丈夫ですよ。あたしは何処かに行ったりしませんから」

勇也「ん…」

そのままキスされた。

蘭「ん…ん…んちゅ」

口を離すと糸が2人の口から伸びていた。

勇也「蘭どうしたの？」

蘭「!!ごめんなさい」

そのまま起き上がりベッドの端に行った。

勇也「蘭…どうしたんだよ」

蘭「ごめんなさい。嫌わなくてください」

勇也「俺が蘭を嫌うことなんて天地がひっくり返ってもありえないよ。だから気にしないで」

俺は蘭を抱いてリビングに向かった。

蘭「ちよつと勇也さん」

勇也「どうせほつといたら行かないだろ」

リビングに入る手前で蘭を下ろした。

蘭「ありがとうございます。それにすいませんでした」

勇也「気にしなくていいから」

俺は実際びっくりしてまだ頭の回転が追いついていない。

リビングに戻るとすでに大方終わったようでもみんなゆっくりしていた。

日菜「勇也くん今日ここに泊まってもいい？」

勇也「いいけど親には連絡しておいてくれよ」

こころ「すっごいいい考えね！私も泊まるわ」

そのまま全員が泊まることになりまだまだ夜は長くなりそうだ。

修学旅行編 V O 1 3

結局全員が泊まることとなりリビングに雑魚寝をした。

俺は寝れずに屋上に向かった。

ちなみにこの家は3階建ての屋上がある。

屋上に行くとリサがいた。

勇也「リサなにしてんの？」

リサ「勇也：ちよつと眠れなくてね」

勇也「嘘ついてんな」

リサ「な、なんでそう思うの？」

勇也「分からん。けどリサが嘘ついてる時はなんとなくわかる。ずつと一緒に居たんだぞ。分からないわけがないだろ」

リサ「はあーやっぱりわかるか。あたしは不安なんだ。もしこのままずつと治らなかつたらどうしよう」

勇也「治るよ。いや必ず方法を見つけ出す。どんな手段でも」

リサ「頼りにしてるよ。けど無理はしないでね」

リサは柵にもたれかかり俺の方を向いてそういった。

月明かりに照らされ俺はなんだか胸が熱くなってドキドキした。

勇也「???」

リサ「風邪引いたらダメだし部屋に戻ろっか」

勇也「そうだな」

2人でリビングに戻り眠った。

次の日

起きるとまだ誰も起きてなかった。

朝飯を作っていると紗夜が起きた。

紗夜「おはようございます。手伝いますよ」

勇也「いいよ。先に顔を洗ってきてくれ」

そこから次々に起き出した。

それでも日菜と香澄、おたえ、あこ、モカは起きなかった。

勇也「それじゃあ朝飯を食べたらみんな帰るんだろ？」

巴「そうですね。昨日はありがとうございました」

勇也「こつちこそ助かったよ。半分ぐらいになったから後はなんとか出来る。保存なりなんなり出来る」

モカ「ううゝ蘭ひどいー」

リサ「どうしたのモカ」

モカ「蘭に布団を剥ぎ取られました」

勇也「そつか蘭助かったよ。あのままじゃずつと寝てそうだったからね」

蘭「い、いえ。気にしないでください」

素晴らしい蘭はモカを連れて洗面所に向かつて行つた。

その間に朝飯を作り終わり食べようとする全員が席についていた。

いつの間にか起きたんだろう…

そのまま飯を食べてしばらくして全員が帰つた。

さつきまで騒がしかった分急に静かになるときみしい。

今日は自宅でゴロゴロしようと思つてケータイを開くと用事を思い出し足を動かした。

行き先は事務所だ。

そのまま社長室に向かい入つた。

勇也「すいません急に」

社長「いや気にしなくていいよ。それでどうしたんだね？」

勇也「1人俺にもマネージャをつけてもいいですか？もう候補はいます」

社長「構わないが一応連れてきてくれるかな？」

勇也「はい。あとで連れてきます」

そこで俺は部屋から出て連絡した。

しばらくして興花はやってきた。

相変わらず恐ろしいぐらいのスタイルをしている。

勇也「ごめんな。急にきてもらって」

興花「いえ大丈夫です」

勇也「それじゃあ行こうか」

そのままもう一度社長のところに向かった。

勇也「失礼します。連れてきました」

そこで興花を部屋に入れた。

すると社長は驚いていた。

社長「あ、あなたはまさか沢木興花さんですか？」

興花の方を見るとしまったという顔をしていた。

勇也「どうして知ってるんですか？」

社長「知らないのかい？ 沢木家は弦巻家と並んで日本の二代資産家なんだよ」

勇也「へーほーそうなの？」

興花「ええ、けれどそんなこと関係ありません。私があなたのマネージャーをしたいと思いますと思ったから来たんです」

勇也「そういうことなんですか？」

社長「もちろんです。興花さんもお願ひします」

俺たちは部屋を出て行くと後ろから1人走ってやってきた。

スタツフ「あなた方に部屋を一つ差し上げるとのことです。社長からです」

俺たちは案内されたところに行くくと最上階の一番いいところだった。

けれど何もなかった。

勇也「なんもねーな。明日買ってくるか」

興花「もう用意してありますよ」

勇也「は？」

すると黒服の人たちが入ってきてきてあつという間に物を置いていった。

冷蔵庫にベッド、ソファア―に机その他もろもろいろんなものが用意された。

勇也「一つ聞いていいか？」

興花「はい。なんでも」

勇也「どうしてあいつはあんな風になったんだ？ いや興花に対してのタメ口はおかしいか」

興花「いえタメ口のままでお願いします。それと質問の答えですが私の家は知っての通り資産家です。だからなんでしようね。やりた放題してもなんでも許された。だからあそこまで堕ちたんですよ」

勇也「なるほどね。それとこのベッドとかはもらえないよ。これ3桁いくぐらいいいやつだろ」

興花「気にしないでください。両親も納得しています。それに時間はいくら使っても帰ってきませんかから」

その場が少し暗くなった。

勇也「それじゃあなんか飲もうか。俺のじゃないけどねー」

興花「そうですね」

素晴らしい興花が用意しようとしていたので静止した。

勇也「俺が用意するよ。座ってて」

興花「ううん。やらせて」

結局やつてもらうことになり俺はコーヒーを飲んだ。

その日は仕事もないので帰ることにした。

勇也「お礼ってわけじゃないけど飯食べに来ない？」

興花「いいんですか!?!?ぜび」

勇也「後その敬語やめてほしいな。無理にとは言わないけど壁があるみたいでいやだ」

興花「わかりまし：わかったよ」

勇也「それじゃあ行こっか」

そこから2人で家に向かった。

家に帰って正座させられたのはまた別の話

修学旅行編 V O 1 4

俺は興花を連れて家に帰るとリサは驚いて姉さんは恐ろしい顔をして俺を迎えた。

リサ「あれー？だれかな？」

俺は手を思いつき叩いた。

「バアチイン」

友希那・リサ「!!」

友希那「ビックリするじゃない」

勇也「ならその顔をやめてくれよ。興花は俺のマネージャーだよ」

興花「はじめまして。マネージャーの沢木興花です」

リサ「沢木？つてどつかで聞いたことがあるような」

興花は耳元で「なるべくバレたくないんだよ」と言った。

勇也「りよーかい。それじゃあなんとかするよ」

友希那「それよりどうしてその子を連れてきたの？」

勇也「これからのことを頼むために飯食べてもらおうと思って。そ

れじゃあ食材買ってくるよ」

興花「私も行くよ」

俺と興花はスーパーに逃げるように向かった。

スーパー

勇也「なに食べたい？」

興花「なんでもいいよ。なんでも美味しそうだもん」

勇也「うーむ。それはそれで困るな」

実際聞いてなんでもいいっていう返事はかなり困る。

勇也「それじゃあフルコースでも作るか」

興花「そんなのも作れるの!？」

勇也「一応な」

そこから食材を買い家に帰った。

そのころ

リサ「沢木ってどつかで聞いたような名前だよね〜友希那」

友希那「確かあの時じゃないかしら？勇也が病院に入院した時」

リサ「あーその時だ。けどあの名前確か興佐だったような？それに沢木ってなんか別のところで聞いたことがあるような気がするんだよねー」

勇也「ただいまー」

リサ・友希那「!!」

リサ「とりあえずこの話は後にしようか」

友希那「ええ、そうね」

俺は帰ってきてそのままキッチンに立って料理を始めた。

勇也「姉さんとリサ、興花は座ってて。できたら持って行くから」

リサ「りょーかい」

そのまま前菜から調理を始めた。

リサ「興花って昔勇也をいじめてた人の妹さん？それともお姉ちゃんなの？」

興花「妹です。その件では…」

勇也「はいはい。できたよ〜。それとリサ興花は関係ないから言わないであげてくれ」

リサは少しむくれている。

リサ「わかったよ」

勇也「ありがと。はいこれ」

俺は作ったものを出した。

勇也「食べ終わるまでに次の料理を持ってくるよ」

そこからはみんなに食べてもらった。

興花「勇也ってすごいんだね。すごい美味しかったよ。うちの料理人なんかよりよっぽど美味しかった」

その言葉でリサは何か気づいたようだ。

リサ「あーまさか沢木って資産家の沢木!？」

勇也「興花普通の家には料理人なんていないから…」
興花はちよつとシヨックを受けているみたいだった。
しつかり者にしか見えないけど案外抜けてるところもあるんだな。
興花「あの…出来るだけ言わないでもらえますか？」
勇也「リサに姉さんも頼むよ。本人もこう言ってるし」
リサ「わかったよ。友希那もそれでいいよね？」
友希那「元々言うつもりなんてないわ」
そこから話をして興花は帰ることになった。
リサ「勇也興花を送ってあげて」
勇也「俺でいいのか？」
興花「お願いします」
俺は興花一緒に家を出た。

興花「いい人ですね」
勇也「まあな。実際助けられてばかりだよ」
そこから無言で歩き続けた。

興花「ここです」
そういいついたのは家のでかさならうちの家が10個じゃ足りないぐらいの大きさだった。

勇也「な！」
それ以上の言葉が出てこなかった。
興花「どうしたの？」
勇也「嫌なんでもない。それじゃあね」
興花「うん。ありがとう」
俺はそこで別れて家に向かって帰った。

その頃
???「うーん。私は勇也がほしいわ！なんとしてでも私だけのものにしたいもの」

自宅

興花を送り届けて家に帰るとリサたちはすでに眠っていた。

俺はそのまま屋上に行き一人でコーヒーを飲みながら考えていた。

勇也「なんであそこまでの金持ちが俺のマネージャーなんてしてるんだ。あの年頃ならいろんなことをしたがってそんなことに時間を使うわけがない」

考えてもわからず屋上で眠ってしまった。

学校での練習も上手いきみんなでの演奏もかなり上達した。

そのまま時間が過ぎていき修学旅行の1週間前

教師「今日から転校生が来ます。みんな仲良くしてあげてね」

この時期に？

素晴らしい入って来たのは見たことのある赤い髪、そして瑠璃色の目をした人だった。

リサ「うそ」

勇也「マジか…」

教師「それじゃあ席は勇也くんの後ろね」

素晴らしい興花は俺の後ろに来た。

勇也「どうやって、いやそんなことよりなんで!？」

興花「こっちの方がマネージメントできると思ってる」

俺の周りは大変なメンバーになった。

後ろに興花、隣にリサ、前には日菜がいる。

俺は窓際だからもう一人隣がいらないだけマシだ。

実際その日は大変だった。

興花はかなり美人だから女子に男子問わず席の周りに来る。

勇也「あー鬱陶しい」

リサたちは信用できるけどこういうのは純粹に腹立つ。

俺は我慢できずに屋上に向かった。

リサ「ちよつと勇也!？」

興花「勇也さん：」

「なにあいっ?」「相変わらず偉そうだな」

クラスメイトが言っているがきにせす屋上に向かった。

屋上

屋上に行くと言った。

蘭「ゆ、勇也さん」

蘭は俺が来て驚きと少し怯えていた。

勇也「まだ前のこと気にしてんのか?」

蘭「はい：」

俺は蘭の近くにいきほつぺに挟んだ。

勇也「だから気にすんなって。次会った時おんなじようになつてた

ら知らないからな」

俺はそういう屋上から離れた。

蘭「相変わらず優しいよ。勇也さん」

俺は教室に戻り鞆を持って帰った。

リサ「勇也残りの授業は?」

勇也「今日はもういいや。まだ欠席しても大丈夫だし」

なるべく柔らかい声で言った。

腹に抱えているものとは別で：

教室を出て家に帰った。

そのままベッドに入り俺は怒りを忘れることにした。

そのまま眠ってしまい気がつくときリビングから声がした。

リビング

リサ「だから気にしなくていいってば」

勇也「どうしたんだ?」

すると興花はすぐに近づいて来て謝った。

興花「今日はすいませんでした」

勇也「どうしたの？」

興花「私のせいで…」

勇也「興花が謝ることじゃない。俺が弱いから逃げるしかできないんだよ」

リサ「勇也くそう自分を卑下にするのやめようよ」

勇也「そうだな。けど興花が気にすることじゃないよ」

興花「でも…」

俺は蘭の時と同じくほっぺを挟んだ。

勇也「(うわ。やわらか)だから気にすんなって」

そのまま話は進み興花も飯を食べて送っていった。

修学旅行までもうすこし！

修学旅行編 V O 1 5

俺は興花を送り家に帰って眠った。

それで俺はなんでこんなことになっているんだ？

眼を覚ます↓天井が変わっている↓周りは人形だらけ

勇也「ここはどこなんだ？」

そう思い立ち上がろうとすると立ち上がれず何かと思ってみると四肢をベッドの四隅につながれている。

???「あら？起きたのね。待ってたわ」

そう言い声のした方を向くところがあった。

けどいつもの黄金色の目ではなく昏くなって俺を見ている。

こころ「よく眠ってたわね！」

そう言い近づいてきた。

なぜか体の上になり俺の上に横になった。

勇也「ちよつと！こころ？」

こころ「あなたは今からここで暮らすのよ。ずっとわたしと一緒にね」

勇也「ちよいちよいちよつと待ち！なんで？」

こころ「わからないの。目を瞑るとあなたの顔が出てきて胸を締め付けるの」

まさかね…

そう言いさらに引っ付いてきた。

勇也「ちよつと待って。匂いきついから」

こころ「あら。そんなことないわ！あなたが臭いなんで絶対じゃないもの」

これはやばいやつだ。

なんとかして逃げないと…

勇也「なら一つ勝負しよう」

こころ「勝負？なにかしら？」

勇也「今から一時間俺が逃げる。その間に捕まえられたらこころの

言うことなんでも聞くよ。今日一日」

「こころ「あらそれはすごい楽しみな勝負ね」

「けど確かこころってかなり運動神経いいよな？」

「ライブの時とかバク転してたし、これやばい勝負仕掛けた？」

「勇也「んじやとりあえずこれ外してくれ」

「そう言うのと外してくれた。」

「勇也「俺がここを出てから10分後に出てこいよ。それと今回は黒服は無しだ」

「こころ「あら？黒服ってなにかしら？」

「勇也「気にすんな。独り言だ」

「これで必ず黒服は乱入してこない。」

「これならまだ大丈夫だ。」

「勇也「それじゃ始めるぞ」

「俺は部屋から出て玄関に行きダツシユでその場から抜け出した。」

「残り1時間10分」

「俺は走ってついたのは知らない公園だった。」

「そこには見たことのある顔がいた。」

「勇也「美咲に花音なにしてんの？」

「美咲「さっきまでカフェに行つててその帰りなんです」

「俺は気になりケータイで時計を見ようとするとポケットにケータイがない。」

「そういえば目を覚ましてから一度も見てない。」

「勇也「今って何時？」

「花音「お昼の1時だよ」

「勇也「そっかー」

「こころ「見つけたわよ！」

「勇也「ゲッ！」

「俺は言葉より行動を先に起こしていた。」

「勇也「美咲、花音じゃあなー」

俺は走って公園の柵を飛び越えて逃げた。

「こころ「あ！待ちなさい」

昏い瞳でそう言われても止まらない。

花音「どうしたんだろう？」

美咲「こころに振り回されてるんじゃないですかね？」

残り50分

俺はそのまま逃げてなんとかこころを撒いた。

勇也「はあはあ死ぬ」

ここまでかなりの全力疾走してきたせいもあり全然酸素が足りてない感じがする。

こころは走るのがかなり早いからこうするしかないとはいえないかなりしんどい。

街中をゆっくり歩いて呼吸を整えていると前から千聖と彩が来た。

向こうもこつちに気づいたらしく俺の方にやって来た。

彩「勇也くんどうしたの？すごい息を切らしてるよ」

勇也「ちよつと死ぬ気で追いかけてっこしててな」

千聖「死ぬ気で？どういうこと？」

勇也「はあはあちよつと待つて。まだ息が…」

そこに鬼はやってきた。

「こころ「見つけたわよ」

勇也「し、しぬ」

言葉とは裏腹に俺は全力で逃げて行つた。

全力で逃げてこころの声と姿が見えなくなつたところで俺は足を止めた。

着いたのは近くの公園だった。

休もうと思いいベンチに座つた

残りは大体30分ぐらいだろう。

そこからも見つかり逃げての繰り返しで残り五分になった。

そこからは引き離すこともできずつと同じ距離で逃げていた。

そして俺の今までのツケが来た。

足が思うように動かずもつれてこけた。

ところがそこにやって来てちようど時間切れとなった。

「こころ「大丈夫なの!?!」」

「そういいこころは近づき至近距離に顔があった。」

そして俺の全身を見てから膝を擦りむいているのに気づいたみたいだ。

「こころ「怪我をしてるじゃない!」」

勇也「そりやこけたからね」

「こころ「そうなのね…」」

「こころはそういい腕を掴んでその部分を舐めた。」

勇也「!?!なにやってんの?汚いからやめろ」

「こころ「やめないわ!私のせいで怪我したんだもの」」

勇也「わかつたわかつた。ならなめないでこの後の治療だけしてくれ。血を舐めるのはかなりやばい」

「こころはしばしば納得してくれた。」

「こころの家で治療することになりこころの家に向かった。」

「けれどその間は一言も話すことなく向かっていった。」

勇也（「こころ黙ってたらかなりモチると思うんだけどなく」）

「そんなことを考えているうちに家に着いた。」

「そこからリビングに向かい治療されたが1回目は巻きすぎて大変

なことになり、2回目はきつすぎて血が止まりかけた。」

勇也「「こうやるんだよ」」

「そういいこころの手に巻いてみせた。」

「こころ「わかつたわ!やってみるわ」」

「そこからやってみたら俺が教えた通りにできていた。」

勇也「うん。これなら大丈夫」

「そういい立ち上がって帰ろうとすると腕を引きずられた。」

俺は倒れそうになりこころの方を向いた途端こころとキスしてしまった。

勇也「ん!」

そのまますぐに離すとこころはなぜか満足していた。

「こころ「うーん。すっごいなにかわからないけれど満たされたわ！」

いや少しは恥ずかしがれよ。

勇也「それじゃあ帰るから」

こころ「ねえ勇也は私のこと嫌いになった？」

不意にこころから訳も分からない質問が飛んで来た。

勇也「はあ？なんで」

こころ「だってあれだけ追いかけて回してそれに怪我したんだもの」

勇也「そんなこと気にしてるんなら俺の願い一つ聞いてくれ」

こころ「何かしら。なんでも聞くわ！」

勇也「こころの掲げる世界中を笑顔にっていうのをやってみせてくれ」

こころ「わかったわ」

そーういー俺は家から出て行った。

なんであんなことを言ったんだろう。

自分でも訳がわからない。

叶わないと知っているはずなのに…

それは儂い幻想だと…

自分でも叶わないいや自分が一番知っているはずなのに…

俺は自宅に帰って行った。

帰ると待ってましたと言わんばかりにリサに姉さん、興花がいた。

リサ「勇也明日って暇？」

勇也「特に何もなかったよな」

興花「なら買い物に行きましよう修学旅行のもの買いに行かないといけないから」

勇也「俺に拒否権は？」

友希那「あると思うのかしら？」

ですよー。

知ってました。

勇也「それにしてもどうやって興花は来たの？」

興花「リサさんに開けてもらいました」

勇也「なるほどね」

そこからは夜飯を食べ俺の膝のことを聞かれたが濁して答えた。

俺は今日一日走り回ったこともありベッドでまた眠ってしまった

修学旅行編 V O 1 6

俺が起きたのは既に昼前だった。

リビングに行くとりサに姉さん、興花は既にいた。

勇也「ありやりやごめん。遅れた」

リサ「気にしなくていいから早く用意してきてー」

俺はそのまま部屋に戻って用意をしていると電話がかかってきた。

番号は非通知設定ででようか悩んだが出ることにした。

???「今日行くところすべて私たちが監視しています。何かあればこちらの電話まで」

そう言われて電話番号を書いた。

なんだったんだろう。

気にはなつたが気にしてたら悪い。

俺はリビングに行くとりサと姉さんが驚いた顔をしていた。

勇也「どうしたの？」

リサ「じ、実は今回の買い物車の車を興花が出してくれるんだって
言ってくれたんだけど大きさが…」

その言葉を聞き外を見ると前に見たところの家と同じぐらいの車が止まっていた。

勇也「ちよつと待って。興花これで行くの？」

興花「そうだけど何か変かな？」

これ本当に聴いてるやつだ。

興花はかなりの天然だな。

仕事はできるみたいだけど。

勇也「姉さんとリサも観念して」

友希那「はあわかったわ」

リサ「わかったよ」

素晴らしい俺たちは乗りこんだ。

中に入るとかなりの広さで4人とも寝転んでもまだまだ入れるぐらいだ。

そのまま着いたのはかなり高そうな店だった。

勇也「ここってたしか」

リサ「うん。かなり高いところだよね」

興花「早く早く行くよー」

勇也「ちよつと待つて。俺たちこんなに金ないよ。だから別の店にしようよ」

興花「大丈夫だよ」

興花がそういうと周りに黒い服を着た人たちがきた。

俺は一瞬で警戒していた。

興花「勇也心配しなくても大丈夫。うちの人間だから」

勇也「は？」

黒服「勇也さんだけこちらに来てください」

俺は案内されるがままついていった。

黒服「朝の電話は私たちです。今日はここのカメラを買収…いえ貸していただきました」

今買収って言ったよな。

勇也「なるほどなんとなく話はわかりました」

黒服「お嬢様に悲しい顔だけはさせませんように」

勇也「最大限努力するよ」

黒服「ではこちらを」

素晴らしい渡されたのは一つの袋だった。

持ってもさほど重くなく開けようとするのと止められた。

黒服「そちらを開けるのは初めて買い物したところで開けていただきますようにお願いします」

勇也「はあ。わかりました」

俺はみんなのところに戻った。

リサ「勇也その袋は？」

勇也「俺も知らん。最初の買い物のところで開けてからだどさ」

興花「まあまあ早く行こ！」

興花は先に行ってしまつた。

勇也「俺たちも行くか」

友希那「ええ、そうね」

俺たちも後を追うように向かつて行つた。

そして最初に着いたのは服屋だつた。

勇也「はあ」

正直ここにはきたくない。

女は服選び長いからなー

俺は正直なんでもいいと思うけどリサによく着せ替え人形にされるし

姉さんはこういうの興味なさそうだよな。

みんな中に入つて行つたので俺は外にあるベンチに座っていた。

黒服「入られないのですか？」

いつからいたんだろう？

勇也「正直ファッションに関しては興味ない。いや分からん」

黒服「そうですか」

そのまま気がつくともうそこにはいなかった。

しばらくすると興花がでてきた。

興花「ほらほら勇也も早く」

勇也「いや、だから全然わかんないだつてば」

そのまま引つ張られて俺も入つた。

そこにはもうすでに服を大量に持つてるリサと姉さんがいた。

そこに興花がさらにもつてきた。

それだけで30着ぐらいありそうな量だつた。

勇也「これを全部買うのか」

俺は財布を出すと興花に止められた。

興花「勇也にはこれがあるよ」

そーいい持つて来たのはさつき渡されたカバンだつた。

開けて見ると俺はすぐに閉じた。

勇也「待て待て待て。これはおかしい」

リサ「なにになに何が入ってたの？」

俺はカバンを渡すとリサも姉さんも驚きを隠せてなかった。

リサ「ちよつと待って。これってまさか」

友希那「お金よね」

興花「今日のこと話したら両親が持って行きなさいって言われちゃって」

いやそれにしても中身がおかしい。

これ多分うん値段は言わないでおこう。

勇也「なんでそこまでしてくれる？正直に聞くと興花たちに全くメリットがあるわけじゃない。なのになんで？」

興花「前にも言ったけどあのバカ（お兄ちゃん）がああなったのは何をしても守ってくれるうちの環境があつたから。そのせいで勇也には迷惑をかけたし許されることじゃない。だから私たちにできることがあるなら最大限サポートをしてあげたいんだよ」

勇也「なるほどね。悪い空気悪くしたな」

俺は会計を済ませて店を出た。

その後を全員が追ってきた。

勇也「それじゃあ飯行くか。腹減ってるんだわ」

リサ「うん。そうしよ」

そのまま歩いて行きレストランに着いた。

ここも高そうだ。

レストランに入ると店長みたいな人がきた。

店長「あなたは湊勇也さんですか？」

勇也「いえ違います」

リサ「勇也なんで嘘つくの」

勇也「いやだってさ入った途端に聞かれたらそうなるだろ」

店長「私と料理勝負してください」

勇也「はあ？いやです」

友希那「構いません」

勇也「ちよつと姉さん！何言ってるの？」

いや実際ほんとに何言ってるんだろう。

なんでこんなところまで来て知らんやつと料理勝負しないといけないんだ。

興花「私も食べてみたいな勇也の料理」

こう言われては何も言えない。

勇也「はあわかったよ。制限時間は1時間それでいい？」

店長「もちろんです」

勇也「後今から10分時間もらうから。どんな食材があるのか知るとききたい」

店長「わかりました」

俺はキッチンに向かうとその場でかなりみられた。

何も言わずに冷蔵庫を見て一瞬で決まった。

すぐに戻り官僚を伝えた。

店長「では始めましょう」

そこから調理を開始した。

衣をつけてソースを作り始めた。

従業員「何やってんだあいつ」

たしかに一般的にはありえない。

俺がやっているのは周りからの作業だ。

本来ならメインを作ってから周りのを並行して作るのがセオリーだ。

しばらくして店長が出したのはオムライスだった。

審査員はリサと姉さんと興花にしてもらった。

俺も一口もらうとたしかにうまい。

勇也「これ卵にホイップクリーム入れてあるな。だからこんなにも優しい感じになった」

店長「あなたは出さなくていいのですか？」

勇也「もうできるさ」

そういいだしたのはロースカツだった。

店長「なんですかこの白いのは？」

勇也「食べてみればわかるよ」

店長に食べさせると店長は一瞬白い目になった。

興花「何これ？」

リサ「こんなのつて作れるの？」

勇也「一つ目の工夫はカツを揚げる時間。暑い油に入れるとどうしても肉が固まる。だから冷えた状態の油から入れてすぐにあげている。」

二つ目はそのソース。内容は企業秘密」

リサ「えー教えてよ」

勇也「家に帰ったらな」

勇也「それじゃあ勝負は俺の勝ちでいいですか？」

店長「ええ、完敗です」

そのまま店を出て俺たちは買い物再開した。

そのままいろんなどところを周り俺たちは帰りの車で寝ていた。それに気を使ってくれたのか目を覚ますとちようど家だった、

興花「お疲れ様」

勇也「ああ、今日はありがとう」

俺たちは家に入った。

そのまま何もすることなく時間が過ぎて全員が眠った。

そのまま修学旅行当日になった

修学旅行編 V O 1 7

修学旅行当日

起きるとリビングが騒がしい

気になり起きるとバンドメンバーが全員いた。

勇也「はて？ここは」

日菜「あははく勇也くん何言ってるのー？」

起きて早々こんな数の女に囲まれたら誰でもビビる

リサ「ほら朝って自由に空港に来てって言ってたじゃん。だからさ」

あーなるほど。このメンバーで行こうってなったのか。

勇也「わかったよ。行こうか」

友希那「それがちよつとね」

なんだか一部を除いてすごい顔をしている。

まあ普通の顔をしているのは薫と日菜だけだが…

麻弥「実は今回の移動興花さんがだしてくれるって言ってるんですけど」

千聖「その大きさがね」

あーたしかにあそこほんとに容赦ないぐらいの大きさで来るからな。

勇也「まあ今日はいいいんじゃないかな。みんなも楽器とかあるしその分助かるだろ」

興花「そうですね！早く行きましょう。車の中に一通りのもの用意してますから」

一通りのもの？

みんなそれぞれの楽器は持つてるし何かあったかな？

そう思い車に入ると朝飯や飲み物が一通り用意されていた。

勇也「相変わらずすごいな。ありがとう興花」

興花「ううん気にしないで。それより食べよ」

そこからは車の中で宴会状態になった。

日菜は暴れるし紗夜はそれを止めるために大声出すから少し耳が

いたい。

俺は少し離れたところに座った。

麻弥「お疲れみたいっすね勇也さん」

勇也「まあ起きた直後にあの惨状だからな。多少疲れた」

麻弥「あははたしかにすごいことになってるっすね」

ほんとすごいことになっている。

この車じゃなければいくつか壊れてそうだ。

そこに興花もやって来た。

興花「お疲れ」

勇也「さっきまであの2人に混じってたやつがなーに言ってるんだよ」

そのまま雑談して空港に着いた。

黒服「空港に着きました」

興花「わかった。ありがとう」

黒服「お気をつけて」

俺たちはお礼を言っただけで車から出て空港に降りた。

時間も良かったので着くとすぐに点呼から始まりすぐに乗り込んだ。

ただ飛行機で少しもめた。

理由はよく知らない。

俺には関係ないからと言われて聞かせてくれなかった。

飛行機での隣は燐子とリサになった。

燐子は初めは本を読んでいたが途中で眠たくなったのか俺に体を預けるように倒れこんで来た。

リサ「勇也お腹空いてる？」

勇也「ちよつとな。さっきの車でもあいつらが暴れてほとんど食えてないし」

リサ「じゃあさこれ食べる？」

リサが出して来たのは小包に入ったものだった。

勇也「なんだろ？開けていいの？」

リサ「いいよ」

開けるとそこにはクッキーが入っていた。

リサ「それでお腹膨れるかはわからないけど食べないよりはマシかな」と思ってる」

勇也「ううん。ありがと。貰うわ」

実際かなり嬉しい。

あれ？なんでだろう。嬉しいんだけどなんだか胸までいっぱいになってる。

食べると少しお腹が膨れた。

勇也「ふう。後もうちよつとかな」

リサ「うーんどうだろう。行くところが沖縄だからね。予定ではあとがき1時間弱だよ」

そこからはあつという間に着いた。

向こうに着くと最初にホテルでのチェックインを済ませた。

勇也「んん？」

俺がもらった鍵は大部屋用だった。

3、4人用でなんで大部屋用なんだろう。

しおりなんか見たことないからわからないし。

部屋に向かうとそこにはバンドメンバーと興花がいた。

勇也「んん。俺部屋間違えた？」

そう思い出て部屋番号を確認してももらった鍵と同じだ。

友希那「間違ってるわ。早く来なさい」

勇也「じゃあ聞くけどなんでおんなじ部屋なんだよー」

千聖「実は…」

そこから理由を聞くとこの部屋になったのはバンドメンバーで固めた方がいいという話になり全員（俺を除く）メンバーからの了承を得られたのでこの部屋になったというわけらしい。

勇也「納得いかんけど納得するしかないか」

日菜「そうだよ。観念して一緒の部屋にしようよー」

観念するのは間違ってるけどたしかに何にも思い浮かばないため

この部屋にいるしかなさそうだ。

そこからは荷物を置いて少し自由時間らしい。

ホテルにいてもいいし外に出てお土産や観光もしていいらしい。

俺はホテルを徘徊していると後ろから掴まれた。

??? 「ちよつどよかった。ちよつと手伝って」

勇也 「は？誰だよ」

そっくり向くとそこにはばあちゃんがいた。

勇也 「ばあちゃん！なんでここに？」

祖母 「あたしがこのオーナーだからだよ。それとちよつと手伝ってくれ」

勇也 「なにを？」

祖母 「実は料理人が数人風邪で休みでね。代わりの料理人を探してたんだけどあんたがいて助かったよ」

勇也 「いやだよ」

祖母 「後であれあげるから」

勇也 「わかった」

そこから俺は調理場に向かった。

シェフ 「今日はよろしく」

勇也 「こちらこそ。それでなにを作るんですか？」

シェフ 「バイキング方式だからね。一応の料理はここに書いてある。あとは君に任せるよ」

勇也 「わかりました」

俺はそこから怒涛のスピードで調理を開始した。

シェフ 「あれがほんとに高校生なんですか？オーナー」

祖母 「ああ、そうだよ」

シェフ 「けれどあれは高校生の域をはるかに凌駕しています。あれはプロでもかなりのスピードです」

祖母 「色々あったんだよ。あいつにもね」

そこからも調理を進めていくとだんだんテンションが上がって来

た。

勇也「ここからは俺一人でやらせてください。テンション上がって来たんで」

シエフ「わかりました。何かあれば呼んでください」

そこからも調理を進めて気がつく指定された分が終わっていた。

勇也「終わった。部屋に戻ろう」

そこではあちちゃんから貰うものももらい部屋に戻った。

部屋でゴロゴロしていると最初に帰って来たのはリサと姉さん、日菜と紗夜だった。

リサ「どうしたの勇也、疲れた顔をして」

勇也「ん？そう？そんなことないと思うけど」

友希那「今日は本番なのだからしっかりしてちょうだい」

勇也「わかってるよ。後で音合わせだろ」

今日がバンドの本番だ。

本当は2日目にしようか悩んだらしいが1日目の方がいいという意見が多かったのでこっちに決まった。

俺は音合わせまで少し眠った

俺が起きると全員が帰ってきた。

リサの顔色もそこまで悪くなくなんとか行けそうだった。

勇也「みんなそろそろ時間？」

友希那「ええ、そうよ。早くいきましよう」

そこから俺たちは移動したのは大宴会場だ。

入るとかなり広く俺たち今来てるのが全員入ってもかなり余裕があった。

そこから軽く音合わせして俺たちは本番までゆっくりしていた。

今回はいつものライブとは違い、高い技術を演奏することより、楽しんでもらうことを目的にしているのでそこまで完璧を目指さなくてもいいって俺は思ってる。

みんなは知らないけど。

彩「ううーもうすぐ本番だよ。大丈夫かなー」

彩はいつも通り緊張していた。

それを見た人は日菜は笑い、麻弥は励まし、花音は自分のことで精一杯という感じだった。

リサ「なんとかならない？」

勇也「できないわけじゃないけど…」

友希那「なんとかしてちょうだい。みんなに緊張が移っても困るわ」

勇也「はあわかったよ」

俺は彩と花音のところに行き声をかけた。

勇也「ほら二人とも合掌」

彩・花音「え？」

二人に合掌をやらせると俺はその上からかなり力を入れて叩いた。

彩「いったーい」

花音「痛いよ」

千聖「何してるの!?!勇也くん」

勇也「どうだ?緊張しなくなったか?」

彩「あれ？本当だ」

花音「どうして？」

勇也「人は大抵緊張の時はそれ以上の感情を持つと消えるんだよ。例えば怒りとか。けど今怒らせるのは違うし、怒らせるようなことはしない。だからちよつと強行手段に出たんだよ。ごめん」

彩「ううん気にしないで！ありがとう」

花音「うん。ありがとう」

はあこんなことをしておいてお礼まで言われたらなー。

友希那「そろそろ本番よ。いきましよう」

全員「はい！（うん！）」

そこから舞台上がるとすごい数の人がいた。

演奏を始めるとみんなもノリになってきたようで俺たちもだんだんテンポが上がり、練習以上にまとまり始めた。

友希那（この感覚はまさか…）

紗夜（あの時と同じ）

リサ（初めてRoseliaで演奏した時と同じ）

隣子（みんな…の音に…引っ張られる）

勇也（久しぶりに演奏したけどこんなに楽しかったんだ）

演奏は10曲以上したのに俺たちはあつという間に感じた。

勇也「ありがとうございましたー」

「最高ー」「よかったよー」

俺たちは舞台から降りた。

降りるとRoseliaのメンバーは驚きを隠せない顔をしていた。

俺も驚きを隠せない。

友希那「あの感じはやっぱりあの時に感じたものと同じ」

日菜「うーんるん！ってくる演奏だったね。すっごい楽しかったよ」

千聖「ええ、けどそれだけじゃないような…」

そこに教師がやってきた。

教師「夜飯にするぞー。早く来いよー」
勇也「まあまあ話しててもしょうがないし行こうよ」
俺たちはそこから食堂に移動した。
自分が作ったから何か知ってるんだけどなー。

食堂

オーナー「えー1日目お疲れ様でした。今日はこれで終わりですの
でゆっくりしてください。余談ですが今日の夜ごはんは湊 勇也く
んが作りました」

勇也「ゲホッ！」

飲んでいた水が気管に詰まっつてむせた。

あの野郎なんてことを言うんだ。

「えーすーい」「チツなんであいつなんだよ」

はあこうなるだろ。

いろんな声が聞こえるんだよ。

そこから飯を食べ始めた。

するとしばらくすると俺の周りが大変なことになっていた。

「これ本当に湊くんが作ったの？」

勇也「う、うん。そうだよ」

「すっごい美味しいよ。ありがとう」

勇也「そっか。よかつたよ。口にあつて」

全くなんでこんな目に。

静かに食べたいのに……

そこかも永遠に留まることのない話で俺は結局ずっと捕まりなが
ら飯を食べていた。

部屋に戻ると一気に疲れがきた。

勇也「疲れた」

その一言だけで俺は布団に倒れこんだ。

今日は内容が濃すぎる。

リサ「お疲れかな？」

勇也「もうあんなに囲まれるのはいいや。しんどい」

千聖「それより私たちが先にお風呂に入ってもいいのかしら？」

ここのホテルは各部屋に風呂があり大浴場もあるが基本的には部屋で入る。

日菜「えー勇也くんも一緒にはいろーよ」

勇也「何言ってるの？無理に決まってるよ」

日菜「水着着ればいけるよー」

全員「!!!」

リサ「ほんとだね。水着着ればいけるよ」

あれ？リサまでそんなことを言ってるよ。

友希那「そうね。それぐらいならいいんじゃないかしら？」

紗夜「ちよつと湊さん!!」

そうだよ。紗夜もつと言ってる！

千聖「そうよ」

千聖ももつと言ってる！

千聖「水着を着れば一緒に入れるわよ！」

そっちですかーマジか。

これって誰も拒否しないやつだな。

麻弥「いやでも自分は…」

おっ！麻弥全力で否定しろ。

千聖「大丈夫よ麻弥ちゃん。麻弥ちゃんはスタイルいいもの」

そういうことじゃない！

麻弥「フへへへ千聖さんがそういうなら大丈夫ですね」

撃沈だな。

寝るか。

リサ「おっとー勇也今から寝るなんて許さないからね」
考えていることを読まれた。

結局観念して俺は風呂に入ることになった。

風呂に入ると意外とそこまで否定しようとは思わなく普通に入れた。

多少目のやり場に困っても想像していたほどじゃなかった。けどやっぱり少し恥ずかしいから早く洗って出よう。

早く洗い出ようとすると手を掴まれた。

またこのパターンか：

日菜「逃がさないよ〜」

リサ「どこに行こうとしてるのかな？」

はあまたか。

それよりも

勇也「リサ今日は拒否反応出ないんだな。大丈夫そうだ」

リサ「あ、あれ？本当だ。なんでだろう？」

思い当たる節はいくつかあるけど誰も確実じゃないからな。

勇也「まあ出なくなっただんならいいんじゃないかな〜」

そこに風呂のドアが開いた。

興花「失礼しまーす」

興花までこっちに来た。

部屋は一緒だから納得できなくはないけどな。

そこからもかなり風呂に入っていて隣子のはのぼせた。

そのまま抱いて風呂から出て体を冷やすとしばらくすると元どおりになった。

結局風呂に一時間半ぐらいいた気がする

勇也「もう寝ようか」

そこから話は続き全然眠ることが出来ず結局寝たのは夜中の2時ごろだった

朝起きるとみんなすでに起きていて俺が最後だった。
起きるとみんなの様子がおかしい。

勇也「どうしたんだ？」

なぜか顔を合わせずケータイばかり見ている。

一番近くにいた彩のケータイをとってみると俺の寝顔が写っていた。
た。

彩「あ！返してー」

勇也「はあ~~~~~~~~。何これ？」

彩「勇也くんの寝顔です」

勇也「まあいいや。できれば消しといて」

俺はそういいケータイを返した。

彩「あれ？怒ってないの？」

勇也「別にこれがあつたところで死ぬわけじゃないからな。それより早く飯食べにいこーぜ」

俺は部屋着のまま食堂に向かった。

部屋着っていつでもホテルから借りてる浴衣なのでかなり胸の部分がはだけていた。

少し戻して俺は食堂に着いた。

食堂

俺が席に着くとその後からみんなもやってきた。

勇也「今日って何があつたっけ？」

紗夜「バナナポートとダイビングですね」

勇也「あーなんだか面倒だな」

リサ「だからって部屋で寝とくなんてなしだからね勇也」

あれーバレてますか。

なんとなくしんどいって教師に言えば休めると思ってたのに
勇也「わかってるよ」

そのまま飯を食べ終わり一度部屋に戻った。
部屋に戻って用意を済ませバスでの移動だったので乗り込んで海
に向かった。

ただこの時期の海は地味に寒い。

海

みんなテンション上がっているが正直そんな元気ない。

朝はバナナボートで昼からはダイビングをするみたいだ。

バナナボートは6人で乗るみたいで俺はリサ、日菜、麻弥、彩、興
花になった。

しばらく待って乗ると初めはゆっくりでだんだんスピードが上
がってきた。

日菜「あ、はははーたのしー」

彩「早いよー」

リサ「い、いや。きやあー」

リサはスピードに体がついていかずに振り落とされた。

勇也「止まってくださいーい」

声を出してもエンジンの音でかき消される。

リサが乗っていたのは一番後ろで俺がその前だったのでその場で
飛び降りた。

少し距離があるがリサのところまで泳いで行った。

リサ「勇也ー」

リサは俺に抱きついてきて少し泣いていた。

リサ「ううずつとこのままかと思った。ありがとう」

勇也「うーん。ここは場所が悪い。とりあえず向こうに戻るから俺
にしがみついててくれ」

リサにしがみついてももらい俺はそのまま泳いだ。

けど何箇所がバナナボートをしていて変な波の渦ができていて
思うように進まない。

教師連中も乗り方をレクチャーしていてこっちには気づく心配が

ない。

勇也「このまま泳いで行くけど大丈夫か」

リサ「うん。大丈夫」

しばらく泳いで行くと少しは近づいた気がする。

それでもまだ距離はありかなり遠い。

リサ「勇也ごめんね。あたしのせいで」

勇也「???なんでリサが謝ってんの?全く意味がわからないんだけど」

正直リサに非は全くない。

そのまま30分ほど泳ぎなんとか足の届くところまで来た。

勇也「あとちよつとだから……」

リサ「うん」

そのまま歩いてなんとか着いた。

リサは砂浜で降りて俺はその場に倒れた。

勇也「はあはあ。ゲホッ!」

正直ここまで体力面できついとは予想にもしてなかった。

リサはみんなのところに行っていたので俺は砂浜にうつむせにたおれた。

『ドサッ!』

リサ「!!勇也!?!しっかりして」

意識が遠のいて返事ができない。クソ情けねえ。

いつまで倒れていたかはわからない。

けど目を覚ますとリサが目の前にいた。

リサ「よかった。目を覚ましたんだ」

俺は立ち上がろうとすると節々が痛かった。

勇也「っ!」

リサ「まだゆつくりしてて。泳いでる最中にいろんなものに当たって怪我してるんだから」

リサに抑えられて俺はリサの膝で寝ていた。

勇也「ごめん」

リサ「なんで勇也が謝ってんの?むしろあたしの方こそごめん。怪

我ばっかりさせて」

俺の顔を冷たいものが当たった。

リサが泣きながら謝った。

俺はリサの頭に手を伸ばして頭を撫でた。

勇也「この前の車にひかれたのも、リサを助けたのも、今回の件もどれもリサが悪いわけじゃない。それにリサに怪我がなくて本当に良かった」

リサ「うん、うん」

泣きながら答えた。

勇也「ところで今何時？まだ明るいけど」

リサ「まだお昼だよ」

『グウ~~~~~』

俺の腹が鳴った。

リサ「ちよつと待ってて。すぐに持ってくるから」

リサはすぐに何処かに行った。

当然すぐに行つたので俺の頭は地面に直撃した。

勇也「いてえ」

リサ「お待たせー」

リサは手に二つの焼きそばを待って来た。

俺は体を起こして食べようとした。

リサ「無茶しちやダメだよ！ほらあーん」

いやここいろんな人の目があるんですけど……

勇也「あーん」

なんとか食べさせてもらった。

周りからの目が痛い。

それにしても寒い。

勇也「リサは寒くないのか？俺かなり寒いんだけど」

リサ「うん（おぶつててもらってる間ずっとドキドキで暑かったも
ん）」

そこに教師がやってきた。

教師「湊くん！大丈夫ですか？」

勇也「だ、大丈夫です。痛い」

肩を掴まれて少し痛かった。

教師「よかった。昼からのダイビングは予定通り行いますが湊くんはどちらでも大丈夫ですよ。予想以上に疲れていると思うので」

勇也「それじゃあ休ませてもらいます」

リサ「あ、あたしも休んでもいいですか？」

教師「今井さんもですか？うーん構いませんよ。それでは…」
そのまま何処かに行ってしまった。

勇也「リサまで休む必要なかったのに」

リサ「いいの。勇也を見とくから」

勇也「はあわかったよ」

そこに全員がやってきた。

友希那「勇也！大丈夫!？」

勇也「大丈夫だから近い」

海に入ってなんだか余計にいい匂いがする。

日菜「それにしてもリサちーにはびっくりしたなく。勇也くんと帰ってきて倒れた途端すごい慌ててたもん」

リサ「ちよつと日菜!」

勇也「あはは。悪かったよ。心配かけた」

教師「今からダイビング始めます。こっち集合してください」
みんなは向こうに行き俺とリサだけになった。

勇也「うーん二人で海入るか？」

リサ「そうだね。浅いところなら大丈夫だし」

二人で浅瀬に行き水に浸かっていた。

それにしてもなんでリサといるときはこんなにもドキドキするんだ？

よくわからん。

しばらく遊んで俺たちはビーチに座っていた。

海やプールに入るとそのときは疲れないのに出ると極端に疲れる。

『ドサツ』

俺は浜辺に倒れた。

リサ「勇也!？」

勇也「大丈夫。疲れたから寝転んでるだけだから」

俺はそのまま寝てしまった。

リサ side

やっぱりダメだ。

勇也が好きなのを止められない。

勇也はあたしを助けてくれる。

いつからひかれ始めたんだったかな。

確か小学校の頃だったと思う。

あの頃の勇也は比較的髪の色も黒くあたしの茶色や友希那の髪の色は目立っていた。

小学生の時はそういう小さいことでもいじめられた。

あたしはよく男子にいじめられた。

友希那は勇也がいたからやられることはなかったみたいだ。

回想

「なんでお前の髪こんな色なんだよ!」

あたしは髪を引っ張られたりすることがたまにあった。

リサ「いや、やめてよ」

こんな言葉を出しても助けてくれる人はいなかった。

そんなところにやってきた。

勇也「ふわあく眠たい。ってリサ!?!おいお前ら何してんだ?」

「これはその」

この時の勇也の声は今まで聞いたことがないぐらい怖かった。
そのあと勇也その子たちを追い払って先生に上手くいつてあたし
と勇也を帰るようした。

勇也「大丈夫リサ？」

リサ「うん。ありがと勇也」

すると勇也はあたしの前にきて頭を下げていた。

勇也「ごめん！俺がもっと早く気づいてたら」

リサ「ちよつと勇也どうしたの？あたしは大丈夫だから」

勇也「それにしてもあいつらはわかつてないよな。リサの髪こんな
にも綺麗なのに」

リサ「へ!?綺麗?そんな…」

勇也「???どうしたのリサ？」

リサ「なんでもない！早く帰ろ」

あたしと勇也はそこで帰り次の日からあたしに対するいじめは無
くなった。

後で詳しく聞くといじめてきてた男の子たちを片っ端から脅した
とか殴ったとかいろいろな噂があったからどれが本当かわからないけ
どあたしはこの時から勇也が好きになったんだと思う。

END

勇也「んあんんー」

起きるとリサの膝の上だった。

リサも座りながら寝ていて声が聞こえ始めた。

「楽しかったー」「面白かったね」

勇也「リサ！起きろ」

リサ「んん、勇也どうしたの？」

勇也「みんな帰ってきてる。早く起きて」

リサ「う、うん」

俺とリサはすぐにさつきいた場所に戻った。

千聖「お疲れ様。何もなかったのかしら？」

あれ？そういえば確か千聖って運動苦手だったような…

勇也「千聖はダイビングしたの？」

千聖「!!え、ええも、もちろんよ」

この反応はしてないな。

日菜「それにしてもすっごいいるん！つてきたよ。こうバジャーつて入ってブワワつてなった感じだよ」

何言ってるのか全くわからん。

教師「それじゃあホテルに戻りますよ。バスに乗ってください」

俺たちは着替えてバスに乗り込んだ。

バスの中ではみんな疲れていて起きてるのは俺とリサだけだった。

そのまま何事もなくホテルに着いた。

この後にあることを予想もせずに……………

修学旅行編 V O I 1 0

バスがホテルに着く10分ぐらい前からだんだん周りが目を覚まし始めて着く頃には全員が起きていた。

教師「それじゃあホテルでは自由とします。暴れたりはしないでね」

そのままバスはホテルに着き俺たちは部屋に帰った。

俺は初日にもらったものを食べていた。

勇也「なんかいつもと違うような」

そんなことを考えて食べてるとみんなが来た。

日菜「あー勇也くんあたしにもちようだい」

勇也「ああ、いいよ」

そこにいたメンバーは全員食べた。

食べたのは姉さん、紗夜、リサ、燐子、日菜、彩だった。

しばらくすると飯を食べてそのあとみんな同じもの食べた。

食べたのは普通のチョコだった。

勇也「さあて風呂でも入るか」

すると手を掴まれてそのまま倒された。

いきなりのもので頭がついていかず面白いうちに倒れた。

心なしかチョコを食べたメンバーの顔が赤い。

日菜「あははく勇也くんがいっぱいいるく」

紗夜「何を言ってるによよひにやー。勇也さんは一人よー」

紗夜がこんな風になるなんて何があつたんだ。

燐子「勇也しゃーん」

そーいい燐子まで倒れてる俺の上に乗って来た。

彩「あー燐子ちゃんずるくい。私もく」

他のメンバーはまだ食堂や薫は女子に捕まっている。

友希那「勇也は私のものよく」

姉さんまで！何言ってるんだ？

リサ「むー友希那ずるういよ〜」

リサまで壊れていた。

勇也「まさか…」

俺はなんとかその場から抜け出しさつき食べたチョコのパッケージを見た。

するとそこにはアルコールが入っていると書かれていた。

勇也「あんのババア」

その頃

祖母「なんかこのチョコ甘いわね〜」

パッケージには普通のチョコが書いてある。

祖母「あはは勇也に間違えて渡しちやったか〜。まあ大丈夫でしよう」

燐子「勇也さーんどうして逃げるんですかー」

燐子って酔うとすげえ饒舌だな。

意外だ。

日菜「あひやひやひやまてまてー勇也くーん」

日菜は余計に壊れた感あるし。

千聖「ただいまー」

そこに千聖と花音が帰ってきた。

花音「勇也くん何してるの？」

勇也「とりあえず助けてくれる。後で説明する」

その後は千聖が彩を抑え花音が燐子を抑えてくれたので後は簡単だった。

残りのメンバーにもう少しチョコを食べさせてその後少し暴れた

ら全員動かなくなった。

アルコールをとった後に急に動くとアルコールがよく回るからその応用をただけだけど……

千聖「それでどういうことなの？」

勇也「実はーってわけなんだよ」

花音「大変だったね」

勇也「本当に危なかったよ。助かったよ二人とも」

実際あのままはかなりやばかった。

その後に麻弥と薫も帰ってきた。

そのまま寝ることになり俺は眠れずにホールに向かった。

ホール

薫「おや眠れないのかい？」

勇也「まあな」

薫になら聞いたら答えてくれるかな。

試しに聞いてみよう。

勇也「薫ちよつといいか？聞きたいことがある」

薫「ああ、構わないよ。どうしたんだい？」

勇也「人を好きになったらどんな風になるんだ？」

薫「夢い質問だね」

まじめに答えてくれ。

薫のこういうところよくわからん。

そもそも夢いってなんだよ。

薫「ただ一緒にいると楽しい気持ちになる、それに自然に目で追っ
てしまうなどが代表的な例かな」

ちよつと待ってくれそれって俺がリサに……

考えていると顔が熱くなってきた。

薫「おや随分顔が赤くなっているが大丈夫かい？」

勇也「ああ、大丈夫。ありがとう助かったよ」

薫「力になれたなら何よりだ。ああ儂い」
俺はその場から離れて一人になった。

まさか俺がリサにしていることや思っていることがそのまま出てくるとは思いもしなかった。

リサと一緒にいると楽しいしなぜか自然で目で追う節はあった。けどまさかね

この時も自分の思っていることが信じられなかった。いや多分信じたくなかった。

リサみたいに綺麗な世界で生きてるやつとなりに俺みたいな過去に縛られてるやつは似合わない。

リサにはもつと相応しいやつがいる。

勇也「寝よう」

俺は部屋に帰って眠った。

起きて朝飯を食べていくとホールに全員が集まった。

教師「今日は自由行動とします。14時にバスに戻ってきてね」
自由行動か。

少し考えたいこともあるし一人で行こう。

リサ「勇也。一緒にいこーよ」

勇也「悪い。ちよつと一人で出かけてくるわ」

リサ「勇也……」

俺はその場から抜けて一人でウロウロし始めた。かなり歩いてわけもわからないところに着いた。

最悪タクシーでも引っ張ったらいからどうでもいいが……
すると後ろから数人のけはいがする。

勘違いの可能性が高いが……

勇也「だれ？」

「よお久しぶりだな」

勇也「えっと誰？」

「昔お前の腕に鉄パイプ振り下ろしたやつだよ！」

ああーそんなのもいたな。

全然思い出せなかった。

勇也「で、何の用？」

「おまえを倒しにきた」

何このバトル漫画であるような展開。

勇也「あっそ。興味ないからじゃーね」

俺は後ろ向いて歩き始めた。

「待ってって言ってるんだろーが」

後ろから殴りかかってきたので俺は避けて手をひねりあつという間に背後を取った。

勇也「まだやる？これ以上やるなら相手してあげるけどやめるなら今のうちだよ」

「舐めんなー。やっちまえー！」

すると数人がやってきたがなぜか動きがよく見える。

そのまま全員を殴り飛ばし終わった。

勇也「んじやーね」

俺はその場から離れて一人で海岸に行った。

海岸

一人で砂浜に座っていた。

この時期はあまり泳いでる人いなくこの時間は見るところ誰もいなかった。

勇也「はあ今でも信じられないや」

たしかに自覚し始めてから余計にリサのことを考えるようになった。

いくら割り切っても割り切れない。

「やー。うやー。勇也ー!」

俺を呼ぶ声があったからそつちを向くとリサがやってきた。

勇也「リサ!なんでここが?」

リサ「なんとなくな。勇也ならここにいて思ったし」

勇也「なんでなんだ?俺は今回断つたはずだぞ」

リサ「うん。けどあの時の勇也の声震えてた。あの時の言葉が本心じゃないことはすぐにわかったよ」

はあそんなに声震えてたかな。

恥ずかしいや。

リサの隣にいるのは無理でもリサを支えるのはいいよな。

勇也「んじやどつか行くか。まだ時間あるし」

リサ「うん!」

リサ side

あたしは勇也を誘って断られた後にすぐに彩に言われて勇也を追いかけた。

あたしは勇也に助けられてばかりだけどなんだかあの時の勇也はいつもと感じが違った。

なんだか勇也が遠くに行つちやいそうな感じがした。

あたしは勇也の行った方向に走って行ってそこで通りすがりの人たちに聞いて勇也のいるところがわかった。

みんなにはちよつと用事を思い出したって言っただけだから心配されるけど勇也が心配でこの時はもうそんなこと忘れていた。

海岸に着くと一人で砂浜に座っている勇也を見つけた。

あたしはやっぱり勇也が好きなのを抑えられない。

この気持ちは本物だから…

リサとあった後はタクシーでさっきのところまで戻ってはしやぎまくった。

いろんなものを食べたりお土産を買ったりした。

もちろんあの時お世話になった人にも買った。

しばらくするとみんなに出会った。

友希那「勇也どこに行ってたのよ！」

勇也「悪かったって」

その後はみんなで合流して時間まで遊んだ。

そこからはバスに乗り込み空港に向かって出発した。

空港までは早く着き空港での待ち時間が長かった。

空港

教師「まだ飛行機まで時間があるのでゆっくりしてください」

俺は少し離れたところでゆっくりしているとばあちゃんがきた。

祖母「おつかれ。今回はありがとね。助かったよ」

勇也「こっちこそありがとう。それよりあのチョコはワザとか？」

祖母「そんなわけないだろ。たまたまだよ」

祖母「それより勇也あんたが髪その色になったのってやっぱりあの

時からかい？」

勇也「ああ、それ以上は聞かないでくれ」

祖母「悪かった。辛い記憶だったね」

勇也「未だに過去に縛られてるだけだよ」

祖母「それじゃあそろそろ時間だから行くよ」

喋っているとあつという間に時間が経っていたようでそろそろ時

間みたいだ。

祖母「あ！そうだ。一つヒントをあげよう。気持ちは言葉にしない

と伝わらないよ。リサちゃんにもね」

勇也「!!なんのことだ?」

祖母「あはは相変わらずだね。それじゃあね」

勇也「ああ、またな」

俺はそこで別れて飛行機に乗り込んだ。

飛行機では行きとは違い全員が疲れているのか比較的寝ているやつが多かった。

それに今から帰ったから夜になってると思う。

隣はリサだが疲れて寝ていたので俺はずっと外を見ていた。

そのまましばらくするとちらほら起き始めた。

リサ「んん勇也起きてたんだ」

勇也「まあ寝れなくてな」

リサ「向こうに着いたら聞きたいことがあるからいい?」

勇也「ん?なにを聞きたいんだ?いいけど。ここじゃダメなのか?」

リサ「ここはちよつとね」

そのまま飛行機は空港に着いて全員が別れて帰った。

修学旅行くその後

空港に着くといろんな帰り方をする人ばかりだった。

親に迎えにきてもらう人、電車で帰る人、タクシーを使う人などがいた。

リサ「勇也ちよつといい？」

勇也「ん、いいよ。あのことか？」

リサは頷いて俺とリサは近くのカフェに入った。

みんなは興花の家の車で帰った。

カフェ

リサ「勇也はさなんであたしが男の子の前にも拒絶反応が出なくなつたと思う？」

勇也「分からん。候補はあるけどな……」

リサ「何？なんでもいいから教えて！」
体を乗り上げて聞いてきた。

近い近い。

勇也「一つ目の可能性は俺といたこと。言うの恥ずかしいな。けど俺といても拒絶反応が出なかった。だから周りにおいてもプラスとマイナスの結果だと思う」

リサ「あーたしかに。それで二つ目は？」

勇也「あれだな。演奏中あの感覚があつたら。それで演奏に集中して気にならなかつたかな。こっちの方が可能性高いけど」

リサ「うーんどうなんだろう（あたし的には勇也といたからだと思っただけだな）」

しばらくそこでゆっくりしていた。

リサはあくびばかりしていた。

リサ「それでね勇也……あの……その」

勇也「どうした？」

リサ「その……あたし……勇也のこと」

勇也「??」

リサ「ううん。やっぱりなんでもない。今度一緒に料理しよ！」

勇也「ああ、いいよ」

あーびびった。

告白されるのかと思った。

けどそんなことはまずありえない。

リサは俺のことをなんとも思っていないのだから……

あーあたしのバカ！

なんであそこで止まるのかなー

勇也も鈍いよ

勇也「それじゃあ帰るか」

リサ「う、うん」

タクシーを呼んで俺たちはそれに乗って家に帰った。

家に帰った後も服出ただけでベッドに倒れこんでそのまま眠った。

そこから3日間は休みで仕事も特になく俺たちはゆっくりしていた。

学校

学校行く日になり蘭たちに渡すお土産を持って行くことにした。

リサたちより早く出て山吹ベーカーリーに向かった。

沙綾「いらっしやいませーって勇也さん」

勇也「おはよ。後これ家族にとポピパのメンバーに渡しといてくれる?。」

沙綾「え!ありがとうございます」

勇也「うん。後これよろしく」

俺はパンの会計を済ませ店を出た。

そのまま学校に行き教室でパンを食べていた。

時間になりHRが始まった。

教師「修学旅行お疲れ様でした。それで今日の6時間目に文化祭の出し物を決めたいと思います。少しでいいから考えておいてね」

マジかもうそんな時期。

ってか行事多くないかな。

興花「文化祭かーなににする?。」

勇也「なんでもいいけどな」

リサ「勇也当日休もうとしてるでしょ」

なぜバレた。

リサ「だってなんでもいいって言う時大体休む時だもん」

勇也「わかったよ」

そこからも授業を受け春休みになった。

昼休みは少し早く弁当を食べ俺は屋上に向かった。

屋上

ドアを開けると探していた人たちがいた。

モカ「あー勇也さんだー」

勇也「モカは相変わらずだな」

ひまり「それでどうしたんですか?」

勇也「あ!そうだそうだ。これ」

俺は一人一人に袋を渡した。

蘭「これって？」

勇也「ああ、沖繩のお土産だよ。とりあえず食べ物と一人一人がキーホルダーぐらいしかえなかつたけどな」

つぐみ「開けてみてもいいですか!？」

つぐみがここまでテンション高いの久しぶりに見るな。

勇也「いいよ。センスないから期待すんなよ」

一人一人バントで演奏している楽器にハイビスカスがついたのを買ってみた。

巴「ドラムなんてあるんですね！」

蘭「綺麗」

買ったのは透き通るようなガラスのものだった。

もちろんある程度硬い。

ひまり「ありがとうございます、勇也さん」

勇也「ん、んじゃ俺帰るわ」

蘭「はい。ありがとうございます」

俺は教室に帰り残りの時間机にうつむせになっていた。

5時間目も終わりのよいよ6時間目になった。

6時間目 (リサ side)

勇也はあまり興味なさそう寝ていた。

教師「まずはこのクラスから実行委員を選ぶわよ。といっても二人なんだけどね。男子から一人。女子から一人ずつ」

「それに入ったらなににするんですか？」

教師「生徒会と連携しているんなことをしてもらうわ」

「めんどくさー」「それはちよつとね」

教師「男子はそうだな、決まらなそうだから寝てる湊くんにしておくわ。本人には私から言つとく」

勇也は寝ていたから勝手に決められていた。

教師「女子でやりたい人いる？」
そこであたしが少し手を挙げた。

リサ「それって用事があるときは抜かれるんですか？」

教師「それは生徒会に行ったら抜かれるわよ。流石にそこまで強制はできないわ」

リサ「じゃ、じゃああたしやります」

教師「それじゃあ今井さんよろしくね」

「結果あたしと勇也がやることになった。」

教師「次はこの教室の模擬店を考えるわよ。なにがいいかしら」
ほんとにこの担任ゆるいよ。

なんだかモカ見てるみたい。

そのまま話し合っても候補は出たけど結局決まらなかった。

候補はメイド・執事喫茶

和風喫茶

後は普通の飲食店だったなー

勇也「んん、あーよく寝た」

リサ「勇也起きた？」

勇也「あー起きたよ」

リサ「それより前見た方がいいよ」

俺は前を見てみると文化祭実行委員のところに俺の名前が書かれていた。

勇也「なんで!?!」

教師「寝てたから強制だ。異論反論講義口答えは許さん!」

どっかで聞いたようなセリフだ。

勇也「マジですか……………」

教師「ちなみに今日の放課後生徒会室に行けよ」

勇也「はーわかりました」

名前を見るとリサの名前もあった。

興花「しばらくは仕事ないからそっちに行っても大丈夫だよ」

勇也「りよーかい。それじゃあ行こっかりサ」

リサ「うん」

俺たちは二人で生徒会室に向かった。

生徒会室

つぐみ「あ！勇也さんとリサさん」

勇也「もう集まってる？」

つぐみ「はい。もう集まってます」

俺たちは中に入るともうすでに集まっていた。

生徒会長「今回はありがとうございます。それじゃあ早速始めてい

きたいから手元の紙を見てね」

そこに書いてあるのはざっとしたものだった。

役職を今回決めるとか、その役職について書いてあった。

生徒会長「見てもらった通り実行委員長を決めます。だれかしたいですか？」

だれも手を挙げない。

挙げる気配すらない。

そこで一人の男が手を挙げた。

???「それじゃあ僕やっていいですか？」

生徒会長「いいよ。それじゃあ名前は？」

???「はい。宮田 大輝です」

生徒会長「はーいそれじゃあ宮田くんに決定！後はみんなで支えていこう」

うーんなんかゆるいな。

それに副実行委員は決めなくていいのかな？

そこからはパソコンを使っていろんなことをしていた。

リサは少し苦手なようでちよくちよく聞きに来ていた。

生徒会長「はい。今日はここまで。お疲れ様でした」

勇也「帰るか」

俺はカバンを持って出て行った。

リサ「ちよつと待ってよ」

勇也「悪い悪い。先にあそこから出たかったんだ」

二人で帰っていると後ろからつぐみが来た。

つぐみ「お二人ともお疲れ様です」

リサ・勇也「おつかれ」

つぐみ「それにしても意外でした。リサさんはともかく勇也さんまで来るなんて」

リサ「あはは、聞かないであげて。勇也無理やりだから」

勇也「はあ。全く面倒だ。それに……」

つぐみ「それにどうしたんですか？」

勇也「ううん。なんでもない。あの生徒会長ってあんな感じなの？」

つぐみ「そうですね。いつもあんな感じですよ」

勇也「そっか」

あの生徒会長を変えない限りこれは失敗する。

そのまま歩いているとつぐみの家に着いたので別れて帰って行った。

結局何も進まずに数日経った。

原因は実行委員長が自由参加にしたことだ。

実行委員長曰くクラスの方が大事だとかアホみたいなことを抜かしていた。

生徒「追加です」

俺の隣にわけのわからない量がたまっている。

俺多分紙で誰が作業しているかわからないぐらい。

リサは今日バンドの練習でいない。

宮田「ごめん。クラスの方行ってた」

こいつマジで殺したい。

心に思いつつ作業は進めた。

そこに近づいてきた。

宮田「大変そうだね。手伝おうか？」

勇也「どつかの誰かさんが大変なことをしたせいで仕事が多いんだよ」

宮田「おやおや、それは大変だ。自分のところにも少しあるのでそれに終わらせてくるよ」

そう言い何処かに行った。

その時に俺のケータイが鳴ったので部屋から出て見るとそこには C i R C L E と書いてあった。

勇也「はい」

まりな「ごめんね。いきなりかけて」

勇也「いやそれはいいんですけどどうかしました？」

まりな「それが1ヶ月後に少し大きいイベントがあるんだ。そのサポートでしばらくうちに来てくれないかな？」

勇也「それって俺が C i R C L E で働くってことですか？」

まりな「そうなんだ。けど勇也くんのこと優先だから仕事を優先し

て空いてる時間手伝って欲しいんだ」

勇也「わかりました。しばらくしたらいくんでまたお願いします」

まりな「こちらこそよろしくね」

俺は部屋に戻り半分ぐらい終わらせて部屋を出ようとするま
まっ

宮田「どこに行くんだい？まだ仕事があるよ」

勇也「自分の仕事終わらせてから言え。俺にも用事があるんだよ。
お前が勝手にそういうルールにしたんだろ。っていうか俺はリサの
分合わせても既に終わってる」

そう言い俺はC i R C L Eに向かった。

C i R C L E

入るとまりなさんは待つていたかのように近づいてきた。

まりな「ごめんね急で」

勇也「いえ、お世話になってるんで気にしないでください」

まりな「それじゃあ早速教えていくから着替えてくれる？スタッフ
ルームに服が入ってるから」

勇也「わかりました」

俺はスタッフルームに行き着替えた。

といつても黒のカッターシャツだが……

まりな「うん。それじゃあ勇也くんの場合チューニングや設定は基
本的にできるからあとは受付やレジのこととあとは物の場所だけだ
ね」

そこからは少し教えてもらいその日は終わった。

帰ろうとするとちようどりサたちが出てきた。

リサ「あれ、勇也じゃん。何してんの？」

勇也「しばらくここでバイトだよ。空いてる時だけけど」

リサ「へー頑張ってるね」

あこ「勇也さんなんで気づかないのかな？」

燐子「あこちゃん……それはいつちや……ダメだよ」

リサ「それじゃあ先に帰ってるね」

勇也「ああ、じゃあな」

リサたちはそこで帰った。

まりな「勇也くん。時給はこれぐらいでいいかな？」

見せられたのは普通のところより少し高い額だった。

けどこれは何かおかしい。

確かこの時給より少し高い。

勇也「これなんか高くないですか？」

まりな「え!?え、そんなことないよ」

俺とは顔を合わせずにいった。

勇也「これはというか時給はいりません。またお願いができた時に
お願いします」

まりな「え?でも……」

勇也「高いのは大方まりなさんが自分の金を出そうとしたんでしょ
う。まりなさんは自分の生活もあるのにそんなことをしちやダメで
すよ。だから今度俺のお願い聞いてくださいね」

まりな「わかった」

勇也「後時給つけるなら俺の分全部まりなさんにつけていただき
い」

まりな「え?ええええええー」

その時のまりなさんの声はC i R C L Eだけにとどまらず外にま
で聞こえたのかなんとか。

俺は帰ると帰り道に生徒会長がいた。

勇也「どうも」

一言いい頭だけ下げると手を掴まれた。

勇也「あ”?”」

生徒会長「ヒイ」

怒るつもりじゃなかったけどつい反射で出てしまった。

勇也「あ、そのすいません。わざとじゃないんです」

生徒会長「う、うん。それと少し話したいんだけどいいかな?」

勇也「公園でいいなら」

生徒会長「うん。いいよ」

俺たちは公園に移動した。

公園

俺は二つの飲み物を買おうと渡した。

紅茶だが……

勇也「それで話ってなんですか?」

生徒会長「今日どうして帰ったの?」

この生徒会長何いってんだ?

勇也「あの質問の意味がよくわかりません」

生徒会長「だからなんで帰ったのって?」

勇也「だからその質問の意味がよくわからないんです。あの実行委員長はそれを許可してみんなが来なくなり、仕事が回ってきた。けど俺は今井さんの分と自分の分を合わせてもゆうに超える量をしました。」

それで帰るのがおかしいっていうのはそつちの勝手な押し付けです」

生徒会長「それは……そうだけど」

勇也「話は終わりです。では……」

俺は立ち上がってその場から去った。

多分もう少し話したら爆発しそうだった。

自宅に帰ってもイライラは収まらず部屋に一直線に向かった。

『コンコン』

リサ「勇也入っていい？」

勇也「ん、リサか。いいよ」

リサ「どうしたの？帰ってきてから様子がおかしいよ」

勇也「何にもないよ」

俺はリサとは目を合わせなかった。

自分がやってるのが最低なのはわかってる。

けど今リサの方を見たら俺はどんな顔をしてるかわからない。

リサ「そっか……あたしは何も言わないけど勇也は一人で抱え込ん

じやうから無理する前に必ず言っただけ」

リサはそういう部屋から出ていった。

勇也「まったく優しすぎるよ」

俺は眠った。

次の日になりいつも通り学校に行くと呼び出しを食らった。

「今から言う人は生徒会室に来てください。湊勇也くん、湊友希那さん、今井リサさん、氷川日菜さん、瀬田薫さん、大和麻弥さん、美竹蘭さん、羽沢つぐみさん、宇田川巴さん、青葉モカさん、上原ひまりさん以上です」

近くにいたりリサと日菜驚き一緒に行くのと既に全員がいた。

中に入ると生徒会長と宮田がいた。

生徒会室

生徒会長「よく来てくれました。あなたたちにお問い合わせがあります。文化祭でライブをしてくれませんか？合同ライブです」

ひまり「やるやる！やるよね蘭？」

蘭「うん。いいと思う」

勇也「なんで俺が……」

あと聞くけどこれは誰が企画した？」

つぐみ「ゆ、勇也さん」

俺は多分声色が変わっていたと思う。

俺の予想が正しければ……

宮田「僕と生徒会長で話しました」

勇也「なら俺はやらない。それじゃあ」

全員「!!」

俺は扉を勢いよく閉めて部屋から出て行った。

リサ「ちよつと！勇也!？」

宮田「まあ彼なしでもいいでしょう。やってくれますか」

日菜「その言い方はなに？勇也くんはおまけ扱いなの？」

宮田「そう聞こえましたか。失礼」

リサ「ちよつと日菜もおちついて！返事はまた今度でいいですよ
ね」

宮田「ええ構いません」

全員が部屋から出た。

日菜「あーなんなの!?!なんであんな言い方なの」

全員（日菜「さん」がいつちやダメだと思う）

そこで別れて教室に戻った。

教室に戻ると勇也はいなかった。

リサ「興花勇也は？」

興花「なんか怒って帰ったよ」

リサ「そっか……………」

やっぱり勇也は何か抱えてるんじゃないかな。

けど普通に聞いてもいつてくれないよね。

あたしは頭を抱えて唸っていた。

日菜「リサちーどうしたの？頭痛いの？」

リサ「違う違う。そんなんじゃないよ」

勇也は何を悩んでいるの？

結局頭にきて俺は帰ってきていた。

勇也「はあ、変わらないな俺は」

独り言を呟いても返す人はいない。

何するか考えても何も出てこなかった。

勇也「寝よう」

その日からなんだか体の異変にまだ俺は気づいてなかった。

文化祭 vol 2

目を覚ますと俺の手を握って寝ているリサと姉さんがいた。

勇也「ほら二人とも起きて」

リサ「んんー勇也起きた？」

友希那「zzz」

勇也「まだ寝てるみたいだな。起こさないように移動しようか」

リサ「そうだね」

俺とリサは姉さんを起こさないように静かに移動した。

リビング

リサ「勇也はあの二人と何があったの？」

勇也「何にもないよ」

これを説明するためにはリサのことまで話さないといけない。

そうなる通りサは自分のことを責めるから話せない。

リサ「そっか……。けど前にもいったけど一人で抱え込まないでね」

勇也「ああ、わかってる」

友希那「勇也なんで起こしてくれなかったの？」

勇也「一応起こしたよ。けど起きなかったんだよ」

友希那「そ、そうなのね」

ずいぶん顔を真っ赤にして言っていた。

勇也「飯作るよ。なんでもいい？」

友希那・リサ「うん、ええ」

そこから作って食べ終わって片付けをして部屋に戻った。

自室

入るとリサと姉さんがいた。

勇也「なんで勝手に入るのさ」

リサ「ご、ごめん。けどどうしても聞きたいことがあって」

勇也「?なに」

友希那「あなた過去になにがあったのかしら? 何かに縛られてる感じだわ」

とうとう話す時が来たのかな。

勇也「今は話せない」

友希那「どうしてかしら?」

勇也「俺は今のはつて言ったんだよ。だから明日二人が信頼できるメンバーを連れて来てくれ」

リサ「わかったよ」

二人は出て行った。

これでよかったんだ。

多分これを話すと二人は多分自分を責める。だから支えるやつが欲しいんだよ。

そのまま眠ったが俺は夜中に目が覚めた。

勇也「ちよつと散歩するか」

俺はケータイと財布だけ持って散歩に出た

公園に行きベンチに座っていた。

こういう時に静かなのは少し落ち着く。

「めて、やめて、やめてってば」

勇也「はあ」

耳がいいのも少し悩みものだな。

声がる方向に行くと数人の男が女を囲んでいた。けどなんかみたことある髪の色してるような……

??? 「やめてください」

この声まさか……

勇也 「ひまり!?!」

ひまり 「勇也さん!」

「なんだテメエ」

「殺すぞ」

はあまつたく。

勇也 「あんまり強い言葉使わないほうがいいよ。弱く見えちゃうよ」

その言葉を逆行したのかまとめて襲いかかって来た。

けれどかなり遅く膝や足を引っ掛けてこかした。

「クソー!」

「なんであたらねえ」

勇也 「まだやる? 今度からは俺も攻撃するよ」

「チィー引くぞ」

よくわからないが何処かに行った。

ひまり 「勇也さん!!」

ひまりは俺に向かって飛び込んで来た。

勇也 「うわ!」

俺は支えきれずに倒れた。

ひまり 「ううく怖かったです」

勇也 「うん。間に合ってよかったよ」

それにしても苦しい。

いやけどなんだか気分は悪くない……

勇也 「それよりどいてくれ。死ぬ」

ひまり 「へ? ああ! ごめんなさい」

勇也 「少し移動しようか」

俺たちは俺がさつきいた公園にやって来た。

公園

近くの自販機で飲み物を買ってひまりに渡した。

ひまり「あ、ありがとうございます」

勇也「それでなんでこんな時間に出歩いてたんだ。幾ら何でも危ないだろ」

ひまり「そのバイトで次のシフトの人が寝坊してくるまで残って欲しいって言われて」

幾ら何でも遅すぎる。

もう12時回ってるんだぞ。

勇也「はあ理由はわかった。危ないから次からはなるべく断ろうな。無理な時は俺に連絡くれたら迎えに行くから」

ひまり「くくくくくく！わかりました」

勇也「送っていくよ」

ひまり「はい！」

俺はそこからひまりの家まで送って行き別れた。

そこから少し散歩しているとさっきのやつらが来た心なしかさっきより人数が多いような。

「さつきみたいには行かないぞ」

勇也「ふうー懲りないな。今度は攻撃するよ」

「構わねえやっちまえ」

さつきは確か3人だったから今度は5人か。

そこからのものの数分で俺の足元に倒れこむ姿が五つあった。

俺はしやがみこういった。

勇也「まだやるなら相手してやる。けどなそのために俺の知り合いに手を出したらこんなもんじゃ済まないぞ」

「は、はい」

俺は確認だけして家に帰った。

家に帰り寝て次の日になってがっこうにむかった。

その日は実行委員会に顔を出さず俺は帰ると家にはすでにかなりの靴があつた。

リビングにいたのは沙綾、有咲、After glow、Pastel*Palette

リサ、姉さん、紗夜、美咲と花音だった。

ポピパの残りのメンバーはりみは刺激が強いから他の二人はいると話がややこしくなるからハロハピも同じ理由らしい。

リサ「さて勇也話してよ」

勇也「それじゃあ話そうかな。縛り続けられている理由を」

勇也「それじゃあ話そうかな。俺の過去」

勇也「昔リサと姉さんは知ってるかもしれないけど俺が一ヶ月ぐらい登校してなかった時があったんだよ。

その時に俺は家の地下室に入れられてたんだ」

友希那「地下室!? そんなのあの家にあるのかしら?」

勇也「なんであるかは知らないけど。

そこに連れられて俺は玩具にされたんだ。

そこからはベッドに固定されて輸血と同時に身体中の至る所に刺された。

血さえなくならなければ死ぬことはないからな。

そこからも立たされて吊るされて鞭でしばかれたりもした。

そこからはあまり思い出したくない」

勇也の体は震えていた。

勇也「泣いても叫んでも誰も助けてくれない。

そんな地獄が続いて俺は心も折れた。

そんな時にあいつは俺を地下室から出してこういったんだ。

『今はここまでだ。お前は夏になっても長袖を着ている。バレたら面倒だからな』って

俺は逆らう気力すら出なかったから従った。

その時に今の髪の色になったんだ。

激しいストレスや怒りでなったんだと思う。

そこからも地下室に入れられることはなくなっただけで暴力が止むことはなかった。

ちよつとしんみりさせたな。

悪い」

沙綾「そんなの親のすることじゃない！」

沙綾は大きい声でこの空気を変えるかのように言った。

勇也「さ、沙綾？」

沙綾「親は子どもが育つまで見るんです！それを自分のストレス発散のためだけに使うなんて親じゃない！」

有咲「沙綾落ち着けて」

沙綾「え？あ、ごめんなさい。つい」

勇也「ううん。ありがとう」

モカ「モカちゃんお腹空いちやいました。あー勇也さんの料理食べたいな」

モカは強引に俺でもわかるぐらい話題を変えた。

少なからずリサや姉さんはショックを受けているようだし他のみんなも自分のことのようにショックを受けていた。

巴「お、おいモカ！」

勇也「いやいいよ。作るわ。みんなも食べる？」

全員「はい！」

そこからは料理をしていたが俺は自分がなんでこんな話をしたのかさえ全く分からなかった。

優しすぎるみんななら、必ず傷つくことはわかっていたはずなのに

……

勇也「いた！」

はあ、考え事をしながら料理するもんじゃないな。

つぐみ「勇也さん！」

勇也「大丈夫大丈夫。慣れてるから」

つぐみ「ダメです！座ってください」

つぐみに怒られた。

いや正直に言うところまで言われると思ってなかった。

つぐみ「少ししみますよ」

つぐみは丁寧に治療してくれた。

つぐみ「勇也さんの過去が辛いのはわかりました。なら、ここから私たちといっぱい楽しいことをしましょう」

つぐみはそういつた後恥ずかしいのか顔を真っ赤にしていた、

俺は何も言えなかった。

まさかこんなことを言われると思っていなかったから。

つぐみの頭に手を置き「ありがとう」

そういつた。

つぐみ「くくくはい！」

俺たちは料理をするために戻った。

勇也「はいはいーいできたから机の上開けて」

モカ「わく待つてました」

姉さんとリサは紗夜と日菜に慰められていた。

勇也「いつまでショック受けてんだ。姉さんもリサも飯できたよ」

リサ「だつてあんな話聞いたら」

『グウ~~~~~』

勇也「体は飯を求めてるみたいだよ」

リサ「~~~~~バカ」

リサは急ぎ足で机のところに向かっていつた。

紗夜「さあ湊さんも」

友希那「え、ええ」

全員が座りみんな好き好きに食べ始めた。

日菜「それで勇也くん。あの話どうするの？」

あの話、つまり文化祭のことか。

勇也「今は受ける気はない。けどみんなはどうしたい？」

日菜「あたしは出たくないな。だつてあんな言い方されてまで出

る必要ないと思うし」

蘭「あたしは、勇也さんと演奏したいから出たいです」

ひまり「わぁー蘭が素直になってる〜」

蘭「な、なってるない!」

勇也「それじゃあとりあえずやって見るか。あの生徒会長と宮田は俺がなんとかする」

一応考えもあるしな。

日菜「えー受けるのかー。まあ勇也くんと演奏できるならいいかな〜」

千聖「はあ私たちも行けたらいいんだけどね」

勇也「千聖たちは見に来てくれよ。いいライブにするからさ」

千聖「ええ!もちろんよ!」

そこから食べて結局みんな家に泊まることになった。

次の日の放課後

俺は実行委員会に行った。

手札を揃えて

宮田「やあ、君に仕事が残ってるよ」

勇也「お前と生徒会長を下ろす」

宮田「な、な、一体どんな権限があつて……」

勇也「これだよ」

俺はそういう紙を見せた。

そこには教師たちそしてこの実行委員会にいるメンバーの署名があつた。

理事長の氏名もある。

宮田「こんなのは認めない」

紙を破ろうとしたので俺は予備を出した。

勇也「お前がいくら破ろうと無駄だよ。俺にはまだまだスペアはある」

生徒会長「どうして私まで!？」

勇也「あんたも同罪だよ。こいつの暴走を止められなかったんだから。生徒会長あんたを生徒会長という席から下ろす」

生徒会長「そんな……」

勇也「どうだ。自分が目立とうとして名乗り出た結果がこれだ」

宮田「くそー」

宮田はどこかに走って行った。

部屋の中はだんまりしている。

勇也「さて俺が実行委員長をする。1つ目に全員が参加だ。2つ目自分の仕事をこなしてもらおう。以上!」

全員「ワアーアー」

そこで歓声が上がった。

勇也「さてさっさと終わらせてクラスの方に行こうか。自分のを終わらせると手伝うもよし!帰るもよし!クラスの方に行ってもよし!

さっさと終わらせるぞー」

そこからはみんなあつという間に仕事を終わらせた。

つぐみ「生徒会長を下ろしたはいいんですけど誰が生徒会長やるんですか?」

勇也「まだ考え中だ。理事長からの許可ももらってる」

そこにみんなが入ってきた。

日菜「いや〜スカツとするやり方だったね」

勇也「なんだ聞いてたのか」

蘭「それでライブはどうするんですか?」

勇也「やるよ。みんないいよな?」

全員「うん!はい!」

俺も自分の仕事を終わらせて出る頃には夕日も落ちていた。

勇也「ふわあ〜」

リサ「はいお疲れ様」

リサはそっぴい俺にコーヒーをくれた。

「勇也「あれ？練習は？」

リサ「ちよつと休憩中」

リサたちは学校の空き教室で練習中だ。

リサ「勇也あの、その、昨日の話気づけなくてごめん！」

勇也「リサや姉さんが気にしなくていいよ」

リサ「でも！あたしはいつも隣にいたのに気づけなかった」

勇也「ほらみんな待ってるよ。早く練習してこいよ」

リサ「勇也……ごめん」

リサはそういい戻って行った。

コーヒーを飲むと少しほろ苦かった。

はあ、あたしはやつぱり勇也と距離が近すぎて勇也のわかってるつもりで何もわかってなかったんだ。

だからあの時沙綾が叫んだ時に後悔した。

近すぎてあたしには言えなかった、分からなかった言葉を沙綾は言っただから。

友希那「リサ、またズレてるわよ！」

リサ「ご、ごめん」

集中しないと。

終わってもそのまま頭から離れることなかった。

俺は自宅に帰るとリサはリビングでソファアにうずくまっていた。

勇也「えーと何してんの？」

リサ「ちよつと考え事」

勇也「そつか。そのまま寝るなよ。風邪引くぞ」
リサ「うん」
そのまま倒れて俺は眠った。

次の日はセットリストを考えると言われた。

仕事を終わらせて向かうとみんなはいた。

友希那「遅いわよ」

勇也「悪かったよ。それじゃあ考えようか。セットリスト」

麻弥「ある程度は決まってるんですけどまだ完全じゃないんですよ」
ね

紙に書いてあるのを見るとそこには確かに曲が書かれていた。

天体観測、恋空と雨音、流星、Boys be Ambitious

S!!、シャルルが書かれていた。

このアニソンは誰が入れたんだろう。

勇也「それでどんな感じなの？もう練習してるんだろ」

蘭「少しそこで座って聞いてください」

そこから全員での演奏が始まった。

聞いてて思ったのはレベルの差がある。

姉さんと蘭にも差があったし、ひまりとリサのベースにも差がある。

なによりドラムとギターが致命的だ。

ドラムは麻弥は技巧派巴は力押しとでも言えばいいのだろうか。

かなり実力の差があった。

これはまだなんとかなる範囲内だが一番ひどいのギターだ。

元々唯一3人のところで合わせにくいのもあるがそれでも実力の差がひどい。

天才の日菜がずば抜けて上手いのとそこまでじゃないがなんでも

器用にこなすモカ、おそらく始めたばかりでまだその領域までいけない薫はかなりしんどい。

勇也「はあくくくく。これはヤバイな」

みんな顔を引きつらせている。

友希那「やつぱりそうよね」

勇也「まあまだボーカルとドラム、ベースははなんとかなる。キーボードは元々一人だからそこまでじゃないけど」

蘭「どうやったらいいんですか？」

勇也「ちよつと厳しいこと言うぞ。それでもいいか」

蘭「構いません」

勇也「なら、蘭今回はギターを辞めてもらう」

全員「!!」

全員が驚いていた。

なにより蘭が驚いていた。

蘭「つ、理由を聞いてもいいですか？」

勇也「1つ目はギターにどうしても手を取られるということ。

姉さんはボーカルしかやってない。というかそれしかできない。

つまりはそれだけそこだけに集中できるということ。

2つ目に今回はいつものライブと違い、曲数がまだまだ多くなる。

そのせいでボーカルに集中してほしい。ギターを加えると蘭は両

方頑張ろうとする。それで倒れて欲しくない。これが理由」

蘭「勇也さんはあたしに倒れて欲しくないんですか？」

勇也「???なにに当たり前のこと聞いたんだ？蘭に倒れられたら俺も

悲しいしなによりモカたちはもつと悲しむだろ」

蘭「わかりました。今回だけボーカルに集中します」

勇也「次にドラムだけどこつちはもつと単純だ。巴が麻弥のやり方を実践すればいいんだから」

巴「へ?そんなのわかってますよ!それができないから困ってるんです」

勇也「なら麻弥のやり方を見ててみ。多分巴でもすぐにできること

をしてるよ。というかそこを重点してやってると思う」

麻弥「あはは、まさかバレてるなんて思いませんでしたよ」

巴「何をしてたんですか!？」

勇也「簡単なことだよ。ドラムを叩く時正確にはその前に全身の力を脱力してるんだよ。」

そしてそのおかげで素早く高い技術が出る。

逆を言えば力強い音も出るよ。

って事で麻弥から詳しく聞いて」

巴「わかりました」

勇也「さてと問題のギターだけど薫」

薫「なんだい？」

勇也「俺と一対一で練習しようか」

薫「おや、ずいぶんと嬉しい誘いだね。もちろんだよ」

勇也「OK当面の目標は決まった。ちなみに言っとくけどこれは楽しませるためだからな！特に姉さん」

友希那「わ、わかってるわよ」

そこから各自個人練習に入った。

薫との一対一の練習はかなり大変だった。

薫も俗に言う感覚タイプだから教えるのが大変で仕方ない。

なんとか教えて少しは上手くなったと思う。

モカ「あーもうこんな時間ですね。帰りましょうか」

勇也「そうだな。かいさーん」

みんな帰って行った。

俺は一人実行委員の部屋に行き仕事をとった。

これから練習もあるから仕事を家で終わらせておこうと思ったからだ

ここからはさらに大変になりそうだな

文化祭編 Vol 4

俺は家に帰ってからパソコンにUSBをつなぎドンドン作業を進めた。

そのせいもありかなりの作業が終わったが気がつくとすでに外は明るかった。

勇也「そろそろ用意するか」

俺は結局寝ることなく学校の準備を始めた。

大人になるとこういうことは厳しいがこの年だとまだまだ動ける。

そんなことを考えては一人でシヨックを受けた。

勇也「考えることおっさんだな」

用意して俺と二人分の弁当を作り家を出た。

そのまま学校の実行委員会の部屋に向かい終わらせた仕事を置いて、次の仕事を持った。

この学校はかなり風紀が緩く授業中にいじらなければそうそう怒られることはない。

俺は大量の紙とUSBを持って屋上に向かった。

屋上

朝からメロンパンを口にくわえて仕事を終わらせるやつもなかなかいない。

これ将来俺社畜になりそう。

そんなことを考えて指と目を動かして仕事を終わらせていった。

しかしそう上手く行くはずもなく寝ていない反動がきた。

なにせこの時期は暑くもなく寒くもなく寝るのには一番いい時期だ。

俺は柵にもたれかかったまま寝てしまった。

そのまま時間が過ぎても起きることなく昼休みのチャイムが鳴った。

ひまり「それでね、モカのバイト先にスイーツ買いに行ったらひどかったんだよー」

巴「ははは、モカらしいな」

『ガチャ』

蘭「ん？みんな静かに」

つぐみ「どうしたの蘭ちゃん？」

蘭「あれって勇也さんだよね？」

モカ「ほんとだね。けど横にある紙の山や足の上に置いてあるパソコンはどうしたんだろ」

巴「ちよつと見てみるか？」

蘭「うん。そうしよう」

あたしたちは勇也さんの近くに行き置いてあるものを見た。

そしたらこれは到底一人でこなせる量じゃない。

モカ「これは一人でやれる量じゃないですね」

つぐみ「た、たしかに多いよね」

勇也「ん、んん」

俺が目覚ますとそこには蘭たちがいた。

しかもかなり近い。

勇也「どしたの？みんな」

蘭「勇也さんこの仕事はなんですか？」

俺は隠すのを忘れてそのまま寝ていたらしい。

ここで変なことを言っても逆効果な気がする。

勇也「文化祭の仕事だよ。まあかなり減ったからあと少しなんだけど、それがどうかしたの？」

つぐみ「これって勇也さんだけの仕事じゃないですよ？明らかに私たちがほかの実行委員の人たちの分の仕事まであります」

勇也「あくほら、ね。それよりみんな昼飯食べにきたんだろ。早くしないと時間なくなるよ」

モカ「あーモカちゃんとしたことが忘れてました。お腹すいて死にそうです」

巴「とりあえず食べるか」

そこから蘭たちは弁当を広げて食べ始めた。
俺も食べるか。

教室に戻るとリサと日菜も寄ってきた。

教室

リサ「勇也！どこに行ってたの？」

勇也「寝てたわ。屋上気持ちいいんだよ」

リサや日菜に知られるとまずい。

最悪取られる可能性もある。

日菜「うーん。なんかるんってこないな。まあいいや」

勇也「それより飯食べてもいい？」

そこから飯を食べて昼からの授業は受けた。

これ受けとかないと来た意味ないからな。

一応受けて放課後になり、実行委員会に向かった。

入るとそこには実行委員じゃなくバンドメンバーが全員いた。

リサ「勇也聞いたよ」

勇也「なにを？」

友希那「あなた自分の仕事だけじゃなくてほかの人の仕事まで終わらせていつてるそうじゃない」

とうとうバレた。

けどこれに関しては譲ることはできない。

譲ったらその時点で俺は多分学園祭のバンドに参加できない。

勇也「ああ、やってるよ。けどこればかりはやめられないね」

リサ「知ってる。だから貸して。あたしたちも手伝うから」

勇也「は？」

日菜「もー早く早く、あたしたちも手伝うからさ」

蘭「勇也さんのことだからあたしたちに気を使って自分一人でやる

と思っただあしたちも手伝います」

みんな頑なに譲る気配がなかったので俺の方が折れた。

勇也「わかったよ。それじゃあやろうか」

そこからみんなでやっていった。

やっぱり一人でやるより断然に早い。

リサ「勇也とんでもないスピードでやってるけど大丈夫なのあれ？」

つぐみ「どうでしょう。けどあのスピードは今までで見たことないです」

巴「ならこうしませんか？」

そこから巴の案を聞くと少し信じられなかった。

友希那「いいわね。リサ行ってきてちょうだい」

日菜「リサちーお願い！」

みんなから頼まれて断れなかった。

リサ「うーわかったよ」

あたしは勇也の近くに行き声をかけた。

リサ「勇也」

勇也「ん？どうしたリサ」

リサ「ちよつと息抜きしいこーよ」

勇也「けどなー。まだ仕事あるし…」

つぐみ「こっちは大丈夫ですから行ってきてください」

こういわれたらもう反撃できない。

勇也「わかったよ。行こっか」

俺は部屋から出てリサと屋上に向かった。

屋上

屋上に向かつて俺たちはなにも話さなかった。

そのまま時間だけが過ぎて行きなかなか話さないまま日が落ち始めた。

リサ「勇也は今って好きな人っているの？」

勇也「フア！いいいきなり、何言ってるんだ!？」

リサ「いいから答えて」

勇也「いるよ」

リサ「そう：なんだ。一応聞いてもいい？だれかって」

リサはいきなり何を言ってるんだ？

勇也「名前は言えないけどそいつは俺にとって大切なんだ。

なによりも守りたい存在。けど俺には高嶺の花で届くはずもないから勝負の土俵には上がらない。だからこの気持ちだけで十分なんだよ」

リサ「そっか：誰かは知らないけどいいねその人」

気まずい空気になったのもうここで切り上げた。

勇也「そろそろ帰るか」

リサ「そうだね」

俺たちは屋上から出て部屋に戻っていった。

はあやつぱり聞くんじやなかったな。

勇也にとつて高嶺の花なんてあたしなんか届くわけないしなー。

千聖に日菜、紗夜や興花あれ名前あげたらなんかどんどん出てくる。

勇也の周り女の子多くない？

俺たちは部屋に戻って仕事を進めていると日菜が話し出した。

日菜「ねーねーこのバンドって名前なんなの?」

勇也「名前なんている?」

つぐみ「いるんですよ。申請するとき名前がないと受理してもらえません」

全員「!!」

はあからも課題か

文化祭編 Vol.5

俺たちは結局いい案が出ず解散にした。

あのまま考えても何も出てこないと判断したからだ。

自宅に帰りベッドに倒れこんだ。

あの時俺はリサが好きだって言えばよかったのかな。

あの判断を少し後悔している。

勇也「はあいくら性能良くてもな」

今までこの頭は最善を選んでくれたが今回ばかりは最善かと聞かれると即答はできない。

結局考えても出ず俺はそのまま眠った。

次の日も放課後に集まり全員で考えていた。

勇也「なかなかでないな。バンド名」

つぐみ「そうですね。そもそもバンドごとで共通点が違いますが」

蘭「Linalliaなんてどうですか？」

勇也「Linallia? ってなに」

蘭「花の名前なんです。まえに花道で触ったときに綺麗だったんでどうかかって思って(ほんとの事は言えない)」

勇也「いいんじゃないかな。みんなは？」

全員「いいと思う！」

そんなことで決まった。

俺たちはそこから練習を始めた。

今回俺はキーボードになった。

今回のバンドはつぐみしかキーボードがないから俺が入るしかなかった。

特にこれやりたいたのかなかったから別にいいけど…
練習は俺が薫を教えてそのあとは全体で合わせるって練習をして
いた。

全体のレベルは練習で上がってきてはいるが正直まだ難しい。
これは楽しませる以前に微妙だ。

勇也「今日はここまで〜」

練習はそのまま終わり帰ろうとする腕を掴まれた。

薫「もう少し付き合ってくれないだろうか」

普段はつちやけてるのにその目は覚悟を決めていた。

勇也「わかった。けど俺がダメだと思ったらそこで終わりだから
な」

薫「ああ、ありがとう」

そこから俺と薫だけ残って自主練していた。

そこからの練習も薫は真剣にやっていたので俺は少し抜け出して
飲み物を買に行つた。

そのまま帰ると薫はまだやっていた。

勇也「薫一旦休憩だ」

薫「しかし！」

勇也「今このままやつても無駄だよ」

薫「わかったよ」

俺たちはそこから休憩した。

勇也「1つ聞いていいか？」

薫「ああ、構わないよ」

勇也「どうしてそこまでやろうとする、いやレベルが足りないのは
自分でもわかってるはずだ。けどどうしてそこまで」

薫「当たり前のことだよ。人の期待に応えたいというのは。そのた
めの努力なら惜しまないつもりだよ」

勇也「なるほどな」

こういうところが人気者の秘訣なんだろうな。

そこからも練習を続けてその日帰ったのはすでに外は暗かった。

勇也「送るよ」

薫「ありがとう」

普段からこうやって素顔を出してたらいいのに…

そのまま薫を送って帰るときに俺は近道のためとはいえ自分の家だつた場所を通つた。

正直通りたくもなかったが近道のために通るとそこにいかにも怪しいのが二人いたので隠れて話を聞いた。

「実行は明日か？」

「ええ、あいつの家にあるものをとるみたいだ」

「そうか。湊家はかなりの金があるらしいからな」

たしかにあの親父歌手だった頃の金がかかなりあるみたいだ。

あまり気にすることでもないので俺は帰つた。

「明日の19時に決行だ」

「了解」

少し聞き耳を立てて俺は少し遠回りして帰つた。

次の日にも練習に実行委員の仕事を終わらせて帰るときに18時半だつた。

勇也「はあ」

あんなんでも親父か。

勇也「悪い、先帰つててくれ」

俺は走つて帰つていった。

リサ「え、ちよつと勇也！」

俺は静止されても聞かずに走り出した。

実際学校から家までは20分程度かかる。

時間ギリギリだ。

自宅の前に着くと俺は身を潜めながら様子を見ていた。しばらくすると家の前に昨日の二人組が来た。

家の鍵を開けて中に入った。

器用にハリガネで開けていた。

そのまま入り俺も家の玄関前で待機していた。

「やめろ！お前たち誰だ」

「イヤー！」

「大人しく金を出せ」

おそろくなかでは二人ともすでに拘束されている。

俺は走って行きリビングのガラスを蹴破った。

「なんだ！」

俺はそんな言葉を聞かずに男のところへ走り手を蹴り上げてナイフを飛ばしてそれを掴んで男の後ろに回った。

勇也「動いたら刺すぞ」

「クソ」

勇也「あともう一人そのキッチンに隠れてるのも出てこい」

「バレてたか」

ナイフを首筋に当てたままこつちに来させた。

父「なんでお前が……」

勇也「うるせえ。しゃべんな」

父「っ……………」

勇也「さてどうしようか」

俺は少し脅した。

前に興花にたのいでいたものを出して。

それはおもちゃの銃だが見た目は完全に本物だ。

興花に頼んだらこれが届いた。

「ヒィ」

まあこれが普通の反応だな。

事実強盗犯でほんとうに肝が座ってるやつなんてなかなかいない。

勇也「動かないで俺の前に来い。そして前で手を組め」

男たちは言われるがままに行動した。

そしてそれを縄で縛り俺は警察を呼んだ。

そのまま事態の收拾がついた。

父「どうしてお前が…」

俺は胸ぐらを掴んだ。

勇也「俺はなお前なんかどうなつてもいいんだよ！けどなお前が死んだら困るやつ、悲しむやつがいるんだ。それだけだ…」

父「くっ！ああ、わかった。ありがとう、そしてすまなかつた」

勇也「言葉だけならいくらでも言える」

俺はそこから飛び出して自宅に帰った。

勇也「いた！」

手を見るとかなりの血が出ていた。

ナイフを蹴り上げて掴んだときはかなり強引に掴んだからかなり食い込んでいた。

そのまま家に帰ると姉さんとリサが来た。

俺はすぐに手を隠した。

友希那「勇也どこにいったのよ」

勇也「いいことして来たんだよ」

リサ「そっか。早くご飯食べよ」

勇也「ああ、そうだな」

俺は怪我した左手を隠しながら飯を食べた。

けれどあの事をしてから俺自身過去を乗り越えられたのかな。食べ終わり俺は手に治療していた。

勇也「全く無茶するもんじゃないな」

リサや姉さんはすでに部屋に行っていたので気にすることもなかった。

リサ「何を無茶したの？」

勇也「うわあー」

後ろからリサが出てきた。

リサ「何隠してるの？」

勇也「はあこれは仕方ないか。もう見られたし。姉さんには内緒にしてくれよ」

リサ「わかった」

俺はそこから今日あった事を話した。

リサは驚きを隠せない表情をしていた。

リサ「バカ！勇也に何かあったらどうするの」

勇也「ごめん」

そこからはリサが治療してくれた。

俺は今日のことを思い出して眠った。

文化祭編 vol.6

俺が起きていつも通りの生活をしていると前みたいに何か縛られている感じがしなかった。

そのまま放課後の練習をして終わってそこからしばらく時間が経っていった。

全体のレベルも上がってきてセットリストもまた曲も増えてきて固まり始めた。

現在のセットリスト

天体観測

恋空と雨音

シャルル

Boys be Ambitions!!

流星

カルマ

魂のルフラン

ETERNAL BLAZE

紅蓮の弓矢

Rising Hope

最後にクインティプル☆すまいる

紙に書いてみて思ったけど多いよな。

友希那「少し多いわね」

勇也「けどやるんだろ」

友希那「もちろんよ」

俺たちはそこで解散した。

そこから数日後

文化祭までの間に姉さんの誕生日がある。

そこで俺とリサはショッピングモールに来ていた。

リサ「何にする？」

勇也「猫ものでいいんじゃないのか」

リサ「あつはははけど友希那受けとらないかもよ」

たしかに姉さん陰で受け取って正面切っては取らなそう。

俺たちは色々なところを回った。

なかなかいいのが見つからない。

日菜「んーなんかるんつてくるものないなー」

紗夜「日菜あなた少しは静かにしてちょうだい！」

日菜「おねーちゃんも声大きいよ」

前で漫才みたいなのをしている氷川姉妹がいた。

リサ「なーにやってんの？二人とも」

日菜「あつー！リサちー、それに勇也くんも」

紗夜「今井さんに勇也さんもどうしてここに？」

リサ「えつと友希那の誕生日プレゼント買いに来たんだよ！」

日菜「えーリサちーゆうフガフガ」

リサは日菜の口を押さえて懸命に話させないようにしていた。

リサ「お願い。それは言わないで。ほんとのサプライズだから」

日菜「わかったよ」

紗夜「それなら一緒に行きませんか？」

勇也「そうだな、行こっか」

こうして俺は日菜と紗夜と一緒に回るようになった。

結局その後もかなりの人数と会い気付いた時にはRoselia
はもちろん、

ポピパ、After glow、Pastel*Palletes、ハ
ロハピのメンバーも勢揃いとなった。

唯一いないのは姉さんだけだ。

そして気がつくのと周りの人たちは消えていた。

興花「んー悩むな」

勇也「興花!？」

興花「あ！勇也、それにみんなも」

興花がいて本当の意味で姉さん以外の全員が揃った。

黒服「現在このショッピングモールはあなた達以外の人はおりません。どうぞごゆっくり」

勇也「あ、はい」

もう疲れた。

弦巻家と沢木家がいたらそうなるよな。

そこからもみて回り俺たちが買うものを買った。

姉さんにはブレスレットにしておいた。

水晶のパワーストーンが付いている。

水晶の意味は勝負に勝つっていう意味らしい。

俺たちはそのままショッピングモール内のフードコートで飯を食べて帰った。

帰ったはずなのに今俺の家には全員がいる。

勇也「それでなんでこうなったんだ？」

モカ「えっとく勇也さんのご飯を食べたいからでーす」

友希那「どうしてみんながいるのかしら？」

そこからかいつまんで話すと納得したようになった。

そこから俺は飯を作るとつぐみと麻弥は手伝ってくれた。

他の人は今日疲れたみたいで眠ったりその場から動かないで話したりしている。

姉さんは手伝おうとしてくれたが俺が断った。

つぐみ「焼きそばでも作るんですか？」

勇也「ああ、ただ普通の焼きそばじゃないけどな」

俺は焼きそばを人数分作りその後半熟たまごを乗せた。

麻弥「ちゅ、注射器つすか!?!何に使うんすか?！」

その後、半熟たまごにそれを刺した。
料理と並行して作っていたものだ。

モカ「うわあくなんだかい匂いがしますね〜」
モカが匂いにつられてやって来た。

勇也「はいはい、運んで」

そこからみんなで食べた。

そのままみんな泊まることになりその日も騒ぎまくった。

次の日になり朝起きたのはいつもよりかなり早い5時だった。

流石にこの人数分の飯を作るのは時間がかかる。

作り始めてしばらくすると紗夜と千聖が降りて来た。

紗夜「おはようございます」

千聖「おはよう」

勇也「おはよう、相変わらず早いな」

紗夜「手伝いますよ」

勇也「それより先に用意して来てくれ。洗面所に新しい歯ブラシ置いてあるから好きなのを使ってくれ」

千聖「わかったわ」

そこから全員が揃う頃にはもうすべての弁当ができた。

そこから用意して学校に向かいその日も放課後に練習をした。

もうセトリはかなり完成に近いのでこれ以上弄ることもないと思う。

俺たちのバンドはまだまだ上達すると思いつながら練習を終えた

友希那誕生日回（文化祭編V017）

姉さんの誕生日プレゼントを買った日から数日が経ち姉さんの誕生日になった。

朝起きると姉さんと一緒にリサに家から出された。

その後メールが来て内容は姉さんと一緒にウロウロしておいてくれとのことだった。

その間にこっちは準備すると送られて来た。

友希那「これからどうするの？」

勇也「ちよつと寒いしな今日」

友希那「カフェでも行きましようか。リサに出されたからまだ朝ごはんすら食べてないもの」

勇也「たしかに」

そこから俺たちは近くのカフェに入った。

そこでモーニングを食べてゆつくりしていた。

勇也「相変わらずコーヒーに砂糖入れまくるな」

友希那「そ、そんなことないわよ」

そんなことを言いながら次々に角砂糖を入れていく。

それは止まることなく5個は超えた。

これは多分ふと……

友希那「何か失礼なことを考えてないかしら勇也？」

勇也「何も考えてないよ」

本当にこういう時の女の子は鋭い。

勇也「それにしても姉さんは変わったよな」

友希那「どういうことかしら」

勇也「よく笑うようになったんだよ。周りは孤高の歌姫なんて言うけど表情は柔らかくなった。

もうRoseliaがあるから孤高じゃないけどね」

友希那「そうかしら？」

そこで電話がなった。

リサ「もういいから帰って来てもいいよー」

勇也「りよーかい」
俺は言葉聞いてそこから姉さんと帰った。

自宅

勇也「ただいまー」

俺は姉さんと一緒にリビングに向かった。

そしてリビングの扉をくぐった。

全員「お誕生日おめでとー。友希那（さん）勇也（くん、さん）」

そこにはポピパ、After glow、パスパレ、Roseli

a、ハロハピ、興花がいた。

友希那「え、みんな用意しておいてくれたのかしら。ありがとう」

勇也「なんで俺まで？」

リサ「だって今日は友希那の誕生日と同時に勇也の誕生日でもあるじゃん」

確かにそうだけどこ数年、いや生まれてから俺が覚えている範囲内で誕生日パーティーなんかされたことがないから戸惑った。

モカ「さあさあ早く食べましょー」

ひまり「モカく今日はモカが主役じゃないからダメだよ！」

モカ「ええくそんなく」

昼前だったのでかなり腹が減っていた。

勇也「それじゃあ食べようか」

リサ「勇也のと比べないでね。流石にそこまでうまくできてないから」

勇也「別に比べたりしないし、何よりふつうにうまそうだもん」

リサ「そっか、よかった」

全員「いただきまーす」

用意されていたものを食べるとやっぱり美味しかった。

結局俺の箸は止まらずそのまま食べ続けていった。

勇也「ふー食った食った」

俺はそのまま横になった。

沙綾「そのまま寝転ぶと太りますよ」

勇也「あはは、それもそうだ」

そこからはいろんな話をした。

今のこと、みんなにも過去のことを聞いてもらった。

2回目は辛いからとつぐみやひまり、彩、沙綾、花音が席を外して

いた。

そのまま時間は過ぎていき、夜になった。

勇也「さて飯作るか」

リサ「勇也は休んでてよ」

勇也「んにや断る。さっきは俺が作ってもらったし、何より俺は作ったものを食べてもらってるのが嬉しいから」

リサ「それじゃあ、私も手伝う」

勇也「頼む」

そこから二人で料理を作った。

あこ「あの二人付き合ってるみたい」

燐子「あこちゃん……それは言っちゃ……ダメだよ」

あこ「けどりんりんもそう思うでしょー」

燐子「うん……本当に仲がいいから」

勇也「リサはお母さんに会いたい？」

リサ「ど、どうしたの？急に」

勇也「答えてほしい」

リサ「確かに寂しくないって言ったら冗談になるけど今も楽しいから」

その顔は少し寂しそうに言った。

俺はリサにこんな顔をさせたくない。

もちろん姉さんにも……

そのために俺ができることは1つしかない。

考えて料理を作らなにかできた。

そこからも食べてなんとか1日が終わった。

リサ「まだ終わりじゃないよ。ケーキもあるもん」

そこから4つのケーキがやって来た。

この人数なら4つでも少し少ないかもしれない。

全員「勇也（さん、くん）友希那（さん）お誕生日おめでとうござ
います」

そこからケーキを食べて今度こそ終わりと思った。

リサ「さーてみんな渡すよー」

そこから俺と姉さんはみんなからプレゼントをもらった。

リサは俺が欲しかったネックレスをくれた。

友希那「勇也これ」

素晴らしい姉さんも俺にくれた。

勇也「俺からもこれ」

素晴らしい渡して二人同時に開けると中身は一緒だった。

日菜「うそー」

美咲「ほんとにこんなことってあるんだ」

ひまり「うわくすごいです」

そう俺と姉さんは全く同じ水晶のブレスレットを買っていた。

勇也「あ、ははは。まさかこんなことになるとはなー」

友希那「ふふ、ありがとう勇也」

勇也「ありがとう姉さん」

素晴らしいこの誕生日パーティーは幕を閉じた。

文化祭編 Vol.8

姉さんの誕生日から時間も経ち文化祭まで残り数日となった。

文化祭実行委員の方も特にやることなく後は最終チェックだけとなった。

今はバンドの練習も休憩中で俺は自販機の前でパックのジュースを飲んでる。

リサ「勇也のお気に入りなのそれ？」

リサは俺のところに聞いてそう聞いて来た。

俺が飲んでるのはいちごオレだ。

勇也「そんなんじゃないよ。気分」

リサ「へー可愛いところもあるねー」

勇也「うるさい！」

そこで俺はあることを聞いた。

勇也「リサはさ前に俺に聞いたよね、好きな人がいるのかって」

リサ「うん、聞いたよ」

勇也「リサはいるの？好きな人」

リサ「うん、けど言えない。教えて欲しかったら文化祭最終日の放課後ね」

勇也「言ったからな」

リサ「あはは、もちろん」

あたしの好きな人を勇也が聞いてきた。

この時にあたしは決めたんだ。

言ってそして断られてキツパリ諦めるって…

他の人もそう、勝ち目のないギャンブルに足は突っ込まないし、そんなところに行きたいって感情もおかしい。

だから早く諦めるんだ。

リサ「うん、けど言えない。教えて欲しかったら文化祭最終日の放課後ね」

あたしの恋の終わりを告げることにした。

俺たちは部屋に戻るとすぐに練習を始めた。

勇也「なあ、このクインテイルすまいる香澄や彩、こころに頼む？」

麻弥「確かにそれもいいかもしれませんが理事長が許してくれるでしょうか」

そこなんだよな。

理事長に頼んでみよう。

勇也「ちよつと行ってくる！」

俺は部屋を出て走って理事長室に向かった。

ひまり「ちよつと勇也さん!？」

『コンコン』

理事長「どうぞ」

勇也「失礼します」

理事長「あなたは確か勇也くんでしたね。湊勇也くん」

勇也「はい。今日はお願ひがあります」

理事長「なんですか？」

勇也「今回の文化祭のバンドで最後の曲に花咲川の生徒を呼べますか？」

そこから少し考えるようにして許可してくれた。

理事長「但し1つ条件があります」

勇也「条件？」

理事長「あなたに生徒会長をやっていたいただきたいのです。もちろん

答えは今すぐには言いません」

勇也「質問いいですか？」

理事長「ええ、構いません」

勇也「なぜ僕なんですか？」

理事長「あなたの言葉には説得力があります。何より周りをよく見れて実行する能力もある。人間誰しも気づいていても言えないことなんだよ。けれど君はその線を軽く超えてしまう。それが理由だよ」

勇也「わかりました。考えておきます」

理事長「いい返事を期待しています」

俺は部屋を出た。

そこからみんなのところに戻り事情を説明した。

もちろん生徒会長の話はしなかった。

そこから香澄たちをファーストフード店に呼び集まってもらった。

彩「それで私たちが集められたのって何かな？」

きてもらったのは香澄と有咲、彩、ここに美咲だ。

勇也「実は俺たちの文化祭に出て欲しいんだ」

こころ「すっごく楽しそうじゃない！いいわ」

美咲「ちよつとこころ待ってってば。なんでなんですか？」

勇也「実は俺たちのバンドの最後にクインティプルすまいるをやるんだけどそこに出て欲しいんだ」

香澄「すっごい面白そうです！わかりました」

有咲「あれそれならなんで私と奥沢さんは呼ばれたんですか？」

勇也「保護者としてその二人見えて欲しいんだ」

二人ともなんとなく予測していたようで何も言わずに顔を合わせた。

有咲・美咲「わかりました」

勇也「ありがとう」

俺はお金だけ置いて店を出た。

彩「ちよつと勇也くん!?こんなにももらえないよ」

走っていたのでもう聞こえなかった。
置いたのは一万だ。

そこから時間が進み俺の考えてることの1つを実行する時が来た。

文化祭編 V O 1 9

俺は文化祭までの数日にやりたいことをした。
そのためには興花の力が必要だったのでよんだ。

興花「どうしたの？」

勇也「実は……ってことをしたいんだ。そのために力を貸して欲しい」

興花は少し考えていた。

興花「はあ相変わらず優しいね。いいよ。全面的に手伝う。それでどうするの？」

勇也「そこからは俺がなんとかするから頼んだ時正確には多分今夜になると思う。その時に頼む」

俺はそういう家の鍵を渡した。

興花「わかった」

そういう興花は出て行った。

そうして俺も向かうべき場所に向かった。

しばらく歩いてついたのは俺と姉さんの自宅だった場所だ。

インターホンを鳴らすと俺は家の中に入れられた。

父「どうしたんだ今日は急に？本来なら来たくない場所だろう」

勇也「ああ、死ぬほど来たくねえよ。けどーっ頼みがあって来た」

父「いつてみる」

勇也「姉さんとリサを家に帰してあげたい。正直二人は見せないだけでかなり疲れてると思う。慣れない環境になったから。だからこそ戻してあげたい」

父「……姉さん……か」

勇也「あ？なんか変なことを言ったか？」

父「いや、お前と友希那は本来なら逆なんだ。お前が兄貴で友希那が妹なんだよ。それを小さい時に俺は勘違いしていてな」

勇也「は、？」

父「それより話は受けよう。もちろん友希那にもリサちゃんにも危害を加えない」

勇也「ああ、助かる」

「素晴らしい俺は出て言った。」

「この後に言われた言葉など聞こえるはずもなく」

父「お前にも戻って来て欲しいんだがな」

俺は出てそのままリサの家に向かった。

隣だが話は通しておいた方がいいからな。

インターホンを鳴らすとこちらもすぐに家に入れてくれた。

リサ母「あらあらずいぶん久しぶりねーどうしたの？」

勇也「実は……」

そこから俺はさつきと同じ話をした。

リサ母「こっちは構わないわよく。それよりも勇也くんはいいの？」

勇也「どういことですか？」

リサ母「だってねく若い女の子に囲まれなくなるのよ」

勇也「ブツ！」

俺は何か逆流して来たようにむせた。

勇也「ゲホッゲホッ、そんなんじゃないですよ」

リサ母「冗談よ、それでリサたちには話したの？」

勇也「話してません。けど今夜実行します。そのためにある人から力を借りました」

リサ母「わかったわ。全部勇也くんに任せるわ」

俺は頭を下げた。

そして家から出て現在の自宅に帰った。

自宅

リサ「あー勇也朝からどこに行ってたの？」

勇也「ちよつと用事だよ」

友希那「まあいいわ。今日からはゆつくりしなさい。あなたは特にな

姉さんにこんな気を使われるとは思ってなかった。

いやさっきの話を聞くと姉さんつてのもおかしいかな。

そのまま時間は過ぎていき俺は夜飯の準備を始めた。

リサと姉さんのものにはあるものを数滴垂らして準備を始めた。

これは興花からもらったもので入れて欲しいと言われたものだ。

そのまま夜飯を食べ始めた。

リサ「??あゝれなんだか眠たく」

友希那「そう…ね。私も眠たいわ」

予想通りあの薬は睡眠薬だったみたいだ。

俺は二人が寝たのを確認して興花に電話をかけた。

勇也「もしもし、もういいぞー」

興花「りよーかい。今いくよ」

そこからほんの数分で興花や黒服たちがやって来た。

勇也「あとは頼むよ」

興花「任せて。必ずやるよ」

そこから俺も見守りリサたちを家に届けて荷物も送り俺は家にな

人になった。

興花「ほんとによかったの？」

勇也「構わないよ。リサは家にいた方がいいし、姉さんもなんだか

んだであの親父に固執してるしな。こっちの方がいいんだよ」

興花「そうじゃなくて勇也自身はどうなの？」

勇也「俺自身のことであの二人に無理させてたんだ。その歯車を元

に戻しただけだよ」

興花「そういうことじゃないんだけどね」

興花も帰り俺は家に一人になった。

次の日（友希那）

朝目を覚ますといつもと違う、けれどどこかで見たような天井だった。

そして周りを見渡すとここは本当の意味での自宅にいた。

友希那「どういうこと？」

父「起きたか友希那」

友希那「お父さん。これはどういうこと？」

父「実はな」

そこから私は全てを聞いた。

勇也が望んで私とリサを戻したことを……

友希那「あの子は自分勝手ね。学校で詳しい話を聞くわ」

父「ああ」

お父さんはそういい部屋から出て行った。

私も用意して学校に向かった

リサ side

朝起きてみるといつもと感じが違う。

気になってリビングに行くところには本来いないはずの人がいた。

リサ母「あらー起きたのね」

リサ「マ、ママ!?なんでここに？」

リサ母「なんでってここ家だもの」

あたしは周りを見渡してみると確かにあたしが生まれて育った家だった。

けどどうしてここに……？

リサ母「何にもわからないって顔ね。いいわ私の知ってる限りのことを教えてあげる」

そこから聞いたことは信じられないことだった。

リサ「勇也のバカ」

リサ母「いいわねー青春してるじゃない」

リサ「どこが!？」

私の頬からは涙が溢れていた。

リサ母「リサも勇也くんもお互いを思ってるんだから、そしてそのための行動なんでしょう」

確かにその通りだ。

今まで勇也はあたしたちのことを優先して行動して来た。

そのために自分がどんなに犠牲になっても……

リサ「学校に行ったらぜっーたい聞いてやるー!」

そうして学校の準備を始めた。

その頃

勇也「ぶえーくしよい!」

誰かに噂でもされてるのかな？

そんなことを考えながら学校の準備を始めた。

それにしても静かだな。

今までと違うとこんなにも変わるんだな。

さてと学校の準備して行きますか。

弁当をカバンに入れ俺は学校に向かった。

学校に着くといつもより早く来たせいもあり誰も見当たらなかった。

教室に行き机に座ろうとすると鬼がいた。

リサ「さーてどういうことか話してもらおうかなー?」

友希那「そうね。すごく気になるわ」

二人は怒っておりこれは手がつけられない。

勇也「わ、わかった」

そこから俺は全てを話した。

リサは家にいた方がいいこと。

友希那はその親父のそばにいた方がいいこと。

友希那に関しては俺たちの姉弟の関係も話した。

俺と友希那は本来逆で俺が兄貴で友希那が妹なことを……

けれど友希那は案外動じておらずケロツとしていた。

友希那「そんなこと今更知っても何にも変わらないわ。むしろ納得よ」

勇也「ん？どういうこと？」

友希那「勇也が上でもなんの違和感がないってことよ」

リサ「あー確かに、友希那は結構抜けてるところ多いからなー」

友希那「ちよつと！リサ」

勇也「まあそういうわけだから別に嫌ってしたわけじゃない」

二人とも渋々納得してくれたようだ。

そこから授業は進み時間は過ぎて行き、遂に文化祭当日が来た。

俺たちのバンドは2日目の有志で出ることになっている。

それで俺は初日と終わりの挨拶を任されている。

体育館に全校生徒と教師が集まり俺はその壇上に立った。

勇也「えー長々と話したくないので一言だけ。勉強からのストレスから解放されてこの二日間を楽しんでください！」

「ウオオオオオオオオ」

そこから文化祭は始まった。

そして今に至る。

なぜこうなった。

今ここには薫を除いた羽丘バンドメンバーに興花を加えたメンバーがいる。

勇也「それでなんでこんなにも集まってるの？」

日菜「勇也くん、一緒に文化祭まわろーよ」

友希那「早く行くわよ勇也」

痛い痛い、腕を引っ張らないでほしい。

そして何より周りからの視線を気にしてほしい。

助けてほしいがここに入る勇氣は俺が逆の立場でもないので何も

言わないでおく。

勇也「わかったわかった。みんなもそれぞれの仕事があるからその間に回ろう。幸い俺は警護っていう名目だから自由だからさ」

全員納得してくれた。

それで回るのは1日目の朝が蘭とモカ昼からは日菜と麻弥、二日目の朝はつぐみ、巴、ひまり昼からはリサ、友希那という風になった。

朝の部

モカ「それでどこに行きますか?」

勇也「そんなことを聞いてどうせ食べ物だろ」

モカ「流石わかってますね」

俺たちはそこから移動して色んなところを回りはじめた

その中でも衝撃的だったのが麻弥のメイド姿だった。

麻弥「いらっしやいま:せ!ゆ、ゆ、ゆ、ゆ、勇也さん!」

勇也「麻弥よく似合ってるな」

そのまま麻弥の顔はどんどん赤くなりほんとの意味でのゆでダコみたいになった。

勇也「似合ってる。ごちそうさまです!」

そう言った瞬間に蘭から足を踏まれた。

勇也「いったー。冗談なのに」

蘭「冗談でも言い過ぎですよ。麻弥さんもう顔が大変なことになってるじゃないですか」

勇也「悪かったって。それにしても麻弥今回はコンタクトなんだな」

麻弥「はい、クラスの方たちにこっちのほうがいいと言われました」

勇也「まあどつちでも似合ってるけどな」

モカ「それより早く注文してもいいですか?」

麻弥「は、ハイっす」

そこから軽く注文して俺たちは注文を待った。それにしてもこの学校なんでもありだよな。

アイドルがメイド喫茶なんて大変だろう。
そう思っていると時間は起きた。

男が足を伸ばして麻弥の足に引つ掛けた。

その結果転んで麻弥は持っていた飲み物をこぼした。

男「あーあ最悪だなくおい」

麻弥「す、すいません」

男「詫びいるだろ。そうだな〜こぼしたところ舐めてもらおうかな
〜。パスパレの麻弥ちゃん」

蘭「あいつ、何いってんの!？」

勇也「俺が行くから落ち着いて」

俺はそのままその男のところに行き声をかけた。

勇也「どうされました？」

男「あ？なんだお前」

勇也「僕は今回の文化祭においての全権を持つてるものです」

男「なら話が早いな。この子が俺のズボンに飲み物をこぼしたんだ
よ」

勇也「なんと！それは大変失礼しました。こちらの動画見てもそう
いえますか？」

俺はさっきの部分の動画を見せた。

男「な！ふぎけんなテメエ」

素晴らしい殴りかかって来た。

麻弥「勇也さん！もういいですから」

麻弥は泣きながらそういった。

勇也「それは無理な相談だ。麻弥が泣いてる以上見過ごすなんてこ
とはできないんだよ」

そのまま殴りかかって来た手を掴みそのまま握った。

男「い、いたたたたたた」

勇也「まだやるか。今度はお前を吹き飛ばすぞ」

男「す、すいませんでしたー」

そのままどこかに逃げていった。

俺はそのまましやがみ麻弥にハンカチを渡した。

勇也「ほらこのまま作業するわけにはいかないだろ。これ使って笑って…な！」

麻弥「は、はい。ありがとうございます！」

麻弥は作業に戻った。

俺も席に戻った。

モカ「おおく勇也さん相変わらずですな〜」

勇也「なんかすげえ棘があるんだけど……」

蘭「それよりここ出た方がいいですよ。注目を浴び過ぎてる」

勇也「それもそうだな」

俺たちは店から出ていった。

そのまま蘭たちと色んなところに行き、昼からの日菜と麻弥に変わった

昼頃になり蘭とモカとは別れてそのあとの日菜と麻弥と合流した。会うと麻弥は申し訳なさそうな顔をしていた。

日菜「麻弥ちゃんさつきからずっとこんな顔なんだ」

麻弥「勇也さんさつきはすいませんでした」

勇也「だーから気にしなくていいって。あんなの麻弥が悪いわけじゃないしどう考えてもあいつが悪いんだから」

日菜「なんだかよくわからないけど勇也くんがこう言ってるならいいと思うけどな」

麻弥は少し安心した顔になりそこから俺たちは回り始めた。

この時に気づいておくべきだった。

先に起こる事態の可能性を……

そんなこととは知らずに俺たちは色んなところを回っていた。

勇也「誰かのところに行ってみるか」

日菜「んーそれならリサちーのところに行ってみよーよ」

リサのところか。

確か俺のクラスはなんだったかな。

ここ最近クラスじゃなくて色んなことが忙しすぎてよく覚えてない。

勇也「行ってみよっか」

そこから3人でリサのクラス（自分のクラス）に向かった。

着くと同時に日菜が走って行った。

日菜「あ、リサちー！」

リサ「日菜！来てくれたんだ」

日菜「あたしだけじゃないよ。勇也くんと麻弥ちゃんも」

リサ「ゆ、ゆ、勇也も!？」

後からゆっくりに行くとリサは顔を真っ赤にしていた。

見ると昔の時代劇のような格好をしていた。

クラスの看板には和装喫茶と書いてあった。

リサが着ていたのは緑の昔の人が着るような衣装でシンプルなものだった。

けどシンプルだから素材が生かされてリサがより良く写っている。

麻弥「勇也さん？」

勇也「ん、ああ、悪い」

日菜「早く中に入ろーよ」

中に入ると和装というだけあって時代劇の中みたいだ。

勇也「けど、俺ほとんど知らないんだけど…」

リサ「あー、それはあたしと日菜でみんなに頼んだからだね」

考えてみれば日菜もこのクラスだった。

勇也「日菜は仕事はいいのか？」

日菜「あたしは明日だからね」

なるほどね。

ほとんど何も知らないからメニューを見て見ると和風なだけあって団子やあんみつなんかがあった。

それに飲み物は普通にあるがより強調されていたのは抹茶ラテなど抹茶を使ったものばかりだった。

そこから注文したが俺は抹茶系まったくダメなので普通のオレンジジュースと団子にした。

そこで事件は起きた。

「きゃああああああー」

声のした方に行くとわけのわからない20代後半ぐらいの男が厨房に来ていた。

本来なら立ち入り禁止のはずの場所にいた。

「ほんとにRoseliaのリサちゃんだ〜」

そういい一歩ずつリサのいる方に近づいて行く。

そしてゆっくり手を伸ばしたのいつたのを俺は掴んだ。

勇也「何してんだ？」

多分今までで一番キレてると思う。

「なんだお前？」

勇也「お前は今から倒すやつにわざわざ名前を名乗るか？」

「うるせえ」

そのまま右手で殴りかかって来て避けようとしたが俺の後ろにはリサがいてよけるのを途中でやめた。

勇也「いつて」

「ははは、おもしれえな。そんなに避けないなら殴ってやるよ」

俺は避けるのも出来ずに殴られていた。

勇也「あーあ」

多分何箇所も痣ができるかもなく。

麻弥「今井さんこつちです」

麻弥がリサの手を引いてどこかにいった瞬間俺は飛んでくるパンチにカウンターを決めた。

しかも殴った瞬間に踏み込んで手を振り抜いたから男は吹っ飛んだ。

「ガッ！ゲホ、なん…で」

勇也「お前なんか手こずるわけねーだろ。リサが後ろにいたからだよ」

俺はそれだけじゃ気が済まなく男の首を掴んで持ち上げた。

そいつは必死に腕を殴っているが正直感覚が麻痺してて痛みなんか感じない。

リサ「勇也！もうやめて」

その言葉で一気に現実に引き戻された。

勇也「よかったな。命払いしたな」

「ヒィ」

勇也「リサ後は頼む」

リサ「うん…」

俺はそいつを担いで保健室に向かった。

俺は保健室に向かっている間にまた後悔していた。

なんでこうも手加減ができないんだろう。

そのまま保健室に連れて血を吹き、ある程度の治療をした。

勇也「後はテメエが一人で病院にでもいってろ」
「ヒイ」

こいつはもう完全に怯えてる。
これ以上のことはしないだろう。

『ガララ』

その瞬間に麻弥と日菜、リサが来た。

リサ「勇也！ごめん。あたしのせいでまたあんなことに」
そういうリサの目からは涙が溢れていた。

勇也「気にしなくていいから。全部悪いのは俺だし、リサが責任を
感じる必要なんて何もないよ」

日菜「勇也くんはそれでいいのー？なんだか無理してるみたいだよ」

こういう時はなんだかんだで日菜やこころがかなりよく見ている。

勇也「無理なんかしてないよ」

そこで放送が入った。

『そろそろ文化祭1日目が終了のお時間です。ご来場ありがとうございます』
いました。生徒の皆さんは片付けを始めてください』

麻弥「もうそんな時間なんですね。早いですね」

俺たちはそのまま保健室から出て教室に帰った。

もちろん注目を浴びた。

リサは心配されていたが俺に声をかけてくるやつはいなかった。

そんな俺に対してリサは心配の目を向けてくる。

帰りのHRを終え俺は一人で自宅に帰った。

自宅

一人になるとどうしても思い出してしまう。

あの親にやられて怯えていた日々に：

けれど実際には本質は何も変わってない。

俺もあいつらと同じで加減を知らず結局みんなを困らせる。

やり方は違えど本質は同じだ。

勇也「はあゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ」
盛大にため息をついてソファで一休みしていた。
しばらくすると眠くなりそのまま眠った。

そのまま時間は過ぎて行き起きると頭に柔らかい感触があり、横に向いていた頭を上に出るとリサがいた。

勇也「あ、あれ？」

リサ「起きた？今から夜ご飯作るから待ってて」

勇也「うん：じゃなくて！なんているの？」

リサ「あたしもここに住んでたんだよ。鍵ぐらい持ってるよ」
そうだった。

あの時に渡したものをまだ回収してない。

そのままリサはキッチンに行き鼻歌交じりに料理を始めた。

寝起きで頭の回転が追いつかない。

リサ「今日のことクラスの誰も気にしてなかったよ。それどころかみんな感謝してたよ。やり方はあれでも間違っていないっていったから」

勇也「そっか」

リサ「それと今日泊まっていくからね」

勇也「は、はあー？」

リサ「今日泊まっていくから」

勇也「二回も言わんでいいわ！」

リサ「あははは、やっぱり勇也はそうじゃないと。寝てる間もずっとうなされてたし」

勇也「恥ずかしいところを見られた」

そこから料理を食べリサが泊まっていくというので別の部屋に布団を敷いた。

自室に戻りベッドに倒れると何かが避けた。

リサ「危ないよ」

勇也「そうだね、じゃなくてなんているんだよ！」

リサ「一緒に寝るからだけど？」

勇也「なんで俺がおかしいみたいになってるのさ」
リサ「まーまーいいから早く」
そういうベツトに引き込まれそのまま眠った。

2日目

その日も変わりなく学校に向かい文化祭が行われた。
昨日と変わったところといえば昨日のことを反省して教師たちもより警戒心を増したことだ。

朝からはつぐみとひまり、巴と回ることになっている。

ひまり「待ってましたよー」

勇也「悪い悪い」

巴「それでどこにいくんだ？ひまりのことだから決めてるんだろ？」

ひまり「ふっふーん。もちろんだよ」

そこからひまりが押していたのは1つのお化け屋敷だった。

けどひまりの性格的にお化け屋敷は無理だったはず……

勇也「ひまりはいけるのか？」

ひまりは冷や汗を垂らしていた。

ひまり「だ、大丈夫です」

勇也「はあ、それじゃあいくか」

俺たちはそこからお化け屋敷に向かっていった。

お化け屋敷

「それじゃあ二人ペアで入ってくださいーい」

受付している人にそう言われた。

ひまり「これは」

巴「もちろん」

つぐみ「あれだね」

そこから3人でじゃんけんを始めた
そして俺はひまりと入ることになった。

巴「あ、あたしはここで待ってます」
つぐみ「わたしも」

結局俺とひまりだけになった。

入ると結構リアリティがあり、下からは冷えた風をとどころどろあり意外と凝っていた。

あとひまりさん？入ったと同時に腕にしがみつくのやめてもらえませんか？

ひまり「……………」

入ってからまだ脅かしは来てないが、ずっと俺の腕に抱きついてい
る。

そして必要以上に育っているものが当たっている。

勇也「もう出るか？」

ひまり「い、いえ。まだいきましよう」

そうはいつでもずっと腕にしがみついても全然説得力無いんで
すけど…

そのまま進んでいくと大変な目にあった。

簡単に言うとはひまりに殺されかけた。

びっくりしたのと同時に毎回飛びついてくるんだもん。

その度に窒息しそうになる。

しかも途中で腰が抜けたように動けなくなっていた。

勇也「ひまり乗って」

ひまり「でも…」

勇也「こんなところで動けなくなると怖い思いしたくないだろ」

ひまり「はい、ありがとうございます」

ひまりは俺の背中に乗った。

それにしてもほんとになんてこんなにも成長してるんだらう。

モカのカロリー送ってるっていうのもあながちうそじゃないかも
な。

ひまり（勇也さんの背中安心する）

俺はそのままお化け屋敷を出ていくと出口に巴とつぐみがいた。
つぐみ「ひまりちゃん！大丈夫？」
ひまり「う、うん。心配かけてごめん」
巴「そんなの気にすんなって」
ひまり「勇也さんありがとうございました」
勇也「はいはい。早くなんか食べに行こう。腹減った」
そこから3人で行動していくと昼になりひまりたちはどこかに
いった。

待ち合わせのところに行くと言希那とリサはすでにいた。

友希那「遅いわよ」

勇也「悪かったって」

リサ「まあまあ勇也も大変なんだから許してあげようよ」

友希那「まあいいわ」

俺はどこに行くのかと思うと二人とも一向に移動しない。

勇也「どこかに行かないの？」

リサ「あー多分そろそろくると思うんだ」

そうすると少し袋を持った興花がやって来た。

興花「ごめーん。遅くなった」

リサ「ううん。気にしないで。ありがとう」

友希那「それじゃあ行くわよ」

そういついて行くと屋上に向かって行った。

屋上

勇也「なんでここに？」

リサ「勇也、ライブまでゆつくりしてて。これがあたしたちからの
お願いだよ」

勇也「はい？」

興花「勇也は無理するからね。ゆつくりしてて。そのために買って
来たんだから」

そういい出されたのは食べ物や飲み物だった。

勇也「いや、でもな」

友希那「ごちゃごちゃ言わずに休みなさい！」

勇也「はい！」

なんか違うような気もするがのんびりする時間ができた。

2日目は文化祭が終わるのが遅いので花咲川の香澄や彩、こころたちも十分に間に合う。

勇也「興花、香澄たちが来たら舞台袖で待っていてくれ」

興花「りょーかい」

俺は持つて来てもらったものを食べながら相談していた。

そしていよいよ時間が来た。

ライブ

いよいよライブの時間が来た。

俺とリサ、友希那は移動して行くとみんなすでにいた。

勇也「なんだ俺たちが最後か」

日菜「はやくいこーよー」

俺たちも準備をして舞台袖に待っていた。

「次は大バンドlive affectionです」

そこで舞台幕が上がリ俺たちの舞台が始まった。

友希那「それじゃあ一曲目天体観測よ」

そこから演奏が始まり、曲数も進んでいった。

途中で楽器紹介と人物紹介があったりもして少しずつ進んでいき半分を超えたあたりで舞台袖に香澄たちがやってきた。

そこで演奏中に上から見えたのは香澄たちだけじゃなく他の花咲川のメンバーもいたことだ。

そして曲数が進むたびにみんなの演奏もヒートアップしていき残すは2曲となった。

そこで俺に異変が起こりキーボードと一体になっている感覚が起

きた。

そこからは演奏にもさらに磨きがかかった。

リサ（なにこれ？）

麻弥（勇也さんのキーボードに引っ張られて）

ひまり（すごい！すごいよ！）

友希那（勇也のキーボードがバンド全体の演奏技術を底から持ち上げてるみたい）

そこで俺たちの演奏は終わった。

燐子（すごい。こんな演奏が…あつたんだ）

燐子がそこで感じたのはキーボードの奥深さだった。

曲がりなりにも燐子にも自負はあった。

それでも初めて見る勇也の演奏は異質かつ天才なんて言葉では表現できないものだった。

いうならば1つの完成形。

それに驚いて声が出なくなっていた。

俺たちは舞台袖に下がり最後の曲が始まった。

そこで香澄と彩、こころが飛び出していった。

蘭「最後の曲です。聞いてください」

そこから始まり終わると拍手が鳴り止まなかった。

「すごかったぞー」「さいこー」

俺たちも横で休憩していて悪くない気分だった。

勇也「それにしてもさっきのは？」

つぐみ「勇也さん！さっきのはなんですか？」

麻弥「そうですね。なんなんですか？あれは？」

勇也「いや俺にもよくわからないんだよ。なんだか本当の意味でキーボードと一体になった感覚がして」

蘭「ほんとに凄かったです」

俺たちはなんとか終わりその日の文化祭も終わった。

閉会式の言葉も終わらせ片付けも済み俺はリサに屋上に呼ばれた

から屋上に向かった。

屋上

リサ「ごめんね。こんなところに呼び出して」

勇也「気にしなくていいよ。それで？」

リサ「前に聞いたよね。勇也はあたしが誰が好きなのかって」

勇也「ああ、聞いた」

リサ「あたしが好きなのはね

勇也「なんだよ」

俺はその言葉を聞いた瞬間に意味がわからなくなった。

リサがおれのことを好き？

嘘だろ。

リサ「けどあたしにその資格はない。わかってる。だから今日に気持ち伝えて全てを終わらせるつもりだった。勇也今まであり……んむ！」

俺は言葉を言う前にリサの唇を奪った。

そのまま離れて行くとリサは驚いていた。

リサ「ゆ、勇也？」

勇也「俺の答えだよ。俺もリサが好きだ。本当に大好きなんだよ」

リサの顔は本当に真っ赤になっていた。

リサ「はわわわわ、ううほんとにこんなことがあっていいの？勇也があたしのことを好きなんてこんな幸せがあっていいの？」

勇也「幸せは誰にくるかなんてわからない。けど俺も幸せだよ。まさか……ね」

そこまでいうと今度はリサからキスされた。

勇也「んん！」

リサはやつておきながら顔が真っ赤になっている。

勇也「俺と付き合ってください」

リサ「こちらこそよろしくね」

今度は二人同時にやっていた。

この日俺とリサは付き合い始めた

文化祭くその後

俺とリサが付き合った後みんなのところに戻っていった。
みんなはライブの余韻に浸っていたところをいうとみんな喜んで
いた。

けれど俺はなにも気づいていなかった。
喜びながらも昏い目をしている奴らが何人もいることに……

蘭side

やっぱりリサさんと付き合っちゃったか。

けどまあいいや。

ここからでもいいけるし、なによりこんなことで勇也さんを諦めたく
ないからね。

そのためならなにしてもいいよね？
待っててね勇也さん。

日菜side

やっぱりリサちゃんが一番か。

それでもいいけど。

私が最後に笑って勇也くんをもらうんだ。

そのためには今まで以上に引っ付かないとね。

そのためにはなんでもするから待っててね勇也くん。

千聖side

リサちゃんを選んだのね。

私はてつきり蘭ちゃんだと思っていたのだけれど……

蘭ちゃんが言ったバンド名を聞いて蘭ちゃんの思いを知ったから。

けれどそれで勇也くんを渡すわけじゃないわ。

それには他の人も上手く使わないとね……

私をこんな気持ちにしたんだから責任取ってもらおうわよ、勇也くん

ひまりside

リサさんとかー。

確かにお似合いだし、邪魔はしたくないけどこんな気持ちになっちゃったから邪魔したくなっちゃうよね。

リサさんに嫌われても勇也さんが欲しいから仕方ないよね。

例え誰が来ても最後に笑うから……

紗夜side

今井さんと付き合ってたんですね。

前の私なら素直に喜んでいたかもしれないませんが、今は勇也さんが欲しい。

どうやって手に入れようかしら。

そのために日菜と手を組むのもありかもしれないわね。

あの子も多分同じ気持ちだから……

沙綾side

あーありサさんとかー。

私も勇也さんと付き合いたくない。

そのためになにしてもいいよね？

だってこんな気持ちになったのも全部勇也さんのせいだから……ね。

花音side

リサちゃんか。

うーん私には無理だけどそれは私が一人の場合は無理だね。

なら千聖ちゃんと手を組むのもありかもしれないな。

千聖ちゃんも同じことを考えてるといいんだけど……

俺たちは言っただけのままみんな解散した。

その日はリサは俺の家に泊まるって言って聞かなかったの俺の

家に来た。

自宅

リサ「なんだか新鮮に見えるなー」

勇也「??なんのこと？」

リサ「ほら付き合ったら世界が変わるってよく言うと思うんだ。

あたしの場合ほとんど望み薄だと思ってたから余計にそう感じるんだよ」

リサは確か告白してくれた時もそんなことを言っていた。

俺だって同じように考えてたから気持ちには分からなくもない。

その日は夜遅くまで話して眠った

怖い

俺がリサと付き合い始めてからは周りの人間が変わった。
変わったのは一部だが…

ひまりは学校で見つけると走って飛びついてくるし蘭も俺が屋上でサボっていると来て色んなことをさせてくる。

中でも一番ひどいのが日菜だ。

所構わず抱きついてくるし、ひどい時はキスマまでして来ようとする。

なんとかリサが止めてくれたり、麻弥が止めてくれたりするんだけどなかなか大変だ。

なにより直近の問題はリサのお母さんに言われたことだ。

回想

俺たちが付き合ってリサの家に行って報告するところ言われた。

リサ母「なら1つ条件があるの」

リサ「ちよつとママ!」

勇也「なんですか?なんでもいいですよ」

リサ母「ならあなたはお父さんと仲直りしなさい。もちろん今すぐには言わないわ。あなたが向き合えた時でいい。だから…ね」

勇也「っ……!わかりました。必ず」

俺たちはそこで家を出た。

終了

勇也「難しいんだよな」

屋上でつぶやいていると蘭がきた。

蘭「勇也さん」

そういいながら座ってる俺の膝に頭を乗せてきた。

初めはなんのことか分からずほっておくと足をしばいてきて意味もわからず猫と同じように撫でると満足してそのまま寝たこともあった。

今回はそれで満足したのかずっと俺の方を見ている。

この目をどこかで見たような気もするがあまり覚えていない。

そのまま満足したのかどこかに行った。

勇也「なんか怖いよ」

その日も何事もなく終わった。

そこからさらに日にちがたち俺は紗夜と日菜が家に来た。

この二人がセットでくるのは他に人がいた時はあつたが、それ以外で見たことがないので意外だった。

家に招き入れてリビングに向かってソファーに座ってもらった。

勇也「飲み物入れてくるから待ってて」

俺は立ち上がり後ろを向いた途端に首元に電気が走って俺はそのまま倒れた。

日菜「アハハハあたしたちに背中を向けたらダメだよ。勇也くん」

紗夜「フフフフフそうね。とりあえず早くしましょう」

日菜「そうだね。おねーちゃん」

俺は目を覚ますと椅子に座って手を後ろで括られ、足はそれぞれにくぐられていた。

勇也「う…んここは？」

日菜「アハハハ起きたね勇也くん」

紗夜「そうですよ。寝すぎですよ」

この時の二人はまともじゃないと一発でわかった。

そのまま日菜が俺の顔をつかんだ。

俺は顔を逸らそうとしたが力が強く、俺は寝起きで力が入らなかつた。

日菜「ん…んんんちゅ、んんはあ…はあ。気持ちいいよ。勇也くん」

日菜の口と俺の口からは銀色の糸が垂れてた。

勇也「ひ…な？」

俺はされたことに頭がついていかずに何をされたかわかっていなかった。

紗夜「次は私ですよ。普段はダメってわかってるんですけどね。もう無理です」

そこから紗夜にも同様にされた。

勇也「二人ともどうして!？」

俺はあえて大きい声を出した。

その後ろでは手を縛っているロープを外そうと動かしているから気づかれないようにするためだ。

そのまま時間は過ぎて行き昼頃になった。

日菜「それじゃあお昼を作ってくるよ」

紗夜「そうですね。逃げようなんて考えないでくださいね」

二人ともに念を押されて俺は部屋に取り残された。

そのままロープをなんとか外して外からは見えないように内側にリボンのように結んだ。

しばらくして紗夜と日菜が昼飯を持ってきた。

最初は普通に食べさせてきたが途中で飽きてきたのか口移しになつて味なんかわからなかった。

食べ終わって何をするわけでもなく時間だけが過ぎて行った。

勇也「1つ聞いていいか？」

日菜「どうしたの？」

勇也「なんでこんなことをする？」

紗夜「それは勇也さんが私たちの好意に気づいてくれなかったからですよ」

俺はそれを言われて目の前が真っ白になった。

まさかこの二人からそんなことが言われると思つてなかった。ただどなおさらこのまま終わらせるわけにはいかない。

俺は手のロープを一瞬で外して二人を捕まえた。

日菜「アハハハまさかそんな簡単に抜けられるなんてね」

紗夜「フフフフ予想にもしてませんでした」

俺は今二人を押し倒している体制になっている。

俺はそのまま二人を起こした。

日菜「勇也くん？」

紗夜「勇也さん？」

勇也「ごめん二人とも。本当に俺がバカだった。二人の気持ちに気づいていれば二人にこんなことをさせないで済んだかもしれない。

本当にごめん」

俺は二人に頭を下げた。

二人は何も言わずにただただ驚いていた。

紗夜「どうしてなんですか！私たちが悪いのに」

勇也「俺だよ。二人の気持ちに気づいてたらもつと違う言い方をできたかもしれない。二人にこんなことをさせて後々負い目を被せなくて済んだんだよ」

日菜「バカ…」

そのまま二人とも俺に飛び込んできて俺は倒れた。

その上で二人とも泣いていた。

それはしばらく終わることなく、かなり長いことその体制になっていた。

そして二人とも家を出るときに行った。

日菜「今はまだ無理でも必ず振り向かせるからね！覚悟しててね」

紗夜「いつか必ず」

勇也「諦めたんじゃないのかよ」

日菜・紗夜「女の子はしぶといんです（だよ！）」

勇也「やれやれ困った」

そう言った二人の顔は泣いて目は赤くともそれ以上に透き通った黄金色の目でそう言われた。

そこからもあつという間に時間ばかりすぎて俺たちは3年になり、受験のことをしているとあつという間に冬休みになった

卒業式はなんだかんだで泣く人が多い

俺たちが三年になり蘭たちももちろん二年になった。

噂ではひまりがかなりギリギリだったとか：

そんなこんなでみんなちゃんと進級して時間が経ち冬休みに入
た。

リサと付き合ってからもうろんなところに行った。

冬休みに入り俺は友希那に呼ばれた場所に向かった。

本来なら家で勉強してたいが息抜きがわりに公園に行ってみると
そこには親父と友希那がいた。

勇也「これどういうこと？」

友希那「あなたリサと付き合うときにリサのお母さんに言われたん
でしょう。今ならゆっくり話せるわ」

父「すまなかった。全て俺が悪かった。だから戻ってきてほしい。
俺の息子として」

そういい頭を下げて、手を出してきた。

俺はそれを受け取るに受け取れなかった。

ここ最近の親父の態度は明らかに変わった。

友希那たちに対しても何事もなくきている。

けれど過去のことを思い出して手を伸ばして手を取ろうとすると
途中で止まる。

友希那「……こうすればいいのよ！」

そういいしたのは俺と親父の手を友希那が取り合った。

友希那「私が2人の架け橋になるわ。今すぐには言わない。2人
が向き合えるときまで」

そういい俺たちを引っ張って連れていかれた。

父・勇也「ネ、猫カフェ？」

連れてこられたのは猫カフェだった。

俺たちは言われるがままドリンクを買っていった。

友希那はもうすでに猫に満喫中だ。

俺と親父は椅子に座ってその姿を見ていた。

勇也「お前のことを許したわけじゃない。けどまだ信用はできるよ
うになつた」

父「ああ」

そうして俺も行くど一気に猫が寄つてきた。

俺はそのまま猫に埋められて、倒れた。

しばらく動けないままなんとか抜け出して俺は逃げるようにまた
椅子に戻つて行つた。

親父「災難だな」

勇也「そう思うなら助けろよ」

親父「見てる分には面白くてな」

勇也「全く」

俺たちはそこからもいて出るときに友希那を説得するのは大変
だった。

そして帰り道に俺は本当の自宅に帰ることになつた。

事務所に話して今ある自宅は俺がお金を払うことで今後も使える
ことになつた。

自宅

俺が帰ると母親が飛んできた。

俺は受け止めたが意味がわからなかつた。

今まで親父に賛同して俺をいじめてたやつがこんなことをするな
んて思いもしなかつた。

母「ごめんなさい。もう二度とあんなことはしないわ」

勇也「わかつたから離れてくれ」

母親は離れてキツチンに向かつた。

俺もついていき手伝うことにした。

その間も絶え間無く話してきてまるで人が変わったかのようにさ
え思えた。

俺はその日食べた飯の味を忘れることはないだろう。

俺が自宅に戻って寝ようとする親父に呼ばれた。部屋に行く椅子に座って俺を待っていたみたいだ。

勇也「何の用だ？もしかして今からやるのか？」

父「まさか、俺はもう二度とお前に手をあげないよ。これを渡しとこうと思つてな」

素晴らしい箱を投げられた。

掴んで見てみるとコンドロー○だった。

勇也「なんてもん渡してんだ！」

俺は勢いでそれを床に叩きつけた。

父「リサちゃんとするときに必要だろ」

勇也「はーなんだか神妙な言い方で気になってきてみてこれかよ。

もらつとくけど」

親父は笑っていた。

親父の顔をはつきり見たのなんていつぶりだろう。

そんなことを考えて俺は部屋から出て行った。

親父からもらったものを2日目に使うとは予想だにしていなかったが…

俺が仲直りしたことをリサとリサ母に言うときリサは驚いていた。

なぜかそのままリサとデートすることになった。

この一年でいろんなところに行ったがこういう急なことは初めてだった。

俺は服を着替えてリサと合流してそこから映画を見てカフェに行く、俺の自宅に向かった。

今は誰もいないから静かだった。

リサ「静かだね」

勇也「そうだな。いつもここにきた時はうるさかったからな」

確かなここにいた時は友希那やリサ、その後もいろんな人がきた。

少し懐かしいような感じもする。

そこからはリサと一緒に料理をして俺は今日は帰らないと連絡だけしておいた。

自分の部屋に行くとりサはすでにいてベッドに腰をかけていた。

リサ「また髪乾かしてない」

勇也「まあ風邪引かないしいいだろ」

リサ「ダメ、ここに座って」

リサはベッドに座り俺はその下に座ることになった。

そのまま髪を丁寧に乾かされて俺はリサと一緒にベッドに入った。ベッドに入り、キスをするとりサの方から深くしてきた。

そのまま俺たちは角度を変えて、そこで部屋の電気を消した。

勇也「もういいのか？」

リサ「うん」

その言葉だけで十分だった。

俺たち2人とも初めて付き合うとはいえ高校生でこんな暗い中といえは当然そう言う雰囲気になる。

俺は何度もキスをしたりピアス穴を噛んだ。

リサ「ん、んん、！ちよつとそこ…ダメだつてば」

勇也「そんなことを言われてもやめないよ」

リサが色っぽい声を出すから余計にやめられなくなってきた。

そこからもしばらくして落ち着くと同時くらいに俺たちは疲れたのかすぐに眠った。

目を覚ますとりサは目の前で気持ちよさそうに寝ていた。

起こすのも悪いので俺はそつと立ち上がりベッドから出ると俺たちの服が散乱していた。

勇也「これは…ちよつとな」

そして俺はとりあえず着替えの服を着て片付けを始めた。

結局あの親父にもらったの一箱全部使い切るまでやると思いもしなかった。

しばらくするとリサも起きたみたいだった。

リサ「ん、んんー」

リサは目を覚まして自分の姿に驚いたのか今まで見たこともないようなスピードで服を着た。

そのままリビングに行き先にリサはシャワーを浴びた。

俺もその後に浴びて2人でコーヒーを飲んでいた。

リサ「うう痛い」

勇也「ごめん。つい」

リサ「ううん。勇也も痛いでしょう？あたし背中に手を回してる時たぶん刺さってるから」

勇也「確かに痛くないっていえば嘘だけど、嫌な痛みじゃないよ」

リサ「勇也つてもしかしてM?」

勇也「どうだろう?」

リサ「けどしてる時は本当にSだったよ」

勇也「言わないでくれ」

そんな会話をして俺たちはベッドに戻って眠った。

俺の部屋とは違うベッドだが：

そのまま日には経って行き卒業式の前日まで来た。

みんな大学は一緒に行きたいと言い出して花咲川のメンバーも同じ学校に行くことになった。

俺はもちろん止めたがみんな聞くことなく同じ大学に行くことになった。

そのときに一番喜んでいたのは日菜だが：

前の日は何もすることなく俺たちはその日を終えた。

卒業式

朝起きて用意するとリサがいた。

なんでも一緒に行こうと言うのを忘れて言わなかったら俺が逃げると思っただらしい。

リサ「それじゃあ行こ!」

勇也「行こっか友希那も」

友希那「ええ」

父「後で行くから」

勇也「はあく来なくてもいいのに」

母「そう言わないの」

本当にこの2人は変わった。

まるで人格自体が変わったというか元々こっちの性格だったのかと勘違いしてしまうほど。

俺たちは家を出て行くと蘭たちにあった。

行く道が違うはずだから会うわけがないんだけど…

全員「卒業おめでとうございます！」

勇也「みんな、どうしてここに？」

モカ「それはですね、蘭がどうしてもお祝いしたいって言うから朝早くに来たんですよ」

よく見ると耳や手の先が赤くなっていた。

寒いのもあるが10分やそこらでここまで赤くならない。

つまりかなり前からいたことになる。

勇也「ちよつと待ってて」

俺は家に入り人数分の手袋とカイロを持ってきた。

勇也「これ使って。俺のお古だから嫌かもしれないけど」

ひまり「そんなことないです！ありがとうございます」

蘭「あつたかい」

勇也「全く言ってくればよかったのに」

全員「……………」

俺たちは蘭たちを加えたメンバーで学校に向かった。

蘭たちは在校生として卒業式に参列する。

学校に着くと蘭たちと別れて俺たちは教室に向かった。

今回三年になるに当たってみんな同じクラスになれたのは大きかった。

日菜「あ、勇也くん。リサちゃん、友希那ちゃんおはよー」

麻弥「おはようございます」

勇也「おはよー」

リサ「おはよー」

友希那「おはよう」

みんなも来ていたみたいで俺たちはクラスの中でも遅いほうだった。

俺は相変わらずクラスの男子に嫌われていた。

今となつてはどうでもいいが理由もリサと俺が付き合っていて、さらにアイドルの麻弥、日菜それに A f t e r g l o w のメンバーと仲がいいかららしい。

この一年で一番変わったのは日菜だ。

人の感情を読むのが苦手で空気をぶち壊す発言をしていた日菜が俺が言った一言によって他人のことを考えて尊重するようになった。まだまだ苦手みたいだが大きな進歩だった。

興花「おはよ」

勇也「ずいぶん遅かったな。寝坊か？」

興花「まさか、ただ単に用事があったんだよ」

興花にもこの一年助けてもらった。

何せ友希那が卒業が危ういと言われた時は俺と興花で勉強を教えていたからそういう意味でもマネージャーとしても頭が上がらない。

興花が来ると教室の雰囲気が一気に変わる。

興花はこの付近で1、2を争うぐらい美人だからみんな自然と目がいく。

それにこの学校に訳も分からないファンクラブまである。

そこで教師がやって来た。

教師「はいはい。ちゅうもーく。まずはみんな卒業おめでとう。みんなの担任できたのは本当に嬉しかったよ。さて、湿っぽい話はここまでにして体育館に移動しようか」

本当にこの教師湿っぽい話嫌いだな。

そこから俺たちは体育館に移動して卒業式を始めた。

そのまま長い卒業式を終えた。

みんな教室に戻り筒に入った卒業証書もらった。

俺はそれを持って帰ろうとするといろんな人に捕まった。

リサたちはもちろんほとんど見たことがない後輩にも捕まった。

「写真一緒をお願いしますー！」

勇也「わかった、わかったから近い」

リサと付き合ってるとはいえ女にこれだけ近づかれたらいい匂いもするし、気も揺らぐ。

するとリサから後ろでつままれた。

リサ「ずいぶん嬉しそうだね〜」

勇也「いたた、悪いって。それに俺が好きなのはリサだけだよ」

リサ「へ？あ、えっと、うん」

顔を真っ赤にして離してくれた。

そこから写真を撮りそれだけで1時間ぐらい使った。

その間にみんなは最後と思ったのか卒業するやつらは泣き始めた

そこで最後に後輩男子や同期の男子に捕まった。

「最後に勝負しろ」

勇也「は？やだよら、面倒くさい」

「逃げんのか？」

勇也「なんとでもどうぞ」

「お前の周りがどうなっても知らないぞ」

その言葉を聞いて俺は頭にきて挑発に乗った。

人数は20人ぐらいだろうか。

一緒に校舎裏に行き1人ずつと喧嘩を始めた。

しばらくして俺の体力の限界がきた。

勇也「ハアツ、ハアツあと何人だ」

見てみるとあと5人ぐらいだった。

そこで勝気と見たのか全員がかかってきた。

俺は最後に足を薙ぎ払うようにして全員をこかして終わりにした。

一発ももらってないがすごい疲れた。

そのまま元いた場所に戻り、みんなのところに行った。

そのまま門を出て俺たちは羽丘を後にした。

大学生編 入学式

俺たちは卒業してから服をたくさん買いに行った。

俺たちがいく大学は私服でいいらしいのでなるべく多く勝っておこうと言われたからだ。

俺は3年のときに車の免許をとり俺が運転することになった。

親父たちの意見で車を大きいのを買い(買ったのはほとんど俺だが…)リサと友希那、日菜と千聖、花音と紗夜は乗り込んだ。

助手席にリサが乗りそのほかのメンバーは後ろに乗った。

千聖「ごめんなさいね勇也くん」

勇也「気にすんな。1人で行ってもこの人数で行っても変わらないよ」

リサ「だいじよーぶ。勇也は今日しっかりコーデしてあげるから」

勇也「勘弁してくれ」

正直あのとき以降紗夜と日菜はなかなかあってくれなかったのによかった。

そんなことを考えて車を走らせて来たのは少し遠いところにあるシヨツピングモールだった。

ここはかなりの店が入っており最近有名になって来たところだ。

花音「広いね」

勇也「とか広すぎやしない?」

友希那「私は早く帰って練習したいのだけれど」

リサ「まあまあ友希那もそんなこと言わないでさ、一緒に服選ぼう」

友希那「まったく」

そこから俺たちは服屋に行き服を選んだ。

それにしても周りの視線が痛い。

まあそれもそうなんだけどこんなメンバーに俺1人なんてのも考えものだな。

すると1人の小さい女の子が近づいて来た。
見る限り小学生だろう。

「あ、あの湊勇也さんですか?」

勇也「ん? そうだけどうしたの?」

「わあ本物だ。あ、あのサインください」

まさか小学生にサインを欲しいなんて言われるとも思ってた。なかった。

俺は持っていた色紙に書くとその子は喜んでどこかに行った。

そこに1人の男がやって来た。

和樹「久しぶりっすね」

勇也「あー和樹か。ずいぶんだな。どうしたんだ?」

和樹「服買いにきたんっすよ。大学私服なんで」

勇也「へーそうなのか」

和樹「それじゃあこれで。俺は用事があるんで」

勇也「ああ、んじゃ」

そうしてどこかに行った。

なぜだかわからないが妙な胸騒ぎがしてならない。

リサ「どうかしたの?」

勇也「なんでもないよ。服決まったの?」

リサ「あたしはね。けど千聖がすごくて」

勇也「なんとなくわかるかも」

そこで決まったみたいなので俺はみんなのところに行き、俺は自分の分とまとめて払った。

みんな驚いて止められたがなんとか説得して払うことにした。

紗夜「勇也さん。返しますよ」

勇也「いらないよ。それより早く次行こう」

花音「で、でも高かったよ」

勇也「気にしなくていいよ。次もあるんだし」

俺たちはそこからも移動して荷物を車に置いてまた出かけた。

こういう時はやっぱり車は便利だ。

俺たちはそこから昼を食べてそこからはいろんなところに回った。

カラオケに行ったりしていた。
意外と紗夜が歌うまくなかったのはびっくりだった。
それにしても80後半はあったが、周りがうますぎた。
日菜と友希那に関して98、99を出しまくっていた。
まったく化け物だった。
その日は終わり俺は車を運転しているとみんな寝ていた。
一人一人家に送り最後になる頃には友希那とリサも目を覚ましていた。

リサ「勇也今日はありがとう」

勇也「いいよ、楽しかったから」

リサ「けどもうちよつとあたしに構ってくれてもいいと思うけどな
」。少しは寂しいんだから」

勇也「え？最後なんて？」

リサ「なんでもない！今日はありがとう」

俺は車を直してリサと別れて家に帰った。

そこから俺は眠った。

日にちが経ち入学式の日がやってきた。

入学式はまじめにしないといけならしく俺たちはスーツを着て
行った。

リサや彩は似合ってなかった。

逆に紗夜や友希那、薫に千聖はびっくりするぐらい似合っていた。

そこに興花もやってきた。

興花はスーツで恐ろしいぐらいに似合っていた。

勇也「じゃあ行こっか」

友希那「そうね」

俺たちは移動して講堂に行き入学式に向かった。

そこで長い話を聞いて出て行った。

俺は途中から寝ていたが…

そこでクラス分けを見ると俺とリサ、日菜に千聖、花音と燐子
に興花が同じクラスだった。

1学年がクラスなのでこれだけ揃うのも珍しい。
残りのメンバーも同じになったようで喜んでいた。

俺たちはクラスに移動すると入った途端にすごい視線が集まった。

「あいつか」

「そうみたいだな」

勇也「なんだか注目されてない？」

「あの人だよ」

「ほんとだね」

興花「確かに注目されてるかも」

そこで席を見て俺は座ると女子がやってきた。

「サインください」

勇也「はい？サイン？」

一度書くとそこから止まらず俺の教室だけじゃなく廊下にまで長蛇の列ができていた。

そこに教師が入ってきて途中で終わった。

そこから自己紹介をしていくと俺のクラスに和樹がいた。

軽く挨拶して俺は家に帰った。

帰るとなぜかお祝いをされたが……？

入学式からいろいろ大変

俺たちが入学してからすでに1ヶ月以上たった。その間も大変で講義なんかあんまり聞けてない。

高校と違いみんな所々でケータイをいじっているのですごくいい通知が来る。

それも入学式の日のが原因なんだけど。

あの日俺は連絡先を教えるところから連絡が止まなくなった。

俺たちは今飯を食べてる

勇也「眠い」

リサ「あはは：勇也は人気者だね〜」

リサはそういいながら全く顔が笑ってない。

けど男子からの嫉妬はひどい。

実際この一ヶ月リサたちには男子からよく連絡が来るみたいだ。

それに関しては何も言っていない。

リサ「あたしだって：」

勇也「ん？どうかした？」

リサ「なんでもない。ただ勇也が全然構ってくれないな〜と思つて」

勇也「悪かったって。今日遊べる？」

その瞬間にリサの顔は一気に明るくなり、もちろんと言ってどこかに走っていった。

あんな顔されたら俺の方が大変だ。

そこから講義を受けて終わったのが16時を回って居た。

そこから行けるところとなると数が限られてくる。

リサ「どこに行こっか？」

勇也「んー今回はあんまり時間ないから近くにして週末に遠くに行くか？」

リサ「そうだね。今日はカフェにしよう」

2人でカバンを持ったままカフェに向かった。

電車で少し距離のある有名なところに向かった。

中に入ると人気なようでかなり混んで居た。けれど入れてそのまま席に着いた。

俺はコーヒ―をリサは紅茶を頼んだ。

頼んだものが来て飲んでみると確かに有名になるくらい美味しかった。

リサとの久しぶりの2人きりの時間を過ごして俺はそこで別れた。今日は1人になりたいので俺はもう1つの自宅に向かった。

その途中で花音と沙綾にあった。

花音「あれ？勇也くん？」

勇也「花音に沙綾。どうしたの。こんなところで」

沙綾「ちよつとこら辺に用事があつて」

勇也「へーそうなんだ。んじゃ」

俺は帰ろうと横を通り過ぎるとその瞬間に沙綾に手を花音に何かの注射を刺された。

勇也「なに…を」

沙綾「アハハ、勇也さん油断しすぎですよ」

花音「うん。勇也くんが悪いんだよ」

俺は落ちる意識が段々遠のいていきその場を倒れた。

そして次に目を覚ますと見たことのある天井だった。

そのせいもありなにも気にせず起きようとするとき起き上がれない。

自分の体になにが起こっているのかみると手から足まで全てロ―プでくくられていた。

勇也「ここは…俺の家か」

沙綾「そうですよ」

花音「ずいぶんぐっすり寝てたね。そんなに疲れてるのかな？」

勇也「ああ、この格好じゃなければゆっくりできたかもな」
起きたせいもあるがなぜか力が入らない。

手を出そうとしてもうまく縛られて出られない。

花音「えへへ…それなかなか外せないでしょ」

沙綾「勇也さんでも外せないように工夫したんですよ」

口調は普通でも恐ろしいぐらいの目をしていて、それでも2人が止むことはなかった。

そこからは2人が飯を作り、部屋を出ていった。

勇也「さてどうしよつか」

俺は引きちぎろうとしたが力が入らない上に本当にうまく縛っている。

俺は指先だけ動かしてケータイをいじった。

だれにかかるかはわからないがここは賭けだ。

かかったのは興花だった。

興花「どうしたの？」

勇也「今すぐな俺の家に来てくれ。誰にもバレないように。合鍵使って静かに来てくれ。これ以上は話せない。頼む」

興花「え？あ、ちよつと！」

そのまま電話を切った。

その直後に2人が入って来た。

持って来たのは普通の飯だった。

沙綾「勇也さん、あーん」

俺は口を開かなかった。

花音「うーん。開いてくれないね。それじゃあ」

花音に顔を押しえられた。

それにしてもすごい力だ。

これがあの花音の力？

そのまま口移しをされた。

花音「えへへ、私までご馳走になっちゃった」

沙綾「あー花音さんずるい。私も」

そこから終わることなく永遠にされていた。

なんとか終わってやっと終わりかと思うとそこで終わりじゃない。なかった。

花音「口周りが汚れちゃったね。綺麗にしてあげるよ」

沙綾「そうですね。綺麗にしないと…」

そこから2人に舌を使って口周りを舐められた。

勇也「2人とも…」

そう言いかけた途端に興花がやって来て2人を気絶させた。

興花「全くいきなりかけてくるんだもん。びっくりするよ」

勇也「悪い。助かった」

興花は縄を切ってくれた。

俺は縛られていた跡が少しあった。

興花「それでどうするの？」

勇也「2人のことは任せてくれないか？俺のせいだから」

興花「はー全くどこまでお人好しなんだか。だからあたしも」

勇也「ん？最後聞こえなかった」

興花「なんでもないよ。それじゃあね」

勇也「また今度お礼するよ」

興花「期待してる」

興花そう言い出て行き俺は花音と沙綾をベッドに寝かせた。

そこからも中々目を覚まさず2人が目を覚ましたのはかなり時間を要した。

花音「う…ん」

沙綾「ここは？」

勇也「2人とも目を覚ましたんだな。よかった」

花音・沙綾「勇也さん（くん）!？」

勇也「もう捕まえられないよ」

花音「うん。わかってる。勇也くんが本気になったら私たちじゃなにもできないことも」

沙綾「ほんとにごめんなさい」

2人ともベッドに座って土下座しようとしたので途中で手を出して止めた。

勇也「それは2人がすることじゃない。ごめん」

俺が土下座した。

花音「ゆ、勇也くん!？」

沙綾「なんで勇也さんが土下座してるんですか？」

勇也「2人のことを傷つけたからだよ。ほんとにごめんな」

俺は2人に起こされた。

そのまま2人は飛びついて来て泣き出した。

沙綾「悪いのは：私たちです。うわああああ」

花音「わたし達が：悪いんだよー」

2人に乗られて俺は身動きが取れなかった。

俺は2人の頭を撫でて泣き止むのを待った。

そこから泣き止むまでには30分ぐらいかかった。

その間も頭を撫でてたが2人とも少しウエーブのかかった髪なのにすごく指にかからなかった。

綺麗な髪をしていた。

沙綾 side

花音「ごめんね。勇也くん」

沙綾「ごめんなさい。勇也さん」

花音・沙綾「もう近づきません」

その瞬間ににあたしは頬に痛みが走った。

何かと思っただけで見てみると勇也さんが涙を流しながら私たちを叩いた。

勇也「ごめん。けどそんなこと言わないでほしい。高校の時にも話したけど俺は2人のおかげで助けられたんだから」

そう言われて私はやっぱり勇也さんが好きなことを認識させられた。

花音さんも同じなように頬を赤らめながらも嬉しそうにしていた。

END

勇也「ごめん。けどそんなこと言わないでほしいら、高校の時にも話したけど俺は2人のおかげで助けられたんだから」

我ながらすごい恥ずかしいことを言った。

2人の顔を見ることができず恥ずかしくて後ろを向いた。

その時に2人に抱きつかれた。

花音「今はダメでも勇也くんを諦めないから」

沙綾「私もちゃんと勇也さんのこと好きですから」

そう言った2人の顔は泣き崩れていたがすごい綺麗だった。
そのまま2人も帰って行った。
数十分後に花音から迷子の連絡が来たのは別の話

中々に大学は大変

俺が花音たちにされてからかなりの日数が経ってもうすぐ夏休みだ。

けどその前に学生にとって最悪のテストがある。

俺は学校のテストは特に心配なかった。

日菜も同様に心配していない。

紗夜は復習をしっかりとっていて前回のテストも点数良かったから心配してないが残りのメンバーだ。

特にひどいのが友希那だった。

俺は家で飯を食べてると話しかけられた。

友希那「勉強を教えてくださいませんかしら？」

勇也「は？俺が」

友希那「ええ、そうよ」

勇也「わかったよ。けどなんの教科？」

友希那「その、ぜ、全部」

勇也「へ？なんて」

友希那「だから全部だって！」

逆に怒られた。

俺は笑いをこらえきれずに笑い出した。

友希那は少し怒っているが：

そこから飯を食べ終わると友希那の部屋に向かった。

そこで入ると友希那は服を脱いで着替える最中だった。

勇也「へ、あ、いや」

友希那「何してるのよ！早く出て行きなさい！」

勇也「は、はい！」

俺は部屋から出て行った。

それにしても頭から離れない。

思ったよりはあったな。

友希那「もういいわよ」

そこで顔を出して友希那が来た。

友希那「きつきのことは気にしないでいいわ。わざとじゃないでしょうに。けれど忘れてちょうだい」

勇也「最大限努力するよ」

俺はそこから部屋に入って、勉強を教え始めた。

そこから時間はだんだん過ぎて行き夜から始めてもうすぐ日が回りそうだった。

勇也「今日はここまでだな」

友希那「え？あ、もうこんな時間なのね」

勇也「ずいぶん集中してたね」

友希那「それにしても教え方上手いわね。教師になれるんじゃないかしら？」

勇也「はは、どうだろう。友希那はなんだかんだでしないだけだからね」

友希那「音楽以外のことに時間を使いたくないのよ」

勇也「それでこの点数なら世話ない」

友希那「くくくくくくくくくく！」

これ以上からかうと後が怖いので俺は部屋を後にした。

それにしても友希那の点数は本当にギリギリだった。

これなら俺に教えて欲しいというのも分かる。

俺は部屋に戻って目を瞑った。

そこからもテスト勉強をして時々リサに教えたりもした。

なんとかテストも終わり友希那の点数はみんなびっくりした。

日菜、俺に次ぐ学年3位だった。

リサ「うつそく」

勇也「これは驚きだな」

友希那「助かったわ。ありがとう勇也」

勇也「いやこれには俺もびっくりしてるんだけどな」

紗夜「勇也さん!!」

勇也「うわ！何紗夜？」

紗夜「次はわたしにも勉強教えてください」

勇也「うん。わかったから近いよ」

この距離はやばい。

みんなも気がついたように紗夜は机を乗り出して俺の顔に息がかかるぐらい近かった。

紗夜もそれに気づいたようで顔を真っ赤にして離れた。

花音はあれ以降何も話してこない。

もちろん気まずいのもあるだろうけどこれはさみしいので強硬手段に出た。

俺は花音の近くに行くのと花音は怯えたような顔になった。

花音「ゆ、勇也くん？」

勇也「花音ちよつとごめんな〜」

俺は腕に掴んで走って行った。

みんなもびつくりしてるようで状況についていけないみたいだ。

花音「え？ちよつと勇也くん」

勇也「喋ったら舌嚙むよ」

俺はそのまま止まることなく家に帰り車に乗り込んだ。

花音は驚きながら息を整えていた。

花音「勇也くん。どこに行くの？」

勇也「んー水族館」

花音「え？水族館？なんで突然？」

勇也「あの日以来花音がぜんぜんぜん話してくれないからかな。それもあるけどなによりしよんぼりしたのは見たくない」

花音「~~~~~!!」

花音は助手席で顔を真っ赤にしていた。

その前に車を走らせて来たのはこの辺なら一番でかい水族館だった。

入場券を買い中に入ると平日もあり少し空いていた。

勇也「どこに行く？」

花音「じゃあクラゲ見に行ってもいい？」

勇也「どこでもいいよ」

花音はワクワクしながら俺の手を引いてクラゲがいるところに向かっていった。

そのままショーケースに張り付いてなかなか離れなかった。離れてから向かったのはペンギンとの触れ合いができるところについた。

そこに行くとき花音に一匹のペンギンが近づいて来た。

そのまま花音の前に座って何かを訴えかけるようにした。

勇也「知ってるの？」

花音「ううん。わたしにペンギンの知り合いはいないな……」

まさか！ペンちゃん!？」

ペンギンは気づいてもらえて嬉しかったのかその場で飛び跳ねていた。

花音も嬉しそうにそのペンギンを抱いていた。

俺はそれを写真に撮って花音に送っておいた。

そのまま閉館時間まで花音はそのペンギンと遊んでいた。

途中で飼育員がやって来てびっくりしていたが……

なんでもあのペンギン前の水族館からこっちに来てからは中々人に懐かなかったとか。

花音は助手席で嬉しそうにしている。

花音「勇也くん。今日はありがとう。けどこういうことはリサちゃんにしてあげないとね。最近構ってもらえないって言ってたよ」

勇也「全く情けない限りだ」

花音「それにしてもあんなところでペンちゃんに会えるなんて思わなかつたな」

勇也「ずいぶん嬉しそうだな。よかつたじゃん」

花音「うん！すごい嬉しいん……」

花音は遊び疲れた反動か瞼が落ちて来ていた。

そのまま眠り俺は車を花音の家まで持っていきインターホンを鳴らして家族を呼んだ。

花音母「はい」

勇也「すいません。花音をお願いします」

花音母「あらあらずいぶん気持ちよさそうにして。よかつたら部屋まで届けてあげてくれる?」

勇也「わかりました」

俺は花音の家にも何回か来てるので大体のことはわかってる。

花音の部屋に行きベッドに花音を寝かせた。

俺はそのまま部屋を出て帰って行った。

帰ってからリサにえらく追求されたのはまた別の話

夏休み

テストも終わりおれたちは夏休みに入った。

夏休みに入ると俺は一人暮らしの方の家に入ることが多くなった。こっちの方が静かに過ごせるからだ。

それで今の状況に説明してもらいたい。

勇也「今これどういう状況？」

リサ「えーと、海行こうつてなつてあたしと友希那で話してたら日菜が来て、それを聞いた千聖が来て、興花も来たんだよね」

日菜「いいじゃん。いこーよ海」

千聖「そうよ。行きましようよ」

勇也「お前らなく。この面子で俺が行ったら殺されるわ！」

周りからの視線とかを考えて欲しい。

まったくこれでさらに人増えたらもう車無理だし。

興花「勇也が心配してることは何も無いと思うよ。海に行くのは無人島の海だから」

勇也「はい？」

興花「実はねリゾートとして買ったみたいなんだけど全くの手付かずでどうしようか悩んでて今回使うことにしたんだ」

これにはみんなも初耳なようで驚きを隠せていなかった。

しかも規模が違う。

無人島を買ったなんて聞いたことがない。

けどみんなは驚きからワクワクした顔になっていた。

リサ「そこなら勇也も文句ないよね？」

勇也「失礼な。俺は元々文句なんて言っつてないよ。ただ心配だっただけだよ」

日菜「それじゃあ決まりだね！」

興花「それじゃあ明日みんなを迎えに来るよ」

全員そこで了承してみんな帰って行った。

俺は1人になるつもりがリサも泊まると聞かなくてそのまま泊まることになった。

俺が飯を作ろうとするとリサが止めて自分が作ると言っただけで聞かなかった。俺は風呂の用意をしに行く。それも止められた。

リサ「勇也はゆっくりしてて」

勇也「いや、でもな」

リサ「いいからーゆっくりしてて」

そういわれたので俺はソファにゴロゴロしていた。

リサはエプロンをつけてキッチンに立つとほんとに違和感がない。あれでギャルなんだもんな。

そこからひと段落したのか風呂の方に行って洗い出した。

本当に悪い気がする。

リサ「できたよー」

勇也「ん、もう？」

リサ「軽く作ったただけだからね」

その割にはえらい凝ってる気がする。

シチューって、時間かかる料理だ。

「いただきます」

2人で食べるとやっぱりうまい。

それにリサは料理の腕が上がってる気がする。

勇也「うまい」

リサ「ほんとに!?!よかったー」

勇也「気にしなくてもリサは料理は料理上手だと思うけど」

リサ「勇也に言われたら嫌味だよ」

勇也「フフツ」

リサ「あー笑ったな」

そこから楽しく食べて俺は風呂に入って寝るためにベッドに行く。リサがいた。

しかもこの時期だから薄いネグリジエにも見えて、窓からの月明かりでかなり際どい。

こんなんでも理性を保つ方が難しい。

リサ「一緒に寝よ。勇也」

勇也「ああ」

俺はその一言だけでベッドに入りリサの方に背中を向けて寝転んだ。

するとリサは背中に抱きついてきた。

リサ「あたしは魅力ないのかな…」

勇也「逆だよ。やるとリサが悲しんだりしないか不安だったんだ」

俺はリサの方を向き口を合わせた。

そこからはあまり記憶がない。

ただ目を覚ますともうすぐ時間になりそうだったので、リサを起こして準備を始めた。

なんとか間に合い用意が終わったと同時にみんながやってきた。

そのまま車に乗り込み俺たちは船着場に向かった。

そのまま船着場につき、船があった。

なんだかおかしい。

勇也「ん？俺目がおかしくなったのかな。この船誰もいない」

興花「ん、これうちの船だもん」

興花は何事もなかったように行って乗り込んだ。

日菜もそれを追うように入って行った。

俺たちも入ると中はとんでもないぐらい広かった。

その一言に尽きた。

そのまま発車して行くとしばらくして俺は気分が悪くなってきた。

千聖「勇也くん？どうしたの？」

勇也「多分船酔いだ」

千聖「けどこの船全然揺れてないわよ」

勇也「ちよつと寝てくる」

おれは部屋に行きそのまま眠った。

この時はまだ俺は船酔いだと思っていた。

そのまま船は進み目的の島に着いた

無人島

俺たちは船から降りて無人島に入った。

その時に運転してきた人たちは帰って本当に俺たちだけになった。中に入っても体がだるい。

みんなにバレないように普通に装っているが本当に思うように動かない。

なんとか別荘につくとみんな驚きを隠せていない。

デカすぎて……

興花の後に続いてみんな入って行くと不思議に思った。

しばらく使っていないのに綺麗だったから。

勇也「綺麗などこだなく」

興花「なんか掃除してくれたみたいだよ」

リサ「それに海も綺麗だしね！」

たしかにここの海は綺麗だった。

それこそ雑誌とかで見るハワイの海並みに綺麗な海だった。

とりあえず部屋に行き荷物を置くとそこで限界を迎えた。

体が熱い。

腕が重い。

思うように動かない。

外を見て見るとみんなは海に行ったようで安心した。

俺は動かない体をなんとか動かしてベッドに倒れこんだ。

そのまま目をつむり時間が経ち目を覚ますとまだ寝ぼけていた。

勇也「母さん？」

友希那「お母さんじゃないわよ。けど後でお説教ね」

俺は今の状況を確認すると俺は友希那に膝枕されていた。

そして時間は外を見る限りもう夜だ。

俺はかなり長い時間寝ていたみたいだった。

俺は立ち上がろうとして体を起こすと反動で倒れた。

友希那「まだ動いちゃダメよ。勇也かなり熱出してるんだから」

勇也「熱？　そういわれてみれば」

俺の体が熱いのも思うように動かないのも納得できた。

俺はそのまま寝かされてしばらくするとリサが鍋を持ってこつち
にきた。

勇也「リサ」

リサ「全くいつつも無茶するんだから」

勇也「悪い」

リサ「けどそんな勇也だって知ってるから」

そう言いながらリサは鍋の蓋を開いた。

中身はお粥で俺が食べようとするるとリサに抑えられた。

そのままりサは冷まして俺の口の前まで持ってきた。

リサ「はい。食べて」

勇也「おいおい、これって…まさか」

リサ「いいから早く」

そのまま口の中突っ込まれた。

熱いと思つたがそこまで熱くなくむしろちょうどいい感じだった。

そこから食べ進めて気がつくともなくなった。

リサ「今日は安静にしててよ！明日元気になったら一緒に遊ぼう！」

勇也「わかつたよ。おやすみ」

リサ「うん。おやすみ」

リサは部屋から出て行き俺は再び寝転ぶと食べてお腹が膨れたせい
もあり、すぐに眠気は襲ってきた。

そのまま寝続けて俺が目を覚ますともうすぐ朝日が昇ると思う時
間だった。

起きた時には体のだるさはなく熱も引いていた。

そのままりビングに行き冷蔵庫を見て適当に朝食を作った。

しばらくしてみんな降りてきて少しのお説教と心配をされて今日
も海に行くと言わなかった。海に行くことになった。

海

行くと昨日と同じぐらい綺麗で透き通っていた。

日菜はそこに飛び込むように走って行き千聖は少し呆れながらも追いかけて行つて一緒に遊んでいた。

俺はのんびりしようとして別荘内にあつたパラソルを立ててるとリサも手伝いのんびりしようとして座ったら手を引つ張られて結局入ることになった。

そのままみんなまでビーチバレーしたり、遊んだりしていると時間が過ぎて行きすでに昼を回っていた。

日菜「お腹すいたー」

勇也「たしかにそろそろ腹減つてきたな」

『グウ~~~~~』

そこで誰かの腹が盛大になった。

誰かと思うと本人は真っ赤にして顔を晒していた。

友希那「これは…」

勇也「はいはい。わかつたから一旦戻ろうか。腹減つたし」

リサ「うん。そうしよつか」

千聖「ええ、わたしももうお腹すいてきたわ」

興花「ほんとだよ。夕方はバーベキューだからね」

日菜「えー！バーベキューなの!？」

興花「ちようどいいものがあつたからそうしようかと」

勇也「いいんじゃないかな。それより腹減つた」

その言葉でみんな移動して別荘に戻りみんなは風呂に行き、俺はその間に仕込みだけしておいた。

夕方はバーベキューって言つてたから軽い方がいいと思い、軽くチャーハンを作つた。

みんなが出てくると興花と日菜は乾かすのを適當だったようで髪が少し濡れていて色っぽい。

リサ「勇也も入つてきなよ」

勇也「そうするよ」

俺は風呂に向かつて入つて行くところは風呂もでかい。

昨日はシャワーで済ませたからここは全く見ていない。

ほんとにでかいな。

湯船に浸かりゆっくりしていた。

そのまま風呂を出て行くとみんなにお説教を食らった。

リサ「髪乾かしてっ！」

千聖「また風邪をひくわよ」

興花「勇也く髪は乾かさないと」

リサたちはともかく興花に言われるのは納得いかない。

興花だつて乾かしてなかったのに…

そのままリサに手招きされて俺は座った。

リサが髪を梳きながら乾かしてくれた。

勇也「さて、飯食べたらどうする？」

友希那「もう一度海に行ってもいいわ」

リサ「うっそく。あの友希那からまだ遊んでもいいなんて」

たしかにこれには驚いた。

今から練習しようとしても言うのかと思っていたから。

それだけここの海を気に入ったんだろう。

結局昼からも海で遊んだ。

ここなら周りの視線も気にしなくてもいいからすごく遊びやすい。

そこからも遊び続けて俺は先に別荘に戻ってバーベキューの準備を始めた。

火起こしからして、食材を切つていき、後はみんなが帰ってくるのを待つだけだ。

そして火がだいぶ付いてきた頃にみんな水着のままやってきた。

勇也「着替えてこいよ！」

リサ「いいじゃん。このままの方がいいでしょ」

勇也「たしかにこのままの方が…って目のやりどころに困るわ!!

それに火傷するよ？」

千聖「本音でまくりね」

勇也「はお…：…いわないでくれ」

俺はそこから焼き始めると日菜は止まることなく食べ始めた。

途中すごい千聖に怒られていたが、なんでもアイドルとして食べすぎはダメだとか、それでも日菜は自分は太らないから大丈夫と言って

た、

隣でリサと友希那が怒ってたのは言わないでおこう。

興花「勇也は食べてるの？」

勇也「ぼちぼちたべてるよ」

興花「嘘ばかり、さつきから焼いてばかりじゃん」

勇也「ん、んーそんなことないけど」

そこからは興花が焼き始めた。

俺の紙皿にどんどん入れていき食べるのが間に合わなくなってきた。

そこで一度ストップしてゆつくり食べた。

なんとかたべ終わりみんなもお腹いっぱいになったみたいなのでバーベキューはそこで終わりになった。

片付けをして俺たちは部屋に戻った。

しばらくして俺は海岸に行くと興花がいた。

ちようどいい機会なので聞いてみることにした。

勇也「興花」

興花「勇也どうしたの？真剣な顔して」

勇也「聞きたいんだけどなんでここまでしてくれるんだ？もう十分すぎるほどしてもらってる。興花がここまでしてくれる必要もないだろ」

興花「そっか…それもそうだね。全部話すよ」

その時の興花の顔はいつになく真剣だった。

興花「私は小さい時からなんでも買ってもらえた。まあこんな家に住んでるせいもあるんだけど…」

そのせいであいつと同じく調子に乗ってたんだ。

周りの子は多分私のことを恨んでいたと思う。

そして中学に入ったら初めて好きな人ができたんだ。

名前は言わないけどね。

そしてその人に気づいてほしくて、知りたくて私は今までの自分を捨てた。

そして私はしつたんだ。

あのバカ兄貴がその人を苦しめて、ひどいことをしていたことを……」

勇也「んー、話はわかったけどなんで俺にしてくれるの？」

興花「はーここまで言ってるわからないか。まあ勇也だもんね」

興花は呆れるようにして別荘に帰って行った。

俺も訳がわからずにしばらくして別荘に帰って行った。

次の日の朝に俺たちは船に乗って帰って行った。

その時にまた船酔いを起こした時はみんなびっくりしていた。

帰ってきてからは俺はCIRCLEに来ていた。

なんでもまたイベントがあるらしくまりなさんに俺は呼ばれていた。

まりな「ごめんね、また来てもらっちゃって」

勇也「いえ、気にしないでください。それにしても今回僕初めて見るバントもありますね」

まりな「ああ、GlitterGreenね。けど多分勇也くん知ってるよ」

勇也「僕が知ってるんですか？」

ゆり「それじゃあ勇也くん連絡先教えて」

おれは内心嫌がりながら交換した。

連絡先交換してグリグリは帰って行った。

その後はあんまりすることなくホールの清掃をして帰った。

帰っておれはこれからのことを若干不安に思いながら眠った

対バンライブは大変

俺が審査員することを友希那たちに言うといえらく責められた。

リサ「それでどうしてゆり先輩と連絡先交換してるのかな？」

勇也「いや、それはな向こうが強引に……」

リサ「へー強引に言われたら交換するんだ。知らない女のひと」

リサに責められて逃げ道を無くされた。

俺はなんとかリサをなだめていた。

勇也「ごめん。けどこれからのこともあるし、俺はリサ以外好きにはならないよ」

リサ「フア！え、うん。あたしも……」

全くこんなことはするもんじやないな。俺もかなり恥ずかしい。

リサは納得したのかそこで俺の家から出て行き帰って行った。

その直後に電話がかかって来た。

それはゆりさんだった。

ゆり『もしもし』

勇也「はい？どうしました？」

ゆり『明日一緒にショッピング行こうよ。あたしたちグリグリと』

勇也「え？」

ゆり『うん。強制ね。先輩命令だよ』

俺は拒否権はなくそのまま決まった。後になり駅前集合とだけ連絡が来た。時間は書いてなかったから10時ぐらいに行けばいいだろう。

そのまま静かな家で俺は眠った。

朝起きて時計を見るとまだ8時だった。俺は二度寝しようと思つて布団に入ると、ケータイが光った。

そこにはゆりさんからのメールだった。

内容はもう集まってるとのことだった。俺は用意して車に乗り途中のパーキングに停めていった。

ゆり「遅いよ」

七菜「全く待たせるなんて…」

そう言うが俺には誰だか全く分からなかった。

勇也「えつとどちら様で？」

リイ「あはは、七菜だよ。キーボードの」

勇也「へ？いや、だってメガネしてないし、全然雰囲気違いますよ」

ひなこ「いや〜いいね、いいよ」

そう言つて抱きついて来た。いや、やめて欲しいんだけどさ。それに七菜さんはよほどびっくりしたのか何も言わない。

勇也「それでどこに行くんですか？」

ゆり「今は夏だし、水着選んでもらおうかなと」

勇也「帰ります」

ゆり「待つて待つて、なんで？」

勇也「そりやそうでしょ。つてかよく七菜さんも許しましたね」

七菜「あなたなら大丈夫かと」

そんな信頼いりません。だから帰らせてください。お願いします。心の中でずつとつぶやいていた。

そこで心を読まれたのか俺の手を掴まれた。

勇也「わかりました。わかりましたから」

ゆり「うん。それじゃあ行こうよ。ーってどこ行くから」

勇也「そこなら車の方が近いですよ」

七菜「誰も車持つてないんですよ」

勇也「僕持つてますよ。ここまで車で来ましたし」

全員「!!」

ゆり「それじゃあお願いしてもいい？」

勇也「構いませんよ」

そこからパーキングに移動して車エンジンをかけて俺たちは向かった。ちなみに助手席はゆりさんだった。

ゆり「それにしてもずいぶん慣れてるね」

勇也「もう一年以上乗ってますからね。少しは慣れました」

ゆり「それにこの車大きくない？」

勇也「人乗せることが多いんで」

後ろでひなこさんが暴れて残りの2人主に七菜さんが抑えていた。俺は何も言わずに見ていた。そのまま車を走らせてなんとかシヨツピングモールについた。

着いた途端にひなこさんが走って行きそれにリイさんが着いて行き七菜さんが声を上げながら抑えに向かった。

ゆり「ごめんね。騒がしくて」

勇也「いえ、静かより全然いいですよ」

ゆり「その他人行儀の話し方なんとかならないかな？距離ある感じで嫌だな。タメ口でいいから」

勇也「わかりました：いやわかったよ。ゆり」

俺がそう言うと言顔を真っ赤にして背けた。言わせておいてそれはずるいと思う。ゆりは多分はたから見てもかなりかわいい。それは他のグリグリメンバーにも言えることだ。七菜さんなんかメガネしてない方が多分かわいい。

そんなことを考えていると手を引つ張られて俺も連れていかれた。俺は止まって着いたのはもう水着が置いてあるところに着いた。

ゆり「着いたよ」

勇也「僕は外で待ってますから」

ひなこ「君が選ばないと意味ないんだよ。特にゆりと七菜はね」

勇也「へ？」

ゆり・七菜「ちよつとひな」

2人とも顔を真っ赤にしていた。全くわけがわからずにいるとリイさんは隣で笑いをこらえていた。

そこから4人バラバラに動いて水着を探しに行った。ここは女物ばかり置いてるからすごい浮いてる。俺は耐えきれずにそこから出て前にある椅子に座っていた。すると七菜さんが出て来て少し怒られた。

七菜「なんで出てるんですか!？」

勇也「いや、だつて皆さんバラバラに動いてすごい僕浮いてましたから」

七菜「うっ!それは…すいませんでした」

勇也「いえ、こつちこそ生意氣すいません」

そこに他の3人もやって来た。他の3人も少し申し訳なさそうにしていた。俺は気にしなくていいと言つてもう一度中に入った。なんとか選り終わつておれが会計をすませるとみんな申し訳なさそうにしていたがなんとか説得した。

そこで俺は少し飲み物を買つてくると席を外していった。

その間にトイレに向かいみんなの分も飲み物を買つて戻つて行く
と4人揃つてナンパされていた。

人数は見る限り5人だった。

「俺たちと遊ぼうぜ」

七菜「人を待つてるんで」

「どうせこねえよ。気持ちいいことしようぜ」

ゆり「だから大丈夫です」

そのまま男は先輩たちの腕を掴んだ。周りの人たちも見て見ぬ振りをしている。それも1つの選りだ。実際に関わると

ゆり「いや、離して」

「いいから来いよ」

俺は少し走つてそのまま一人の足を蹴り上げた。そのままの勢いで全員の手を蹴り飛ばした。

勇也「全く。少しは考えてくださいよ。皆さん綺麗で目立つんだから」

ゆり「ごめんね」

勇也「いや、とりあえずはこの状況を終わらせましょう」

「調子に乗ってんじゃねえぞクソガキ」

そのまま殴りかかつてきたからその力を利用して投げた。背中を殴打たせいでそいつは苦しそうにしていた。

他の4人も殴りかかってきたがカウンターを入れたり、そのままの投げたりして一瞬で終わった。

勇也「まだやる？これ以上するなら手加減しないけど」

「す、すいませんでしたー」

そいつらは何処かに行きみんなの方を見ると体を震えさせていた。

みんなは何も言わずに俺に飛び込んできた。

ゆり「怖かった。怖かったよ」

勇也「悪かった。ゆり」

七菜「あ、いつの間にも名前呼びで」

勇也「そこですか」

みんな離れてそこからは聞かれてゆりは少し逃げるように何処かに行った。さっきのことがあったから少しは自重して欲しいんだけど。

まあずっと静かよりマシだからいいけど。

ひなこさんとリイさんは追いかけていった。

七菜「あの：わたしもゆりと同じように言って欲しいです」

勇也「え？」

七菜「お願いします」

勇也「わかったよ。七菜」

七菜「くくくくくくくくくく」

顔を真っ赤にして背けながら俺の背中にくつついてきた。

そのまま離れないでしばらくしていた。

勇也「あの、その」

七菜「ご、ごめんなさい。それじゃあ行きましようか」

俺たちはみんなを追いかけてそのままその日は終わってみんなを送り届けて俺も一人の方の自宅に帰った。

夏休みの間はこっちにいる予定だ。

そのあとみんなから連絡が来た。

俺は返信して眠った

無茶な要求ばかり

俺が目を覚ますとリサが来ていた。

リサには合鍵を渡しているからこれでもなんら不思議じゃない。

リサ「昨日は楽しかった？」

勇也「なんのことだ？」

リサ「ゆりさんたちとずいぶん楽しそうじゃん」

そこで見せて来たのは俺の光ってるケータイだった。あんまり必要ないと思って無防備で置いていたから名前だけでわかったんだろう。

こればかりは俺が悪い。

勇也「リサそれじゃあ今日の朝からの練習終わったら遊びに行くか」

リサ「え！行く行く」

たった一言でこれだからなんだか犬？それとも猫かとも思う。

けどやっぱりリサが好きなんだとこういうところで認識させられる。

とりあえずリサを一回返してその後の練習で会うことになった。

リサはうちに来たのはいいけどベースもなにも持っていなかった。

俺は朝飯を食べてCiRCLEに向かった。

CiRCLE

俺が行くと既に紗夜と友希那がいた。この2人はやっぱり早い。それに比べてリサとあこはかなりギリギリに来るから紗夜に怒られてばかりだ。こればかりは大学になっても変わらない。

紗夜「おはようございます。白金さんは宇田川さんを迎えに言っただからくると言っていました」

勇也「また寝坊してるのかあこは…まあ俺はあんまり気にしないけど。人間眠気には勝てない」

友希那「あなたが言っても説得力がないわ」

勇也「あはは……」

しばらくするとリサが来てそのあとに燐子とあこが来た。用意を始めて練習を始めると思った。

けどまだ始めずに話し始めた。

友希那「今回の対バンライブ、新曲をしたいと思ってるの。実はもう歌詞はできてあるわ。後はみんなの意見を聞くだけよ」

あこ「新曲やりたいです」

リサ「いいんじゃないかな？」

燐子「やり：たいです」

紗夜「やってみましょうか」

そこで曲の題名を見てみるとPASSIONATE ANTHE
ENと書かれていた。これは確か意味は熱烈なロックだったかな？
確かそんな意味だったと思う。

友希那にしてはずいぶんな意味だな

友希那「それで勇也はどうなの？」

勇也「俺はどっちでもいいよ。だって演奏しないし。みんながやりたいと思うならやるべきだと思う」

友希那「ならしましょう、けどこれから練習きつくなるわよ」

その言葉で怯む人はいなくみんな覚悟は決まってるという顔だった。

みんなが既存曲の練習の間に俺は作詞と譜面作りしていた。

もう既に歌詞ができているから後はそんなに大変じゃない。人によつてはかなり大変という人もいるが俺は特に苦に感じることはない。

そのまま作業を続けて1時間ほどで9割がたできた。そこでみんなも休憩してとりあえず友希那と紗夜に見てもらった。

友希那「いいわね」

紗夜「そうですね。まさか1時間ほどでここまでしてくるなんて思いもせませんでしたけど」

勇也「あははありがとう。けど演奏しないとわからないからまた後でよろしく」

そこで部屋の扉が開きだれかと思うとまりなさんだった。まりな「勇也くん今大丈夫？」

勇也「大丈夫ですよ。こつちも一通り終わりましたから」

俺は友希那にアイコンタクトを取ってから部屋から出た。出るとそこにはグリグリメンバーがいた。

ゆり「昨日はありがとうね」

勇也「どうしたんですか？僕は用事あるんですけど…」

まりな「ごめんね。用事はグリグリのことなんだ」

まりなさんは申し訳なさそうにしている。横でゆりは少し笑っているがここで怒るのも申し訳ない。

俺はRoseliaに一言入れてグリグリの方に行った。

Glitter Green

俺が入るとみんな軽くチューニングしたり準備し始めた。その姿はRoseliaと遜色なくやっぱりここも真剣にしているのがわかった。

そこから一曲目が始まり、二曲目が始まり三曲目で終わった。

七菜「どうだったかしら？」

勇也「うーん。僕がこれ言ってもいいのかな？」

ゆり「いいって。何か気になることあった？」

勇也「それじゃあまずドラムその場のテンション強い。キーボードは周りの音を聞きすぎて一瞬自分の音を見失ったね。ベースも同

様に一瞬キーボードが見失った瞬間に同じく見失った。

最後にギター、ボーカルは所々のミスが目立ったよ。何かに緊張してるのかな？」

そういうと全員がポカンとして俺の方を見ていた。その直後にみんながこつちに来た。

ひなこ「すごいよー、まさかそこまで当てられるとは」

リイ「やっぱりすごい。想像以上だよ」

七菜「流石の一言です。やっぱり」

ゆり「うん。これなら」

勇也「嫌ですよ。何いうかわかりました」

ゆり「ありやばれた？なんでーお願い」

勇也「もう既に3つのバンドのマネージャーしてるんでちよつと厳しいです」

ひなこ「そんなこと言わないでねがーい」

そう言つてひなこさんは頭をくしゃくしゃして来る。やっぱり前の時から思つてたけどこの人グリグリの中で一番ヤバい人だ。周りで七菜はもう手をつけられないみたいな顔してるし、リイさんは混ざろうとしてるし、ゆりはなんか見て笑いをこらえてるからだれも止められない。

しばらくされてるとまたまりなさんが入つて来て見た途端に驚きながらも話し始めた。

まりな「勇也くん。Roseliaが歌聞いて欲しいって呼んでるよ」

勇也「あ、わかりました。ありがとうございます」

まりなさんはそこで出て行きみんなも納得したように離れてくれた。

そこからはまた移動して、俺はRoseliaの方に向かった。

中に入るとこれから演奏開始というところで俺は座つて聞くことにした。

そこからは新曲の演奏に入った。

聞いていると何個かやっぱミスがあった。まあ人間だから見た直後に合わせて行くなんてできるの天才だけだから仕方ない。

演奏は終わりみんながこっちの方を見て来たので俺は言った。

友希那「どうだったかしら？」

勇也「うーん。1回目にしてはレベル高いよ。けどやっぱミスが目立つな」

紗夜「どこですか!？」

勇也「まずはドラムのミスだな。サビの部分でミスが目立ったよ。その次はベースだね。ドラムにつられそうになっていて、途中遅れるところが何個かあったよ」

リサ「あちやくやっぱり」

勇也「キーボードは一番から二番にかけて少しミスがあったね。それとギターもミスがあったよ。それにもう少しこの曲に関しては激しくいつてもいいと思う。最後にボーカルはうん、家に帰ってから俺のどこ来て、夜にだよ。その時に言うよ」

友希那は少し膨れているが「わかったわ」と了承してくれた。そこで練習は終わり俺たちは部屋から出た。その時にグリグリのメンバーと鉢合わせした。

ゆり「あ、勇也くん。今日暇？」

勇也「いえ、全く。これから遊びに行くんで」

ゆり「そっかー残念。また今度ね」

そう言うとみんなは出て行き後ろからリサが背中に顔を埋めてそのまま軽く叩いて来た。

勇也「ごめん。リサ」

リサ「なんで勇也が謝ってるのさ。あたしが」

勇也「それより早く行こ。時間がなくなる」

俺たちはCIRCLEから出てそのまま家に帰った。リサは一度帰ってから着替えてうちに来ると言っていた。俺は軽く風呂に入っ

てから準備してゴロゴロしていた。

そのまま時間が過ぎ2時頃にリサはやって来た。

リサ「お待たせ！」

勇也「それじゃ行くか」

俺たちは車に乗りそのまま発進した。どこに行くかは決まっていからそのまま進んでいった。

リサ「ならこのままドライブしない？いい季節だし海まで行って見てもいいと思うんだ」

勇也「そうしょつか」

俺はアクセルを踏み、そのまま車を走らせた。途中でエアコンを切り、窓を開けて行くと車の速度で風が気持ちいいぐらいに入ってくる。

そしてしばらく車を走らせると潮の匂いが少しして来て、右にはもう海岸が見えていた。

けどここに来るまでかなり時間が経っていたからもう日が落ちかけている。

リサ「海岸に行かない？」

勇也「いいよ。行ってみるか」

俺は車を止めてリサと一緒に海岸に向かった。

もう人も帰り始めてほとんどいなくなった。海岸沿いを貸し切りになっているみたいだった。俺とリサは2人で誰もいなくなった海岸に座った。

リサ「こうして2人きりも久しぶりだね」

勇也「確かにずいぶん久しぶりだな」

リサ「勇也はずっと構ってくれなかったもんな」

リサは少し嫌味ったらしく言ってきたが実際その通りだから何も言えない。

俺は何も言えずに黙っているとリサがもたれかかってきた。

リサ「冗談だよ♪勇也が忙しいのは知ってるし、しっかりあたしのことを考えてくれるのもわかってるから」

勇也「ありがとう」

リサを引き寄せると肩に乗り、リサは顔をグリグリしてきた。ウエーブのかかった髪がちょうど俺の顔に当たってこそばい。リサはしばらくして俺を押し倒してきた。

リサ「こういう場所も好きだよ。ありがとう勇也」

勇也「俺の方こそありがとう。それにわるかった」

俺たちは唇を合わせていた。その時のキスは少ししよっぱい感じがした。

対バンライブまたかよ！

リサとのドライブからかなり日にちが経ちもうすぐ夏休みが終わる。そしてその週の日曜日にととうとう対バンライブの日がやってきた。

俺は基本的にRoseliaのマネージャーだけどそつちに固執することはなくグリグリの方にも顔を出していた。

Glitter Green

ゆり「勇也くん。今日は私と七菜と出かけてくれない？」

ここ最近からばかりなので俺はなにかと理由をつけては断っていた。

それにこの目が微妙に怖い。七菜さんも綺麗な目じゃなく、深く昏い目で俺も見えてきた。

勇也「わかりました。それじゃあまた後で」

ゆり「よかった：今日も断られてたらどうしてたかわからないや」最後の言葉は俺にはよく聞こえなかった。

七菜さんは普通の綺麗な目に戻っていた。俺は練習を抜けて部屋から出た。今日グリグリの練習は昼に終わるのでそこから行こうというところだろう。

とりあえず用意をするために家に帰った。

そこで帰るとしばらくしてゆりと七菜がやってきた。

ゆり「それじゃあ行こっか」

七菜「そうですね」

俺は先に出ようと玄関に行くと言いと首にしびれが走り俺の意識は落ちていった。

ゆり「アハ、後ろ向いちやダメだよ勇也く〜ん」

七菜「これから楽しみましようね」

次に眼を覚ますと俺の目の前に映ったのは自分の部屋の天井だった。

そこで立ち上がろうとするとガシャンという音を立てて俺は倒された、

七菜「あ、起きたんですね。よかったです」

ゆり「よかったです。随分寝てたね」

勇也「うん。これ外してくれない?」

七菜「ダメですよ。あなたは逃げますから」

ゆり「うん。外さないよ」

2人はそう言いながらだんだん俺に近づいてきた。

そして七菜は俺の上にはゆりは俺の横に来た。そのまま七菜密着するように倒れて来てゆりは俺の腕に抱きついて来てゆりはそのまま顔を掴んで来た。

そのまま止まることなくキスをして来た。

ゆり「ん、んふっ、んん」

勇也「ん、んん」

この時間は長く永遠に感じるほどに…そのせいで呼吸ができなくなり悶えた。

しばらくして納得したのかゆりは離してくれた。

その後は七菜にも同じことをされて呼吸困難になりそうだった。

勇也「ゲホー・ゴホー・ハアー・ハアー。一応聞くけどなんでこんなことを?」

七菜「初めてだからです。初めて人を好きになりました」

ゆり「けど君は気づいてくれなかった。だから段々と欲が出て来ちゃったんだよ」

勇也「ハアー・ハアー」

まだ息が整わない。けど2人の言い分を聞いてると、おれが悪いかもしれない。

そこで俺の電話が鳴った。名前は『リサ』と書いてあった。そこで俺は出ることができずに出たのはゆりだった。

リサ「もしもし勇也?」

ゆり「勇也くんじゃないよ。ゆり」

リサ「ゆりさんどうして勇也の電話を持ってるんですか?」

ゆり「ふふ、それはね、」

リサ「もういいです。今から指定する場所に来てください」

ゆり「アハハハハハハハハハハ、いいよ」

そう言いゆりは電話を切った。その直後にゆりは俺の机の中からカッターを出してそれをポケットに入れていた。

勇也「待て!何をするつもりだ」

ゆり「リサちゃんを殺すけど?リサちゃんがいなくなれば私を見てくれるよね?」

そう言い部屋から出て家から出て行った。七菜はそれを見て笑いながら俺の上に乗っていた。

勇也「なんで笑ってるんだ?」

七菜「だってこのまま2人ともいなくなれば私だけですから、これ以上のことはありませんよ」

七菜が考えていることは最悪の結末だった。俺は暴れて七菜を振り落とした。

その直後に七菜はオレの机に置いてあったハサミを持って俺の方に近づいてきてそれを俺の腕に刺した。

勇也「ああああああああ」

七菜「何するんですか。少し痛い目に見てもらわないといけないです」

その直後にオレの左腕に何箇所も刺し始めた。俺は痛みで意識が飛びそうだった。

けどここで意識を飛ばしてるわけにもいかない。

逆の右腕を無理やり外して抜けた。そのせいで手の肉はボロボロ

になっていた。

七菜「な！一体何を」

勇也「ごめん。後でキツチリ話をしよう」

俺は首の後ろをしばして気絶させた。その後に鍵を探して左腕の手錠も外した。

そのまま立ち上がり俺はゆりたちを追った。

ゆり「それでどうしてここなのかな？」

リサ「こののなら誰にもバレませんから」

アタシが指定したのは今はもう閉まってるコンビニだった。まだ取り壊しは行われてなく中は電気はないがそれなりに明るい。

ゆりさんとはそれ以上の言葉を交わさず、ゆりさんはポケットからカッターを出してアタシに近づいて来た。

「こういう時の対処は知らない。」

アタシ自身話し合いだけで済むと思ってたから何も持って来ていない。

そのままアタシは店の中を走って逃げた。もちろんここに入るときに鍵は閉められていて外には出られない。

そのまま追いかけてアタシはだんだん体力がなくなって来た。ゆり「アハハハハハハもう終わり？ さよなら」

ゆりさんはアタシにカッターを振り下ろした。その直後にガラスが割れて現れたんだ。

アタシの恋人で待っていた人。

リサ「勇也!!!」

勇也「悪い。待たせた」

勇也は来たのはいいけど両手は血だらけでもう足も震え始めていた。

こんなのはいくらなんでもひどかった。

ゆり「なんだ。抜けてきたんだ」

勇也「まだやりますか？ この状況でも俺は勝てますよ」

ゆり「当たり前でしょ！ここまで来てやめられないよー！ー」
そのまま振り下ろして来たカッターを勇也は避けようとせずついて立っていた。

その直後バキン！という音が店内に響いた。驚くことに勇也はカッターの刃を口でくわえて折った。

その後勇也の口からも血が止まっていない。

勇也「これで終わりですよ」

勇也がそういうと、血だらけの右手を動かしてゆりさんの首に手刀を入れた。

その直後にゆりさんは勇也に倒れこむようにして倒れた。

勇也「悪かったリサ。怖い思いさせたな」

リサ「それより早く血を止めないと！」

勇也「ああ、意識が飛んで来た。頼みがある。ー！ー！ーつていうふうに頼む」

リサ「え!？」

勇也はそういうと倒れた。勇也からは信じられない言葉が飛んで来たがアタシはその通りにして勇也を病院にゆりさんを勇也の家に

連れて行った。

病院

「勇也が手術室に運ばれて既に3時間以上たっている。その間に勇也の両親と友希那も来た。」

リサ「嫌だよ…勇也帰ってきて」

友希那「大丈夫よ。勇也がリサをほって何処かに行くわけじゃないじゃない」

友希那はそう言いながらアタシを支えてくれたがその体は震えていた。

実際アタシも涙が止まらない。アタシがもつとうまくできていれば勇也にこんな怪我させないで済んだかもしれない。

アタシが勇也を苦しめてるんだ。

その直後に手術室の扉が開き医者が出て来た。

医者「とりあえず峠は超えました。あとは回復するだけです」
リサ「ああ、よかった」

その言葉を聞いてアタシは安心して、その場にへたり込んだ。そこからアタシは勇也の病室に向かい隣で手を繋いだ。

リサ「勇也！」

アタシはそうすることしかできなかつた。勇也の手を握って少しでも早く治つて欲しい。そう思うことしかできない。

それが辛い。

そこから時間が経ちしばらくすると声が聞こえた。

勇也「リサそんなにきつく握ると痛いよ」

リサ「勇也!!」

そこで勇也は目を覚ましてくれた。起きて早々それだけの軽口を叩いてくるとは思いもしなかつたが…

そこからは勇也はすぐに起き上がりあのこと聞いて来た。

そこからはアタシは勇也に頼まれたことをしたと伝えた。

それはゆりさんと七菜さんが罪を被らないようにバレないようにして欲しいとのことだつた。

正確には勇也をあのコンビニから出して、ゆりさんたちを勇也の家に連れて行くことだつた。

もちろんアタシだけではできないので勇也の両親にも手伝ってもらつた。

そこからはしばらくして病室の扉が開かれた。

ゆり「勇也くん…」

七菜「勇也さん…」

リサ「あなた達一体どの顔で」

勇也「リサ、いいから落ち着いて。それより今は3人きりにしてくれない？」

リサ「わかつたよ」

アタシはその場から立ち上がり病室から出て行つた。本当は勇也の隣にいたいけど多分そうすると勇也は怒ると思う。だからここは勇也に任せることにしてアタシは友希那のところに向かつた。

勇也「さて詳しいことを聞きたいけどもういいや」

ゆり「え？」

七菜「どうしてですか？」

勇也「眠たいから。それに2人を責めたりもしない。俺の方こそ首をおもいつきりしてごめん」

ゆりと七菜は2人とも飛びついて来た。そのせいで手につけていた輸血用の管が取れた。

まああんまり気にしてないからいいんだけど。

2人とも泣きじやくってそのまま時間は過ぎていきしばらくして落ち着いた。

勇也「落ち着いた？」

ゆり「うん」

七菜「はい」

勇也「なら今日はここに泊まった方がいいよ。もう外は暗いし」

ゆり「でも…」

勇也「リサには俺から話しておくよ。だから2人とも親に連絡だけしておいた方がいいよ」

七菜「はい」

ゆり「それであたしたち話し合ったん「おっとそれは無しだよ。対バンライブは出ないとか言わないよね？」な、なんでそれを」

勇也「なんとなくだよ。あと必ず出て。勝った方のいうこと聞くよ。」

俺が叶えられること限り」

ゆり「なら！」

七菜「ええ、勝って私たちに償いの機会を作るわ！」

勇也「そんなの気にしなくてもいいのに」

ゆり・七菜「私たちが気にするの！」

2人とも納得したりリサは少しふてくされていたが納得して帰ってくれた。両親は何も言わなかった。

そのまま看護師に布団だけ用意してもらって2人とも寝始めた。

寝る直前に2人に「必ず振り向かせるから」と言われて俺は眠れなかったのは別の話

朝起きて俺は退院できることになった。なんでも血はもう大丈夫で、傷は塞がりかけているから激しい運動さえしなければあとは勝手に治るそうだ。

俺はゆりたちと一緒に出て、2人を家に送り届けたあとに家に帰ろうとするとまりなさんから電話がかかって来た。

まりな「ごめんね！また賞品がほしいって言われて」

勇也「まさか…」

まりな「そのまさかだよ。それじゃあよろしくねー」

それは俺がまた賞品になることだった。

こうして対バンライブは別の意味で怖いことになりそうだ

対バンライブ……結果は？

対バンライブ当日、俺は手が治ることなく包帯だけ巻きながら料理を作り始めた。と言っても軽くだからそんなに無理してない。

2バンドに差し入れとCIRCLEにだ。
軽くタルトを作って持っていった。

CIRCLEに着くとなんかすごい人の数だった。その中には見知った顔もいた。

蘭もいたし、そのほかにもたくさんいた。

俺は人ごみを抜けていきなんとか中に入った。そしてまりなさんに渡してからグリグリの方に向かった。

Glitter Green

中に入ると中では軽く音合せをしていた。邪魔するのも悪いので俺は出ようとするとう手を掴まれた。

勇也「いつ！」

ゆり「あ、ごめん」

勇也「いや、それはいいんだけどどうしたの？」

七菜「いや、その」

あの出来事以降2人と距離がやばい。正確にはこつちの方があつてるのかもしれないが、前のこと以前の距離に戻りたい。

2人のことをわかつてるのかリイさんとひなこさんも何もいってこない。

勇也「それじゃあこれ食べてください」

ゆり「え、でも…」

勇也「でももへっちやくれもないー。食べるこいいいな！」

ゆり「う、うん」

俺はそこから出てRoseliaの方に向かっていく。

R o s e l i a

入るとまた逆戻りでとんでもなく音合わせから気合が入っていた。SMSの失敗を理解してないようだ。

俺はタルトだけ置いてその部屋から出た。

そこでドリンクを買って端の席にいと隣に千聖がやってきた。

千聖「あら、やっぱりきてたのね」

勇也「わざとらしいな」

千聖「ふふ、そうね。あなたが見えたからきたのよ」

勇也「そういうことは言わない方がいいぞ。勘違いされる」

実際千聖ほどの美人にこんなことを言われたら彼女がいなかったらころっといきそうだ。

それでも千聖は不満そうに俺の横腹をしばいてきた。

わからないと思う顔をしていると少し膨れていた。そしていよい

よ始まった。

最初はRoseliaからで予想通りみんなの音にキレがない。そして新曲に入り周りは喜んでいるが正直これなら練習の時の方がはるかに良かった。

そこでRoseliaは終わり次はGlitter Greenの番だった。

そこではみんな多分食べたんだろう。そしてキレのある演奏に歌声、これは誰がなんと言おうとグリグリの勝ちだ。

そして演奏は終わりお客はみんなはけていった。

俺はまりなさんに呼ばれて控え室に向かった。そして結果を伝える時が来た。

みんななぜか緊張していた。

勇也「結果は火を見るより明らかだと思う」

友希那「……………」

勇也「グリグリの勝ちだな」

ゆり「え、？うそ」

勇也「理由は友希那もよくわかってるだろう」

友希那「ええ、またやってしまったわ」

そこで終わり俺は部屋から出て行こうとしたら後ろから飛びかかられた。

こけそうになったがそのまま耐えると後ろからひなこさんの声が聞こえた。

ひなこ「コラコラ、何帰ろうとしてるのかなー?」

リイ「そうだよ。これからゆりと七菜と遊びに行つて来てね!」

リサ「ちよつと!それは」

ゆり「そうだよ」

七菜「一緒に行けません」

これは無限ループになりそうな雰囲気だ。俺はこういう時の抜け方を知らない。だからやれることをする、なんてかつこいいことを思ってるが何をしたらいいのかすらわかってない。

勇也「リサそれが約束だから。わかってるだろ」

リサ「けど…」

勇也「だいじょーぶ。俺はもう」

リサ「わかった。勇也を信じてるから必ず帰って来てね」

勇也「任せてとけ」

俺はそこでゆりと七菜の手を引っ張って出て行った。正直手が痛い
がそんなことを気にしてたら一生無理だ。

2人とも焦ってるがそんなことを気にせず家に向かった。

そこで2人にシャワーを浴びてもらいそこから出かけることにした。

服はとりあえず俺のスウェットを着てもらって買えばいいという
と、不満そうだったが納得してくれた。

そこで俺のケータイに連絡が入り、それはリイさんからだった、
そこには七菜はラーメンが好きだから連れて行ってあげてほしい
とのことだ。

確かにラーメンは1人では入りにくいし女同士ならなおさらだ。

そこで2人が出て来て来たんだか少し大きい服のせいでなんだか目
を合わせづらい。

ゆり「どう?」

勇也「いや、どうって?」

七菜「くくくくくくつ、それより早くいきましよう!」

七菜は歩いて行ったが車で行くから車の前で待っていた。

こういうところは抜けてる気がする。本人に言うとかされるかわ
からないが。

そこから車を出して、走らせて服を買うと2人とも軽いものを買っ
ていた。

言い方が悪いが体のラインがはっきり見える。ゆりは黒いスカ―
トに上は白のTシャツだから余計に強調されるし、七菜は短パンジ―
ンズにメッシュのTシャツだ。

そこからさらに車を走らせて来たのは遊園地だった。なんでもひ
なごさんから2人を思いつきり、楽しませてあげてと送られて来たの
がここの住所だからだ。

そこからは3人でいろんなところを回った。
一番面白かったのはジェットコースターだ。

勇也「ゆり震えてるなら乗らないけど」

ゆり「だ、大丈夫!」

七菜「全然説得力ないです」

ゆり「もうー七までー」

誘ってみるとゆりは楽しんでいて倒れそうなのは七菜だった。降りた途端にフラフラになつていた。

七菜「あっ!」

勇也「おっと」

倒れそうになつたのを俺が手を掴んでなんとか支えた。それにしても足元がフラフラだ。

本当に怖かったみたいだ。

七菜「大丈夫です」

勇也「そういうなよ。そこでちよつと休憩しよう」

俺はベンチを指してそこに座らせた。少しやばそうなので俺はそこからドリンクを買いに行った。

そして持つて帰った。

七菜「お金」

勇也「いらないよ」

七菜「でも」

勇也「フラフラな人からもらうのは気がひける」

七菜「なんだかんだ言つて受け取りませんね」

事実俺は今日2人から返そうとされたがはぐらかして一円ももらつてない。七菜はありがとうと言つて飲み始めた。

もちろんゆりにも渡した。

そこで少し休憩して俺たちは移動して、他のにも乗った。そのまま時間は過ぎて閉館時間になつたので俺たちは出て車に乗った。

七菜「今日はありがとう」

ゆり「罪を償うつもりなのに私たちが楽しんだよ」

勇也「次それ言ったら怒る。俺は気にしてないのにそれ以上いわないで」

ゆり・七菜「わかった／わかりました」

俺は車を飛ばしてそのままラーメン屋に入った。そこで七菜は嬉しそうにメニューを見て何にしようか決めていた。

なんか意外な感じしかない。

ゆり「意外でしょ？」

勇也「ほんとに。けどいいんじゃない。みんな意外なことなんてあるよ」

ゆり「それもそうだね」

そういいゆりもメニューを見始めた。それにしてもこのラーメンいい匂いがする。俺はチャーシューラーメンを、七菜は醤油を、意外にもゆりは豚骨を頼んでいた。

そしてしばらくするとゆりのが来てそのあとに七菜、最後に俺のが来た。

みんな食べると匂い通り美味かった。

そして会計に行こうとすると、2人に抑えられた、

ここだけは出すと言って聞かなかつたから、出してもらった。

そのままゆりを家に送った。

その後に七菜を送ろうとすると少しだけ寄り道がしたいと言って来たので車をパーキングに停めて公園に行った。

俺たちはブランコに乗って揺れてると七菜が口を開いた。

七菜「傷は大丈夫ですか？」

勇也「ん、またその話か」

七菜「今回の件で私とゆりは捕まってもおかしくなかった。それなのに勇也くんはそれをしなかった」

勇也「だーからそれは俺が2人と一緒にいたいと思ったからだよ。

それ以外に理由いる？」

七菜「いりません」

そして立ち上がろうとすると七菜が前に来て柔らかいキスをして来た。

七菜「ふふ、今度はちゃんと見ますから」

素晴らしい歩いて帰って行った。俺はその場からしばらく動けずそして時間にして15分ほどしてから立ち上がり帰って行った。

夏休み終わりは？

ゆりたちと遊んでからの数日間リサは毎日家に来ている。

理由を聞いても上目遣いでダメ？しかいってこないから何も言えないし、会いたくない。

勇也「それにしても、どうしたの？毎日」

リサ「だって、夏休みももう終わりだよ。どこか行こうよ」

勇也「それよりリサ宿題終わってるの？」

その瞬間さっきまで笑ってたりリサの顔が一気に引いていった。そして数秒後飛びついてきた。

リサ「お願い！手伝ってよー」

勇也「なんでやってないんだよ」

リサ「だって無人島に行ったり、バイトとか対バンライブの練習で疲れて家に帰った途端に倒れてばかりだったから」

勇也「確かにそうだけど……うんそれじゃあもしかして友希那も!？」

リサ「た、たぶん」

俺はそこからすぐに電話かけると同様にやってないと返事が来た。

友希那も呼んで3人で勉強会をしようとしたら俺の電話が鳴った。誰かと思うと燐子だった。

勇也「はいはいどしたの？」

燐子「あの：勉強：教えてもらえませんか？」

燐子もかー！内心そう思い、了解して家に来てもらった。今家にはリサと友希那と燐子がいるがなんかまだ増えそうな気がする。

そんなことを考えてると俺のメッセージアプリに通知が止まなくなつた。

確認すると千聖、花音、彩、麻弥から連絡が来た。

しかも全員が宿題ときた。頭を抱えながらも了解と送るとしばらくして順番にやってきた。

パスペレ組は夏の特番でなかなか手がつけられなかったと聞いた。

確かにそんな番組があった気がする。

一番やってなかったのは友希那でそこからは彩、千聖、花音、麻弥、リサの順番できた。

そこから絶対に終わらない組の友希那と彩、千聖は泊まるかどうか聞いてみると即答で返ってきて、他のメンバーも泊まるとのことだったのでみんなに宿題してもらってる間に俺は布団を用意したり、飯の準備を始めた。

リサや麻弥は手伝おうとしてくれたが今回ばかりは遠慮した。

そして風呂の準備もして先に飯を食べた。

少し手が痛むがもうほとんど気にならない。そこで一通の連絡が来た。

勇也「はいはい。どしたの？まさか宿題？」

紗夜「そんなわけないでしょう！ただ自主勉強に付き合っていただけないかと……」

確かに紗夜に限って終わってことなんかはないと思ってたがまさか自主勉強に付き合ってくれなんて言われるなんて、けど紗夜がいたら楽になりそうな気もする。

俺は少し考えて来てもらうことにした。

しばらくして紗夜は来てくれてリビングで勉強している人を見ると手を額に当てて呆れていた。

紗夜「全くなぜやってないんですか……」

全員「……………」

リサ「そ、それよりなんで紗夜は来たの？」

紗夜「勇也さんに自主勉強に付き合ってもらおうと思ひまして」

勇也「それはまた後で……とりあえずみんなをなんとかするの手伝ってくれない？Roseliaの練習にも関わってくるし」

紗夜「はあ、わかりました」

こうして説得して教える側は俺と紗夜になった。これでだいぶ楽になったがなぜか背中に視線が当たって痛い。そこで一旦置き飯にすることにした。

飯は少し豪華にしてみた。牛ヒレ肉を花卉状に並べてシーリングスパイスで味付けしたものや、鹿モモ肉の栗ソース添えなど他にも

色々作った。久しぶりに料理したから少ししんどい。

みんなは喜んで食べてくれたのでよかった。食べ終わり俺は片付けを、みんなは宿題をしていた。

風呂に入り、もうすぐ夜中の12時を回りそうなのでみんな終わりにして寝ることにした。

みんなは別の部屋にして俺は自分の部屋に行き、電気を切って布団をかぶろうとすると声がした。

??? 「きゃっ!」

勇也 「えっ!? 誰?」

千聖 「まさかすぐに電気消すとは思わなかったわ」

勇也 「千聖、何してるんだよ」

千聖 「それより手をどけてくれないかしら?」

俺は片方の手で布団をまくり、もう片方の手は布団に置いたはず…見てみるとそこに千聖が寝転んでいた。

勇也 「あっ! ご、ごめん」

千聖 「別にいいわよ。わざとじゃないのわかってるから」

そこで千聖は少しずれて隣に寝る用な形になった。

勇也 「戻らないの?」

千聖 「あら、さっきのこといってもいいのよ」

勇也 「くっ!」

手札が違いすぎる。勝ち目はない。

勇也 「はあ、わかったよ。けどみんなにはうまく言い訳しろよ」

千聖 「もちろんよ」

そーいい寝転んでる俺の上に乗ってきた。そしてパジャマのボタンを手をかけ始めて俺は止めた。

勇也 「ちよつとまてえ! 何してんだ」

千聖 「何ってわからないかしら?」

勇也 「それは勘弁」

千聖は納得したのか降りてくれた。けど降りて隣に来て手に抱きつくのは認めないと許してもらえなかった。そのまま千聖は眠った

が俺は寝付くまでかなりの時間がかかった。

次の日からも勉強をして夜には誰かが俺のベッドに忍び込んでな
んとかみんなの宿題は終わった。

友希那に聞しては最終日の夜中になったがなんとか終わった。

そして明日からは大学からの授業がまた始まる

なんか一波乱ありそうだなあと思いつつ眠った

大学は色々と裏が多い

提出物も出し俺たちは明日から普通に授業が始まるから、楽できるのも今日までだ。

そんなことを考えながら帰っていると後ろから俺のほっぺに冷たい物が当たった。

勇也「冷た！」

リサ「大成功ー、いやーいい反応してくれるね、勇也」

勇也「まったく心臓に悪い」

リサ「あはは、はいこれ」

リサはそういつてその飲み物を俺に渡して来た。俺はそれを受け取り飲みながら家に帰っていった。

しばらくは何もなく平和な日常を送っていた。

千聖 s i d e

はあ、勇也くんの鈍感ぶりにも舌を巻くわね。けどこうなったら別の手段を取ってみましようか。

けれどこれは1つ失敗したら終わりね。

まあやれるところまでやってみましようか。

END

学校が始まりしばらくして俺は驚いたことを聞いた。それは昼休みに自販機に行ってる時

「白鷺さん付き合ってください」

俺はすぐに隠れて、陰から見ると確かあいつは、いやあの人は確かサッカー部のキャプテンですごい人気がある人だった。けどあまりいい噂は聞かない。俺は大体の人のことを噂程度では知ってるがサッカー部のキャプテンとバスケの奴らは本当にいい噂を聞かない。

そして千聖は

「ええ、喜んで」

それを了承していた。陰から見ていて、そいつの口が三日月に黒く

笑っていた。けれどそれは一瞬で消えてしまい、見間違いかと思っ
た。

俺は飲み物を買うことなくそのまま教室に帰った。

そのまま興花のところに行った。

勇也「興花頼みがある」

興花「どうしたの？藪から棒に」

勇也「興花の家の黒服さん一人欲しい。あんまりわけは話せないけ
ど」

興花「いいよ」

素晴らしい手を叩くと後ろに来た。この人たち瞬間移動でもして
るのかな？

黒服「なんなりと命令を」

勇也「実は……ってことを調べて欲しい。あと……
を監視してくれ。学校の間。何かあったらすぐに教えてくれ」

黒服「お安い御用です」

素晴らしい何処かに消えた。これでとりあえずはなんとかやるだ
ろ。俺の思い過ぎならそれが一番いい。

授業が終わり、千聖が付き合ったことはあつという間に知れ渡
つた。

けど事務所は書類を書いてもらえればいいらしい。

そこから黒服さんから連絡が来た。

黒服「やっぱり勇也様が言った通りです。どうされますか？」

勇也「いや、今はいい。そのまま見て。何かあったら逐一知らせ
て欲しい」

黒服「かしこまりました」

そこから二週間ほどたち事件は起きた。昼休みに連絡は来た。

黒服「白鷺さんが今は使われていない校舎に連れていかれました。
三階の部屋です」

勇也「わかりました。ありがとうございます」

俺はその場から走ってすぐに向かった。やっぱり最悪の予想が的
中した。

千聖 s i d e

なんでこんなことになったのかしら？わたしはただ勇也くんの気を引きたかっただけなのに。

あの人に呼ばれてわたしはその教室の前に向かうと一緒に歩き出した。

そして途中からは服を引っ張られて連れていかれた。そこはほとんど人が来ない古い校舎だった。

その教室にわたしは入れられて倒された。

「はあいつまでもやらしてくれないから」

そういいわたしの体を触り始めた。いやだけど誰もこんなところには来ない。これはわたしが招いた結果だから受け入れないといけないのかも。

その時にその男は自分のズボンを脱ぎ出した。

それだけは：わたしは自分の頬を伝う涙を止められなかった。

そこでチャイムがなりもう誰も来ないことが確定した。

そしてだんだん近づいて来た時に閉めていた扉が吹き飛んだ。

「何してんだテメエ。それ以上千聖に近づいてみる。殺すぞ」

「なんだお前」

そこで現れたのはわたしが本当に好きな人、勇也くんだった。

それでも止まることなく男が近づいて来たので勇也くんは自分の靴を飛ばし、怯んだところでわたしの前に来てくれた、

END

俺が教室の前に着くと中からは千聖の声と男の気持ち悪い声が聞こえて来た。それは千聖の声は少し上ずり泣いてるみたいだった。そのまま扉を蹴飛ばし、中に入ると俺の想像以上のことが起こっていた。

男が下のズボンまで脱いでるのだから…

靴を飛ばし怯ませて千聖の前に滑り込んだ。

勇也「つつたく、少しは気をつけろよ」

千聖「どうして…ここが」

勇也「実はな、嫌な予感がしてある人に手伝ってもらったんだよ」
よく見ると抵抗したのか体に何箇所か跡がある。殴られたような跡が

俺は上の服を脱いで千聖に渡した。俺はシャツだけになった。

勇也「さて、何か言いたいことはあるかな？」

「邪魔をするな。彼氏でもないやつが」

勇也「それでも友達がこんなことをされてるのは気に入らない。何より女に手をあげるクズはな…」

「はっ！ヒーロー気取りか」

そいつは千聖めがけてカッターを振り下ろしたので足で止めた。そしてそれを待つてましたと言わんばかりに刺してそのあと引き裂いた。

勇也「いっつ、それにしてもよく切れるカッターだな」

千聖「勇也くん！」

刺された部分がまだよくてあんまり肉が裂けてないがそれでも刺されて裂かれたところはもう繋がっていない。

外からなんだか声がするので見てみると興花がいて、そしてその付近にマットが敷かれていた。

勇也「千聖、ほんとにこいつにやられてほんとにはやりたくないんだな」

千聖「ええ」

勇也「それで俺のことを信じれるか？」

千聖「何を今更、当たり前前よ」

勇也「ありがとう」

俺は千聖を抱いて窓から飛んだ。その瞬間に足には激痛が走ったがなんとか意識を飛ばさずに済んだ。千聖を抱きしめて俺は下になって落ちた。

そしてすぐにそのクッションに落ちた。

興花「おつかれ〜」

千聖「それより勇也くんの足を」

勇也「いやなんとかなるよ」

そして興花が手を叩くと足に応急で治療が開始された。それはすぐに終わり足に少し包帯が巻かれて止血もされた。

あとはくつついてくれたらいいんだけど…

そんなことを考えてると階段を使って降りて来たんだろう。さっきのやつが降りて来た。

「フザケンナ。殺してやる」

そいつはカッターを武器と言わんばかりに前に出して来た。突っ込んで来たところに体を半分だけ回してその手を掴んだ。

そのまま思いつきり殴りそいつは少し宙を待って落ちた。その瞬間にグロツキーになった。

興花「グロツキー早」

俺はそいつに近づいて持ち上げてもう一発殴った。そしてそいつはそこに倒れたまま俺は教室に帰って行った。

千聖は俺の横に来たが何も話さない。興花は空気を読んだのか何処かに消えていった。

勇也「まあなんだ、なんにもされてないのか?」

千聖「ええ、体を触られてあとはあの通りよ」

勇也「よかった。そういうのは好きなやつとやつとけ」

そういうと千聖は前に来て、唇にキスをして来た。

千聖は顔を真っ赤にしてるがそういう問題じゃない。俺も恥ずかしい。

勇也「な、な、」

千聖「わたしのファーストキスよ。本当にありがとう勇也くん」

千聖はそこから少し走って帰って行ったが俺は追いかけるほど足が良くないのでゆっくり帰って行った。

そして教室に帰る時にチャイムがなりその時に彩や麻弥が走って教室に来た。

彩「千聖ちゃん大丈夫？」

千聖「え、ええ。どうしてそれを？」

麻弥「実はあのあと興花さんが出て行って一人の黒服さんが教えてくれたんです」

千聖「それで…ええ、わたしは大丈夫よ。勇也くんが助けてくれたから」

その時にリサが走って飛んで来た。受け止めると足が痛み膝が崩れた。

勇也「あ、いったく」

リサ「ご、ごめん。大丈夫？」

勇也「いいのいいの。それよりどうしたの？」

リサ「どうしたのもこうしたものないでしょ！また無茶して」

勇也「ごめん」

こんな話をしてるが体勢がやばい。膝が崩れたせいで俺は倒れて俺はリサに馬乗りになされてる状態だ。

周りは知り合いしかいないとはいえちよつと恥ずかしい。

ちなみに俺の服は興花が待っててそれをもらった。

そこからは何事もなく学校は終わり、帰ろうとすると腕を掴まれた。

千聖「一緒に帰りましょう」

勇也「はいはい」

そこからは二人で並んで歩いて行った。

勇也「そういえばあいつは退学らしいな」

千聖「そうみたいね。あんまり興味ないわ」

勇也「でも、付き合ってたんだろ」

そこで話さなくなり、俺が分かれて帰ろうとすると恐ろしい顔でどこに行くのかしら、と止められた。

千聖「あなたはまず病院に行くわよ」

勇也「ええ、面倒だなく」

千聖「面倒でも行くの！」

とんでもない剣幕に押し切られて俺は病院に向かった。そこには見たことないがなんだか面影のある人がいた。

そして俺の前に来て頭を下げられた。

父「ありがとうございます。娘を救っていただき」

母「本当にありがとうございます」

勇也「えっと、どこかで会いましたか？」

千聖「わたしの両親よ。あなたに会いたいと行って聞かなかったから」

そしてそこから治療してもらい何日かの入院が決まった。全く面倒だ。

病室でゴロゴロしているとそこに千聖とその両親が入って来た。

3人とも座る気配がなかったので促してとりあえず座ってもらった。

父「今回はありがとう」

母「あなたのおかげで娘が傷つかずに済んだわ」

勇也「わかりました、わかりましたから頭をあげてください」

二人ともずっと頭を下げる。そして袋を渡された。中身はお金だ。

俺はそれを突き返していらないと答えた。

父「どうしてだい？」

勇也「俺は千聖が大事で友達だから助けたんです。それに関してお金なんか要りません」

母「なるほどね。」

千聖が惚れるのもわかるわ」

母親の方が何か言っていたが聞こえない。二人ともそのまま出て行き、千聖は残ると言って聞かないので一応面会時間が終わったら、帰るとの約束で居させることにした。

そこでケータイを開くと通知がすぐ来てまとめて返して行くと、今からくるなんていうからびっくりした。

そのまま面会時間は終わり、千聖はタクシーで帰って行った、

千聖 s i d e

やっぱり勇也くんはカッコいいわね。どうしても欲しいわ。何もかもを私のものにしたい。けどそれにはもう今回みたいな方法は取れないわね。あれは想定外だったわ。

まあ何が何でも手に入れるわ。
待っててね勇也くん。

急展開、時間が経つのは早い

千聖の一件からかなりの時間が経ちテストも過ぎ、しばらくは何もない日が続いた。まあこういう日が一番あつたら嬉しいんだけど。

興花「勇也」

声のする方を見ると興花がいてとんでもなく険しい顔をしている。そこで恐ろしいことを聞いた。その瞬間に体の血の気が引き冷や汗が止まらない。

勇也「はあはあ」

過呼吸になり、息できなくなつて俺はその場に倒れた。乗り越えたはずなのに…

落ちて行く意識の中でそんなことを考えた。

リサ「勇也!？」

俺が次に目を覚ますとそこは見たことのない天井だった。体を起こすとそんなに違和感なく、隣に寝ているリサがいた。

興花「ごめんね、あんなことを言つて」

勇也「ううん、乗り越えたと思つて何も変わつてなかつたんだから」

興花「……けど本当のことなんだ。あいつが出てくる」

それな俺にとつてトラウマ的なもので乗り越えた気になつていただけだ。俺はそれを乗り越えられるだけのことを何もしていない。現実から目を背けていただけだ。

俺は担任に様子を聞かれてまだ調子が良くないと言つて早退した。家に帰つてからも頭から離れず夜になり、結局眠れない夜を過ごした。

次の日に学校に行くときいつはいた。

興佐「お前確か…」

勇也「うあ、ああああああああああああああああああああ」

俺は何もできずその場を膝をついた。その声を聞いたのか興花とリサがやってきた。

興花「随分痩せたね」

興佐「偉くなつたな、俺おもちゃが」

興花「ふん、とりあえず勇也は貰つて行くよ」

興佐「おっとそうはさせないよ。早速遊ぶんだから」

リサ「ふざけてないで勇也を返して！」

興花は止めに行つたがそこからの記憶がない。俺は目を覚ますとそこは暗い教室だった。

俺はを手繋がれており動けない、

というかもう動く気力すら起きなかつた。

興佐「せめていい声出してくれよ」

そこからは俺の体は傷だらけになつた。ナイフで刺されたり、どつかれたりして俺は意識を失つた。

リサ side

あたしたちは止めたけど止まらずに興花は止めに行き、あつという間にやられた。そいつはあたしのところに来て何もせず振り返つて勇也を連れて何処かに消えた。

あたしは興花を連れて行こうとするとすぐに黒服の人たちがやって来て、応急処置だけして、どこかに連れて行つた。

あたしは何もできなかつた。勇也に助けられてるのに勇也を助けることすらできない、

リサ「うわああああああああああ」

日菜「リサちー!？」

あたしは日菜に連れられて屋上に向かつた。そこには日菜がみんなを呼んだみたいでみんないた。

友希那「リサどうしたの？」

リサ「友希那、勇也が、勇也が連れ去られたんだよ」

全員「!!」

千聖「どういうこと!!?勇也くんが連れ去られたって」

そこからあたしはあったこと全部話した。するとみんなは怒りを隠せていない。

日菜は特に顕著で怖い顔をして何か呟いている。

日菜「こうなったらとことん潰さないとね」

紗夜「日菜!何言ってるの!それより勇也くんが心配です。興花さんも心配です」

あたしたちはまず、興花のお見舞いに行った。するとそこには言い合いの声が聞こえて来た。

興花「ふざけないで!早く探して」

???「彼1人のためにそこまでできない」

すると後ろから声をかけられてそれは見たことのない人だった。

???「ごめんなさいね、私は興花の母です」

それはお姉ちゃんでも通じるぐらいの美人が出て来た。その人は見た目はいい人そうだけど、何故だろう胸騒ぎが止まらない。

リサ「あの、中でどうして興花は怒ってるんですか?」

母「ああ、あの子勇也くんを助けるために無茶な治療を施せつてるさいのよ。流石にそこまではできないわ」

あたしは部屋のドアを開けて中に入った。みんなびつくりしてるがあたし自身が我慢ならないからだ。

興花「り、リサ!」

リサ「興花、そんなことはやめてお願い。あたしは興花も大事な友達なの。そんな無理して欲しくない」

興花「でもそれじゃあ勇也が!」

日菜「そのためにあたしたちがいるんだよ」

千聖「そうね、1人じゃ無理でもみんながいれば」

紗夜「なんとかかりますよ」

興花「わかった、私も協力する。私の家を上げて全面に」

母「そんなことはお父さんが許しませんよ」

興花「うるさい、これは時期当主の沢木興花の命令よ」

すると家が総出で動き始めた。けれどこの人たちは動けないし結

局のところあたしたちでなんとかするしかない。

そこからは色々なものを渡された。

けどどれも使えないものばかりで私たちは何もなしで勇也のところに向かつていった。

俺は意識を戻すと身体のいたるところに傷があつてむしろ傷がないところを探す方が難しい。

俺が目を覚まして少しするとそいつは嬉しそうにやって来た。

興佐「全く寝過ぎだよ！」

その言葉と同時に俺の体に包丁を刺して来た。痛みでまた気を失いそうだ。

そしてそのまま意識を落とそうとすると水をかけられてまだ寝るなよ、忠告されてるみたいだった。

そこからも殴られ、満足したのかそいつは何処かに消えた。

しばらくしてまた入ってきた。そしてその後ろにはリサと友希那がいた。

リサ「勇也!!」

興佐「はいはい、感動の再会は終了ー。そしてバーン」

そいつはリサと友希那の服を破り捨てた。そしてそのまま欲望を満たそうと手を伸ばした。

こんな時にまで体が動かないなんてな。

全く笑えないよ。そこで目を閉じるといろんな光景が浮かんできた。

「勇也は無理しすぎだよ」

違う俺は好きな奴のために無理をしてるんだ。

「あたしのために怪我をしないで」

リサのためならいくらでも怪我をする。

「ありがとう勇也」

違う、ここでごくくばつてたまるか。男を見せる時だろ。好きな人守れなくて何が彼氏だ。ふぎけるな。

その瞬間一瞬手の手錠が緩んだ感じがして、無理やり抜いた。前を見るとまだ何もされてないようで、走ってそのまま蹴り飛ばした。

興佐「な、なんでお前」

勇也「コロスゾ、調子に乗ってんじやねえ」

興佐「ハハ、流石にこの展開は予想してなかったぜ」

そこからは殴り合いだがどうにも分が悪い。まあ手の肉がそげてるから、当たり前なんだけど。

そのまま殴り合いを続けて相手は俺の腹に包丁を刺した。その瞬間に腹に力を入れて、そのまま思い切り殴った。それがカウンターになったようでそのまま倒れた。

そして俺はリサと友希那のところに近寄った。

2人は震えている。

勇也「ごめん」

そして2人を抱きしめたが俺はそこで2人から転げ落ちるように倒れた。

リサ side

勇也「ごめん」

勇也があたしと友希那を抱きしめて背中に手を回した後、勇也はそのまま倒れた。

それは勇也の限界を示してたようでそこからは動きもしなかった。

友希那は勇也のお腹の傷口を必死に布で抑えている。

友希那「リサ！早く病院に」

リサ「う、うん」

私は焦って病院に電話するつもりが興花にかけてしまった。

リサ「お願いします、怪我人です」

興花「ちよつと待ってどういうこと？」

リサ「え、興花？」

興花「その住所を教えて、それかどんな場所か。すぐに向かう」
あたしはすぐに教えてそこから少しすると興花を乗せた車がきた。
ちなみにあたしたちがいたのはとある一軒家だった。

興花はやってくるとすぐに勇也を乗せてその車をどこかにやった。
そして倒れてる男の人のところに近づいた。

興花「それじゃああんたをうちに連れて帰るね、そこからは覚悟しててね」

素晴らしい手を手錠をかけてその人を連れてあたしたちも一緒に帰った。

そこからは病院に向かい勇也の手術室の前にいた。けれど一向に

出てこず、そのまま時間はたち1日が過ぎた。

その間も何人も医者が入っては出てきたがそれでも終わらなかった。

トラウマを乗り越えた今何を思う

勇也が手術室に入ってからももうすでに1日が経っている。それでもお医者さんは次々入れ替わりで入っていく。

そして2日目にさしかかろうとしたところでランプが消えて全員が出てきた。

リサ「勇也、勇也はどうなりました？」

医者「とりあえずの峠は超えました。あとは彼次第です。もしかしたらこのまま目を覚まさないかもしれない。それはまだわかりません。だから近くで出来るだけ声をかけてあげてください。それが今できることです」

あたしはその言葉を聞いてショックだった。もしかしたらこのまま目を覚まさないかもしれないなんて、聞きたくない言葉だった。

そこから友希那は両親とお医者さんのところに行き、あたしは一足先に病室に向かった。

入ると輸血や点滴、そのほかにもすごい数の医療機器を体に貼られた勇也がいた。

しばらくして友希那たちがやってきて友希那は隣に両親は荷物を取りに一度帰って行った。

友希那「リサ、あなたがそんな顔してたら勇也は怒るわよ」

リサ「でも、あたしがああな時に止められてれば」

友希那「過去なんていくら言っても帰れない。だったら今からやれることをするべきじゃないのかしら？」

たしかにその通りだ。いくら嘆いても時間なんて巻き戻せるわけがない。なら今からでも出来ることをやろう。

あたしはそこから勇也の隣で声をかけ続けた。

そこからはたくさんの人がお見舞いに来た。RoseliaのみんなにA f t e r g l o wのみんな、パスパレのみんなにポピパのみんな、ハロパピのみんなに、グリグリまで来てくれた。

それでも勇也は一向に目を覚まさず時間だけが過ぎていき、もう季節は変わり冬になった。

そろそろクリスマスだけどあたしにとってはそんなこと関係ない。

リサ「勇也そろそろクリスマスだね」

素晴らしい花瓶の花を変えていても目を覚まさない。わかつてはいる。けどやっぱ辛い。あたしは窓を少しだけ開けて冷たい風を入れた。

今の自分の気持ちにこのひんやりとした風は心地いい。

そこにノックがしたので中に入ってもらおうと全バンドメンバーが来た。

リサ「ど、どうしたの？みんな」

香澄「あ、リサ先輩。それがみんなでクリスマスパーティーをしようってなってリサ先輩の参加を聞きたくて」

リサ「ごめん、あたしは無理だよ」

友希那「リサがそんな風に落ち込んでても勇也は喜ばないわよ。むしろいつもみたいに笑ってる方がいいんじゃないかしら？」

たしかにそうかもしれないけどあたしは勇也を置いていけない。だから断ろうとしたら。

興花「リサの考えてることは大丈夫だよ」

リサ「え？どういうこと？」

興花「実はこの病院のこの部屋を移動して大部屋に勇也を移すんだ。だからそこですることにしたの。それもすでに許可ももらってるよ」

リサ「え、うそー。わかった、あたしも参加する」

そこで決まり、そこからは勇也を移動させていくとそこは1人で使うにはでかすぎる部屋だった。ここにみんなはパーティーの準備を始めていき、あつという間にクリスマス気分になった。今日がイヴで明日がクリスマスだから今日にある程度料理もおかなくちやならない。

だから夜中に病院のキッチンを借りれるように手配してくれてるからそこで作る事になった。

作るのはあたしと沙綾、つぐみと麻弥、美咲と興花で作る事になった。

その時間まで勇也の病室にいて、キッチンに行くとすごい食材が用意されていた。

リサ「これはまたすごいね」

興花「ふふーん、ちよつと奮発しちゃった」

麻弥「奮発しすぎじゃないですか！」

たしかにすごい量と高そうなものばかりある。これは想定してなかった。

これで料理するのは少し緊張する。けど料理を始めるところで作り方がわからなくなった。けどみんなが忙しそうで声をかけられない

「ここを切るんだよ」

リサ「え？今の声」

その時間聞いた声はたしかに勇也のものだった。あたしは走って勇也の病室に向かった。扉をあけて見るとやっぱり勇也は起きてなかった。

あたしは勇也の手を握って1人ですすり泣いていた。

そこに入って来て声をかけられた。

つぐみ「リサさん」

リサ「え、あ、つぐみごめんね。今戻るよ」

つぐみ「こつちは大丈夫ですから勇也さんについてあげてください」

リサ「え、でも」

つぐみ「もうほとんど終わってますし、大丈夫ですよ」

リサ「うん、ありがとう」

あたしはつぐみの言葉に甘えることにして勇也の隣にすることにしました。

けどそれでも何も変わるわけでもなく辛い。手を握っているとそれを返すように少し握り返された。

リサ「え？うそ」

あたしはすぐにナースコールを押して状況を説明した。けれどあれが嘘だったかのように何も反応もなかった。

けれどあれが嘘だったとは思えず、隣にいた。そのまま日にちはクリスマスになりみんなやって来た。

興花「リサ始まるまで少し寝て起きなよ」

リサ「でも」

興花「勇也に何か変化があったらおこしてあげるから、少し寝て」
リサ「うん、ありがと」

あたしはそのまま勇也のベッドに体を倒して座って眠った。そのまま時間はたち起こされたのは夕方だった。

準備は終わり、あとはもう少し時間が経つと始まるみたいだ。そして時間が経ち、料理を運んで始めた。

香澄「それじゃあメリークリスマス」

全員「メリークリスマス」

そこで料理を次々に出していき病院とは思えないぐらいいい匂いが部屋中に漂い出した。

そこで奇跡が起きた。

???「んん、腹減った」

声のした方を見て見るとそこにはあたしが待っていた人が体は起こさなくても目ははつきりと開いていた。

あたしは言葉よりも先に体が動き出してベッドに飛びついた。

リサ「勇也」

勇也「いてえよリサ」

リサ「勇也、勇也」

勇也「うん、随分と心配かけたみたいだなごめん」

END

俺が目を覚ますといい匂いがして、言葉が出ていた。その直後にリサが飛んできて俺に飛びついてきた。

正直に言うといろんな箇所が折れてたり、刺さってたりしてたから痛かったがそんなことは言えない。あのことがあったのは夏だから今見て見るとクリスマスだ。

4ヶ月ぐらい寝ていたと思う。

勇也「みんなごめん。心配かけた」

千聖「いいえ、おかえりなさい。みんな心配してたのよ」

勇也「あはは…迷惑かけたな。リサもしっかり寝てもらわないとな。目の下のクマができてるよ」

リサ「それは言わないでよー」

そこからは大変だった。リサに飯を食べさせてもらってると周りからの視線が痛いし、リサが席を離して遊びに行くと蘭やひまり、日菜、紗夜もきた。

そこで部屋のノックがなり入ってきたのは飲み物や食べ物を持ってきたまりなさんとグリグリメンバーだった。

まりな「ヤッホー。きちやった」

ゆり「あー、勇也くん目を覚ましたんだ」

七菜「よかったです」

そこからはグリグリのメンバーも加わってパーティーが始まった。俺は動けないからずっとベッドに座っていたがみんなが次々に来てくれるから退屈しないで済んだ。

そこで終わり、片付けをしてリサと興花だけが部屋に残った。

興花「勇也ちよつといいい？」

勇也「構わないよ」

興花「目を覚ました途端に悪いんだけどどうしてあそこまであいつにビビってたの？そこだけは考えても出てこなくて」

勇也「そうだなー。多分トラウマなんだと思う。小さい頃は大きい声出したり、軽く殴られただけでも痛く感じるからそれをビビったんだよ。それに俺はあの時親のこともあったしな」

リサは何も言わずに聞いていた。実際今はなんとも思ってもないし、考えようともしない。ただ単にあの時はトラウマが蘇っただけだ。

興花「それでこれはあいつの口から出た言葉だったんだけど、勇也昔車にひかれたでしよ。あれもあいつが仕組んだことなんだ。刑務所で知り合ったやつに頼んだらしい。それにもう一つここから先に何かしかけているらしい。何とまでは白状しなかったけど」

勇也「そっか。今となつてはどうでもいい。恨んでも時間は帰つてこないしな。それより早く怪我直さないといけないしな」

興花「そっか、今の勇也なら大丈夫だね」

興花はそういつて部屋から出ていき、部屋には俺とリサだけになった。リサは何も言わずにベッドに体を倒してきて顔を横に向けた。

俺もなかなか動かない手を動かしてリサの髪を撫でた。

リサ「ほんとに心配したんだから」

勇也「ごめん、もうどこにもいかないよ」

リサ「うん、信じてる」

リサは落ち着いたのかそのまま寝てしまった。俺はそんな寝顔を眺めながらゆっくりと目を閉じていった。

起きるとそこからが大変だった。いろんな箇所のリハビリ、検査が絡みほとんど休みない。

そんな日が2ヶ月ほど続き2月に退院できたがまだ完治でない。だからしばらくは派手な動きはできないので学校には行くがほんとに今まで行けなかった分を取り戻すだけだ。

俺はこの時はまだ忘れていた。この時期はもう1つイベントがあることを

バレンタインってこんなイベントだったっけ

学校に行くのも一苦労していき俺はなんとか毎日を過ごしている。両手はだいぶ動くようになってきたが右足がまだ折れたままだ。だから松葉杖で通っているがだいぶしんどい。

そして日にちが2月13日になった。

なんだか教室が騒がしい。あんまり関わらないでおこうとするといろんな女子からチョコのことを聞かれた。

なんでそんなことを聞いているのかわからないがとりあえず質問に答えるとみんな聞いて何処かに行った。

勇也「んー、なんかあったのかな？」

しばらくするとリサは来なかったが日菜や紗夜、千聖やそのほかにもいろんな人がきて大変だった。

帰り道もリサや友希那に聞かれて大変だった。

家に着くとまず風呂に入ってその後は1人の部屋にいき、リハビリを始めた。

この部屋は軽い支えがあるだけで特にこんな風に部屋にすることはなかったのだが親父がうるさくてこうなった。

何回も支えを持ちながら往復していると限界か倒れた。

勇也「いつつつ」

そのまま立ち上がり往復しようとするので友希那に止められた。

勇也「いつ入ってきたの？」

友希那「今よ。それより今日はもう終わりよ。もう限界でしょう」

勇也「わかったよ」

俺は壁に立てかけてある松葉杖を使って帰って行きその隣を友希那もきた。

そのままベッドに入り眠った。

俺はいつもより朝早く起き、朝風呂に入っているとやっぱりこういう

ところでちよつと邪魔なギブスだと思う。

あまり濡らさないように言われてるから余計に風呂なんかでは邪魔に感じる。

なんとか終わり出て飯を食べて服を着ると既に友希那は家を出たと親父が言つて俺は歩いて向かつていった。

なぜか大きな紙袋を渡された。

親父に送つて行くと言われたがりハビリも兼ねてるので入らなかつた。

学校につき下駄箱に行き下駄箱を開けるとえらい何かが落ちてきた。

勇也「どおわぁー！ー！ー！ー」

何かに下敷きにされてその周りを見てみると綺麗に包まれた箱がたくさんあつた。

何かわからず持つてみると中から音がした。

とりあえず全部朝の紙袋に入れて教室に行くと教室でもえらいことになっていた。

机に教科書を入れようとすると入らない。

中を見てみるとさつきと同じようになんだか綺麗な箱が沢山ある。

とりあえずそれを袋の中に入れて行くと教室の中から黄色い声が上がつた。

とりあえずわけもわからず用意して眠つた。

千聖「勇也くん少しいかしら？」

勇也「うん、ああ、千聖か。どうしたの？」

千聖「ちよつとついてきてちようだい」

そう言われてついて行くとそのまま屋上についた。そこには誰もいなくて千聖と俺だけの状況になっている。

千聖は向こうむいたまま俺の方を見てくれない。

勇也「えーと？どうしたの？」

千聖「勇也くん、よかつたら食べてほしいわ」

渡されたのは朝見たのと同じように綺麗な箱に包まれたものだつ

た。

なんでこんなに日にたくさんもらえるんだろうと気になってると千聖が顔を覗き込んできた。

千聖「どうしたの？」

勇也「今日って何かあったっけ？」

千聖「まさか、勇也くん。今日が何日かわかるかしら？」

勇也「え、確か2月14日じゃないの？」

千聖「今日がなんの日かわかるかしら？」

勇也「ん、なんかの日だっけ？」

千聖「まさか本当にわかってないなんて」

千聖はそういう屋上から教室から帰って行った。そしてわけもわからずに屋上にいるとチャイムがなり1時間目はサボることになった。

そのまま千聖にももらったものを開けてみると中には綺麗なチョコが入っていてそれで俺は思い出した。

今日はバレンタインだった。けどあれが全部そうならなぜかわからない。

そんなにモテる要素もないし、みんな彼女がいることを知ってるはずなのに…

俺はそこで1つの結論に至りあれは友チョコだと思って千聖からもらったのを食べながら1時間目が終わるのを待っていた。

1時間目が終わり教室に帰るとリサやほかのメンバーにも責められたが何も言わなかった。

そのまま学校での時間は経ち昼休みになるといろいろな人からさらにもらい持ってきた袋では足りなくなった。

なんとか別の袋をもらいそこに入れて授業に入り、学校が終わり家に帰るとリサと友希那から連絡が来てリサの家に来てくれと言われた。

リサの家に行きインターホンを鳴らして入ると、中にはチョコのいい匂いがした。

そのまま歩いてリビングまで行くとエプロン姿のリサと友希那がいてそこでさらにチョコの匂いが強くなった。

リサ「あ、勇也やつと来た」

友希那「遅いわよ」

勇也「無茶言うなよ。それでどうしたの？」

リサ「実は今日バレンタインでしょ。それでチョコ作ろうと思ってたら友希那から連絡きて、それで一緒に作ろうってなったんだ」

友希那「ちよつとリサ！」

勇也「まあまあそれはいいけどなんでそんなことを？」

友希那「勇也にはいつもお世話になってるから。それに…」

うわーなんかいつもと違うギャップってやつかな。すごい変な感じだ。

リサなんて目がキラキラしてる。まあ確かにわからないでもないが、リサは友希那のこんな姿なんて見たかつたんだろうし。

そこからしばらくしてリサたちが持ってきたのはチョコフォンデュだった。

もつとも小さい鍋にチョコを入れてほかのお菓子を持ってきてくれたやつだが。

そしてその下でチョコが焦げない程度の火がありチョコが固まらないようになってる。

勇也「それじゃあいただきます」

俺は無難にクッキーをとってつけると甘みもちょうどよくとても美味かった。

そこでリサと友希那も加えてみんなで食べていた。

そして気がつくの外が暗くなっていて、俺たちは家に帰って行き、リサとも別れた。

家に帰って持って帰ってきた袋の中をみると知ってる人からのも入っていた。

花音や紗夜、日菜からもきていたし、燐子からも来ていた。

今度またお礼しよう

悩みの種

リサたちからチョコをもらって日にちがたちホワイトデーまで1週間になってどう返そうか悩んでいた。

実際全員に何か返すつもりだけど、全員となると困る。これはこれでかなり多いし、まだ食べ終わってないのもあるから今日も食べないといけない。

そんなことを考えてると後ろから声をかけられた。それに今日は少し暖かい。

ちなみに俺が今いるのは商店街だ。

勇也「ん、蘭とひまりか」

蘭「勇也さん」

見てみると2人とも膝に痣があった。しかも普通の怪我じゃなくて殴られたような後だ。

それになんだかやつれている。

勇也「2人ともその怪我どうしたんだ？」

蘭・ひまり「!!」

そのことに触れられなくなかったようで2人とも少し退いていた。それになんだか様子がおかしい。

2人とも7分丈の服を着て少しまくっていたからわかった。

勇也「2人とも全部話して、俺がなんとかする」

ひまり「勇也さん、ひつぐ、実は」

そこで2人から聞いたのは学校が大変になっているとのことだった。

詳しいことは話すより一度見に来てもらった方が早いと言われたので土曜日の昼過ぎから蘭とひまりを連れて学校に向かった。

そして学校につき見たのは驚きの光景だった。確か今の生徒会長は日菜の後任でつぐみだったはず。

勇也「ちよつと待て、つぐみは？」

蘭「それが…」

聞いたら怒り以外の感情が湧いてこずとりあえず話を聞いた。そ

ここでは今の学校には番長とか言う奴がいると言うこと、そしてその名前が桑原高志と書いていた。

学校のいたるところには落書きがあり綺麗な学校はなかった。そしてつぐみは自分はやっていけないとほとんど学校に来ていないらしい。

来てもほとんど屋上で泣いているとのことだった。

俺はすぐに事情を聞き解決しようと思ったが今日が土曜日ということもあり、月曜日の朝になった。

蘭たちもそいつの家を知らないとのことで教師に聞いても個人情報だからと拒否された。

俺はそのまま羽沢珈琲店に向かった。

そのまま入ってつぐみの両親に挨拶して事情を話してつぐみの部屋に向かった。

勇也「入るよ、つぐみ」

つぐみ「……………」

返事がなかったので入るとそこは今までと違う部屋と思えた。真っ暗で何も見えず人が居る気配だけわかった。

すぐに電気をつけるとそこで倒れるようにつぐみは目を開けて倒れていた。

近づき体をこつちに向けると俺に気づいたようだ。

勇也「つぐみわかるか？」

つぐみ「勇也さん？勇也さんだ。ごめんなさい。みつともないところを」

勇也「今から時間ある？」

つぐみ「はい」

俺はつぐみを連れてもう1つの家に向かった。その途中で蘭たちにも連絡してきてもらった。そこでAfter glowのメンバーが揃った。

蘭「つぐみ…」

この反応を見る限り全員つぐみとは会えてなかったようだ。そこで俺は全員をリビングで合わせて俺はキッチンで調理を始めた。

それは人間としての本能でもある食欲だ。

そこで調理を始めたが何もみんなは話さなかった。それはAfter glowにとつては初めて見る光景であり、それは多分みんなにとつてもそうなのだろう。

俺は調理を進めて1つ目を作った。

前菜から作りみんなの前に出すとみんなは不思議な顔をして俺の方を見てきていた。

勇也「いいから食べ、話はそれからだ」

みんなが食べ始めて俺は次の料理とその後の仕込みを始めた。そこから次の料理を運ぶとみんな一心不乱に食べていた。

そこからつぐみが泣いてみんながそれに触発されるように泣き始めた。

つぐみ「みんなごめんね」

巴「あたしたちの方こそ力になれなくてごめん」

そこから料理を運ぶとみんなそれも食べ始めていった。そしてしばらくするとみんなお腹いっぱいになったのか箸が止まり始めた。

そこで作るのをやめて俺は机の正面に座った。

勇也「さて、話を聞こうか」

つぐみ「みんなは悪くないんです。私が…」

勇也「俺が聞きたいのは誰が悪いかじゃない。なんで学校にあんな奴がきたのかだ。それとも元々いたのか？」

ひまり「はい…勇也さんたちが卒業してしばらくしてから急に出てきました」

そこから話を聞いてしばらくしてみんなから聞くのをやめて俺は部屋をでた。

ここからは俺が入る場面じゃない。みんなでなんとかできる。

俺は自分の部屋に行きベッドに倒れこんで興花に電話して詳しいことを調べてもらった。

少しして電話がかかってきてそいつは何にもなく裏に何もいないとのことだった。

そこで外は夕日が落ちて行き時間的にも良かったので蘭たちを

送って最後につぐみと2人きりになった。

つぐみ「あの、勇也さん。今日だけ一緒にいれませんか？」

勇也「はい？いや、俺より両親はダメだって言うと思うよ」

つぐみ「もう許可はもらってます」

勇也「はあく、いいよ」

つぐみ「ありがとうございます」

つぐみは服だけ取りに行きもう一度俺と一緒に家に向かっていった。

とりあえず風呂に入ってもらってそのあとは飯を作りしばらく話していた。

そして寝ようとするにつぐみも同じ部屋で寝ると聞かなくて連れて行きベッドで寝るように言うのと下で布団を引いて寝ると聞かなかった。

そして布団を引き電気を消すとつぐみは俺のベッドの中に入ってきた。

勇也「つぐみ！なんで？」

つぐみ「ごめんなさい。今日だけこうさせてください」

つぐみは素晴らしい俺に抱きついてそのまま眠ってしまった。風呂入っていい匂いがする。

なんでなんだろうな。

しばらく眠れず俺が眠ったのは夜中を回ってからだだったと思う。

そして起きてみると既につぐみはいなかった。リビングに行くところエプロンをつけたつぐみが朝飯を作っていた。

つぐみ「おはようございます！」

勇也「ああ、おはよう。じゃなくて！びっくりした」

つぐみ「ごめんなさい」

勇也「いや、責めてるわけじゃなくて急にキッチンに立ってたからびっくりしただけ。ありがとう」

つぐみ「いえいえ、泊めてもらったから当たり前ですよ。先に顔を洗ってきてください」

俺は顔を洗ってその後は朝飯を食べてしばらくするとつぐみを

送って俺は家に帰った。自宅の方に帰ると友希那たちに心配されたがうまくごまかしてなんとかなった。

そのまま日にちはたち月曜日になり俺は朝から学校には行かず高校に向かった。

勇也「さて、掃除の時間だ」

学校に入るとそこで偉そうなのが2人座っていた。

「あんちゃん、何の用だ」

勇也「うーんお前が桑原？」

「あの人に何の用だ？」

勇也「うーん、答えろよ」

「いたた、」

俺は2人の頭を掴んでそのまま力を入れた。やっぱりハズレだった。

この2人に聞いても何もしらなかった。

そのまま中に入って行きしばらくすると3人やってきた。

そのうちの2人はさっきの2人だった。

「お前さっきはよくも」

勇也「えーと、早く桑原ってやつに会いたいんだけどな」

「テメエが会える人じゃねえよ」

勇也「はー、全く」

俺は3人のことをしばいて新しくきたやつから場所を聞いてそこに向かった。

そこら体育準備室で特にはひどかった。

そして奥にボスらしいのがいた。

勇也「お前が桑原？」

桑原「ああ、テメエは？」

勇也「名乗る前に1つ、お前なんで生徒会の言うこと聞かなかった？」

桑原「俺がそんなんの言うこと聞くわけねえだろ！ハハハ」

勇也「あつそ、そうだ。名前は湊勇也。覚えなくていいよ」

桑原「湊？湊ってあのまさか」

そいつの顔はだんだん青ざめていった。俺何かしたかなと考えながらそいつを殴ると一撃で降参してきたので俺はそいつを連れて他の奴らのところに向かい学校中の落書きを消させた。

勇也「わかつてるだろうな？逃げたら」

桑原「はい」

俺は屋上から様子を見てそこに蘭たちがきた。みんな仲直りというか話すようになってみんなは元どおり遊んでるらしい。

みんなも上から様子を見ていた。

つぐみ「勇也さんごめんなさい。私たちがなんとかしなくちゃいけないことだったのに」

勇也「いや、いいよ。こればかりはなんとかできる問題じゃなかった。話し合いにに応じてくれるやつならいいけど応じなかったんだろ」

つぐみ「っ…やっぱり勇也さんは優しすぎます」

モカ「まあまあ終わりよければ全てよしだよ。つてことでみんなで勇也さんの家に行つてご飯食べよう」

巴「なんでそうなるんだよ！」

蘭「モカは全く。いきなりだね」

勇也「いやいいけど」

ひまり「いいんだ」

そしてしばらくして全部終わったみたいで全員が屋上に上がってきて、それにビビつたのか蘭たちは俺の後ろに隠れた。

まあ無理もないけど。

俺は帰っていいといい一言だけ脅して帰らせた。そして蘭たちを連れて家に行くとりサたち R o s e l i a もいた。

リサ「聞いたよ勇也。まーた危ないことしたんでしょ」

勇也「はてはて？なんのことやら？」

紗夜「目が違う方向向いてますよ。バレバレです」

勇也「あはは、そんなに危険なこととはしてないよ。ただ蘭たちをほっとけなかつただけ」

リサ「それで何に悩んでるのかな？」

勇也「っ…！」

バレるとは思わなかった。バレないようにしていたから。けどバレンタインのお返しで悩んでるなんて言えないからごまかした。リサと友希那には怪しまれたがそれ以上は何も聞いてこなかった。

そこから飯を作るつもりだったがめんどくさくなってきたので鍋にすることにした。

鍋を2つ用意して普通の鍋とキムチ鍋をした。

みんな食べ終わり片付けをして蘭たちや友希那を送って俺も帰ろうとするとりサに手を掴まれた。

リサ「勇也、ちよつと話があるの」

勇也「どうしたんだ？」

俺は引つ張られるがままついていくと公園のベンチに座らされた。そしてリサが隣に座りしばらく沈黙が続きそれをリサが破った。

リサ「勇也が悩んでること当てよつか？」

勇也「わからないよ」

リサ「ホワイトデーのことでしょ？」

勇也「へ？なんで」

リサ「今のはしらを切るところじゃないのかなー？」

勇也「あ、ったくそうだよ。悩んでるのはそれ」

リサ「ならあたしはいいや」

勇也「おい！リサには一番するつもりなのに」

リサ「そのかわりに！」

勇也「ん、んむっ！」

何が起こったのか全くわからなかった。けど少しして息ができるようになり何をされたかわかった。

リサは顔を真っ赤にしてそらしているがそれならここでしなくてもいいのんじゃないかながら嬉しかった。

リサ「帰ろっか」

勇也「そうだな」

俺たちは歩いて帰ったが結局別の家に行きそのままやることをし
た

ホワイトデー

???
side

ふふ、やつぱり勇也さんはかっこいいな。勇也さんがほしい。頭から足の先まで私のものになりたい。けどリサさんと付き合ってるからなかなか手が出せないや。けど絶対いつか手に入れるよ。勝手私の初恋なんだもん。

ほしいものは手に入れないと、ね。

ホワイトデーまで時間がなくてどうしようかと考えているとある人物と出会った。

薫「やあ勇也じゃないか。どうしたんだい？悩んでるようだね」

勇也「ああ、薫か。実はな」

おれはそこから悩んでいる理由を話した。すると薫は驚きながらも意外な解決法を出してきた。

それは俺にとつても確かにいい方法だし、薫が出してきた提案はなぜ知ってるのか聞くと高校時代に一度やったそうだった。

なんでも薫は演劇だったみたいで俺は演劇じゃなくて音楽をしたらどうだと言われてそれならできそうな感じがしたが結局どこでするか、なんの楽器をするかは決まっていなかったのでやるかが決まっただけだ。

薫はなんだか独り言をつぶやいてどこかに行った。

勇也「なんの楽器をするか、か。悩みどころだよな。ドラムやベースは1人でやるには厳しいし、となるとギターかキーボードだしな」
1人でぶつぶつ言いながら歩いて多分周りから変な目で見られているだろう。そんなこと気にならず頭の中がいつぱいで歩いていると、目の前を車が通り過ぎた。体ストレスで通ったので向こうも驚いたんだろう、すぐに出てきて謝られた。

俺も見えてないのが悪いので謝りその場は終わった。

家に帰ってからもどこでしようか悩んで結局出ないまま時間が過ぎ何も解決策は出なかった。

小さいホールくらいなら借りられるのでそれにしようかと悩んだが、どうにも違う気がする。

解決策が出ないままその日は終わった。

次の日に俺は全員からの出欠をとるとほとんどがOKをしてくれた。

そのまま俺は結局小さいホールを借りることにして楽器はピアノを演奏することにしてあとは薫が言っていた一人一人への手紙だがほとんど話したことのない人からももらっているので大変だ。

書き始めて授業を受けているときもフリだけして全く聞いていない。

その間も書き続けてなんとか3日で終わった。

残り3日で演奏をあげないと、俺はそう思いCIRCLEに向かった。

まりな「やつほー勇也くん。久しぶりだね」

勇也「そうですね、予約いけます?」

まりな「ありや珍しい。いつ?」

勇也「今日から3日後までいける時間全てお願いします」

まりな「え?大丈夫だけどどうしたの?急に」

勇也「ちよつとやることできちやつて」

まりな「わかったよ。また言っても聞かないだろうし、だから所々私が入ってもいいことが条件だよ」

勇也「わかりました」

俺許可をもらい部屋に入りキーボードに手を触れた。使う予定なのはピアノだから少し勝手が違うがこれで練習するしかない。そのまま触れて思うがままに弾いていた。

R o s e l i a s i d e

私は今R o s e l i aでC i R C L Eに来て練習をしようとしている。

いつも通り入ってまりなさんの受付を済ませて部屋に入った。すぐに演奏できる状態にして練習を始めた。そして休憩になら私は部屋から出てお手洗いに行こうとするとある部屋から少しだけ音が聞こえた。

その音はとても綺麗で澄んだ音をしていた。

私はお手洗いに行くことも忘れてその部屋の前で音を聞いていた。

友希那「燐子、休憩は終わりよ。早くしてちょうだい」

燐子「あ、はい」

私はすぐにお手洗いに行き練習を再開した。

練習が終わりさっきの部屋に行くとまだやってるみたいでその音を聞いていた。

リサ「燐子どうしたの？」

燐子「今井さん…この音が…綺麗で」

紗夜「確かにすごい音ですね。綺麗でいてその中に力強い音もあります」

友希那「確かにすごいわね」

あこ「こんな綺麗な音どうやってたら出るんだろー」

そこで扉が開いて中の人が出てきた。

全員「キャ！」

勇也「何してんだ？」

リサ「へ？勇也」

勇也「いや、なんで部屋の前にいるの？」

リサ「なーんだ。勇也なら納得かも」

勇也「はい、わかったら帰った帰った」

勇也さんは私たちを押しして無理に帰らせました。私はあの時に聞いた音色が家に帰ってから忘れられずに眠るのがいつもより遅くなりました。

END

まったくなんで部屋の前にいるんだよ。まーた家に帰ったら聞かれるかもな。これは家に帰りにくいな。なかなかやりにくい。そんなことを考えてまたスタジオに入り練習を始めた。

まりな「それにしても勇也くんの音綺麗だね」

勇也「ありがとうございます。けどまりなさんのギターには負けま
すよ」

まりな「またまた。そんなことを言っても何も出ないぞー！」

まりなさんはそう言って笑っているが実際あれほど弾けるとは想像にもしてなかった。今で言う日菜と紗夜を足したような感じだ。

日菜の自由な音楽、そして紗夜の丁寧なところを併せ持つ音だった。

言葉にできないがそんな感じだ。

まりなさんは笑って出て行きしばらくして入ってきて何かともう閉店の時間らしい。

そこであげて俺は家に帰った。結局友希那に聞かれたがごまかしてなんとか終えた。

次の日もその次も練習してなんとかものとして恥ずかしくないぐらいの演奏ができるようになった。

その時にリサが入ってきた。

勇也「リサ、まあ知ってるから何にも言わないけどどうしたの？」

リサ「実はRoseliaみんなで話して勇也あたしたちと一緒に演奏しない？」

勇也「はい？」

リサ「今あたしたちも練習してるんだけど明日勇也が発表する日でしょ？それであたしたちと一緒にしない？」

勇也「俺のはリサも知ってる通りホワイトデーのだよ。それにどうしてRoseliaが来るの？そこを話してくれて納得したらやるよ」

リサ「あたしたち最近ライブしてないし、目標はてっぺんだからいろんな人からの評価を見てほしいんだよね」

勇也「あー、わかったよ！こっちこそよろしく」

俺はリサに引っ張られてRoseliaのところに行くともみんなも待っていようで歓迎された。けど何をするかは聞いていない。

もちろん俺はキーボードを練習していたからそれをするつもりだった。

あこ「勇也さんの歌楽しみだねーりんりん」

燐子「うん：楽しみだね、あこちゃん」

俺はリサから何をするか聞いてなかった。まさかのツインボーカルとは思いつかなかった。

その後リサを見るとわざとらしく顔を晒していた。騙されたと思いつながらもやることにした。

友希那「セトリはすでに決まってるの。これでどうかしら？」

見るとそこには熱色スターマインとNeo-Aspect、BRAVE JEWELだった。

なんの問題もないが俺もやりたい曲が一曲だけある。

勇也「うん、あと一曲出してもいい？」

友希那「その曲にもよるわ」

勇也「Change the Futureって曲なんだよ。これ」

俺はそれで音源を流した。これはツインボーカルにぴったりだし、歌詞の内容も好きだからやりたい。

けどやるのは明日だから実際的には無茶だ。

リサ「やるだけやってみない？」

あこ「あこもやりたいです！」

燐子「やって…みたいです」

紗夜「やってみましょうか」

友希那「無理と判断したらその時点で終わりにするわよ」

そこから俺はすぐに全員分の譜面を書き起こして渡した。そこからは練習して、俺はまりなさんに頼んで今日1日借りられるとようでした。

もう夜だがみんなまだまだやる気みたいだ。

そこから一度出て飯を食べてから俺たちはもう一度スタジオに戻った。

そこからは何度も何度も合わせてその間に休憩を入れてなんとか形になってきた時には外は朝日が差し始めていた。

あこ「ううゝ眠いよゝ」

友希那「あこ！そんなんじや今回はなしよ」

あこ「はいいゝごめんなさい」

勇也「こらこら友希那。そんなこと言わない。あこ少し休もう。みんなも寝てていいよ。もう大丈夫、あとは時間なったら起こすよ」

紗夜「ですが勇也さん！」

勇也「いいの、俺のわがままでみんなを無理させたいわけじゃないから、後はやれることをしよう。それが今は休むことだから」

リサ「紗夜も友希那もここは休も。みんなも疲れてるみたいだし」
紗夜「わかりました」

友希那「わかったわ」

そこでみんなは雑魚寝をしていたので俺は少しスタツフルームに入りかけるものを借りてみんなにかけた。そのまま家に帰り軽く料理をして車で会場に食材を運んだ。

今日は音楽の後にパーティーをするつもりだから大変だ。

そこから会場に入りキッチンに行くと思花がいた。

興花「全く言ってくれればいいのに」

勇也「なんでここに」

興花「それより後はやつとくから寝ておいて」

勇也「あはは…ダメだね、これは俺がしないといけないことだから」
興花「はあ〜、全く。なら手伝うよ。これは却下させないからね」
俺はそのまま料理の仕込みに入った。そこからはあつという間だった。だんだんと集まりそこから事情を説明するとみんな納得してくれて時間まで待つてくれた。

そこからRoseliaのみんなもやってきた。そして俺のところに来て小言を言われなんとか解放された。

時間になり俺たちは舞台袖に待機してそして演奏を始めた。まさか俺がRoseliaのマネージャーを始めた時には思いもしなかった。

Roseliaの曲を友希那やリサ、紗夜、燐子、あこと同じころですることになるなんて…

けどあの時からの願いでもあった。昔逃げたギターは弾けてないが友希那たちといつか一緒の舞台に立ちたいと思っていた。

そして俺が望んだChange the Futureが始まった。この歌は俺の昔を言われてるみたいで少し嫌いだが、心に響く歌だ。

終わるとすごい拍手がなっていた。

俺たちは顔を合わせてみんな笑った。俺はマイクを持ちそしてこれからのことを言った。

勇也「今から俺が料理する。それを食べたい人は残っていてくれ。そんなに時間は関わらないからちよつとだけ待っていてくれ」

俺はその言葉を残してキッチン向かった。そのまま使う食材を次々上に上げてその間に切っていった。

そしてその下に置いてある皿に入れてそこから煮込んだり、焼いたりしてなんとか形になってきた。

それに盛り付けをして運び始めた。机をパーティみたいにしていたのでその上に置いていく。

そしてみんなに食べてという食べ始めてみんな喜んでくれて俺も嬉しくなってきた。そのまま料理を続けて終わったのは2時間後にやっと落ち着いた。

俺は少し休憩しようと思つてそこに行くところに行くとそこにリサもやってきた。

リサ「お疲れ様」

そういいリサはコップに入った飲み物を渡してきてくれて俺はそれを一気に飲み干して自分の隣に置いた。

リサはその逆に座ってきた。

リサ「あたしにもいつてくれたらよかったのにな」

勇也「リサは主役なんだからゆっくりしてて」

リサ「冗談だよ！だから今は少し休んでて」

勇也「また後でな。ここですると殺されるよ」

俺はそういう笑うとリサもたしかにと言つて納得してくれた。今回のイベントでRoseliaだけじゃなくて、パスパレやAfterglowも来てくれている。今は別のところで食べたりしているみたいだがまあそのうち終わるだろうと思つているとなかなか終わらず時間は夜の9時を回った。

俺は舞台上上がりとりあえず終わらせた。みんな少しずつ帰って行き、全員が出ていったのは10時半を回った。そこから机の上のものを片付けて行くとりサと友希那に肩を持たれてそのまま下に押されて俺は耐えきれずにそのまま落ちた。

リサ「勇也は休むこと！」

友希那「後はあたしたちがやっておくわ」

勇也「でも！」

千聖「でもじゃないわ。少し休んでて」

そしてRoseliaのみんなにAfterglowのみんなにPastel paletteのみんなまで片付けをしてくれた。

俺は結局お礼を言うことしかできずにその日は終わった。最後は興花が全員を送ってくれて終わった

進級

ホワイトデーも終わり大学は春休みに入りしばらく暇が続いた。その間に受験があり蘭たちは無事に合格したとの報告が来たので俺の家で合格祝いをする事になって今絶賛準備中だ。

リサ「こんなにいるのかな？」

勇也「まあモカがいるし食べるだろ」

紗夜「そうですね。青葉さんのどこに一体あれだけの量があるのか不思議なぐらい食べますから」

確かにモカのあの体の中のどこにあれだけの量の飯が入るんだか、しばらく3人で料理をしていると友希那とあこ、燐子が帰ってきた。

3人には飲み物を買ってきてもらっていてたくさん買ってきてくれた。

そこから時間が経つにつれて料理も出来上がりインターホンが鳴った。

迎えに行くと蘭たちはやってきてその手にはお菓子を持っていた。

「お邪魔しまーす」

そういい入っていきみんなリビングに揃った。そしてみんなでパーティーが始まり楽しんでいた。

相変わらずモカのあの暴食はどこからくるんだか…

俺は飲み物だけ持って外に出ていった。その後を蘭がついてきて隣にきた。

勇也「合格おめでとう」

蘭「ありがと、けどここまでしなくてもよかったのに」

勇也「まあそこはいいんじゃない。みんな楽しんでるし」

???「あー、私抜きでやってるー!」

蘭「だれ!?!」

声のする方を向くと怒りながら来ている興花がいた。そのまま家の中に来て俺のところまで来て文句を垂れていて、その隣で蘭が笑っている。全く酷い目にあってるがみんななんだかんだで笑ってる。

そのまま興花に連れられてリビングでみんな2回目のパーティー

が始まった。

そのまま時間はたち夕方になって片付けを始めた。

モカ「モカちゃんもう満足で一步も動けませーん」

ひまり「モーカそんなこと言っただけで片付けするよ」

勇也「あはは：いいから。主役はゆっくりしてて」

つぐみ「いえ、手伝いますよ」

勇也「いいからゆっくりする」

俺はつぐみの肩を掴んでそのまま座らせた。そのまま興花に相手を任せて俺とRoseliaのメンバーで片付けを始めた。片付けが終わったりサや他のRoseliaのメンバーからの頼みでAfter glowのメンバーを送って行くことになり、Roseliaのメンバーは興花が送って行くと言っただけで別れた。

俺は順番に送って最後はひまりと2人で帰っていた。

ひまり「今日はありがとうございました」

勇也「気にすんな。それより大学でもバンドやるのか？」

ひまり「もちろんです！私たちはいつも通りが大事ですから」

勇也「そっか。これからも楽しみにさせてもらうよ」

ひまり「もちろん楽しみにしてください」

俺とひまりは話しながらあつという間についた。玄関で別れて俺は後ろを向いて帰ろうとすると強い衝撃に襲われた。

ひまり「やっぱり我慢できないです」

その時にひまりの口元はひどく歪んだ笑い方だった。それを見て俺は意識を失った。

衝撃の事実

俺は目を覚ますとベッドの端にロープを繋がれそして俺の手もその延長線上につながれている。

なんだか何回か経験したことなのであまり違和感がない。まあそれもそれで変なただけど…

頭を動かして周りを見てみるともう夜の9時になっていて誰もいない。

そこで部屋の扉が開いてきたのはいつもの髪をくくった状態じゃないひまりだった。

髪はストレートになっており少し濡れていて色気を出している。

ひまり「勇也さんおはようございます」

勇也「うん。おはよ。じゃなくてこれは？」

ひまり「ああ、気にしないでください」

勇也「いや、気にしないでくださいじゃなくて」

ひまり「気にしないでくださいね」

目がこれ以上聞いてくるなど訴えかけてきて俺は何も言えなくなった。ひまりはそのまま乗ってきて俺の上に寝転んできた。その時におそらくお風呂に入ったんだろう、かなりいい匂いがしてきてかなり理性がやばい。

それに寝転ばれるとひまりのものが当たってきている。

全くこれいつもどうやって抜けてかな、全く覚えてないけど何回は他の奴に助けてもらった気がする。

それにあの時あった首の衝撃は一体？

勇也「そういえばひまり俺をどうやって気絶させたの？」

ひまり「ああそれはちよつと鉄パイプで首の後ろをしばかせてもらいました」

勇也「はあ？鉄パイプ？そんなもん後ちよつとで植物人間になつてるかもしれないよ」

ひまり「そうですね、それはそれでよかったです」

これは何を言っても聞いてくれないな。それどころか恐ろしいぐ

らしいオーラを漂わせている。

これは何も言わないで言われた通りにしておいたほうがいいな。

俺は何も言わずにひまりを上に乗せたままいると、ひまりはそのまま眠ってしまった。

俺は寝ることができずそのまま起きて1日が経った。

ひまりは目を覚ますと俺を見てそのままキスしてきた。

やられながら顔をそらすと顔を抑えて舌までねじ込まれた。

勇也「んむ、んん」

ひまり「んちゅ、んん」

そのまましばらくして離されて俺は過呼吸になりひまりは満足そうな顔でこつちを見てきた。

俺はたまらずその顔が怖くなり晒した。俺はこのままずっとこの状態なんだろうかな？

そんなときにインターホンが鳴った。

ひまりは舌打ちをして面倒くさそうに玄関に向かって歩き始めた。

はあ、せつかくいいところだったのに誰だろ。もし邪魔をしにきたなら少し痛い目に合わせないかね。
そして玄関を開けると立っていたのはAfter glowのメンバーだった。

ひまり「みんなどうしたの？」

蘭「ひまりここに勇也さんきてるよね？」

ひまり「ううん、きてないよ」

モカ「それじゃあ確認させてもらうね」

ひまり「ちよつと！モカ」

モカはそういいながら階段を登っていき私の部屋の前に来た。私

んでなんで、邪魔をするの？」

勇也「俺がお前らの音楽を聴いてるのが好きだから。そして後戻りができなくなつて欲しくないから。理由はこれ以上必要？」

ひまり「私…こんなつもりじゃ…」

勇也「知ってる」

俺はひまりを引き寄せてそして抱いた。そのままひまりは胸の中で泣きじやくり蘭たちも周りですすり泣きをしていた。

しばらくして泣き止んだのでひまりはあつという間に離れて顔を真っ赤にしていた。

蘭たちもひまりに寄り添い一緒に顔を赤くして俺を見ていた。

勇也「あ、あれ？」

なんだか目の前がチカチカする。それになん…だか頭が…
そこで俺は意識を落とした。

ひまりが上がってきて鉄パイプを振り下ろしてきたときは本当に怖かった。けどそれを勇也さんが受け止めてくれて心強くて何より嬉しかった。

そしてひまりは泣きあたたしたちも泣いた。あたしは大事な親友がこんなになるまで追い詰められているのに気づかなかったことが悔しかった。

そして泣き止むと一気に恥ずかしさがこみ上げてきてあたしたちは固まった。勇也さんの様子がおかしくその直後に倒れた。

蘭「勇也さん!？」

巴「ひまり、救急車」

ひまり「!!こんな」

巴「ひまり!」

ひまり「うん」

そのままひまりは電話をかけて15分ぐらいすると救急車がやつ

てきてそのまま勇也さんは運ばれた。まさかこんなことになるなんて思いもしなくてひまりは体が震えている。

あたしはリサさんに電話してリサさんはそのまま湊さんに電話して向こうで合流することになった。

あたしたちは病院に向かい入り口にリサさんたちが立っていてひまりはおそらく怒られると思っっていたんだろう。

けれどリサさんも湊さんもなにもいわずになかに入っていき勇也さんのところに向かった。

医者が言うには強い衝撃を変なところに受けたから意識を落としただろうと言っていてひまりはまた自分を責め出した。

ひまり「わたしのせいだ」

リサ「そうだね、ひまりのせいかもしれないけどここでひまりを責めたら勇也はきつとあたしのことを怒ると思う。だから怒らないよ。そのかわり勇也のそばで見せてあげて」

友希那「そうね。この子なら間違いなく怒るわね。全く自分が危ない目にあつてるのにこんな性格だから」

ひまり「はい」

ひまりはその言葉通りほんとにずっといた。離れた時といえばトイレに行くときぐらいでそれ以外はずっと勇也さんの手を握っていた。

リサさんと湊さんは『後は任せたよ』と言って帰ってしまいあたしたちはここでもたべれるようにコンビニに行き軽く食べ物を買っていくことにした。

もう夕方を回っていてこの時期は暗くなるのが遅くなったせいだ。だいぶ暖かくなってきたと実感する。

あたしたちは少し食べ物を買って病院に戻るとひまりは勇也さんの手を握ったままベッドに寄り添い眠っていた。

蘭「あたしたちはどうする？」

つぐみ「このままひまりちゃんだけにはしておけないよ」

巴「そうだな。せめて一緒にいよう」

モカ「それにこのまま帰るとひーちゃんお腹すいて倒れちゃうよ

」

モカの一言で病室内が一気に明るくなった。確かにひまりならあり得そうだ。

あたしたちは買ってきたものをひまり分残して残りを食べた。

そのまま眠くなりあたしたちも眠ることにした。

朝起きると何度か見たことがある天井だ。またここにきたのかと思いつつ体を起こすと両手が繋がれていた。縄かと思つて見ると蘭とひまりが手を握つて眠っていた。

また迷惑かけたなと思いつつしばらくそのままにしておく壁際のソファで寝ていたつぐみが目を覚ました。

つぐみ「勇也さん！目を覚ましたんですね」

勇也「ごめん、迷惑かけたな」

つぐみ「いえ、迷惑なんて…」

勇也「またやつちまつたな…」

つぐみ「え？」

勇也「いやなんでもない。それじゃあみんな起こすか」

つぐみ「はい！」

そこからみんなを起こした。ひまりは泣きながら謝つてきたが俺は気にしてないのであやしてその場を納めて俺は医者のところに行った。

するととんでもないことを聞かされた。

医者「君このままいくと長く生きられない」

勇也「はい？」

医者「君がここに運ばれてきたときに過去のデータを全て調べた。君は今までかなりのけがをしているね」

勇也「ええ、まあそれなりに。けどそれが死ぬ理由となんの関係があるんですか？」

医者「そこが問題なんだよ。怪我のしすぎで体の組織が崩れかけてきている。それは君も感じてるんじゃないのか？」

勇也「っ……！」

事実俺の体は最近どうにも調子がおかしかった。何かあるんだろうと思ひほっておいた代償がこれか。

とんでもない代償もあったもんだ。

勇也「それで治す方法はあるんですか？」

医者「あるにはあるが今の日本では行えない。アメリカじゃないと無理だ。それに莫大な費用がかかる。今の君にそれだけは無理な額だ」

そういう紙に書いたのを見せてもらおうとこれは無理だ、と頭を悩ませた。まあ仕方ない。

怖いのは怖い人間いつかは死ぬ。それが遅いか早いかだけだ。

医者「まあいきなりで無理もない。とりあえず顔でも洗ってきなさい。」

そのあとは今は特に問題はないから帰っても大丈夫だよ」

俺は部屋を後にして顔を洗う前に鏡をみるとすごい顔をしていた。

気がつかないうちに泣いて怯えた顔をしていた。今は昔と違い未練があるってことか。

俺は顔を洗って何もなかったかのように部屋に帰って蘭たちと一緒に帰った。

あの事実を聞かされてからは特に何もなく学校が始まり、蘭たちも入学してきた。

俺はあの事実を聞かされてからはなんとなく周りを意識するようになった。こんな俺でも死んだら悲しんでくれるのか。

そんなことばかり考えながら学校生活を過ごしていた。

リサ「勇也、勇也！勇也!!」

勇也「うお！なんだ。どうしたんだ」

リサ「どうしたんだ？じゃないでしょ！さっきからずっと上の空じゃん」

勇也「そうか…、ごめん」

リサ「勇也なんかあった？ここ最近ずっとそんな感じだよ」

勇也「ごめん。心配かけたな。中々眠れなかったんだよ」

リサ「そっか…なんかあったら言っただろ！」

リサは普段と変わらない笑みで走って何処かに消えた。

俺も帰る準備をして靴を履き替えて帰った

全てを知られた今

はあ…あたしは今帰り道で友希那と一緒に帰ってるんだけどなぜかモヤモヤが消えない。そのせいでさっきからため息ばかりしている気がする。

友希那「リサどうかしたの？さっきからため息ばかりよ」

リサ「うん…なんか胸のモヤモヤが消えなくて」

友希那「そうなのね。大方勇也がらみでしょうけど…」

リサ「そうなのかな？」

友希那「可能性の一つよ」

そのまま友希那と一緒に帰ってベッドに倒れこんだ。帰ってきて早々にベッドに倒れこんだのは久々だ。

本当に勇也のことなのかな？あたしは胸のモヤモヤが消えることなくその日は何もやる気が起きなくて眠った。

さて、医者から言われてるのは一応後3年は問題ないらしい。けれどこれはあくまで目安であって無理をしたりけがをしたりするともちろん短くなるし医者からも固く禁じられている。

もちろん普段で喧嘩するつもりなどさらさらないがみんなが危険になったら話は別だ。

最近は本当に体が重い。おれは体重70ちよいだがそれに鉛を背負ってるみたいだ。

帰り道もいつも通ってるはずの道なのに家までがとてつもなく遠

く感じる。

途中の公園で一休みしていると興花がやってきた。

興花「ヤッホー。こんなところで何してんの？」

勇也「興花。少し休憩だよ」

興花「それじゃ隣失礼」

興花はおれの隣に座った。こうみると本当に美人なんだよなあー

興花は。

それに今ならあの事言えるかも。

勇也「興花。おれとバンドしない？」

興花「へ？バンドってバンドー？」

勇也「そ、おれと興花のツインボーカルでツインギター」

興花「うん、やりたい」

勇也「ならやろうか。それに今年からFWFの最低人数が変わる。

前は3人からだったけど今年からは2人で参加できるらしい」

興花「それって確かRoseliaの目標じゃ」

勇也「そ、俺はそのてっぺんでRoseliaと勝負したいんだよ。

だから頼む」

興花「もつちろん。だって面白そうじゃん」

こうして俺と興花はバンドを組むことを決定して早速楽器店に見に行つた。

ギターは俺は黒いギター、興花はリサと同じ真っ赤なギターを買つた。

値段は秘密でいこう。かなりしたから

そこから俺と興花はcircleに向かい部屋を借りて音を合わせた。最初の1時間は俺が教えてばかりだったが時間が経つにつれて興花もかなり演奏できるようになってきた。

人間には二つのタイプがいるがごく稀に例外がいる。覚えが早いのに全く忘れない人間だ。

それが興花なんだとこの時に改めて知った。

俺たちはある程度形になって今日は終えた。

帰りにファミレスによって軽く食べたがなぜか興花の目がキラキ

ラしていた。

勇也「どうした？」

興花「だってファミレスなんて初めてなんだもん」

ああ納得。興花の家は日本を代表する財閥だしこんな庶民のところに来たことないのがわかる。

それでも少しはしやぎすぎたよなく。

そこで軽くポテトをつまみながら談笑をして帰った。

もちろん送って行ったが…

自宅に帰るともうすでに夜飯を食べていて俺はそこに加わって一緒に食べ始めた。

最近親の様子がおかしい。なんだか獲物を見つけたような目をして俺を見ってくる。

友希那「勇也、何かあったの？」

勇也「いきなりだな。どうしたの？」

友希那「いえ、なんとなくよ。リサが心配していたから」

勇也「なんでもないよ」

俺は飯を片付けて部屋に戻った。

ベッドに倒れ込み俺は独り言のように呟いた。

勇也「後少しなんだ。誰にも傷つけたくない。だからもう少しだけこの幸せを感じさせてほしいなあー」

俺は誰も聞いていない部屋で独り言をつぶやいて眠った。

興花 side

本当嬉しい。勇也からバンドを誘ってもらえるなんて…

元々何か一緒にしたいと思っただけどまさかバンドに誘ってもらえるとは想定外だった。

私は自分の部屋の椅子に座りながら一人でにやけている。

そこで扉がなり入ってもらおうとんでもないことを教えられた。

「失礼します」

興花「どうしたの？」

「少し気になる情報が」

素晴らしい紙を見せられた。そこに書いてあったのは勇也の診断書だった。

なんでこんなものを見ていくと最後のページに信じられないことが書いてあった。

余命3年

興花「うそ…」

「嘘ではありません。その病院に問い合わせてみるとそれは事実でした。おそらく勇也様は何も知られたくないのではなかったのでしょうか？誰も知らないことが事実ですし」

興花「今すぐに治療法を探して」

「かしこまりました」

そして私自身もありとあらゆる資料を漁り始めた。

END

蘭side

やっと手が届くところまで来た。後は実行するだけだね。けど勇也さんをどうやってウチに連れてこよう。

そこだけがネックなんだよね。勇也さん優しいから信じてくれるけど獣並みに勘が鋭いから。

まあそれは呼んでから考えたらいいか。ひまりにはあんなこと言っておいてなんだけど欲しいものは独占しないとね。

END

朝起きて用意して家を出ると興花が立ち尽くしていた。今までこんなことなかったから不思議だ。それになんとなく怒ってる気がする。

勇也「おはよ、どうしたの？」

興花「どうしたの？じやない。ちよつと私に付き合って」

俺は腕を引つ張られてそのまま車に放り込まれた。何度か乗ったが相変わらず馬鹿でかい車だ。

そこに連れ込まれて何をされるのかと思うと目の前に紙を出された。それを見してみると一番最近のカルテだった。

そして目の前で一枚ずつめくらられていき最後にあの事が書いてあった。

興花「どういうこと？」

勇也「そっかばれたか。想像より早かったな」

興花「違う！私が聞きたいのはそういうことじやない。勇也後3年で死ぬの？」

勇也「そうだよ」

興花「ならなんで私をバンドに誘ったの？もし私が知らなかったら勇也はそれを知ってた私を誘ったの？」

勇也「ああ」

興花「そんなの私がピエロみたいじゃない！勇也から誘われて一人で喜んで勇也はもうすぐ死ぬのに！」

勇也「ごめん、たしかに俺の軽率だった。その話は無しにしてくれ」俺は素晴らしい車から出た。しばらく走っていたせいもありどこかわからず適当に歩いてタクシーを拾って俺は帰ることにした。

俺はもうここにはいられない。

もういいや…

そのまま電話をいじりリサに電話をかけた。

リサ「もしもし？朝からどうしたの？」

勇也「手短に用件だけ言うよ。別れよっか」

リサ「え？なんで！どうして、あたしが…」

それ以上は聞くことなく電話を切った。これ以上聞くと決心が鈍りそうで俺はタクシーに乗りそのまま大阪まで車を走らせた。

リサ side

勇也からの朝からの電話は珍しく出てみると内容がひどかった。

あたしは何も悪いことしたつもりはない。あたしは涙が止まらずそのまま泣き続けた。

もちろん友希那にしんぱいされたが何も答えられずにいた。

友希那はあたしを学校の応接室に連れて行って名目上の理由を作って二人きりにしてくれた。

友希那「それで何があったのよりサ」

リサ「勇也に別れよって言われて…」

友希那「勇也に!？」

リサ「うん」

そこでその扉のドアが開き興花が入ってきた。その顔は険しく何か思い詰めてる感じだった。

そして口を開いた。

興花「勇也はバンドしたいって言ってた」

友希那「うそ…あの子が？そう。それでなんて言ったの？」

興花「もちろん一緒にしようって言ったんだけどその夜に真実を知ったんだ」

友希那「真実？」

興花「勇也は後3年で死ぬ」

その時にあたしと友希那が聞いたのは信じられないことだった。

そんな…勇也が死ぬ？冗談だと思いき興花の方を見してみるが冗談なんかじゃなくて本気みたいだった。

あたしは信じられなくて頭の中がごちゃごちゃしてその場で倒れた。

目を覚ますと保健室にいて隣に友希那と興花がいた。二人ともやっぱり顔色が良くない。

今までいろんなことをしてきてその中心にはいつも勇也がいた。そして何よりあたしは勇也の隣にいて何もできない。

なんて無力なんだろう。

そこで興花の電話が鳴り興花の顔色が二度変化した。

興花「いいニュースと悪いニュースどっちを聞きたい？」

リサ「それじゃ悪いニュースから」

興花「勇也がどこかに消えた」

友希那「嘘でしょ…嘘だと言って！」

リサ「友希那落ち着いて」

友希那「これが落ち着いていられる!? 私は無理よ！」

リサ「それでいいニュースは？」

興花「勇也の治療法が見つかった。これをすれば勇也の体は元に戻る。但し莫大な費用がかかる」

リサ「そんな…それいくらなの？」

興花「10億」

あたしが聞いたのはとても手が出ない金額だった。もちろんこんな金額を出せる家なんて限られてくる。

そんなのは無理だ。

興花「二人ともすごい顔してるけどこの額はあたしが出すから大丈夫だよ」

リサ「いや、興花にそこまでしてもらえないよ」

興花「いや、これは私にしかできないよ」

こころ「話は聞かせてもらったわ!」

そこで勢いよく扉が開き来たのはハロハピのメンバーだった。美咲や花音は抑えきれずについてきたみたいだった。

そのことがわかるくらい二人とも息を切らしている。けれど二人とも顔色が良くない。

おそらくさっきの話が聞こえたんだろう。

こころ「勇也を助けましょう!笑ってないのなんてわたしが許さないわ。勇也はいつも笑顔じゃないと」

美咲「ちよつとこころ!いきなり何言ってるの?って言いたいけど今回はこころに賛成です。勇也さんを助けたい」

花音「うん!そのためにはみんなが手伝ってくれないとね」

そういうとポップアのメンバーにA f t e r g l o wのメンバー、パスパレのメンバーR o s e l i aのメンバー、ハロハピも全員が保健室に来た。

そして全員の顔は覚悟が決まったような顔をしていてこの場で覚悟が決まってないのはあたしだけだった。

興花「今回は弦巻の力も借りるよ」

こころ「?なんのことかわからないけれどいくらでも手伝うわ!」
興花「それで具体的にはバンド単位で動いてもらってそれぞれに私の家の黒服とこころの家の黒服を5人ずつつける。そして休みの日にいろんな箇所に行ってもらって車の中から勇也を探して。そこからは各バンドのやり方に任せる」

興花はあつという間にやり方を考えてそれにみんなも賛同した。あたしはまだ割り切れずにいた。

紗夜「今井さんいつまで悩んでいるつもりですか?」

リサ「紗夜…」

紗夜「勇也さんが本気であなたに別れようなんて言うわけがありません。あなたに悲しんで欲しくないから、あなたを傷つける覚悟までして勇也さんは言葉にしましたんです。」

あなたが前を向くと信じて。

ならあなたができることはひとつじゃないんですか？」

その紗夜の言葉を聞いて目が覚めた。たしかに勇也ならそういう選択をするかもしれない。

あたしは覚悟を決めた。何が何でも勇也を探し出して勇也自身の言葉を聞くんだ。

そしてそれでも断られたらもう諦めるしかない。

興花「あ、そうだ。勇也を見つけてもこのことをまだ言わないでね。」

これアメリカでしかできない治療で費用がすごいから。

後もう一つこれは勇也を最後に見た医者から言われたんだけど勇也、これ以上怪我をするとかなり危ないから早く見つけないと行けないからね」

あたしたちはその場で別れて Roselia のメンバーは残ってくれた。

そして話し合った結果あたしたちは今日の夜から実行することになりその旨をあたしたちのこを送ってくれる黒服さんをお願いすると笑って了承してくれた。今回の件で友希那は Roselia の練習は勇也が見つかるまで休んでここの練習をすると言い出した。

これにはみんな驚いたが友希那の言葉に燐子の後押しがあり、あたしたちもそれで納得して夜にまた集まることになった。

END

これでもう誰とも関わりがなくなった。ならこれもいらないな。

俺は携帯を握りつぶした。もちろんいる時はあるだろうけどこれ

からは連絡取る相手がいないからそんなこともない。

それに後3年の命だからこれ以上誰とも関わる気がない。

俺は大阪の街をぶらぶらしているといい匂いがしてくる。あいにく欲望には勝てず歩いていろんなものを買出し出した。

今まで貯めた金もあるしこんなところで使おうと思つて止まらなくなつていて気がつくお腹一杯になつていた。

勇也「こんな時でも腹はすくんだな」

俺はそのまま歩いてマンションにつきその屋上に向かった。学校の時も思つたが俺はかなり高いところが好きみたいだ。

それもありマンションの屋上に行こうと思つて階段を上ると屋上に行く階段があるにはあるが壁に張り付いてなおかつ繋がっていない。

俺はジャンプして手で掴みそのまま自分の体を持ち上げて屋上に行った。

そして屋上でのんびりしてそのまま眠つた。

起きてもあいにくあまり人はこないみたいで俺は何も言われることなくそこにいた。

そしてそこから出て俺は夜の街をブラブラしていた。これは初めてで少しワクワクするがなんてことなく適当に飯屋に入って食事をしてそのあとは記憶がない。

ただ目を覚ますとネットカフェで1日を越していたみたいだ。

会計を済まし、出て体を伸ばしていると見たことがある車が俺の方に近づいてきた。

扉が開き出てきたのはRoseliaだった。

友希那「探したわよ」

勇也「なに？俺はもう用はないんだけど」

友希那「あなたになくても私たちにはあるのよ」

勇也「俺にはない。じゃあな」

これが男なら手を出していた。けれど仮にも知ってるメンバーなので手を出すのは控えておもしろい地面を踏んだ。

そのことにみんなびつくりして周りの人たちも見てきている。

そしてたじろいだ間に俺は逃げた。このままいると俺自身決心が揺らぎそうで我慢できなかった。

もちろん俺に追いつけるわけもなく俺は途中でタクシーを拾いそのまま京都に向かった。

まさか大阪まで来るとは予想外だったがさすがに京都までは来ないだろうと踏んで俺は乗りながら寝た。

そのままその日を過ごして出ると今度は A f t e r g l o w のメンバーがいた。

蘭「勇也さん」

勇也「んだよ、もう俺に用はないだろ」

ひまり「あります!」

勇也「うるさい、これ以上関わるな」

蘭「知ってる。勇也さんの体のこと」

勇也「っ…! 一体どこで!」

つぐみ「興花さんに聞きました」

勇也「あのやろう…」

巴「逃げないで話してください」

勇也「うるさい…うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい。今すぐに消えろ。じゃないと俺もキレる」

そういう威嚇で蘭の隣をおもいつきりグーパンが通り過ぎた。

これにひまりとつぐみは驚きを隠せていなかった。モ力はこうなることがわかっていたかのような感じで見ていて蘭は怖がり巴は俺を睨んできた。

俺は体を返して歩いて行つた。

その後もパスパレやハロハピもきたがパスパレにはこれでもかと思われて脅しても聞かずに結局逃げた。

ハロハピにも同様に行つた途端に手を止められてそのままこちらたちは消えた。おそらく黒服の人たちだろう。

これで俺に対しての追ってくるやつらは消えて俺は本当に一人になった。

なつて安心したと同時に俺はその場で崩れて一人夜の公園で泣き

続けた。

次の日に起きると俺の頭の上が柔らかい。何かと思い見てみるとそこには一度脅したはずの Roselia のリサの膝があった。

リサ「あ、起きた？」

勇也「リサ？」

リサ「あたしに難しいことはわかんない」

俺はすぐに立ち上がりリサの前に立った。

勇也「失せろ」

その瞬間に俺の頬はおもいつきり叩かれてその勢いで俺は尻餅をついた。

叩いた本人をみると泣きながら俺の方を見ていた。

リサ「本心を言つてよ！いつまでも隠さないで！勇也は昨日だってみんなを追い返した後一人で泣いてた。ほんとに別れたい人間が泣くわけないじゃん！」

勇也「っ…！」

リサ「お願いだから本心を聞かせて」

勇也「俺だつて…まだ死にたくない…やりたいことだつて山ほどあるし、みんなといたい」

俺は涙が止まることなく訴えかけた。そしてリサが手を叩くと五バンドのメンバーに興花までやってきた。

興花「ならアメリカに行こ勇也」

勇也「でも…」

興花「大丈夫。費用は話してあたしと弦巻家で負担するから」

勇也「そこまでは…」

こころ「勇也が笑顔になれないなんてダメよ！」

興花「そうそう。それに勇也には約束果たしてもらおうからね。一緒にバンドやってね」

勇也「ああああもちろん」

こうして俺はみんなと一緒に帰った。車の中でみんなに謝りみんなはなにも言わずに許してくれた。本当に申し訳ないことをしたつてのにみんなは優しすぎた。

家に帰るとそこで地獄の再来が来た。友希那は練習があるとかで
行き帰ったのは俺だけだった。

アメリカに行くのは3日後と決まり全て段取りしていると言われ
た。

父「ずいぶん遅かったじゃないか」

勇也「まあな」

そして二階に上がろうとすると後ろからしばかれて俺は意識を
失った。

いよいよその日

俺が目を覚ますと見たことない場所だった。少なくとも俺が知ってる場所じゃない。

そしてその前には親父がいた。

父「やっとお前を…」

勇也「はあ結局こうなるのか」

天井から吊るされるように鎖で縛られてるから動けない。こうなるとやることは一つだ。

俺の体は長いこと傷を受けきれない。もう覚悟を決めないとな。

そこからは俺の体は好き放題に殴られた。拳ならまだしも腹に對しての蹴りや一番ひどい時で腕に鉄パイプを振り下ろされた。

その瞬間に嫌な音がして折れたことがわかった。

そして親父は何処かに行き俺はそのくらい部屋に一人になった。

やっとな一人になれて少し安心したが、体のあちこちが痛い。それに後何発か受けて傷が増えると本当にやばい。

そしてだいたい1時間ぐらいして戻ってきた。

その後も終わることがなくしばらく殴られて俺は手につながれては鎖はもはや意味をなさなくなつて俺はそこに倒れた。

勇也「ちくしょ。ここまでか…」

俺の目の前が真っ暗になってきて頭の中に色んなことが思い浮かんできた。楽しかったことや辛いこと。それに何よりみんなの顔が浮かんできてだんだん暗くなつてきた。

その時に俺の体を持ち上げる人が来て誰かと思ひなけなしの力で見てみるとリサと興花だった。

勇也「な…んで？」

リサ「今は喋っちゃダメ。上で友希那が時間稼いでるから」

興花「だから少し我慢してね」

素晴らしい扉がもう一つあったらしくそこから俺たちは出た。その後俺は車に乗せられて移動した。

俺はそこで寝かされて2人は不安そうに見ていた。もうさつきみ

たいな目の前が暗くなったりはしなかったがなぜか体が全く動かない。

動くのは口だけだ。

勇也「友希那を助けないと…」

興花「ダメだよ！勇也は腕の骨折れてるんだよ！それにそつちは弦巻が手を回してる」

リサ「勇也はゆっくりしてて、普段すごい疲れてるんだからさ」

勇也「ああ、それに…！」

その瞬間身体中が悲鳴をあげた。俺自身も声にならない声を出してもがき始めた。

そのまま車の中で暴れまわり手を伸ばした。その手を掴んでくれた。だれかと思うとリサだった。

リサ「勇也頑張つて」

勇也「あがつ！がああああ、うう」

その手だけは離さない。そう思いながら握っていたら俺の首元に強い衝撃が走り俺は気絶した。

リサ「ちよつと興花！」

興花「わかつてる。多分こつちの方が楽だよ」

リサ「だからってスタンガンなんて使わなくても」

興花「これしかなかったんだよ。もう勇也の体は9割方壊れかけている。このまま放っておいたら体が壊れていたかもしれない」

リサ「でも…」

興花「大丈夫後で何を言われても覚悟してるから今は我慢して」

あたしに興花を責めることなんてできない。現に興花は勇也のことを考えて最善を尽くした。それは勇也の今後にも関わるかもしれないことだったのにあたしは一步が踏み出せなかった。

興花「自分を責めてるみたいだけどそんなことをしちやダメだよ」
リサ「でも！」

興花「いまの勇也の顔を見てあげて。すつごい安心した顔をしてる。多分私や他の人には無理。リサだから勇也はここまで安心して

るんだよ。だから勇也のそばにいてあげて」

リサ「うん：うん」

あたしは涙で視界が歪んでも眠ってる勇也の手を握りもう片方の手で頭を撫で続けた。

車はそのまま進んでいきどこかで止まった。そこで勇也は連れられてあたしも便乗して降りた。するとそこは空港でもうすでに興花たちの家が準備していた飛行機がありそこに勇也は運び込まれた。

リサ「どういうこと？出発はまだじゃなかった？」

興花「まさかここまで進行してるなんて思いもしなかったから少しだけ予定を早くしたんだ。リサの荷物も乗ってる。

早く乗り込んで」

リサ「ちよつと待って！友希那は？それに他のみんなは？」

興花「そつちには私の家と弦巻が回してる。だから大丈夫」

素晴らしい興花はあたしにケータイの画面を見せていまの状況を教えてくれた。それは友希那はすでに車に乗っており勇也の父親は捕まったらしい。

それを見て安心したが友希那たちは後で来るらしくあたしと勇也、興花だけで飛行機は発射した。

そして飛行機の中での時間が経ちその間も勇也は眼を覚ますことはなかった。息が止まっているのかと思いつい何度か近づいて確認したがそういうわけじゃなかった。

こんなことになってるなんて思ってもいないぐらい規則正しい寝息だった。

そのまま時間が経ちあたしも眠くなってきたので寝ることにした。

興花「リサ、リサ！着いたよ」

リサ「う：ん」

あたしは寝ぼけながら目をこすり外を見ると見たこともない景色が広がっていた。そのまま飛行機は着陸してやっと飛行機から降りて勇也を下ろした。その間も目をさます気配はなくあたしたちは病院に向かった。

着くとそこはあり得ない大きさの病院で興花曰くここはアメリカ

で一番大きい病院らしい。

そのまま勇也を連れて行き、病室で一日検査入院らしい。その間も興花は医者と話していて勇也が目覚めました。

勇也「う、ここは？」

リサ「もうアメリカだよ。目が覚めた？」

勇也「なんとか。けどさつきは悪かったな。びっくりしたろ」

リサ「まあ、ちよつとだけ」

その瞬間にはあたしの目の前が真っ暗になった。そして数秒してあたしはいま勇也に抱きしめられてることがわかった。

勇也「悪かった。けどしばらくは大丈夫そうだから」

リサ「うん。信じてる」

そして勇也に離されてあたしは勇也に対してキスをした。

目がさめると何度か見たことあるが匂いが違うところだった。そして隣を見ると目に涙を溜めてるリサがいた。

そしてリサを不安にさせて気がつくのと体が動いていた。その後リサにキスされて俺は多分が真っ赤になっていたと思う。

だって目の前のリサが顔を真っ赤にして晒していたから俺も多分なってるはず…

勇也「リサ別れよっか」

リサ「え？」

勇也「いや、前みたいに嫌な意味じゃないんだ。いまの俺は多分リサに釣り合っていない。だから俺がリサに釣り合うぐらいの男になったら俺から迎えに行くよ」

リサ「そんなことない！勇也があたしに釣り合っていないなんて」

勇也「大丈夫。必ず迎えに行く」

リサはなんとか納得してくれたようで少し不満そうにしていた。俺はまだ気づいてなかった。その時の言葉で口が笑っている奴がいたことに。

日菜「やつほー。あー勇也くん起きたんだ！」

扉を盛大に開けて日菜が入ってきた。その後が続くようにパスパレのメンバーにアフグロのメンバーRoseliaのメンバーまで入ってきた。

ポヒパとハロハピは単位が危ない奴が多いから来れないらしい。

そのことで少し笑ったのは別の話。

その日はみんなも気を使ってくれて俺とリサの2人きりになった。

その間にたくさん話して時間はたち結局2人とも寝なかった。

そしていよいよその日が来た。

それは病院で着せられる服に着替えてカプセルの中に入った。

みんな周りに来てくれてカプセルの周りで何か言っていたがすでに蓋が閉じていたのもう聞こえなかった。

けれどリサの言ってることだけはなぜかわかった。

リサ「必ず待ってるから！」

俺は口で必ず行くと言って意識が落ちた

その間に

勇也が入ったカプセルはだんだんと白い霧で覆われていった。そしてそのまま勇也は見えないまま時間だけが過ぎていった。

興花「しばらくこのままだし、私たちも移動しよつか。もうみんなの分のホテルは取ってるんだ」

「そういうみんなで移動してホテルに行くとスイートルームが3部屋予約されていた。」

あたしたちRoseliaとAfter glow、パスパレで一部屋ずつらしい。

興花はその時によっていろんな部屋に泊まるらしい。

部屋に入るとすごい豪華で言葉を失った。ここに一ヶ月いるなんてどれだけの費用がかかるんだろう。考えると背中がゾツとしてきた。

紗夜「本当にこんなところに泊まってるのいいのかしら？」

リサ「そうだよね。いくらなんでもびっくりしたよ」

友希那「また世話になったわね」

隣子「そう…ですわね」

あこはベッドに向かってダイブしてそのあとはゴロゴロ転がっていてなんとも言えなかった。あたしたちはこれからの予定を話してその日は終わった。

次の日の朝からも勇也のところにあたしだけ先に向かった。

興花「早いねリサ」

リサ「興花、昨日はどこにいたの？」

興花「After glowのところだよ。いや、ほんとに仲

良いね」

リサ「まあ幼馴染だしね。それより興花も早いね」

興花「まあ進展ぐらいは確認しておかないとね」

リサ「進展？」

興花「勇也の体は今生きてる状態じゃないんだ。昨日のうちにコールドスリープって言ったらしいのかな？その状態になって勇也の体

の細胞を使って新しい細胞をいま作ってるの。それを勇也に合わせ
ていくんだ。それな進展具合」

リサ「なかなか難しいね。あたし全然わかんないや」

興花「私も全部把握してるわけじゃないしね。なんとなくだよ」

そんなことを話しているとみんなやってきてこれからを話した。あ
たしたちは何度かライブハウスを借りて練習することになった。も
ちろんこっちに楽器はないから備品を借りるのだが感覚だけでも忘
れないためにするからするという結論になり他のバンドもそうなっ
たが彩や日菜、ひまりやモカは食べ物も気になって仕方ないらしい。
けど日菜やモカはともかく彩やひまりにアメリカサイズの食べ物
を食べられるのだろうか？

あたしたちはそんなことを話してから各自解散になった。

今日は特に予定がないのでずっと勇也に付き添うことにした。

そしてしばらくするとそこに千聖もやってきて手には袋を持って
きた。

千聖「リサちゃんも何か食べないと倒れるわよ」

リサ「ごめん、千聖ありがと」

千聖はそういいハンバーガーとポテトが入っていた。出してみる
と日本でいうLサイズは超えてるぐらいの大きさだった。

リサ「おつきいね。食べられるかな？」

千聖「たしかにかなり大きかったわ」

千聖を見ると苦しそうにお腹を抑えていてあたしも食べ終わり、時
間だけが過ぎてその日も終わった。

夢の中で

なんだか体がふわふわする。そうして夢の中だと気がついた。

周りの景色が変わりどこかと思うと見たことのある景色だ。しばらくするとなんだか声が聞こえてきてそっちの方を見ると小さい頃のリスアがいた。そしてここは小学校だと気がついた。

そしてそこにはリスアと何人かの男がいた。

「なんでこんな色なんだよ！」

リスア「やめて！」

「ははは、変な色」

俺はその場で手を伸ばそうとしたが動かない。けれどこの光景はどこか見たことがある。

いや、知っていると言ったほうがいいのかな？

勇也（小）「お前ら何してんだ？」

「ゲエ！あいつって」

「ああ前に高学年の人をやったやつだ」

「逃げろ」

勇也（小）「逃すと思うか？」

俺は追いかけてそいつらを捕まえて少し脅したはずだ。実際に目の前で起きてる光景も同じものだった。

そこでまた光景が変わり、その頃住んでいた自宅になった。

そして俺はこの日初めて親父に殴られた。

父「なんで！お前は！」

勇也（小）「痛いよ」

俺は殴られ続けてこの頃は意味も分からなかったし今になってもわからない。いや本当は分かっているはず。

親父はギターをやめた俺に対して怒ってたはずだ。友希那とバンドを組むと思っていたはずだから。

そこから次々と世界が変わり俺の過去を見せられていた。

勇也が眠りもう半月が経った。それでも目を冷ますことはなく、勇也の入っているカプセルは白い霧で覆われたままだ。

けれど時折心拍数が上がっているみたいだ。なんでも勇也の心臓には超小型の心音機があるらしくそれを見ているんだとか。一体なんの夢を見てるんだろう。

友希那「リサ、ここにいたのね」

リサ「うん、ここに居たいんだ」

友希那「そろそろ練習に行くわよ」

リサ「もうそんな時間!? わかったよ」

あたしは準備して病院から出て近くのライブハウスに向かった。そこで練習を始めてみんなで音を合わせた。普段と違う楽器だから音の感じ方は違うけどなんとか引けた。もうみんなも少しずつ慣れてきたみたいでだいぶいい感じだと思う。

リサ「ねえ！勇也どうだった？」

友希那「リサ、あなた」

リサ「あつ！ご、ごめん。こういうところって必ず勇也がいたから抜けてなくて」

紗夜「わからなくもないですが、もう少しの我慢ですよ」

みんな呆れて私の方を見てきた。紗夜や友希那はともかくあこも隣子も苦笑いしてる。なかなかシヨックだけどあたし自身かなり無意識に言ったから恥ずかしい。

その後少し休憩を挟んで最後に音を合わせてあたしたちの練習は終わった。

あたしたちはライブハウスから出ると知らない男たちに囲まれてそのまま車に入れられた。

リサ（助けて勇也…）

あたしは届くはずもない願いを込めた。

「急に心音が上がったぞ」

「これは一体？」

その直後にカプセルが破って出た。周りを見てみるとありえない顔をしているが俺の体は間違いなく治ってる。

それは自分で実感できるぐらいになっていた。

勇也「体が固い」

興花「勇也！無茶苦茶だよ」

勇也「それより今リサの声が聞こえた気がしたんだけど？」

興花「今は多分ライブハウスにいるはずだけど…」

「失礼します」

そして興花の耳元でつぶやいてどこかに消えた。そこから顔色が変わり、俺に伝えてきた。

興花「攫われたらしい。場所はわかってるからここは任せて」

勇也「俺がいかないとダメなんだよ」

興花「わかったよ」

興花は俺に対して車と場所を教えてきてくれた。俺は車に乗り込みアクセルを踏んで発進させたが体が軽い。けど固い。

まあ半月以上意識のない状態で寝てたからしょうがないんだけど。

それにしてもなんだか懐かしい夢を見ていた気がするんだよね。思い出せないんだけど。

そのまま走らせると廃ビルに着いた。

かなり高いので俺なら最上階に連れて行く。

そう思い俺は階段を上っていった。エレベーターで行ってもいいが電源を落とされたり、最悪待ち伏せなんてされたら終わりだからだ。階段を登っていき最上階に着くとベッドに倒されたみんなの姿があった。そしてその周りに3人の黒人がいて今にも手を出しそうだった。

みんなは目を瞑っていて気付かず他の男たちは目の前の獲物に目
がいつて気づいてない。

「東洋人だぜ」

「久しぶりだな」

勇也「ぎーんねん」

俺はその瞬間1人の首を蹴り倒した。みんな驚いているが返事し
てる場合じゃない。2人目が殴りかかってきたのでカウンターを入
れると体に異変が起きた。

思うように力が入らない。おそらくは特殊な入院していたからだ
ろう。

3人目を倒せるかわからなかったので待ちの姿勢にすると相手も
出てこなかった。そこで俺は挑発してみると相手は案外短期らしく
すぐに飛び出してきた。

殴りかかってきたのでその手を持ちそのまま背負い投げをした。

「がはっ！」

勇也「しゅーりよー」

リサ「勇也？勇也なの？」

勇也「それ以外の誰に見える？」

全員「勇也！（さん）」

素晴らしい飛びついてきて俺はそのまま倒れた。全員泣いてるので
俺は一人一人の頭を撫でた。

しばらくすると泣き止んで俺の方を妖怪でも見たかのような顔で
俺を見てきた。

リサ「なんて勇也が？」

勇也「リサが俺を呼んだ気がしたから」

リサ「いや、たしかにあの時願ったけど…」

友希那「それより、勇也体は大丈夫なの？」

紗夜「そうです、本来なら後半月はあつたはず」

勇也「詳しい検査はしてないけど多分治ってる。自分でも実感でき
るぐらいだから」

燐子「よかった…です」

俺はみんなを連れて階段で降りるとそこに興花たちがいて俺たちを待っていたみたいだ。

興花「と・り・あ・え・ず勇也は検査ね！」

勇也「はい…」

興花「全く無茶ばかり、後先顧みないんだから」

勇也「ごめんなさい」

興花「ほらはやく帰るよ、勇也はそっちに乗って何人かはそっちね！」

俺が車に乗り込むとリサと日菜、千聖と蘭が乗り込んできた。他のみんなは他の車に乗り俺たちは車を発進させた。

みんな車の中ですごい喋ってこの期間中にあったことや、これからのことを話しているとあっという間に病院につき俺はそのまま検査室に連行された。

検査の結果は特に問題なしとなり俺たちは日本に帰るための準備を始めて荷物をまとめ始めた

日本に帰って

俺たちが日本に帰ると他のメンバーは何もなかったが俺には教師からの雑用を押し付けられた。

なんでも俺の内心はかなりやばいらしくそのためやらしているらしい。

まあノートを運んだり、その授業で使うものを用意したりなのでそこまで苦でもないのだからで内申に響くなら安いものだ。

リサ「頑張ってるなー」

勇也「バカにしてるだろ」

リサ「いやいや、そんなことないって」

勇也「つたく」

俺はノートを持ちながら話して準備室に運んだ。なんでも科学の教師はここがお気に入りらしいのでよくここでノートのチェックや、その他の確認なんかするみたいだ。

けれどここはあまり人も寄り付かず生徒も来ないので少し不気味なのでリサは軽口を叩きながらも俺から離れようとしなない。

まあ雰囲気かなり悪いから気持ちにはわからなくもないが近すぎる。

腕から全く離れようとしなないのでノートを保持する俺からすると歩きにくくて仕方ない。

ノートを置いてその教室から出ると外は暗くなっているかなり雰囲気が出る。

俺はケータイのライトをつけて歩いてその校舎から出て行った。

出ると安心したようで離れてくれた。そこから家に帰り、飯を作ろうと思いい買い物に行くと蘭に出会った。

蘭「勇也さん」

勇也「何してるんだ？」

蘭「練習終わりでビターチョコ買おうかなと思って」

勇也「そっか」

俺は蘭が持っていたビターチョコをとってカゴの中に入れた。蘭は驚いて取り上げようとしたが俺が静止して払うと行って聞かせた。

しばらくして買い物を済ませ別れようとして歩き始めると手を掴まれた。

蘭「勇也さん。あたしも食べに行つていいですか?」

勇也「いいけど、どうした?急に」

蘭「食べたくなつちやつて」

勇也「それじゃあ行こっか」

俺と蘭は家に向かつて歩き始めた。ちなみに俺とリサはまだ分かれていた状態だ。やっぱりもう少し待つて欲しいと伝えるとしばらくは納得してなかったが渋々納得してくれた。

そんなことを考えて歩くと家まであつという間だった。

俺はキッチンに立ち蘭がいるので和食にすることにした。そこから筑前煮や煮物を作り机に運んで食べ始めた。

俺は途中でトイレに行き、再び戻つて飯を食べ始めた。しばらくすると、眠気が止まらず蘭は寝てもいいですよと言つてくれたので少し寝ることにして部屋のベッドに向かった。

やつとこの時が来た。勇也さんと2人きりなんていう場面も最近なかったし、今しかないと思ひ実行した。いつも薬は持ち歩いていないからなんの問題もないし、勇也さんの家に行けば2人きりだから誰にも邪魔されない。

私は勇也さんがトイレに行ったのを確認してから飲み物に睡眠薬を入れた。そして勇也さんがベッドに入ったのを確認してから勇也さんの手と足を手錠でつなぎ動けなくした。

私も少ししんどいので勇也さんの隣で寝ることにしてベッドに入った。

しばらくして起きると勇也さんはもう起きていた。

勇也「蘭、これは?」

蘭「勇也さんを逃さないためですけど?」

勇也「なんで疑問形なんだよ」

蘭「え?ああ、照れてるんですね」

勇也「そんなんじやねえ！」

蘭「別に彼女がここにいても不思議じゃないと思いますけど」

蘭「別に彼女がここにいても不思議じゃないと思いますけど」

蘭はなんの不思議もなくそう言い張った。俺にはそれが少し恐ろしく感じて逃げようと思ったが足が動かない。

でも動かないので見ると手と足に手錠をかけられてる。手はともかく足のサイズの手錠なんてあるんだな。

勇也「蘭これ外したくない？」

蘭「ダメですよ。逃げるんじゃないんですか？」

勇也「そんなことないかなー」

蘭「分かり易すぎです」

蘭にしてはえらく鋭い。それにしてもこの体制かなりきつい。なにせ足と手は体の前にされて特に問題なく見えるがこれが何時間も続けば話は別だ。

手はともかく足が痛い。サイズもかなりギリギリだったみたいでキツキツだ。

そこからは蘭の思い通りに動かされた。飯を食べるにしても口移しだし、寝るときも添い寝でろくに寝れなかった。

そして朝になるとインターホンが鳴って蘭を起こして見に行かせた。

すると蘭は大急ぎで上がってきて俺に布団をかぶせた。

モカ「らーんどうしたの？そんなに慌てて」

蘭「なんでもない。それより何？」

モカ「いやー突然勇也さんのご飯が食べたくなくなっちゃって」

蘭「まだ寝てるから後でにして」

モカ「いやーおかしくないー？夏のこの時期にそんなに布団かぶる人いないよ」

蘭「いや、冷房つけてたらいるでしょ」

モカ「その割にこの部屋涼しくないんだけどなー。むしろ蒸し暑い

そして刺さる瞬間に繋がってる手を蘭の後ろに回してそのまま引き寄せた。

腹は刺されてそこから血は出るしそれが逆流してきて口からも出た。

蘭「な、んで」

勇也「こうするのが正解だと思ったから」

モカ「勇也さん!」

勇也「へーき、へーき。蘭とりあえずこれ外してくれる?」

蘭「は、はい」

蘭に頼んで手の手錠を外してもらい俺はケータイを触って電話をかけた。

勇也「もしもし、いい実験台手に入ったから今すぐきて。俺の家ね」

そして電話を切り数分するとやってきた。その電話の相手は興花だ。その手にはビジネスバックが持たれて中に入ってるのは俺は知ってるが蘭とモカは知らない。

興花「それで?実験台って?」

勇也「目の前に転がってるだろ。俺だよ」

興花「え!?!」

勇也「早くしてくれ。血がたりねえ」

興花「わかった。痛いかもしれないよ」

勇也「気にすんな」

興花はそこから注射器に薬を入れて俺に刺した。そのあとは針に糸を通して傷口を塞ぎ始めた。地味に痛みがあるがそれは黙っておこう。

そのまま7針ぐらい縫うと完全に傷口は閉じた。

興花「おしまい」

勇也「助かったわ。メシ作るけど食べるか?」

興花「いやいや、勇也その傷だからじっとしててよ」

勇也「大丈夫だって。俺がやらないといけないんだよ」

興花「はあ、私も隣で見てるからね」

勇也「わかった。それでいいよ」

俺と興花はキッチンに移動して料理を始めた。包丁を切り進めて鍋を沸かして食材を放り込んでその後ルーフを入れた。

カレーかシチューかで悩んでカレーにした。

そして俺は貧血で膝をついた。

興花「勇也!？」

勇也「大丈夫だから大きい声出すなよ。あいつらにバレる」

興花「前から気になってたんだけどどうしてそこまでできるの？正直恨みを持ってもおかしくないのに」

勇也「そつか。興花にはまだ言ってなかったな。少し話そうか」

俺と興花はソファアームに移動して話を始めた。蘭たちには悪いが飯はもう少し我慢してもらおう。

勇也「俺があいつらの音が好きなんだよ。例えばポピパならなら他のどのグループよりもバンドを楽しんでやってる。アフグロなら幼馴染にしかわからない息の合いよう、パスパレなら真の強さを体現した音楽、Roseliaは圧倒的な技術で会場を盛り上げる。ハロパピは無茶するけどみんなのために頑張ってる。誰一人見捨てずにな。それに俺は一度あいつらを突き放したのにあいつらは見捨てずに来てくれた。

俺にとっては嬉しいんだ。だからあいつらが何をしようと俺は許すよ」

興花「はあく、とんでもないお人好しだね。だから好きなんだけど」

勇也「へ？なんて？」

興花「なんでもない」

その頃

あたしはなんてこと勇也さんを傷つけるだけじゃなくてモカにまで手を出すなんて。

親友に手を出すなんてしちゃいけないのに。巴と口喧嘩するのと

はわけが違う。

あれ以降モカも何も話さない。

モカ「らーん。あたしは怪我してないよ。だから自分を責めないで」

蘭「モカ、けどあたしは！」

モカ「そんなこと勇也さんも望んでないよ」

蘭「モカ…ごめん」

モカ「気にしないで」

あたしたちはそこから何事もなかったように話し出した。そしてしばらくするとモカが我慢の限界がきたみたいで勇也さんのところに突撃してご飯を早くしてもらおうみたいだ。

リビングのドアを開けると勇也さんの話し声が聞こえてきた。

勇也「それに俺は一度あいつらを突き放したのにあいつらは見捨てずにきてくれた。

俺にとっては嬉しいんだ。だからあいつらが何をしようと俺は許すよ」

その言葉を聞いてあたしもモカも足が止まった。そして回れ右して部屋に戻っていった。

あたしは何も言えずにモカも同様に何も言わなかった。しばらくして勇也さんから呼ばれたので降りてご飯を食べて家に帰った。

勇也さんに送ると言われたが悪い気がしたので一人で帰ると押し通して帰った。

蘭たちが帰ったあと興花は家に残った。

興花「もう我慢しなくていいよ」

勇也「ばれてた？」

俺は言葉と同時に倒れた。理由は貧血だが根本的に血が足りない。

興花も傷口を縫ってはくれたが血はたしてないので倒れるのも当然

だ。

興花「全くやせ我慢もそこまでいくと大変」

勇也「あははは、面目無い」

興花「それより血を足すよ」

そこから輸血パックで俺は血を足されてそのあとしばらくすると動けるようになった。

俺は興花を送りその日も眠った。

ちなみに友希那は最近はよくリサの家に泊まってるから家にいないことが多い

崩壊

俺がしばらく手伝いをし始めたのでだいぶ評価は上がったと思う。それでも手伝いは終わらず他の教師にまで言われるようになった。

そんな俺をリサや千聖は笑いながら見てきた。それに千聖の笑い方が時々恐ろしい笑い方で不気味だった。

俺は不気味に思いながらも気にしないでいた。

リサ「勇也、最近大丈夫？ 顔色悪いけど」

勇也「ああ、なんてことないよ」

実際にそんなことは無い。最近非通知で夜中から電話がかかってきて五分おきに電話がかかってくるのでなかなか眠れない。終わるタイミングはバラバラだが朝の4時や5時頃になると終わる。

着信拒否しても毎回違う電話番号を使っているみたいで終わらない。

最近の寝不足に加えて誕生日を迎えたから20になり仕事の量も増えたので寝不足になる一方だ。

なんとかその日も終え俺は事務所に向かっていった。仕事が入っているのでギリギリまで寝たいので近くて用意だけして俺はベッドに入った。しばらくしてアラームが鳴ったので起きて仕事に向かった。

なんとか終わり家に帰って飯食べて寝ようと思ったがもう作るのもめんどくさいので帰りのコンビニで弁当を買って家に帰りレンジに入れて俺は食べてすぐに眠った。

そしてその日も食べるとすぐに机に伏せるようにその場で眠った。その日も夜中になると電話が鳴り出した。俺はケータイの電源を切りもう一度寝ると今度は家の電話が鳴り出した。その日も終わることなく俺は寝れずにその日を終えた。

次の日朝鏡で自分の顔を見てみると目の下にすごいクマができていて流石にバレると思った。もちろんバレたら心配されるが無駄な心配はかけたくない。

あんまり使いたくなかったがリサに前教えられた化粧の仕方を目

の下のクマを隠した。

これは特定のやつにはバレる可能性もあるがそれは仕方ない。

バレたらばれたでなんとかごまかすだけだ。俺はカバンを持って家を出た。すると千聖が家の前で待っていた。

勇也「千聖!?!朝からどうしたんだ? っていうかこの時間から危ないだろ」

千聖「最近疲れてるような感じだったから少し様子を見にきたの」
「ばれてる! こういう時はよく人を見ている千聖や勘が鋭い日菜なんかは特に鋭い。なんとか誤魔化して学校に向かった。」

千聖 side

ふふ、後少しね。彼を精神的に追い詰めて最後の一撃を加えていくわ。その後に私が蜜を与えると必ず落ちてくれるはず。

ただ壊すのは私じゃないわ。ただ偶然得た情報からそろそろ頃合いだと思わ。

ふふふ楽しみね。

学校につきなんとか授業も終わり俺はいつも通り手伝いをして時間が過ぎていき最後に化学室にプリントを運んでくれと言われたので持ち運ぶとドアを開けようとするが開かない。

そして鬱陶しくなってきたので足で蹴って無理やり開けた。

そこで見たのはリサと和樹がキスをしているところだった。

俺はプリントを全部落としてその場から逃げ出すように走って家に帰った。

リサ「勇也! 待って」

その言葉を聞いても俺は振り返ることはなくそのまま家まで走っ

て
い
っ
た。
。

俺はどうしたい？

あたしは一体何をしてるんだろう。やっちゃいけないことなのに……ううん、本当はこんなこともするつもりなかった。

回想

勇也がまた先生に頼みごとされてるので帰ろうと思うと声をかけられた。

その方向を見ると確か勇也がたまに話す人だったので話を聞くと話があるのでしばらくしたら準備室に来て欲しいって言われたのでその時間まで教室でゆっくりしてしばらく時間が経ちあたしは向かった。

そしてそのまま鍵を閉められてあたしは出ようとしたが何もしなと言われてその言葉を信じた。

そしてしばらくは普通に話しているとそこでドアが揺れ始めた。その瞬間に手を引かれてあたしは有無を言えずにキスされて、その瞬間にドアが開いた。

END

あの時あたしが初めから断っていたらこんなことにはならなかった。ならなかったのに……勇也を支えていきたくったのに勇也を苦しめる羽目になるなんて思ってもなかった。

和樹くんはその出来事があつたときにどこかに消えていった。

あたしは重い足取りを動かしながら家に着きお母さんにも夜ご飯入らないと伝えてベッドに倒れた。

こんなことするつもりじゃなかったのに……

リサ「ううう……」

あたしはその日1人で泣き続けた。何もできずに

俺はあの後走って帰ってすぐに鍵を閉めてさっきのことを思い出した。和樹とリサがキスしてた。たしかに見た。そこから俺の頭の中はぐちゃぐちゃに回っていった

――わかつていたはずだろ

勇也「黙れ！」

――お前にあの子の隣は似合わない

勇也「黙れって言ってるんだ！」

俺はそこらじゅうを叩きまくり気がつくと思っていた。そのまま朝まで眠り起きると既に時計は10時を回っていたがどうにも学校に行く気にならない。

俺はそのまま財布だけ持ってくるまでスーパーに向かった。そして車を止めて店員と話し俺はビールやチューハイを箱で買って家に持って帰った、

そのまま開け始めて1人でずっと飲み続けてもう何本飲んだかもわからない。

そこに千聖がやってきた。

千聖 side

勇也くんは今日は学校に来ていない。それもそうねあんなことがあったならこれるわけがない。リサちゃんは来てるけどいつもと違い髪はボサボサで目の下が腫れていた。

それを気にしたひまりちゃんやんがなんとか普通の状態まで戻したのだけれど顔が全く笑っていない。

そろそろ私の方も動こうかしら。そう思いみんなに声をかけて今日は私だけ勇也くんのところに行くことになった。日菜ちゃんにすごい反対されたがなんとか説得できた。

そこで鍵をもらい勇也くんの家についた。中に入ると家の中はひどい状態でいたるところに穴が空いており何よりすごいにおいがする。

そのまま進んでいくとリビングに行く途中から缶が落ち始めた。それはお酒の缶で進むごとに増えていく。

そしてリビングに着くとすごい数の空き缶があり、その中にそれを巻いた本人がいた。これだけ飲んでも飲み足らずまだ新しいのを開けているのだからかなり追い込まれている。

千聖「勇也くん」

勇也「ん、ああ千聖か。どうしたんだ」

千聖「少し飲み過ぎじゃないかしら？」

勇也「別にいいだろ。ほつといってくれ」

前の勇也くと違い自坊放棄になっている。まあこれはこれでかなり好都合だわ。私の想像通り、いえ想像以上かしら。

千聖「私はほつとかないわ」

勇也「はあ？」

千聖「だってあなたのことが大切なもの」

勇也 side

千聖「だってあなたのことが大切なもの」

この言葉が俺の中にあつた何かを溶かした。俺の中にあつた黒い何かを。

勇也「俺が悪かったんだ。リサを待たせて何もしてなかった」

千聖「そんなことないわ」

勇也「シヨックだった。リサがキスしてるところを見せられて」

千聖「私はそんなことしないわ」

勇也「俺は信じられないんだ」

千聖「私はあなたを裏切らないわ。言葉だけじゃダメね。これどう」

千聖は俺の顔を押しさえつけられてそのままキスをしてきた。そして俺を押しさえつけて引き寄せた。

そしてそのまま離すつもりがないのだろう。引き寄せたまま『もう大丈夫よ』と言われて俺はその場で泣き始めた。

千聖 s i d e

勇也くんは想像以上に壊れていた。けれどそれも好都合。

私は蜜を与えて見ると勇也くんは簡単に堕ちた。後はみんなをうまく誘導するだけね。問題は日菜ちゃんと紗夜ちゃんそれにモカちゃんかしら。

あの3人だけは気をつけないと。

そう思いながら私は胸で泣いている勇也くんをみた

潰される気持ち

千聖 side

勇也くんが泣き止んでそのまま私に持たれるように眠った。まだ勇也くんの中にはリサちゃんの影がある。それを壊して私色に染めないよね。

私はそう思い勇也くんは眠ったのでその間にやるべきことを始めた。

まずはこの家の鍵の変更、これには最先端の技術を使って指紋か顔の認証をしないと入れないようにした。

次にこれからのことを考え始める。もちろんみんなから聞かれるだろうしそこをなんとかしないとイケないわね。

ある程度は考えてあるのだけれど後一步がない。これで日菜ちゃんや紗夜ちゃん、それにモカちゃんは騙せないわね。

あの3人はほかのメンバーより頭がいいし、勘が鋭い。

勇也くんは泣き止むと一気に疲れたのだろうそのまま眠ってしまった。私は勇也くんを持ち上げようとしたのだけれど重くて上がらなかった。布団をひきそこに寝かせた。

私はそう考えて鍵の変更を済ませた。

リサ side

朝起きて鏡を見るとすごいことになっていた。髪の毛はボサボサ目の下は腫れていてとても外に出れる格好じゃない。

あたしはこのままもう一度寝ようとする。部屋のドアがノックされた。

友希那「リサ、入ってもいいかしら?」

リサ「うん、いいよ」

友希那はそういい入ってきた。友希那は今お母さんと2人で暮らして、その分の生活費の半分以上は勇也が払っている。

友希那はたまにうちに泊まりにきたりしている。そして何故こんな朝からきたのか全くわからないままあたしは状況を飲み込まないでいる。

友希那「リサ、何があつたの？顔をすごいことになってるわよ」

リサ「なんでもない」

あたしは友希那に八つ当たりのように当たった。頭では友希那は関係ないってわかってるのについて、こういう態度を取ってしまう。

本当に何やってるんだろう。

友希那は何も言わないであたしの隣にいてくれた。それが嬉しくて、辛くてつい涙が出てきた。そして泣き止むとあつたことをそのまま友希那に話した。

友希那「そう、勇也も勇也で勘違いしてるのも悪いのだけれどもつと悪いのはそいつね」

友希那は顔には出てなかったけど口調はとても怖かった。それはあたしの見たことのない友希那の姿だった。

怖いけれどあたしは少し嬉しかった。あたしと勇也のためにここまで感情をあらわにすることがなかった高校時代に比べて今はだいぶ感情を表に出すようになったと思う。

友希那は結局その日は学校に行かずにあたしの隣にいてくれた。

日菜 side

勇也くんは今日学校に来ていない。それに千聖ちゃんも来てない。それが気になり電話したんだけど2人ともケータイにかけても電源が入ってないらしく繋がらない

紗夜「日菜勇也さんのこと何か聞いてないかしら？」

日菜「あ、おねえちゃん。ううん、何も聞いてないよ。あたしも電話してるんだけど繋がらなくて」

紗夜「そう」

日菜「どうしたの？」

紗夜「なんだか嫌な予感がするのよ」

日菜「んー、あたしもなんかモヤモヤしてるんだよねー」

おねえちゃんはそのれ以上何も言わずに教室に帰っていった。たしかにおねえちゃんという通りなんだか嫌な予感がする。

帰りに勇也くんの家に行ってみようと思いきその日の残りの授業を受けた。

そして授業が終わり勇也くんの家に向かうと信じられない光景が写っていた。

見てびっくりしたのが鍵の部分が明らかに前とは違った。あれじゃあまるで牢獄だ。

あたしは中に入ることができなかつたのでとりあえずその場を後にした。

そして家に帰り、おねーちゃんにことの顛末を説明した。

紗夜「やっぱりおかしいわね」

日菜「やっぱりおねーちゃんもそう思う?」

紗夜「ええ、家に見にいくと言っておきながら居ないのも、それに電話に出ないのも不自然すぎるわ」

日菜「けどしばらくパスパレの練習はないんだよね。今まで酷使してたからしばらくの間自主練にするって言って全員は揃わないんだよ」

紗夜「考えすぎかもしれないけれどあまりにもタイミングが良すぎるわね」

日菜「たしかにそうなんだよね」

あたしもおねーちゃんもその場はそれ以上話すことはなかったが考え込んでおねーちゃんは出て行った。あたしもベットに倒れこんで頭をフル回転されて今の状況を考えた。

まずリサちーと勇也くんは今お互いの勘違いで今は仲違い中。そのせいで勇也くんとリサちーは精神的にやられてる。

そしてそれを元に戻そうとして千聖ちゃんが勇也くんの救済に向かったはず。

日菜「??救済、なんか引つかかるな」

そもそも救済に行つたんじゃないとしたら。それ自体が千聖ちゃんの思惑だとしたら？

全てのつじつまが合う。勇也くんの家に行くのを話した時のあの感じや一番に行くへ行つたことも。

千聖ちゃんに会つて確かめなきや

あたしはすぐに着替えて千聖ちゃんが行きそうなところを行つたが結局見つからなかった。

なので家に帰って寝ることにしたがまだ何か嫌な予感がして仕方なかった。

千聖 side

そろそろバレることかしらね。日菜ちゃんと紗夜ちゃんが考えた私の考えてることなんて看破されそうなもの。

けれどそれだけじゃないのよ2人とも。

もう勇也くんは私のものよ。

千聖「フツアハハハ」

私の声は勇也くんの家の中に響き渡りそしてその声がこれからのことを思い浮かべると笑いが止まらなかった。

勇也 side

千聖のそばで泣き止んでからはしばらく頭が痛くて吐き気も止まらなかった。まあ酔いが冷めてもあれだけ飲んだのだからかなり体に来ている。

しばらくは休んでおこうと思ひ俺は部屋にこもった。

しばらくして千聖がやってきた。俺はあのことを思い出して恥ずかしくなって顔を晒すと千聖は俺の横に来て俺を引き寄せた。

千聖「勇也くんリサちゃんのこどう思ってるのかしら？」

その瞬間に俺の体は震えた。それを千聖は見逃さずに耳元で言い始めた。

千聖「リサちゃんはあなたを裏切ったのよ。けれど私はそんなことをしないわ。リサちゃんに会わないほうがいい。私だけがあなたのそばにいるから」

普段ならなんなく聞き流していたかもしれない言葉もこの時の俺はリサのこともあり何も考えられなかった。そしてその言葉を鵜呑みにしてしまい段々と俺は何も考えられなくなった。

勇也「千聖だけが俺のそばに…」

千聖「ええ、私はあなたのそばから離れないわ」

俺は顔を下にしていて見えていなかった。その時の千聖はとてつもなく恐ろしい笑顔だったことを

諭されてわかる自分の気持ち

俺は千聖に学校に行くと言われて今準備している。ここ最近千聖のいうことしか書いてない気がする。

そして学校に行くときも千聖に腕を組まれて向かっている。それに対して何も言う気が起きなかった。昔の俺なら止めてた気もするが今はなんとも思わない。

けれど俺自身まだ吹っ切れてないようでまだ少しリサのことを考えてしまう。

学校に着くと俺は言われるがまま席に着きそのまましばらくの間が経った。

「勇也くん! どういうこと?なんで千聖ちゃんと来てるの?」

「ああ、日菜。別に不思議じゃないだろ?千聖が俺の世話してくれただから」

そこから紗夜も来て事情を聞かれた。それを察したのか千聖が俺のところに来てきた。そして俺の首の後ろから手を回して後ろに抱きつくようにしてきた。

「千聖ちゃん? 一体何してるの?」

「あら日菜ちゃん。私は恋人に引っ付いてるだけよ。何か問題あるかしら?」

「恋人!?!」

その言葉に日菜はもちろん他の面子も驚きを隠せていなかった。俺は納得した覚えがないが俺は反対するのも面倒だったので何も言わなかった。

そして日菜は何も言わずにその場を去った。

あーもう信じられない。千聖ちゃんあんな行動に出るなんて想定外だよ。あたしも同じようなことをしたけどあの時はリサちーが勇也くんの心の中にいてそしてそのおかげで暴走とか潰れることはなかった。けれど今回は話が別だ。リサちーがいなくて勇也くんの心は壊れて、そこに付け入るように千聖ちゃんが出てきた。

ならあたしのすることは一つだ。

リサちーを元に戻してぶつけ合わせなきゃ。そのためにはモカちゃんの力を借りないと。

そう思いあたしはモカちゃんのいる教室までむかっていった。

「モカちゃん！」

「あれ〜日菜せんぱい。どうしたんですか〜？」

「あたしに力を貸して！」

「話の内容が全くわからないですが〜」

あたしはモカちゃんの手を引いてそのまま屋上に向かった。そのまま講義の時間を潰しても全てのことを話した。すると納得したようにモカちゃんは協力してくれることになった。

「リサさんはあたしに任せておいて下さいーい」

「うん、モカちゃんお願いね」

あたしとモカちゃんはそれぞれのやるべきことを理解してその場で別れた。

あたしは友希那に連れられてなんとか学校に向かった。それでも昼を回り、学校に着くとモカがあたしのところにやってきた。

「友希那せんぱい。リサさん借りていきますね」

「ええ、わかったわ」

「え？え？」

あたしはモカに引つ張られてそのままあの廃校舎に連れてこられた。

「モ、モカ？どうしたの？」

「リサさん。勇也さんと今すれ違ってますよね？」

「っ!!うん」

「そこでモカちゃんからのアドバイスです。ぶつからなきゃ伝わらないことだってありますよ」

「それは…」

あたしはそれを言われて何も言えなかった。それはかつてあたしがモカに言った言葉だから。

蘭とモカがすれ違っている時にそういうことを言った。

まさかモカにそんなことを言われるなんて思ってもしなかっただけ。

「それにこのままだと千聖さんに盗られちゃいますよ。いいんですか？」

「それはダメ！」

「なくんだ。わかってるじゃないですか。なら善は急げですよ」

そしてモカはまたあたしの腕を引つ張って走り出した。

昼が回り俺は日菜に呼ばれた。千聖は千聖で紗夜に呼び出されてなんか苦い顔をしていった。俺は屋上に連れてこられてそして屋上

で日菜は俺の方に向いた。

「リサちーとこのままでいいの?」

「それは…けど!」

「あたしから一言だけ言うね。リサちーとぶつかってみて。それでも今の関係になるなら仕方ないと思う。けれどぶつかってもないのにこんなのはおかしいよ」

「っ!!たしかに日菜の言う通りかも。ありがとう」

確かに日菜の言う通りだ。何もしないでこんな別れ方なんておかしい。俺は心に決めて日菜を引き寄せて抱きしめた。

「ありがとう。お陰で目が覚めたよ」

「~~~~/~/~/~/」

日菜は何も言わずに顔を真っ赤にしていた。俺は日菜を離してその場からリサを探し始めた。

「頑張ってね。勇也くん」

支えて支えられて

やられた。紗夜ちゃんに呼ばれて向かってる間に勇也くんを元に戻されるなんて。こうなったら最後の手段を取らないとね。私は最後の1人のところに向かった。この原因を作った人間の1人に。

「あなた放っておいていいのかしら？ 勇也くんのこと」

「構わないよ。元々興味ないし」

「なら興佐くんのことも言っていないのかしら？」

「なあ！ なんでそれを知ってるんだ」

「質問してるのは私の方よ。それでどうなのかしら？」

「なにがしたい」

「私はただ勇也くんの邪魔をしてそのまま動けなくしてくれたいわと思ってるの」

「チィ！」

和樹くんは舌打ちしてその場を後にした。おそらくこのまま行くとりさちゃんと会う前に会うはず。そして和樹くんはおそらく勇也くんよりも強い。これでなんとかなるわね

俺は学校の中を走っていた。リサにあって本当のことを聞いて俺のことを言うために。すると俺の前に和樹がきた。

「なにしにきたんだお前」

「そんなのっつかないだろ」

「ああ、そっか邪魔しにきたんだ……な！」

俺は言葉と同時に殴りかかったがそれを片手で止められた。いやそれよりも驚きが隠せない。和樹に俺のパンチが止められた？その後何回撃つても全て止められるか弾かれる。それは驚くどころか逆に笑えるぐらいにいいようにされる。

そして和樹のパンチが来た。俺は受け止めようと手を出したがそのまま飛ばされて俺は壁に背中をぶつけた。それにしても妙なぐらい力が上がっている。何か飲まされたか？

すると体の節々から血が出始めている。それは体の崩壊を意味していた。なにを飲んだかは全くわからないがとりあえずなんとかしないとな。けれど打開策が全く思い浮かばなかった。そのまま続けて受けるのではなく流す方式にしてしばらくするとそこにリサがやってきた。

「勇也ーごめん。あたしあの時和樹さんに誘われて行くとそのままあの状態になったんだ」

その一言は俺に新しいことを教えてくれた。そんなことを気にせずに殴りかかってきた手を受け流すと同時に掴んでそのまま腕を回して肩腕を折る直前まで持っていた。そしてそのまま地面に叩きつけると手から鈍い音がして、動かなくなった。

「だ、大丈夫なの？」

「一応加減はしたけど、それにこいつ人間じゃないから大丈夫」

「え？それって」

すると和樹は腕の痛みなんて感じてないかのように立ち上がった。そして俺に向かって向かってきた。それはおそろく痛覚を無効にしているんだろう。やっとわかった。俺はただお腹に渾身の一撃を加えた。

するとそのまま前のめりに倒れて俺は和樹を受け止めてそのまま寝かせた。

「リサごめん。俺の勘違いで。こんな顔にしちやつて」
「ううん、あたしこそごめんね」

2人とも顔を晒してなにも言えなかった。それ以上話すことはないと思っただがそこで日菜と紗夜がやってきて2人が手を繋いで俺とリサの手を繋いだ。

「2人が仲直りできないならあたしたちが橋になるよ」

「ええ、ゆつくりで構わないわ。一緒に行きましょう」

「なんでここまでしてくれるんだ？」

「えー」

「それは」

「2人が仲良い方がいいじゃん（からですよ）」

この2人の気持ちに応えるためにも俺はリサとの関係を元に戻していかないと

やっぱり俺は

その後教師が来て事情を説明して最初は納得してくれなかったが優等生の紗夜や日菜が弁護してくれたため和樹が目覚ましてから後日話し合いという形でその場は終わりになった。

俺たちは帰ろうとして何も言わずにリサとも別れて帰るつもりだとだった。それはリサも同様で帰ろうとしていくと俺は日菜にリサは紗夜に手を掴まれた。

「なんで帰ろうとしてるの?」

「一緒に帰ってください」

「でも…」

「それは…な」

「でもも、それはありません(ないよ)！」

二人にどやされ俺たちは一緒に帰ることになった。結局帰る準備をして帰ることになった。しばらく無言の時が続くと痺れを切らしたのか日菜がキレた。

「もう…いつまでももうじうじしないですよ!あたしたちはそんな風にするために手を伸ばしたんじゃないよ!勇也くんとリサちーが前みたいに仲良くして欲しいからしたのにこれじゃあ逆効果じゃん!」

「日菜落ち着きなさい。けれどその通りよ。いつまでもそんな顔してちやこつちがやったことが失敗みたいだわ」

たしかに二人に諭されてその通りだと思う。2人は俺たちのことを思っしてくれたのにこんなことになってちやいけなから俺は一步を踏み出すことにした。

「リサ、今日ちよつと一緒に飯でも作ろっか」

「!!うん!」

日菜と紗夜はいつのまにか帰っており道には俺たち2人しかいなかった。本当に2人には今度何かしないといけないな。

俺たちは家に帰りまずは買い物に向かった。2人とも私服だがリサはまた着替えるといつて一度部屋に戻った。

戻ってくるとえらく気合いの入った服装でやってきた。

「随分気合いが入ってるな」

「だって久しぶりだもん。気合い入れなきゃね」

そういう手を出すとリサは掴みそのまま恋人繋ぎで俺たちは買い物に向かった。車で向かっててもよかったが俺もおそらくリサもこのまま行こうと思っただろう。2人とも手を離すつもりはなかった。

着いて買うためにカゴを持ったが片方はリサの手が繋がってるため今度は買いたいものが取れない。仕方なしにいるものをリサにいい取ってもらいそれを俺のカゴに入れていくことにしたが周りの視線が痛い。まあ買い物よりも手を繋ぐのを優先してるのだから仕方ないのだけれど……

そのままなんとか買い物を終え家に帰り作り始めた。今回は簡単にグラタンにするつもりだ。

「あ、そうだリサ。1人呼びたい奴がいるんだ。いいかな？」

「うん？誰？」

「千聖だよ。このままいくとみんなギスギスしたままだと思うからなるべくわだかまり解いておきたいんだ」

「はあくなんていうか相変わらずだね。いいよ」

そこから千聖に電話すると最初は断られたが押し倒してきてもらうことにした。作り終わりしばらくしても来る気配がなかった。

リサに言っただけ俺は迎えに行くことにすると千聖は誰かに絡まれていた。

「おねーちゃん俺たちと遊ぼうぜ」

「……………」

「まあいいじゃんか。行こうぜ」

そこでそいつは手を伸ばして、掴むと千聖は拒否すらしなくてそのまま向かっていった。俺は追いかけていくと案の定ホテルに連れていかれて俺は入り口で捕まえた。

「おいこら、何してんだ」

「なんだテメエ？」

「千聖もなんで断らないんだよ」

「どう…して。私はあなたとリサちゃんとの関係を壊そうとしたのよ」

「それで？千聖はやり方は間違ってたかもしれないけど俺を助けてくれたのは事実だし、あのままなら俺は死んでたかもしれない」

「うあ、うう」

「さつきから何言ってるんだ」

「邪魔」

その一言でそいつとの会話を終わらせて蹴りを入れるとそいつは痛みを耐えかねて逃げ出した。千聖は俺の背中についてずっと泣いてる。

そして千聖は泣き止むと顔は腫れてるが笑っている。

「バカね」

「そうだなバカかもな」

「でも大好き。必ず好きにさせるわ」

そう言っ指を銃の形にして俺に向けてきた。まるで恋のキューピッドだ。千聖はもう大丈夫だな。日菜とも仲直りできるだろう。

俺はタクシーで家に帰り千聖にリサと飯を食べてそのままみんな泊まることになった

大変

リサとの亀裂からかなりの時間が経ち俺たちは多分元どおりになったと思う。いや、元どおりというのもおかしい。

「勇也くん、早く行きましょう」

「ちよつとちよつと千聖、勇也は今からあたしと出かけるんだからね」
「あら、勇也くんはどっちと出かけたいの？」

こんな調子だ。こんなのがほとんど毎日起こってる。それに俺たちは3回生になったんだから落ち着きを持ってほしいと思う。そして進路のことを考えないとな。前から考えてた夢もあるけどこれは今現在では実現不可能だ。

ちなみにパスパレは喧嘩すると思っていたが日菜は何も思っておらずむしろ面白いから許した。また紗夜は千聖に一言言っただけ以上はなにもいうことはなかった。

俺はとりあえず千聖とリサをなだめてその場から離れ家に帰った。そして興花に頼みごとをした。

「——ってな感じのことをしたいんだけどできないかな？」

「それはうちでもできるけどその規模になると勇也にもなにかしらの要求はすると思うよ」

「わかってる。これが夢の形だから」

「わかった。全面的に協力するよ。けど後は説得の方だね？」

「そこなんだよ。まあやってみるよ」

「がんばれ」

俺は別れて興花は家に帰った。即席で飯を作り食べて眠った。あの日以降喧嘩を売ってくるやつも格段に減りもうそんなことをしてる方が少ない。ただ、こうして眠っていると

「勇也くーん」

「グヘエ」

「日菜さんそれ絶対痛いですって」

「麻弥ちゃん、勇也くんなら大丈夫だよ」

「大丈夫じゃねえ。とりあえずどけ。暑い」

まあこんな感じに日菜や香澄、こころ、おたえなんか飛んでくる。それが見事に腹に直撃した時は本気で死ぬかと思った。

日菜をなんとかどけて起きるとしたから声がする。降りていくと俺と同学年つまりAfterglowやポピパ、あこやイヴ他にもいない人はいるがそれ以外はいた。

「みんなどうしたの?」

「勇也明日の祭りどうするの?」

「あつそつか、そろそろ祭りの時期だな」

「そろそろじゃないわ。もう明日よ」

「ふふ、そうだな友希那」

「なんで笑うのかしら!」

本当に友希那や紗夜は柔らかくなったと思う。前に比べて音楽、音楽だけじゃなくそれ以外にも目を向けるようになった。練習では厳しいのだがそれ以外のことに目を向けてちゃんと自分の今の立ち位置を確認できているのはいいと思う。

「変なこと考えてないで早く考えてよ」

「リサ厳しいな。いくよもちろん」

するとみんなは騒ぎ出し浴衣の写真を見せてきた。正直全くセンスがないからやめてほしいのだが言っても聞いてくれないので選ぶとそのまま帰って行き気づくと俺とリサだけになった。

「勇也は将来のこととか考えてるの?」

「そうだなありリサとはこれからも一緒にいたいしこれからもそうでありたいと思ってるからなく。それぐらいかな」

「あたしもそう思ってるよ」

「ん? なんて?」

「なんでもなーい」

リサはご機嫌になりキッチンに立った。最近俺が飯を作ることも少なくなりリサは以前にも増して料理が上手くなったと思う。

というかなぜか俺の好みがバレてその味付け方向になっていく。

リサは上機嫌で料理を始め結局最後まで1人で作った。

俺はそれを食べ、片付けをしようとするとそれも止められ結局リサ

がしていた。片付けをしてる間もずっと鼻歌を歌いながら片付けをしてリサはそれが終わると自宅に帰って行き俺も部屋に戻った

願い

結局祭りに行くことになり、その日は終わりみんな帰っていったはずなのにどうして今の状況なんだろう？

今俺たちがいるのは

「ちよつとちよつとく勇也ー一緒に泳がないの？」

「今日って祭りじゃないの？」

「そうだけど朝も遊んだ方が楽しいでしょ」

「リサちゃんの言うとおりよ。それに私たちの水着を見てなんとも思わないの？」

「はあー」

俺はたまらず顔を晒した。今回こっちにきたのは夜からメンバーからはかなり減っているがそれでも人数はある。興花、リサ、千聖、日菜、花音、沙綾、ひまりがこっちにきている。

他のメンバーは用事があつたりインドア派だつたりでこれしていない。

まあインドア派でも祭りにはくるみたいだが……

「あ、そうだー！勇也。日焼け止め塗ってよ」

「はあー!?自分で塗れよ」

「前は塗れても後ろは無理なんだもん」

「千聖とかに頼めよ」

「えー」

つたくリサもとんでもないこと言いやがる。興花の別荘にきているから周りはいないからいいけど他にいたら俺多分殺されてるな。そんなことを考えてるとあろうことか千聖や日菜まで俺の前に日焼け止めを持って俺の前に来た。

「私にも塗って欲しいわ」

「あたしにも塗ってよー」

「いや、俺はリサにも塗ってないからな」

そう言つて断つても千聖と日菜は俺の前にうつむせに寝転んだ。こいつらは全く俺の話聞いてない。そして2人とも寝転び水着の

紐を外した。それにつられるようにリサも来て水着の紐を外した。この3人に何を言っても無駄だった。俺は仕方なく塗ることにした。初めは日菜から塗ることにして手にクリームをつけてそのまま塗った。

「ヒヤッ！」

「うお！なんだ？」

「勇也くん。クリームは手であつたためから塗って欲しいな」

「わかつたよ」

俺はよくわからないまま塗り日菜は満足して水着の紐を結んでみんなのところに遊びに行った。残りは2人だけど正直怖いんだよな。

そして次は千聖のようなのでさつき言われたとおり温めてから千聖の背中に塗り始めた。

「ん、んん。そこ」

「お前わざとだろ」

「あら、バレたかしら？」

「そりやバレるわ！塗ってるだけでなんでそんな声が出るんだよ！」

「喜ぶかと思つてね」

「うっさいわ！終わった。さつきと行ってこい」

「つれないわね」

千聖も水着の紐を結んでみんなのところに向かった。あとはリサだけなんだけどすごいやりにくいな。

ここまでやっておいてなんだけど今からでも断りたい。

「勇也く早くしてよ」

「はいはい」

俺は手でクリームを温めてリサの背中に塗った。リサは何を言うわけでもなくただ塗ってる間は静かだった。そして塗り終わりリサも水着の紐を結ぶと俺の手を引いて引つ張つていった。

「リ、リサ？」

「……」

俺たちは興花の別荘まで戻ってきた。リサは何も話さないで俺をソファーに押し倒した。逆のような気もするが何も言わない。

「勇也、あたしは……」

そのリサの目には涙が溜まってきていて少しすると俺の方まで落ちてきた。リサはあの事件以降ごく稀にこういう風に脆くなる。

「勇也はあたしを捨てないよね?」

「捨ててと言われても捨てないよ」

「うん、信じてる」

「もちろん」

リサはそのまま俺に体重を預けてきたが、水着のせいでもろに感触が当たる。なにがとは言わないけど……

しばらくしてリサは起き上がり俺たちはまた海に戻っていった。そこからは特にこれといってはなにもなくそのまま夕方になり俺たちは船に乗り込み家まで帰っていった。もちろん船の中ではみんな爆睡だったが俺は甲板の上で一人海を見ていた。

「なにしてんの?」

「興花、寝たんじゃなかったのか?」

「寝ただけどすぐに目が覚めちゃって」

「今年は俺たちとRoseliaがFWFに出る。来年が俺たちにとっては最後だからな。少し思ってたんだよ」

「なるほどね。なら今年は優勝しないとね」

「去年は3位だったからな」

そう去年俺と興花はFWFに出て初出場で3位だった。周りはずごといいってくれたが俺たちは納得してなくて今年こそは優勝をしたい。それに今年はRoseliaも出るから何が何でも勝ちたい。そんなことを考えてるとあつという間に船着場につき、俺たちは一度家に帰った。去年は俺浴衣を着ないで私服で行くとえらく怒られたので今年は学習して、最初から着ることにした。黒の浴衣で着て降りると既にリサと友希那はいた。2人とも自分のイメージカラーの浴衣を着てよく似合ってる。

そこからしばらくするとみんなやってきた。俺の家はかなりの広さがあるからこの人数でも大丈夫だが他の家はかなりきついと思う。

25人全員いるので厳しいし、何より暴走組を見る保護者たちが大変そう。日菜は紗夜がよく見ている。あとはこころとはぐみ、おたえと香澄、それにあこは少し危ない。

この保護者はもう決まっている。有咲と美咲だ。2人の方を見るとため息をついて手伝ってくださいと言わんばかりの目をしていた。俺は両手を合わせてごめん無理という目線を送った。

そして家から出て祭りに行くとかかなり目立つ。まあ25対1だからそれも仕方ないんだけど、気まずい。

「勇也さーん射的しましょう!」

「それより食べ歩きをしましょうよ」

ひまりに千聖から誘われてそれ以外からもすごい誘われる。これは大変だ。そのまま時間は過ぎていき途中から俺は動けなくなるまで食べ物を食べていた。

そしてベンチに座り俺は休憩してみんなはまだ回るみたいだ。

「くるし」

本当にその一言だ。みんなは買うだけ買ってほとんど食べないとか先に俺に食べさせてきたりしてもう無理だ。ベンチで休憩してるトリサがやってきた。

「FWFもうすぐだね。それなのにこんなことしていいのかな?」

「だからじゃないのかな? Roseliaも俺と興花もわかってる。これが終わるとあつという間にFWFだ。だからみんな今休もうとしてるんだよ」

「そっか、けど今回は特別だからね」

「それもそうだな」

それ以上は話さず上を見るとそこは綺麗な星空が映っていた。夏のこんな祭りの中綺麗な星空が見えるとは思ってもしなかった。隣のリサも上を見て感動していて、ここにいない奴らも上を見ると感動するだろう。

そこからみんなが帰ってくるまで大体1時間ぐらいかかって俺たちは家に帰った。

結局みんなその日は俺の家に泊まると行って聞かずみんな泊まる

ことになり、何よりの問題が服だった。いくらあると言ってもさすがに25人分はきつい。俺は車を出してみんなの分を買いに行くことにした。

「あなたも大変ね」

「来てる友希那や麻弥、つぐみはそれに当てはならないのかな？」

「いえ！ジブンたちは勇也さんだけで行ってもらうのは悪いので」

「そうですよ！それに蘭ちゃんや彩さんはもうお酒で動けませんから」

「あー確か少し飲んだら動けなくなっただったっけ？」

「アハハ、彩さんや美竹さんは弱いですから」

そのまま車は走つてもう閉まりそうな服屋に着いた。店員になんとかと言つてみんなにスウェットを買つて家に帰った。家に帰り蘭や彩はみんなに着替えさせてもらつてなんとか部屋まで運んでみんなそのまま泥のように眠った。少なからず全員が酒を飲んでいたようですぐに眠ることができたみたいだ。

俺は部屋に帰り、少しギターを触り眠くなつてきたので俺も眠つた。

朝起きてリビングに行くとりサと友希那が2人で一緒に朝飯を作っていた。友希那の料理も昔みたいにひどいわけじゃなく一般程度には作れるようになってる。

みんなが降りてきて若干しんどそうな奴もいた。まあ昨日あれだけの感じになってたらそれも仕方ないんだけど。

そしてみんなは少しずつ帰って行き、蘭と彩は最後まで動けそうになかった。その2人を連れて車に乗せなんとか家に連れて行きそのまま家族に渡した。

俺たちはそこから家に帰り俺は興花と友希那たちはメンバーでスタジオに向かった。FWFまでそこまで日にちがない。けど今から焦っても意味がないので俺と興花は最後の仕上げにRoseliaはどうなのかは知らない。スタジオから出ると外のカフェでRoseliaはお茶していた。

「何してんの？」

「見ての通りよ」

「いや、確かにその通りなんだけどさ」

「お茶だよー。友希那があんまりこんを詰めても意味ないからってさ」

「私はもう少ししてもいいと思うんですが……」

「紗夜さん！もう少しだけゆっくりしましょうよ」

「あこちゃん……氷川さんも……わかってる……から」

その一言でそれ以上は何も言わずになった。俺もこれ以上邪魔するのは悪いと思いつつその場を後にした。

けれどあの Roselia がそんな考え方するなんてこれは気を引き締めた方がいいかもしれない。そんなことを考えて帰った。

そこから日がたち俺たちはFWFの会場にいた。そこは確かにでかい。

日本一を決めるには確かにふさわしい場所だった。今回は俺は Roselia とは来てない。向こうから言われて今回は敵同士だからなるべくそういうことは控えたいと言われたからだ。

事実その通りだし、断る理由もなかったので俺は了承した。

「それでもよかったの？勇也」

「興花が心配することはないよ。別に喧嘩したわけじゃないし」

「それはそうだけどさ」

控え室にいて次々と呼ばれてそのバンドごとに出て行く。出て行く順番は前にしたくじの順番だろう。そして先に Roselia が呼ばれた。

みんなの顔はしっかりと前を見ていて何も心配なんてする必要なんてなさそうだ。そして部屋を出る直前にリサがこつちを向いてウインクしてきたのを見ていた。もっとも見ていたのは俺と興花だけだが……

そしてそこからはしばらく経つとどうどう俺たちの番がやってきた。「行くか」

「そうだね。けど勇也。そこまで心配しなくてもいいよ。私もサポートできるぐらいには成長したから」

「あはは、バレてたか」

俺はそんな軽口を叩きながら舞台に向かった。そしてそこに立つと今までとは違う人の数に驚きながら俺たちはなんとか演奏を始めた。結局始めると何も無いような白い空間になって2人だけの音楽を楽しんでいて周りがなんて言ってるかは知らない。そして演奏が終わり俺たちは舞台から降りた。

そして控え室に戻るとなぜかリサとあこが飛びついてきた。

「すごい！すごいよ勇也さん！」

「へ？」

「勇也なんかいつもよりすごいよ。今日の音なんか綺麗だったのに激しかった」

「そっか、ありがと」

俺は多分そっけなかったと思う。けど自分自身そんな音のことなんかより興花との舞台を楽しんでいたんだと思う。だから自分がどんな音していたかのすら覚えていない。

結果発表までしばらく時間があり俺は1人で自販機の前でコーヒーを飲んでいた。そこに1人の男性がやってきた。

「はじめまして。湊勇也くんだね」

「そうですけど」

「私は〇〇会社の代表取締役で今回のFWFを見にきていてね。それで君の音を聞かせてもらった」

確かその会社って今めちやめちや話題に出ていて確かにテレビに引っ張りだこで人気の音楽会社だったかな。あんまり興味もないがそれ以上覚えていないが。

そんな人がなんでここに、いや俺のところ

「単刀直入に言うと君をスカウトしにきた。うちの会社に来ないかい？」

「はい？なんで俺なんです。他にもたくさんいたはずです」

「君の音が素晴らしかったからだよ。それ以外の理由があるかい？」

「なら、そのお話お断りします」

俺はその場から離れて控え室に帰っていった。こんな話みんなに聞かれるとまた何か言われそうだ。なるべく穏便に済ますつもりだった。

控え室に帰り少しすると結果発表が始まるので今回出た全バンドが舞台上上がった。そして発表されはじめた。3位は知らないバンドだった。

「そして2位はRoseliaです」

「!!!」

俺はその言葉に驚きを隠せずそれ以降の言葉が全く聞こえなかった。それ以降は何も聞こえてなかった。あのRoseliaが2位になった。それが信じられなかった。今までいろんな賞を取ってきていてFWFは今回が初だ。初出場で2位と言う快挙にみんな喜びを隠せていない。ただ狙っているのはあくまでも優勝なのか目は先を見ていた。

「優勝は——です」

その瞬間周りから大きな拍手が上がったが俺は聞こえていなかった。それに反応してなかったせいで興花が前に出てやっど状況が理解できた。俺たちが優勝したんだった。

そして前に出て俺と興花は表彰された。控え室に戻り重たいトロフィーを下ろして着替えた。

「おめでとー勇也」

「リサありがと。ただ飛び込んでくるのはやめてくれよ。いたい」

「ごめんごめん。嬉しくってさ」

「ああ、ありがとな」

他のみんなもお祝いを言ってくれた。けどその反面少し悔しそうだった。Roselia自身で目標ができてるなら問題なかった。俺たち全員興花が車を出してくれてそれに全員乗り込んだ。結局全員眠ってしまい運転手さんが遠回りしながら帰ってくれたのは俺しか知らない事実だった。

文句

俺たちが優勝してからはしばらくは大変だった。勧誘ばかりで学校にも来た。おかげでそういうことにも疎い奴にまでバレて質問責めにあい、おちおち学校生活もままならなかった。

そんな日々が過ぎてなんとかみんなの興味もなくなってきたようでやつと収まった。

「はあー」

「ため息つくと幸せが逃げるよ」

「ため息で逃げる幸せならいらないよ」

「相変わらず勇也は勇也だねー」

「リサこそ変わってないじゃないか」

「むー」

そんな感じで俺にもたれてきたがリサは中身こそさほど変わっていないが見た目は変わったと思う。高校の時は必ずしていたポニーテールも大学に入ってからほとんどしてないし、している時といえどバンドの時ぐらいだ。前に理由を聞くと髪を下ろしている方が落ち着きがあるように見えるらしいが正直なところどっちも似合っているからいいと思うが、リサがそう思うならと特には止めることもなかった。

全くあの2人は学校だというのに……

頭を抱えるのは友希那だった。校舎から2人がイチヤイチャしているのが見えた。私たちはもう見慣れているからあれだけれど側から見たらすごいカップルね。

「湊さんどうしたんですか？窓を見てため息なんて」

「紗夜、またあの2人のことよ」

「ああ、あれはもう仕方ないと思いますよ。今井さんも勇也さんも相思相愛でもかなりのところだと思うので」

「まああの2人はここまで安心するまで色々あったせいもあるとは思
うのだけれど」

本当にあの2人の周りは色々あった。勇也も勇也で自分からみの
ことも多かつたし、なにより私の知らない過去絡みが多かつた。そう
考えるとゆっくりするのはわかるのだけれどなぜ学校でするのかし
ら？

家まで我慢すればいいものを……

あたしは勇也に最近甘えてばかりだ。けれどそれを誰も注意しな
いし何より勇也が許容してくれるからついつい甘えちやう。今日も
また甘えていた。するとふと友希那と目があつてついつい友希那は
ため息をついているのがわかつた。

そして口が家まで我慢しなさいといっているのがわかつたのです
ぐに離れた

「ん、リサどうかしたのか？」

「い、いや〜ここが学校だつてこと思い出して」
「そっか」

あー恥ずかしい。友希那に見られてたなんて。後でなんて言われ
ることやら。恥ずかしい、絶対バンド練習の時に何か言われるよ。
それとは別に勇也たちは最近バンド練習はしていない。それより
もいろんなどころを興花と回つてみたいだ。

あたしがいるときは一緒にいてくれるんだけどバンド練習やあた
したちが寝ている時は結構出ていたりする。そのせいで勇也の顔に
は時々疲れが見て取れる。

そこであたしのケータイがなり、あたしはその場から離れた。

リサがその場から離れて俺は一気に眠気が来た。ここ最近はろく
に寝てないからこのベンチでも眠れそうだ。眠たくなってきて目が
落ち始めた時に俺のケータイもなつた。

「んあ、興花どしたの？」

「眠そうだね勇也。今日は夜からだよ」

「そりや眠いよ。けどやると決めたからな。わかったまた夜に」

「うん、今日でかなり詰めるから。だいぶ後は楽になるよ」

「りよーかい」

俺はそこでケータイを切り、少しだけ目を瞑った。その間だけでもすごい気持ちよくなってきて想像以上に深く眠れた。

起きて違和感を感じた。俺は確か座って眠ったはずなのに俺が倒れて寝ていた。その違和感の先には今ここにいるはずのない人がいた。

「やっほー。久しぶり」

「な、なんでここに!？」

「さつき帰ってきたんだよ。そしてりみのいる大学に来て見たら君が寝てたからついついね」

「それにしてもこっちに帰ってきてるなんて思いもしませんでしたよ。他のメンバーも？」

「うん、みんなは一旦家に顔だしてから来るみたいだよ」

「そうですか。それより頭から手を離してくれませんか!? ゆりさん」

「えー、いやだよ。君の髪すっごいさらさら。女の子よりさらさらだもん」

このまま話していても埒があかないと思いちよつとずれてそのまま起き上がった。そこから少し話して今までのことやこれからのことを聞いた。特にG l i t t e r G r e e nのこれからを知っておきたかった。

これからグリグリはみんなのやりたいことをしつつバンドは続けるそう。そんなこんなであつという間に時間が過ぎて俺は時間になったので家に帰り車で移動した。

グリグリもバンド続けるなら誘ってもいいかもしれない。そんなことを考えて移動して目的地に着いた。

「あ、勇也」

「興花、どう進捗状況は？」

「うーん、7割つてとこかな。あとは根回しの方もできてるけどこっちはあんまり心配しなくてもいいかも」

「まあ確かに、大物ぞろいだから」

「まあそれもこれも全部勇也のここにかかっているんだけど」

そういいながら俺の唇に触れてきた。あんまりにも近かったのだたじろいだがそれ以上は何もせずに出て行った。少し放心状態になったが、元に戻り、これからのことを考える。やりたいことはあるが興花の言う通り口が大事と言うのは最もだ。

「はあ、これからが大変だな。ますます」

俺は誰もいないフロアで1人呟いて帰っていった。帰って家に入るとリサが飯の用意をしていた。

「おつかれ勇也。もうちょっとで出来るから待ってて」

「俺も手伝うよ。やってもらえばなしは性に合わない」

素晴らしい隣に行き一緒に作った。とは言ってもほとんど作り終わっていたから盛り合わせたぐらいだけど……

そのまま机に持って行き一緒に食べた。最近はこんな感じだ。大学に入ってからリサが両親を説得をしてほとんどここで暮らしている。

「勇也、今年はF W F出ないの？」

「あれ？俺言ってたっけ？」

「わかるよ、なんとなくだけけど。勇也今何かはわからないけどすごい忙しそうだもん。それが大事なことも」

「あはは、リサには敵わないな。今年は出ないよ」

「そっか、私も少し寂しいけど仕方ない。そのかわりまた今度埋め合わせはしてよねー」

「はいはい、必ず」

俺は飯を食べ終わり、リサも食べ終わって片付けを済ませて早く寝ることにした。ちなみに寝る部屋はリサの両親からの要望でなぜか一緒に部屋に同じベッドだ。

寝るときは背中を向けて寝るか向き合って寝るしかない。背中を

向けた場合はリサが俺を抱き枕代わりにして寝るし、向き合ったらしばらく顔を見て恥ずかしがるから中々眠れない。

「勇也、あたしは勇也がなにしてもついていくからね」

「ああ、ありがと」

俺はそのまま意識を手放した。

勇也がここ最近すっごい忙しいのは知ってる。あたしも手伝ってあげたいけどここ最近の勇也はなんだか遠くに行っちゃそうで怖い。だから一步を踏み出せずにこうして傷つかない言葉を発しているに過ぎない。

そろそろ次のFWFの予選もあるらしいがあたし達Roseliaは前回の結果もあり本戦からの出場だ。今度こそ優勝すると友希那は意気込んでいた。けれど勇也が出ないと知ったらどんな反応をするんだろう。多分怒ると思う。勇也にはそんな気がなくても友希那は元々あの2人に勝つことも目標にしていたから激怒すると思う。

「はあ、あたしがもつとうまく話せたらいいのに」

あたしはどうしようもないことを一人で悩んでそのまま眠った。

朝起きるとFWFからの参加申請が来ていた。これは前回優勝した俺たちとRoseliaはこれが出て参加するなら無条件で本戦からの参加になるらしい。もちろん今回は俺たちは参加しない。俺は紙を破こうとしたがなぜか手が止まってそのまま紙をしまった。そこから少し体を伸ばして朝飯を作ってリサが起きるのを待っているとそんな時間かからずぐにやってきた。

「おはよりサ」

「おはよう勇也、また任せちゃってごめんね」

「気にしなくていいよ、俺もそこまで苦じゃないし」

俺たちは朝飯を食べて大学に向かった。

最終回！

「ふう」

「お疲れ様です。社長」

「その呼び方やめてくれよ興花」

「今はこっちの方がしっくりくるでしょ」

そう俺はある会社の社長になった。俺たちが優勝したFWFの次の年は出ないと友希那に言うのと大反対された。

結果だけを言うと俺たちは結局出ることになった。そして俺たちはRoseliaに負けた。もちろん実力だ。

そして次の日に全員に集まってもらい他にも参加者を呼んで集合した。

今回呼んだのはポピパ、After glow、パスパレ、Roselia、ハロハピ、そしてグリグリに最後はRASだ。代表者にだけきてもらい他のみんなには別の部屋で待機してもらっている。目の前には有咲、蘭、千聖、友希那、美咲、ゆりさん、レイアがいる。「それじゃあ今回呼んだ理由を話そうか」

「ええ話して頂戴」

「今回は全バンドに俺の会社に入らないか？という話をする為に呼んだ。全員がバンドを続けていくから俺の会社との契約を結ばないかという話だよ」

「それは勇也くんの会社なのかしら？」

「ああ、俺の会社だよ。やっとできるんだ」

「ちよつと待ってください！うちはプロデビューとか全然考えてないんですけど!!」

「有咲が言うこともわかるよ。特にポピパ、After glow、ハロハピは続けても地元でしかないことも知ってる。全員の予定が噛み合わないことが多いみたいだし。それも踏まえて来ないかって言う話」

「それってどういうことですか？もちろんプロ契約したらそっち優先になると思うんですけど私の場合特に花道の行事なんかもあるので」
「それはわかっている。それに関してはそっちの優先でいい。もちろんRASやRoselia、パスパレのようにプロでやっていくメンバーもいるだろう。そっちも考慮する」

「私たちは構いませんよ」

「私たちも構わないわ」

「私たちも大丈夫よ。けど私たちは事務所の都合もあるからどうなるのかしら？」

「それは大丈夫脅：説得したから」

「今脅したって言わなかったかしら？」

「アハハ」

残りほピパとAfter glowとハロハピだ。この3つは難しいかなと思ってる。本来プロ目的じゃなく、自分たちがやるためのバンドだ。

あ、ちなみにこころと香澄じゃない理由は言わなくてもわかると思う。あの2人は意見なんて聞かずにOKしそうだからこの場には美咲と有咲に来てもらっている。

「よしとりあえずはこの話を各バンド内でやってくれ。そして今回了承した3バンドは今から別の部屋に来て各バンドごとに話を詰めていくから移動しよう」

有咲、蘭、美咲は部屋から出ていった。その背中にはいろんな感情が載ってるようにも見える。まあいきなりこんな話が来たらびっくりするはず。俺は3人が出ていったのを確認して残りの3人を一旦部屋から出して次からはグループごとにきてもらった。

パスパレ

入ってきてもらった途端に彩とイヴ以外は状況を理解しているみたいだった。日菜に関してはもう話聞く前にニコニコして千聖から聞いてすでに納得しているみたいだ。麻弥に関しても納得はしてい

るが了承は未だにしていけないという感じで彩とイヴに関しては状況すら認知していないようだった。

「それじゃあ本題に入ろうか。すでに千聖から軽くは聞いていると思うけど俺の事務所に来ないかっていう話だよ」

「私はすでに了承したわ」

「あたしもいいよー」

「ジブンも少し疑ってるっすけど勇也さんだから大丈夫です」

「私はまだ信じられない。それは勇也くんが会社を作ったってことなんだよね?」

「そうだよ」

「一人でそこまでのことできるわけないもん」

「そうです!いくらユウヤさんでも難しいです」

「そっかそっちか。それなら後で会社見に行くか」

この一言がきっかけとなり全員で会社を見に行くことになった。

R o s e l i a

入ってきてもう明納得しているみたいだったが友希那はなぜか別のことに不満があるように見えた。

「どうしかしたの?友希那」

「なんでもないわ」

「友希那くそんな顔してたらバレバレだよ」

「はあ、私はまだ納得してないのよ。勇也が音楽じゃなくてそれをプロデュースする方なんて」

「まあ確かに驚きましたね」

「私はまだ納得してないわ。だってそれじゃあ勝ち逃げじゃない。勇也達とはきつちりとしたした舞台でもう一度戦ってそして勝ちたかったのよ!」

本当に友希那は変わった。ここ最近自分が思ったことも言葉にするようになったし、最近は何も昔みたいな仏頂面ではなくなった。メンバーとも話すし自分の意思も通した上での相手の意見も聞く。

だからこそ今回の発言には驚いた。

「わかった。ただしこれが最後だよ」

「ええ、それで十分よ。それと契約の件も私たちは大丈夫よ」

それにすでに納得した顔をしてみんなが周りを囲んでいた。これで Roselia はうちに入ることが確定した。

R A S

ここが1番の正念場だ。何せ会ったこともないメンバーを誘うのだから。そしてドアが開き全員が入ってきた。

「ようこそ。俺の会社へ」

「私はすでに納得したんだけど…」

「私も構わない」

「私も構いません。ポピパさんやそのほかの方も知ってるそうなので」

「私が納得してないの！どうして私の R A I S E A S U I L E N がこの会社に入るの!？」

「まあまあマスター落ち着いて」

「じゃあその子に聞くがこの後どうするつもり？もしかして会社を立ち上げる？それともどこかに入るの？」

「それは…」

「まあ別に強制はしないから考えてくれていいよ。それに断つてもいい」

そういい俺は部屋から出た。今日入っているのはこの3件だと思っていたから。そして出てそのままエレベーターに乗り一番でかい部屋に来た。

そこは俗にいう社長室だ。俺はいらないと言っただけど興花がこれはいると言っただけで聞かなかったので作ることになった。入るとそこは最高級のも物が揃っていた。実際初めて入ったが凄かった。言葉にできないぐらいものが揃っており、これ以上物があるのかと不安

になった。

「すごい」

「驚いた？集めるの苦労したよ」

「いや、やりすぎだよ。どれもこれも見たことあるブランドものばかりだよ」

「あはは、張り切りすぎちゃった。けど勇也だからだよ」

「ありがとな、興花」

「~~~~つ／＼早く入るよ！」

そのまま背中を押されて俺は中の部屋に入った。それはすごい一言しかなく、明日まで工夫がされていた。座ると座り心地はもちろん、角度までついてあるボタンで自由自在だった。

「それならみんなが飛び込んできても避けられるでしょ」

「心配するところが違う！」

そんなこんなでケータイがなりハロハピとAfter glowは参加が確定した。残るはRASとポピパだが、

「お邪魔しまーす」

その言葉と同時に何かが飛んできた。俺はすぐに椅子を平にまで倒して避けた。するとそのまま壁に激突した。

「痛い」

「今のは香澄が悪い」

「有咲ひどいよ」

「大丈夫か？」

「勇也さん！私たちも入ります」

するとその後には沙綾達もやってきてみんなが納得した上での事務所に入ることを決断してくれた。その後他のバンドからも参加が来て全バンド参加となった。

ただしRASに関しては後々自分たちの力で立ち上がりたから期間契約という形になった。それで契約して俺はその後を進めていき卒業と同時に会社を本格始動させた。

しんどい少し昔のことを思い出していたが目の前には目を背けたくなるぐらいの量の書類の山だ。

「はあ、い、」

「こちら社長そんなため息はだめだよ。おつきすぎるよ」

「はあく興花能天気だな」

「あはは、勇也は頑張らないとね」

「全くだよ。やること多いしな。Roseliaとパスパレのガードとその他にも契約が山ほど来てるし」

「ふふ、契約の方は任せて。私の方で話は進めとく、ただガードの方は勇也自身が行ってあげて」

「悪いな」

「いいの、勇也にもうちの会社手伝ってもらってるし」

そう、俺はこの会社を立ち上げる際に興花が継いだ会社の手伝いも約束した。

ここ最近はまだ休みはないが昔にない充実感があるのであんまり疲れは気にならない。

「はい！勇也は今日はここまででいいから今日は帰って」

「ん？まだ日は高いぞ」

「いいから」

俺は言われるがまま帰っていった。最近はスーツばかりで無駄にしんどい。スーツだからだが引き締まる感があるからなんか苦手だ。

そして家に帰るとリサが準備をされていて俺は思い出した。そう、確か今日はリサと付き合った日だ。

「お疲れ勇也」

「リサ、ありがと」

リサと俺は結婚してそのあと同じ家で暮らしている。だから毎年この日をやっているのだが今年は危なかった。リサは怒らせると中々口を聞いてくれないからなあ。

飯の準備をして夜になったので早速食べることにした。

「乾杯勇也」

「乾杯リサ」

俺は飯を食べながら思った。これからもこの先もこんな毎日が続いていけばいいなど。

新年初

結婚してからも毎日が忙しかった。うちの会社は日本でも有数の大きい音楽レコード会社になり、社員数も1万人を超えた。俺も社長から降り、オーナーという立場になり会社を外側から見ることもできた。最初の6組以外にもたくさんของกลุ่มがうちに所属して所属グループだけでも20は超えている。

そんな感じだけどまだ俺は27にもなっていない25歳でこの立場なんだから昔の俺から想像もできない。

「なーに考えてるの勇也」

「リサ、いやいろんなことがあったなーって」

「おじさんくらいよ勇也」

「ひどいこと言うなよ。そろそろ時間か？」

「まだもう少し。あたしも今から着付けだし」

「そっか。俺も袴着ないといけないのかな？」

「そりやそうだよ。あの時のメンバーが全員そろって初詣行くんだもん。それにみんなは着てくるって言ってたから」

リサはそこから急ぐように部屋に戻り着替え始めた。俺も部屋で袴を着たがやつぱり慣れない。なんかヒラヒラしてて。

みんなからも連絡が入りそろそろ着くみたいだ。あれ以来みんなが揃うことはなかなかなく、今回がずいぶん久しぶりだ。初詣をした後はみんな俺の家でおせちを食べるとか言い出してリサと俺はすごい量のおせちを作ることになった。頼んでも良かったがリサに怒られて辞めることにした。

着替え終わりリビングに行くとき黒一色の着物を着たりサがいた。なんだかりサのスタイルを強調してるみたいだ。着物なのにすごいことになっている。

そして外に出ると

「ゆ・う・やくーん」

「ギャア！日菜飛ぶな。後あけましておめでとう」

「うん！おめでとー」

その後ろにはパスパレがいてみんなもすぐにやってきた。みんな少し大人びた感じになっている。そんなに時間も経っていないのに全員が揃うのはかなり久しぶりに感じる。

こころや香澄は相変わらずで暴走気味だが昔に比べると少し落ち着いたようにも感じる。他のみんなもだいぶ落ち着いた感じだ。

みんな揃って神社に向かい神社でお参りをしてその後には俺の家に向かった。その間も質問攻めがすごくて全くゆつくりできなかった。家に着きリサと2人でおせちを用意した。リサには買うのは却下されたが作るからと言って結構いいものを使った。

「それじゃあ食べよっか」

みんな食べ始めてなくなる頃にはみんなも着物に疲れたみたいだ。俺の家にあるお客さんが来た時ように用意してる部屋（とは言ってもくるのは大概今いるメンバーだけだが）にある私服着替えた。

これはこれで破壊力がすごいが…

みんなスウェットのような感じだからこのまま表に出すのは危ないと思う。

「それじゃあ今日はどことするかじゃんけんよ」

「わかりました」

「はい」

「わかったわ」

「負けないよ」

各バンドのボーカルがジャンケンをはじめた。何をしてるのかは聞かないでほしいが勝ったのは蘭だ。

「それじゃあ今日は勇也さん私たちとですね」

「はいはい」

「さっすが蘭」

「蘭ちゃんすごいよ」

「蘭やるな！」

「蘭よかったよ」

俺はその5人と部屋を移動して部屋の中には俺とAfterglowだけになった。

ここでRー18のような展開になると思った人残念そんな展開じゃないよ。なんでもその日1日の残りはそのメンバーと過ごすことになっていろいろらしい。最初はリサから猛反対が出たが渋々納得した。

「それで何するの?」

「何もする気はないですよ。ただゆっくり話でもしましょう」

「そうそう昔みたいの手は出しませんよ」

「紛らわしい言い方すんな!」

結局何もせずにのんびりした時間を過ごしていきその日はみんなうちに泊まっていった。結局みんなお酒で寝てしまい俺とリサだけ起きていた。

「はあ、まさかこんなに飲むなんてな」

「あはは、ほんとだね。みんな潰れちゃったし」

リサと俺は皿を洗いながら少し話してそのまま机でチューハイを開けた。

「乾杯」

そんなにアルコールは強くない。苦手でもないが荒れてた時ほど飲もうとも思わないからなるべく抑えている。

リサは比較的一般程度は飲める。ただ他の奴らはどうと日菜めちやくちや強くてうちに来ると倒れるほど飲む。他のみんなは似たり寄ったりだ。

「勇也今日は楽しかったね」

「そうだな。久しぶりに楽しんだよ」

「ちよつとー、その言い方だとあたしとは楽しくないみたいじゃん」

「あ、確かに」

「ジョーダンだよ。勇也がそんなこと思ってないのは知ってるから」

「カマかけるなよ？ひっどー」

「ふふ」

リサが笑ったと同時に部屋に月明かりが差してリサを後ろから照らした。それが俺にはとても綺麗に見えて顔を逸らしてしまった。

バレンタイン

もうちょっとでバレンタインだ。勇也はあげると食べてくれるけど、今回は特別なものをあげたい。だって本当に付き合い始めてから初のバレンタインだし。

特別な何かのチョコなんてどんなチョコなのかわからない。今もいろんなチョコを作っているが何か違う気がする。

「リサ何を悩んでいるのかしら？」

「友希那、チョコを悩んでいてね。勇也にどんなチョコをあげるか」

「勇也ならどんなチョコでも喜ぶと思うのだけれど」

「うん、わかっている。だからこそ特別なのをあげたいんだ」

「そう、ならリサにはどんなイメージがあるのかしら？」

「イメージ？」

「勇也に対してどんなチョコをあげたいのか、どんな顔を見たいのかなんかよ」

「うーん、喜んで欲しいのはもちろんだけど、なんかモヤモヤうつてしてるんだよね」

「そう、そこを固めるのがいいんじゃないかしら？」

「そうだね、頑張ってみる」

バレンタインまで後1週間。ここからはみんなからも意見を聞いていこう。そしてこの意見を聞くのが波乱を生むことになるなんて予想もしてなかった。

次の日からあたしは学校でいろんな人に聞きに行き始めた。はじめはひまりに聞きに行くことにして昼休みに屋上に向かった。

「ひまりーちょっといい？」

「いいですけどどうかしたんですか？」

「蘭たちもいいかな？」

「いいですよ」

あたしは蘭たちにも許可をもらいひまりを連れて食堂に向かった。食堂にある自販機でひまりにジュースを買ってあげて席についた。

「実はバレンタインで悩んでるんだ。勇也にあげるのってどんなのがいいかちよつと悩んでて昨日友希那に聞いたらあたしが勇也にしたことってなんなのかって言われて」

「あ、そういえば確かバレンタインでしたね。勇也さんにあげなくちゃ」

「いやいや、なんで今の流れでそうなるの？あたしはひまりの意見を聞きたいんだけど」

「それとは別にですよ。女の恋は怖いですからね。それと勇也さんは何をされたら喜ぶかよく考えてみてください。それさえわかればすぐに出るはずですよ」

「!?どういうこと?」

「私にはできないことですから」

「え、なんて」

「それじゃあそろそろ昼休み終わるので失礼します。ジュースご馳走様でした」

ひまりはそういういながら教室に向かって歩き出してあたしは訳がわからないままあたしは机に突っ伏しているとチャイムが鳴って驚きながら教室に戻って少しだけお説教を喰らった。

そういえばバレンタインだったなあ。勇也さんにどんなチョコを贈ろうのかな？リサさんいいこと言ってくれたな。私はもう間違えないけどこの思いだけは消えそうにないから私は私のしたいことを

することにした。そう考えると嬉しくなつて廊下をスキップしながら帰つて教室に着くとモカにまたからかわれた。

あたしはまだ答えがわからず放課後に会う約束をして喫茶店に向かった。もうすでに2人とも座つていてあたしが最後だった。

「ごめん遅くなつちやつた」

「気にしないでいいわ、私たちもさつき来たところだから」

「うん、千聖ちゃんと私もまだ何も頼んでないから」

今回待ち合わせしていたのは千聖と花音だ。今回は2人を呼んだ時ははじめは断られた。私たちにそんな資格はないと言つていたが会うのに資格も何もないし、あたし自身が会いたいと言つて無理を言つた。

「だいたいは電話の時に聞いたけどリサちゃんはそんなに悩むことかしら?」

「うー、勇也に喜んで欲しいから悩むんだよ」

「勇也くんはリサちゃんの作ったものならなんでも喜ぶと思うんだけどなあ」

「確かにそうかもしれないけど、喜んで欲しいんだよ」

「なんの話をしてるんだ?」

「!!!」

「ゆ、ゆ、勇也!?! どうしてここに?」

「どうしてって言われてもちよつとだけ休憩していいこうと思ったら見えたらさ」

「そ、そうなんだ。あたしたちもさつき偶然会つて」

「へえ、そっか」

勇也は何かを見透かしたように同じ席には座らず端の席でコーヒーを飲みながらこちらは見ないように外を見ていた。この状況になっても話す気にならず携帯で文字を打って千聖と花音に謝ってそこから普通の会話をしていた。

あたしはそこで2人と別れて、家に帰ってから何も思い浮かばず時間ばかりが過ぎていき何もできてないまま結局バレンタイン当日が来た。あたしは学校に連絡して休むと言つて家でチョコを作っていた。実際こんなことがバレたら怒られるが今回ばかりはしようがない。あたしは結局残骸ばかり増えてしっかりしたものではない。まま時間ばかり過ぎていった。

朝学校に来てみるとリサがいなかった。いつもなら俺より早く来ているのもあり、妙に気になって連絡を試みたが返事が来ず少しだけ心配になった。一応カバンから教科書を出して机の中に入れておくとすると入らない。中を見てみるとなんだかいっぱい出てきて今日がバレンタインだったことを思い出した。
入っていたやつを鞆の中に入れて教科書を入れると同時に教室に担任がやってきた。

「えー、今日今井は体調不良で休むそうだ」

その言葉を聞いて驚きを隠せなかった。少なくとも機能した電話では声しかかけていないが元氣そのものだったから。俺は結局その日授業なんて耳に入ってこずそのことで頭がいつぱいで終わると同時にすぐにリサの家に向かった。

家にの前に着くとなんだか中からすごい呻き声が聞こえる。そこでインターホンを鳴らした。

インターホンが鳴り見てみると勇也が立っていた。時計を見るともうすでに放課後の時間で何もできていないのに勇也が来たことに驚きを隠せず、あたしはドアの隙間から顔を出した。

「リサ病気は大丈夫なのか？」

「病気？あ、うん、大丈夫。もう治ったよ。上がっていく？」

何もできてないのにいつもの癖で上がってもらおうように言ってしまいい勇也も入ってきてリビングを見ると驚いていた。それもそうだとチョコの残骸がすごい量あるんだから。

「ごめん、病気は嘘。本当はいいのを作れたはずなのに」

「はあ~~~~なんだ病気じゃないのか」

「う、うん。ごめん。それにまだチョコはできてないんだ」

「いや、それならいいわ。1番いいのを見つけたし」
「へ？」

すると勇也はだんだん近づいてきてあたしは顔がだんだん熱くなつていく。そして勇也は手を伸ばしてあたしの顔に手を近づけてそのままつけてそれを口に持っていった。

「1番なバレンタインチョコもらった」

「はう、うう、なんかあたしだけ恥ずかしい思いしてない？」

なんとか口を動かして言ったが顔はまたかなり熱い。勇也は向こうを向いていて返事はしてくれるがこっちは見てくれない。そして顔の熱が冷めてきてやっと気がついた。勇也がこっちを向かなかったのは勇也自身も恥ずかしくてこっちを向いてなかったんだ。

「あれゝ勇也も恥ずかしかったんだ」

「言うなよ。まだ顔の熱が引いてないんだから」

「ふふ、可愛い」

「ふうー、やっと落ち着いた。けどこんな無茶はもうしないでくれよ。心配したんだから」

「うん、ごめんね」

「それじゃあ今日はRoseiliaの練習もないしゆっくり寝てこい」

「うん」

リサはそういいながら部屋に戻っていった。その間にこのキッチンを片付けだけして帰ろうと思ひ、俺は片付け始めた。そしてほぼ終わりの時にリサが降りてきた。

「どうしたんだ？寝に行ったはずじゃなかったか？」

「その、お願いがあるんだけど」

「なんだよ。聞いてるから」

「膝枕して欲しいかな。ダメ？」

だからそんな顔で見られたら拒否できないんだよ。俺は渋々やることにした。本来なら男と女が逆のような気もするが今回ばかりは何といえない。過程がどうであれ俺のためにしてくれたことだから言えるはずがない。

結局リサは起きないまま2時間ほど経って帰ってきたりサのお母さんにおちよくられたのはまた別の話。

過去話その他 対バンライブ

RASとRoseliaが対バンライブをするといつてリサ達は向かった。俺もチケットを2枚もらっていたので向かうとそこには俺の知ってるガールズバンドメンバーがたくさんいた。

そして結果はRoseliaの負け。実際は僅差だと思いがそれでも負けは負けだ。あいつらに関してはまだまだ余地もあるし、こんなところで負ける奴らじゃない。

結果だけ見て帰ろうとするとRASでDJをしていた奴が

「RAS、RAS、RAS、RAS」

それで勝ちを誇った様にしたのがおれを妙にイラつかせた。お前達は良くても隣にいるRoseliaの気持ちもある。

それに会場の奴らもムカついてきて

「興花耳塞いで」

「え？」

「いいから」

「うん」

俺は興花が耳を塞いのを確認すると手を思いつきり鳴らした。その音は俺が想像していたよりもかなり大きくなって会場の声は一瞬にして消えた。

俺は舞台に向かって歩いていき

「あら何かようかしら？」

「いやいや、大変素晴らしい演奏だったよ。感服した」

「あら、ありがとう。ところで何か用かしら？勇也、湊」

「なんだ俺のこと知ってるのか」

「当然よ。男じゃなかったらスカウトしていたもの」

「そいつはどうも。それと俺とも対バンライブしないか？」

「!!!」

俺のその言葉に驚いたのはRASよりもRoseliaだった。当然だろう。俺がこんなことを言い出すなんて今までなかった。

「興味ある提案だけどこっちに受ける義務はないわ」

「そらそうだ。けどRoseliaには似た様にしておいて受けないなんて言わないよな？」

「くう！」

「それとも負けるのが怖いのか？」

「分かったわ。その勝負うけるわ。ただしこっちから連絡するわよ」

「そうだな。レイヤさんだっけ？喉はどれぐらいで回復しそう？それに他のみんなの疲労もあるしいつでも」

「わたしの喉ならそこまで時間はかからないけど」

「そっか。それと俺たちはRoseliaが今回やったセトリで行くから」

俺がそういうとRoseliaは驚きを隠せなかった様で口が出てきた。

「勇也！今なんて言ったの？」

「俺たちが演奏するのはRoseliaのセトリだ」

「勇也それはどういうことかしら？」

「友希那、今回のセトリに何も感じないとでも？」

「あなたまさか」

「そういうことだから。連絡いつでも待ってるよ」

俺と興花はライブハウスを後にした。あのセトリに友希那が込め

た想いはわかってる。だからそれであいつらに勝ってそれをわからせる。

「興花、コレを頼む。出来るだけ早く」
「?了解」

俺は紙を渡して俺は俺のやるべきことをやるために向かっていった。普段なら仕事でしか来ないが今回はわけが違う。

パズパレのところに向かって行った。

「あれー?勇也くん。どうしたの?」
「日菜、それに麻弥力を貸して欲しい」
「勇也さん!?!頭をあげてください」
「勇也くん何があったのかしら?」
「実は……」

俺はそこから全て話して。今回やる対バンライブのこと。それに日菜と麻弥の力を貸して欲しいこと。今回限りの混合バンドを結成して戦うこと。

「ジブンはやりたいんですけど事務所の問題が」
「それなら許可をもらってきた。後は2人がOKを出してくれたら決まる」

「もちろんあたしはOKだよー」
「ジブンも大丈夫です」
「ありがとう。明日から俺の家に来てくれ。練習するから」
「りよーかい」
「わかりました」

俺はそこからは興花に電話をかけた。

「興花見つけた？」

「うん、けどかなーり手強いと思うよ」

「了解。場所は？」

「月ノ森女子学園」

「了解あれは？」

「後で渡すよ。場所は」

場所を聞いて俺はすぐバイクに跨って向かっていった。月ノ森つて確かなかなか賢い学校だった様な？

走らせるとだんだん雰囲気が変わってきて着いた時にはお嬢様つて感じの子ばかりだった。

「勇也これ」

「ありがとう」

俺が受け取ったのは入校許可証だ。ここで探すのはある女の子だ。

「あれ？もしかして湊勇也じゃん!？」

「えーと誰？」

「あたし？あたしは桐ヶ谷透子よろしくー」

「ああ、よろしく。ところで広町って子知らない？」

「広町？知ってるよ」

「ちよつと案内してくれない？」

「いいよーけど、サインくれない？」

「サイン？俺の？」

「そう」

俺は出されたケータイの裏に書いた。ケータイの裏なんかにも書いてもいいんだろうかと思いつながら書いて。そして連れて行ってもらうとそこに目当ての人はいた。

「広町くあんたに用だつて」

「んんーわたしに？」

「どうもどうも。湊勇也です」

「沢木興花です」

「今日は広町七深さんに用事あるんです。ちよつとだけいいですか？」

「はい」

俺と興花、そして広町さんは部屋から出て学校からも出て行つた。そのままファストフード店に入った。

「それで用事つてなんですか？」

「実は広町さんに手伝つて欲しいことがある」

「ちよつと待つてくたさいー。いくらなんでも急すぎませんか？それになんてわたしなんです」

「それは広町さんすごい才能があるから」

「なんでそれ知つてるのにな？」

「それは興花に調べてもらったんだよ」

「ええ、小学校の時から才能が飛び出ていてそれが突然消えた。それは良くあることだけどあなたはそれを隠してるみたいだったから」

「そんなことないよー。普通の女の子だよー」

「まあお願いしてる立場だけど大丈夫？」

「構わないよ」

「ありがとう。明日からここの住所に来てくれ。時間は何時でも構わない」

「了解だよ」

俺と興花はそこで別れた。広町さんがどれだけ才能があるのか気になるが日菜より上なことはないだろう。日菜と遜色ないのは興花ぐらいだ。

「バイクの後ろに乗っけて欲しいかな？」

「はいはい。今回もよろしくな」

「まかせといて」

俺は興花を後ろに乗せて帰っていった。こんなところりサに見られるとまた勘違いされそうだな。

リサの嫉妬は怖い

次の日になって麻弥、日菜、興花はやってきたが広町さんはなかなか来なかった。俺たちだけで練習を開始してかなり時間が経った後に広町さんはやってきた。

「ごめんなさい。遅くなったよ」

「いや構わないよ。それじゃあ譜面は昨日のうちに送っているから引いてみてくれる？」

「わかった」

そこから広町さんが弾くと確かに天才の1人だと思う。けどなんか違和感を感じてならない。確かに譜面通りに弾けてるし、音も悪くなかった。

すると日菜が

「なーんで実力隠してるの？」

「うえ!? な、なんのことかな？」

「だってこの子本気で演奏してないよ」

「まあそうだろうな」

「ええ!? どうしてそう思うのかな」

「なんとなくかな。けどまあ譜面的には間違っていないし今日一回合わせで終わりにしようか」

そこから音を合わせると日菜は自由に引きつつも譜面通りに、麻弥は早く力強く、興花はその間を縫うような繊細な音をそれにさえ合わせてきた広町さんがいた。

「はい、今日は終わり。あとで飯作るけど残る人はリビングにいて。」

あと広町さんだけちよつとだけここに残っててくれる?」「
「えーあたしも残る」

「日菜さん行きますよ」

興花と麻弥が2人がかりで連れて行き今残ってるのは俺と広町さんだけになった。

「私は怒られるのかな？」

「いやいや、怒ることなんてないぞ。さすがの一言だけど。けどなんで本気を出さないんだ？」

「普通ぐらいがちょうどいいんだよ。才能が出ると周りから拒絶される」

「あー日菜とはまた違ったことか。けど今日いるメンバーの中で天才じゃない奴はいないと思うぞ。俺を除いて」

「確かにそうかもね」

「だからいつでも本気でやってくれて構わないよ」

「わかったよ。心に留めとくね」

「ああそれで十分だ。あと飯食っていく？」

「あーどうしようかな」

「まあちよつと考えてからきてくれ」

「はーい」

俺は先にリビングに上がって行くともう待ちわびたかのように日菜が待っていた。

興花や麻弥だけじゃ抑えきれなかったみたいだ。

「お腹すいたよー勇也くん」

「わかった、わかったから離れてくれ」

「はーい。けどこのまま勇也くんを食べちゃおうかな」

「ふざけたこと言ってるで離れろ」

「痛い。女の子は丁寧に扱うんだよ」

「扱って欲しかったらもつと自重しろ」

俺はキッチンに立って料理をし始めた。広町さんも上がってきてここで食うみたいだからちよつと豪華にしよう。

「なに作るの？」

「アクアパッツアとかローストビーフとかかな？」

「なんで疑問系なの？それにそんな対極の料理じゃなくても」

「そういうなよ。それなら興花はなにが食べたい？」

「私はなんでもいいかな。勇也の料理美味しいし」

「それが一番困るんだけどな」

俺は料理をしながらも向こうに目を向けると日菜は広町さんに興味津々という感じだ。おそらく日菜と同等の天才でありながらそれを隠して普通であり続けようとするのが面白いんだろう。俺的には今この場ではそんなに気にすることないと思うんだけどな。

確かにM o r f o n i c aはできたばかりのバンドだし浮くかもしれないという不安があるのかもしれない。

「私もいただいてもいいのかな」

「いいよ。そこで待っててくれ」

俺はもう少しかかりそうなのでそこで待ってもらうことにした。ソファに座っていると日菜からの質問責めがすごい。麻弥も止めてはいるが麻弥1人じゃ厳しいんだろう。止まる気配がない。まあ千聖とかがいれば話は別なんだろうけどそれはそれでめんどくさくなりそうだ。

「帰ったわ」

「お邪魔します」

「あ、ややこしいのが」

「勇也聞こえてるよー」

帰ってきたのは友希那でそれに着いてくるようにリサもやってきた。俺は練習のことで2人のことを完全に忘れていて2人の飯がない。

急ピッチで作ろうと思ってるトリサが隣にきて作る手伝いを始めてくれた。

「勇也のことだからあたしたちの分忘れてたんでしょ」

「いや、そんなことないけどな」

「まあいいや、あたしも手伝うよ」

「助かるわ」

「あれ、勇也今日はずいぶん素直だね」

「バカにしてるだろ」

結局リサには手伝ってもらい俺も助かった。そのまま机に並べると広町さんは驚きを隠せていなかった。

「ところで勇也その子は誰かしら？」

「あー俺が今回来てもらったバンドメンバーの1人」

「へえ、勇也はいろんな子に手を出すんだ？」

「リ、リサさん。何を怒ってらっしやるんですか？」

「別に怒ってないよ。勇也くん」

「怖いです今井さん」

麻弥がなんとか静止してくれてそのままみんなで談笑しながら飯を食べた。

みんな帰って行き俺も部屋に戻って譜面を少し改造しようとしたら部屋のドアが鳴った。

「だれ？」

「私よ」

「入ってきて」

「失礼するわ」

「どうしたの？何か食べたくなつた？」

「ち、違うわ！今回の対バンライブなんで受けたのか気になつただけよ」

「うーん、友希那がああのセトリを組んだのは本気で勝ちに行こうとしたのがわかつた。もちろん今までもサボっていたわけじゃないことはわかつてる。それにあのおチビちゃんにわからせたかつたんだろ。昔の自分にそつくりなこと。そしてそれは必ずメンバーとの亀裂が入ることを」

「勇也はたまに鋭すぎるわ。けどレベルアップを狙っていたのも事実よ」

「そっか」

俺がこの対バンをやつたのにはまだ理由があるけどこれは秘密でいいだろう。これを言う理由もないし、これを言うと友希那たちは責任を感じるから。

「あ、そうだ友希那」

「なにかしら？」

「明日からコーチしてくれない？」

「それはRoselia全員かしら？」

「そうだけど」

「構わないわ。みんなには私から言っておくわ」

「頼む」

友希那に言えたしあとはもうないだろう。友希那も部屋から出て行き俺は譜面に手をつけるのをやめた。

意外と人間はいろんな面が見れる

次の日になって俺たち全員が揃ってかRoseliaの全員が来た。

「勇也くん。なんでおねーちゃんたちが？」

「今日からライブまでの1週間コーチをしてもらおう」

「聞いたよ、あたしたちがコーチなんてなんだか変な感じだな」

「まあまあ今日からパートごとに別れて練習。最後には合わせるからよろしく」

「へえ、それで私はリサ先輩と一緒になんですわね」

「それじゃあ私は燐子ちゃん？」

「ジブンはあこさんとですね」

「そういうこと。それじゃあよろしく」

みんなそれぞれの場所に分かれて行っRoseliaのみんなには予めライブハウスを抑えてることを言っている。俺と友希那は家でやる予定だ。

「それで私たちはなにをするのかしら？」

「うーん？とりあえず一回通して歌ってみるから聞いてみてくれる？」

「わかった」

俺は通して歌った。もちろん本家とは少し違う。友希那みたいに大きくせずにそこは小さくアドリブを入れて歌った。

「私がアドバイスすることなんてあるのかしら？」

「まあまあ何か気になったら教えてよ」

「わかったわ」

そこからも練習をしていくが何にも言われない。そして時間だけが過ぎていき友希那が一言はなつた。

「お腹空いたわ」

「コラー！」

「なにかしら？」

「嘘だろ。放ったのがそれか」

「ええ、お腹が空いたもの」

俺はみんなに連絡して、食べにくる人は来るように言った。作り始めて少しすると全員やってきた。これは流石に想定外でもう一品作ることにしていくとリサと興花がやってきた。

「手伝うよ」

「あたしもー」

2人とも手伝ってくれてあつという間に終わった。みんな食べ終わってから片付けが終わり、今日の練習は最後に合わせて終わりにしようと思っていたらみんながあと少しと言つてなかなか終わらず結局みんなで合わせたのはもう日が落ちてからだった。

みんなで合わせたのを Rose lia のみんなに聞いてもらいもちろん評価もしてもらった。

リサやあこはなにも言わなかった。けど紗夜、友希那、そして燐子までが言ってきたのは想定外だった。

「日菜！走り過ぎとあれだけ言ったでしょう」

「ごめんなさーい」

「勇也あなたもよ。合わせることはかり考えて本気で歌っていたのかしらっ。」

「それは……」

「興花さん……アレンジ……入れ過ぎ……です」

「あちやーばれた」

「あなた達勇也が集めたメンバーなんでしょう。なら勇也が信じないでどうするのかしら?」

「そうだな。ごめん。みんなもう一回合わせてくれるか?」

「「もちろん」」

俺たちはそこからみんなでもう一回みんながみんな今持つてる全力でやった。やり切ったと思う。

「すごい」

「わあく体がゾクゾクってしました」

「ここまでとは」

「鳥肌……たちました」

「これがあなた達の本気なのね」

「本気って聞かれるとそうなのかな?ただ全員が今持てる全力でやったと思う」

「そう、ならこのまま本番まで合わせる練習をして」

「りよーかい」

俺たちはそこで全員がヘトヘトになって少しの間動けなかった。ここまで疲れるって思ってたなくて想像以上でみんな倒れ込んだ。倒れ込んでいる間に広町さんが口を開いた。

「そういえば今回だけだけどグループ名決めなくていいんですか?」

「「「あー」」」

全員がそのことを忘れていた。言われるまで思っても見なくてみんな想定外だった。

「どうしよつか?」

「ジブンそういうのを考えるのは苦手で」
「じゃあDreamなんてどう?」
「興花ちゃんそれナイス! るん! ってくる」
「わたしも問題ないよ」
「ジブンは賛成です」
「なら俺たちは今からDreamってことで」
「」「うん!!」「」

みんな納得して俺たちのグループ名が決まった。そしてライブの前日の日。RASが俺の家にやってきた。

「それでどういう要件で?」
「OK、話が早くて助かるわ。投票の方法をどうするか相談よ」
「うーんどうする?」
「なら提案よ。観客にシールを配ってそれを入り口のホワイトボードに貼ってもらう。それでどうかしら?」
「それでいいんじゃない?」
「随分余裕ね」
「そんなつもりはないけどリラックスはできてるから」
「そう、なら話は終わりよ。帰るわよパレオ」
「はいチュチュ様」
「飯食っていく? 今から作るけど?」
「what? 毒でも盛るつもりかしら?」
「失礼なやつだな。ならいいよ」
「いただきます」
「パアレオ!」
「チュチュ様だってパスペレのみんなもよく食べてるって聞きましたよ。食べたくなるじゃないですか?」

それどこ情報だと思いつつも俺はキッチンに立った。なにを食べるか分からないけど俺はチャーハンにすることにした。けど具材

がなくてなにを入れようか悩んでいるとジャーキーがあった。それを細かく切り一緒に炒めて作った。

「どうぞ。召し上がれ」

「いただきます。チュチュ様もほら」

「いただきます」

食べるとパレオっていう子は食べ始めるまで早かった。けどチュチュはなかなか食わず結局パレオに食わせてもらってから目の色が変わったように食べ始めた。

「まあまあね」

「その割にはがつついてたみたいけど」

「くくく／＼／＼」

「チュチュ様顔真っ赤です」

「パアレオ！」

「まあ口にあつたなら何より。それじゃあまた明日な」

「ええ、ご馳走様」

「ご馳走様です」

そうやって2人は出て行った。人間見えにくいけど結構いろんな面があるんだなと思った。

俺たちは夕方に一度集まってもう一度軽く音を合わせて終わった。結局みんな泊まると言って聞かず結局みんなでお泊まりになった。広町さんとこの少しの間にみんなとかなり打ち解けている。

そしてとうとうライブ本番になった。

対バンライブいざやってみると楽しすぎるもんだなあー

ライブ当日

俺は朝起きると家には広町さん以外はすでにいた。というか俺の家溜まり場になってない？

「こらこら日菜、すでに朝飯を待ってる気満々じゃないか」

「あたしはサンドウィッチで」

「話を聞け！」

結局流されるまま作らされた。その間に広町さんもきて結局6人分作らされた。友希那はもちろんのように並んできたが……

こいつら本当に今日が対決の日ってわかってるのか？それとも忘れてるだけなんじゃ。

「勇也さん顔が固いですよ」

「麻弥、ばれた？」

「みなさんもそれが分かっててふざけてるんですよ」

「あー麻弥ちゃん言ったなあー」

「わーすいません！すいませんってば日菜さーん」

「こうしてやる」

日菜は麻弥に抱きついてこしょぼしている。みんなアイコンタクトだけで分かかっていてそれを実行してくれていたんだらう。

全く情けないな。自分が上手くなつた気でいたがこれじゃあ情けないの一言に尽きるな。

「悪いな。心配かけた。おかげで肩の力が抜けたよ」

「ほんとに〜?」

「日菜さん! くつつきすぎですよ!」

「麻弥ちゃんもくればいいのに」

「そういうことじゃないです! 興花さんから言ってください」

「今日ぐらいはいいかなーって」

「なんかすごいなあ〜」

おいおい感心しないで助けてくれよ。目で訴えても興花は顔逸らし麻弥は無理、お手上げという感じだ。広町さんはそもそもわかっ
てないような感じで俺は準備を始めていく。といつても昨日ほとん
ど終わっているから用意するだけだが……

時間になり俺たちは荷物を持って電車で出かける。1人だけなら
バイクで送れるが流石にこの人数は無理だ。

着くとすでにRASはいた。

「随分と遅い到着ね。余裕のつもりなのかしら?」

「小学生はここにいちやいけませんよ」

「what!?! それ私にいつてるのかしら」

「頭に手を置いてるんだからそうだろ」

「あなたは挑発が下手みたいね」

いやいやその割に随分と頭に血がのぼってるんだけどなあ。それ
で挑発が下手なんてよく言える。

「チュチュ様怒っては挑発に乗ってしまっていますよ」

「shit! パレオ黙ってなさい」

「はいチュチュ様!」

なんであんなにきつい言葉なのにあいつ嬉しそうなんだ? 周りの
3人はもう見慣れたかのように遠い目で見ているし。

「今日でその鼻っ柱折ってあげるわ」

「まあやれるものならやってみな小学生」

「見てなさい」

素晴らしいRASは控え室に向かつて行った。入り口には二枚のホワイトボードがあり俺たちとRASのボードだ。前回同様これで順番を決めるためだ。結果は前回のこともありRASが圧倒的に多い。

「あちゃーこれはあたしたちが先だね」

「まあ前の結果もあるし妥当だろう」

「確かにそうですね。それじゃあ先に準備しちゃいましょう」

「了解です」

「さ、いくよ勇也」

俺たちは控え室に行く。行くとすでに他の4人は知っていたみたいだけ俺だけ知らなかった。全員同じ服があった。男と女でさすがに違いがあるのが嫌だったのか全員Tシャツだった。そして真ん中にはDreamと書いてあり、手には装飾品もあった。

「これプロが作ったの？」

「作ったのは広町さんだよ。私たちはこんなのができればいいなっていったらその通りに作ってくれたんだ」

「すごい、めっちゃ綺麗だな」

「ほんとだよね、プロが作ったみたい」

「いやたまたまですよ」

「広町さん、ライブ終わったらいい？少し話がある」

「いいけど」

その言葉に日菜がおちよくってきたがなんだか話が違う方向に進んでいきそうなので違うといっておく。

前から気になってはいた。広町さんがどうしてここまで自分の才

能を隠したがるのか。そしてそれはこれからの広町さんに対しても必ず必要になってくる。たった一年しか変わらないけど関わった以上なんとかしてあげたいと思ってしまふ。

「s o r r y失礼するわ。結果であなたたちが先よ」

「まあそうだろうな。どっちでもよかったし」

「負け惜しみかしら？」

「負け惜しみっていうのは勝負に負けてからいうものだよ。これから勝負するのになんの負け惜しみかな？小学生」

「s h i t！勝負が終わってから泣かないようにね」

「どっちに言ってるんだか」

正直にいうと勝てる見込みなんてないのかもしれない。R o s e l i aは確かに強い。そのR o s e l i aに対して勝ったのがR A Sだ。けれどR A Sの今の音には決定的に足りてないものがある。それを教えるためにも勝たないとな。

「それじゃあ行こうか」

全員で俺たちはステージに上がった。一曲目が終わり、会場のボルテージはだんだんと熱を帯びていく。二曲目に入ると会場のボルテージはさらに上がっていき俺たちもだんだん乗ってきた。多分この時にみんなが思っていたことは同じだったと思う。もつとこの時間を楽しんでいた。もつと演奏したい。

三曲目はいつ終わったか俺はわからなかった。ただ気がつくとき控え室でみんな揃って笑いながら倒れていたこと。それを見たR o s e l i aのみんなまでもが泣きながら笑っていたこと。それぐらいしか記憶にない。

そして結果発表も覚えていない。ただ家に帰ってやっと元に戻るとリサからおめでとうとメールが来ていたから多分勝ったんだろうぐらいにしか思っていなかった。

そしてそのメールの最後にはチュチュの連絡先があつて向こうがまた話したいそうだ。俺もそれを了承してその日は眠ることにした。